

有岡城跡・伊丹郷町 VII

—宮ノ前地区市街地再開発に伴う発掘調査報告書—



2001. 3

伊丹市教育委員会

有岡城跡・伊丹郷町 VII

—宮ノ前地区市街地再開発に伴う発掘調査報告書—



2001. 3

伊丹市教育委員会

序

歴史的資料に見る「伊丹」の初見は、鎌倉時代、嘉元元年（1303）といわれています。その発展は中世・戦国時代に活躍した伊丹氏が、居館・居城として伊丹城を築いたことから始まります。さらに荒木村重が伊丹城（後に有岡城に改称）に入城した天正年間（1573～91年）から、伊丹は、伊丹村を中心に付近の村々が「町村家続き」になり、在郷町として形態を整えて惣構えの城下町へと発展いたしました。

その後、廃城後は城下町から、酒造業、綿の加工業を中心とする商業都市へと変化し、とくに酒造業の隆盛は伊丹郷町に飛躍的な発展をもたらしました。

この度の発掘調査を行ないました宮ノ前地域は、伊丹郷町の氏神であり、有岡城の「岸の砦」が築かれていた猪名野神社の参道・門前町の様相をもち、宮ノ前通りとよばれ商業区域として発展しました。

阪急伊丹駅周辺の整備以前は、伊丹の中心商店街として、猪名野神社の参道筋にあたるこの通りには、伝統的な町屋商店が軒をならべていましたが、都市の近代化にともない古い町並みは、街路幅員が狭く現代の都市機能の多様性・利便性から立ち遅れが指摘され、都市機能の再整備が求められました。

その結果、多くの町屋はその外観を僅かにとどめるに至り、建物は解体され姿を消していましたが、幸いにも旧石橋家住宅は手入れが良く建設当時の形態を保っており伊丹市指定文化財の指定を受け保存しました。現在、この建物は解体移築し復元修理を終え県指定文化財として建築当時の姿に復し広く一般に公開するべく準備しているところであります。

伊丹の中心街として歴史・伝統をいまに残したこの地の建物の保存活用、また、埋蔵文化財の発掘調査は、その史実を学術資料として後世に伝える重要な仕事であり私たちの責務であります。




















この調査によって伊丹郷町・宮ノ前地区の伊丹城時代・有岡城時代の暮らし振りや歴史を物語る貴重な遺構・遺物を検出し多くの成果をもたらしました。発掘調査に携った多くの方々によって多大な成果を収めることができました。発掘調査から整備まで一環してご協力を頂きました大手前大学藤井直正教授、川口宏海教授ならびに発掘調査と整理作業に従事していただきました赤松和佳氏ほか調査員の方々に深甚より厚くお礼申し上げます。

今後とも、より一層の調査・保護に努めるとともに、文化財を保護顕彰してまいる所存であります。

伊丹市教育委員会
教育長 脇本 芳夫

例 言

1. 本書は、兵庫県伊丹市による宮ノ前地区市街地再開発事業に伴って、宮ノ前1丁目・2丁目において実施した、有岡城跡・伊丹郷町遺跡の発掘調査報告書である。
現場における調査は大手前女子大学史学研究所所長日比野丈夫（大手前女子大学前学長）を委員長とする「有岡城跡・伊丹郷町調査部」を組織し、大手前女子大学（現在大手前大学）史学科教授藤井直正・秋山進午を調査主任として、大手前女子学園（現在大手前学園）が伊丹市の委託による事業として実施した。なお、これにかかる経費は委託料として伊丹市より支出を受けた。
2. 本書に収めた調査は、第117次調査（平成4年10月12日から平成5年2月27日まで）、第123次調査（平成5年4月30日から平成5年7月31日まで）である。
3. 現場における調査は、調査主任である藤井直正・秋山進午の管理・指導のもとに、主任調査員として、川口宏海（当時大手前栄養文化学院助教授、現在大手前大学社会文化学部教授）が専従した。また、調査員として、赤松和佳・石本（旧姓 木南）アツ子・山崎晴世、および事務員として平井千保、調査補助員として大手前女子大学生諸君の参加・協力を得た。これらの参加者の名簿は別項に掲げた。
4. 調査資料並びに出土資料の整理作業は川口宏海の指導のもとに、調査員の赤松和佳・小出匡子・渡辺晴香・佐藤由美・大石真、調査員補の中村祐子によって、現場終了後、逐次、これも多数の学生の協力を得て進めてきた。
資料整理および本報告書作成に向けての作業は、平成11年6月より、藤井直正を代表とする伊丹郷町調査研究会を組織して伊丹市から委託を受けた。
5. 本報告書の作成は企画段階で藤井直正の指導・助言のもとに、原稿の執筆と編集の作業には、出土資料の整理にあたった主任調査員及び調査員が担当し、調査員補、学生諸君多数の協力によって進めた。原稿の執筆分担については、目次に明記した通りである。
6. 遺構写真は川口・赤松、遺物写真は、小出・渡辺・佐藤がそれぞれ撮影した。
7. 一般的な土壌については、予算の都合上個別遺構図を掲載しなかった。よって、遺構全体図（付図）と主要遺構一覧表（表1）を参照していただきたい。
8. 遺構表示番号は、奈良国立文化財研究所の用例に従ったが、一部独自のものを使用した。
SA—柵、SB—建物、SD—溝、SE—井戸、SI—胞衣壺、SK—土壙、SP—柱穴、
SS—礎石、SU—埋桶、SV—竈、SW—埋甕、SY—水琴窟、SX—その他
9. 位置の掲載は、平面直角座標系Vによる。建設省基本点・基準点および伊丹市公共基準点（旧市立社会経済会館前の水準点NO.14の最新水準値、昭和53年のT.P.=16.640mを用いてT-8まで引き、後に順に水準値を与えた）を使用し、記載している数値は、X、Yともm単位で、水準はO.P.（大阪湾中等潮位）である。
10. 遺構の色調については、『新版・標準土色帖』（農林水産技術会議事務局 昭和51年）、遺物については、『新版・標準土色帖』と『日本色研色名帖』（(財)日本色彩研究所）を併用し、全て肉眼観察によって比定した。本文の遺構図のうち、壁面土層図は1/40、建物は主に1/120、埋甕・埋桶は1/10・1/20・1/40、その他は1/60・1/30にした。

11. また、壁面土層図は、 焼土層、 炭化物層、 漆喰、 コンクリート、 石・瓦のスクリーントーンを使って表した。
12. 遺物の絵付けにおいては、 赤色(朱色)、 薄朱色、 桃色、 緑色、 黄緑色、 茶色、 黄色、 青色、 紫色、 黒色、 金色、 橙色、 肌色のスクリーントーンを使って表した。瓦質土器は断面にのスクリーントーンを使って表した。
- 本文中の遺物図のうち屋瓦・石製品は1/4、銭貨は1/2、大型製品は1/6・1/8、その他は1/3にした。
13. 現場における発掘調査の実施にあたっては、資料整理に至るまで、伊丹市再開発事務所関係者諸氏、および伊丹市教育委員会生涯学習部・文化財担当各位の指導と助言を得たほか、(株)染ノ川組、(株)写測エンジニアリングの協力、その他多くの機関と多くの人々の援助を受けた。
- さらに、大手前女子学園（現在大手前学園）福井秀加理事長、大手前女子大学（現在大手前大学）日比野丈夫前学長、現大手前大学米山俊直学長、企画・運営委員会諸先生には、調査の進行から本報告書の刊行に至るまで指導・助言と各方面にわたってご配慮を得たことを付記する。
14. 今回の報告書作成にあたり、多くの方々、および機関のご協力、ご教示を賜ったが、ここに、関係各氏の芳名を載せ、謝意を表する。なお、敬称は略させていただいた。

石井 啓（備前市教育委員会）	石川 道子（伊丹市立博物館）
井上喜久男（愛知県陶磁資料館）	大橋 康二（佐賀県教育庁）
岡 佳子（大手前大学）	小長谷正治（伊丹市教育委員会）
加藤 真司（土岐市美濃陶磁歴史館）	小坂 浩一（伊丹市都市住宅部都市計画室）
嶋谷 和彦（堺市立埋蔵文化財センター）	下村 節子（財団法人枚方市文化財研究調査会）
鈴木 裕子（日本考古学会協会員）	鈴木由紀夫（佐賀県立九州陶器文化館）
谷口 哲一（山口県埋蔵文化財センター）	永井久美男（兵庫埋蔵銭調査会）
仲野 泰裕（愛知県陶磁資料館）	中野 雄二（波佐見町教育委員会）
成田 正彦（弘前市教育委員会）	野上 建紀（有田町歴史民俗資料館）
乗岡 実（岡山市教育委員会）	林 順一（土岐市美濃陶磁歴史館）
堀内 秀樹（東京大学埋蔵文化財調査室）	宮崎 泰史（大阪府教育委員会）
村上 伸之（有田町歴史民俗資料館）	山口 誠治（財団法人大阪府文化財調査研究センター）
吉森 宏明（住友重機械工業）	和島恭仁雄（伊丹市立博物館）

本文目次

序	伊丹市教育委員会教育長 脇本 芳夫	i
例言		iii
第1章 事業の経過	(藤井)	1
第2章 調査方法	(川口)	3
第1節 調査区割と図面割		3
第2節 基準点と水準点の設置		3
第3節 調査の方法		3
第3章 調査の成果		7
第1節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡の時期区分について		7
第2節 第117次調査A-6区	(小出)	7
1. 基本層序		7
2. 第3次面の遺構と遺物		8
3. 第2次面の遺構と遺物		16
4. 第1次面の遺構と遺物		26
5. まとめ		30
第3節 第117次調査A-7区	(渡辺)	31
1. 基本層序		31
2. 第3次面の遺構と遺物		31
3. 第2次面の遺構と遺物		32
4. 第1次面の遺構と遺物		38
5. まとめ		46
第4節 第117次調査B-14区	(佐藤・赤松)	51
1. 基本層序		51
2. 第4次面の遺構と遺物		51
3. 第3次面の遺構と遺物		55
4. 第2次面の遺構と遺物		63
5. 第1次面の遺構と遺物		69
6. まとめ		76

第5節 第123次調査D-7区	(赤松)	77
1. 基本層序		77
2. 第4次面の遺構と遺物		77
3. 第3次面の遺構と遺物		83
4. 第2次面の遺構と遺物		93
5. 第1次面の遺構と遺物		107
6. まとめ		127
第4章 結 語		129
第1節 調査区域の遺構の変遷について	(川口)	129
1. 時期区分について		129
2. 各調査の遺構の変遷について		129
3. まとめ		136
第2節 遺物計測方法および計測結果について	(川口・小出)	143
1. 目的		143
2. 種類と分類基準		143
3. 生産地と分類基準		143
4. 器種と器形の分類基準		144
5. 集計・表記方法		145
6. 分析結果		146
7. 破片数と推定個体数について		146
8. 遺構の年代について		146
9. 用途別構成比について		146
10. 産地別構成比について		149
11. まとめ		150
参考・引用文献		158
表紙図版解説	(赤松)	162

図・表目次

(調査方法)	
第1図 5m方眼割図 …………… 3	
第2図 有岡城跡・伊丹郷町遺跡調査区割図 … 4	
(第117次調査A-6区)	
第3図 調査地点位置図 …………… 5	
第4図 A-6区北壁土層図 …………… 9	
第5図 A-6区東壁土層図 …………… 10	
第6図 SB301・SD301遺構図 …………… 13	
第7図 SV301遺構図…………… 13	
第8図 SE301遺構図…………… 14	
第9図 SE301下層(1・2)・ SE301(3・4)・ SK300(5~8)・SK322(9~14) 出土遺物 …………… 15	
第10図 SD304・305・333遺構図…………… 16	
第11図 SK332遺構図…………… 17	
第12図 SX315遺構図…………… 17	
第13図 SV201遺構図…………… 18	
第14図 SV201(2・3)・SI202(4・5)・ SY203(1・6)出土遺物…………… 19	
第15図 SI202遺構図…………… 19	
第16図 SY203遺構図…………… 19	
第17図 SU226遺構図…………… 20	
第18図 SU226(1・8)・ SU229(2~4・9)・SD201(5)・ SD203(6・7)出土遺物…………… 21	
第19図 SD201遺構図…………… 22	
第20図 SD203・204遺構図 …………… 23	
第21図 SK208(1・2・5)・ SK224(3・4・6)・ SK201(7~9)出土遺物…………… 23	
第22図 SB01遺構図 …………… 24	
第23図 SB02遺構図 …………… 24	
第24図 SV01・02遺構図 …………… 25	
第25図 SV01(1)・SV02(2)・SU03(3)・ SU04(4)・SU05(5~9・11)・ SW01(12・13)・第1包含層(10) 出土遺物 …………… 26	
第26図 SU03・04遺構図 …………… 27	
第27図 SW01・02遺構図 …………… 28	
第28図 SW01出土遺物 …………… 29	
第29図 SK06出土遺物 …………… 29	
(第117次調査A-7区)	
第30図 A-7区東壁土層図 …………… 33	
第31図 A-7区中央アゼ土層図 …………… 33	
第32図 SU200(1・2)・SU209(3・6)・ SK214(4・5・7)出土遺物…………… 35	
第33図 SU113遺構図…………… 36	
第34図 SW109遺構図…………… 36	
第35図 SW109出土遺物…………… 37	
第36図 SK104(1~4・7)・ SK108(5・8~10)・ SK118(6)出土遺物…………… 37	
第37図 SW01遺構図 …………… 38	
第38図 SD01遺構図 …………… 39	
第39図 SW01(1)・SD01(2~5) 出土遺物 …………… 40	
第40図 SD01出土遺物 …………… 41	
第41図 SD02遺構図 …………… 42	
第42図 SD02(1~3)・SK06(4・5)・ SK07(6・7)出土遺物 …………… 43	
第43図 SX20遺構図 …………… 44	
第44図 SX20出土遺物 …………… 45	
(第117次調査B-14区)	
第45図 B-14区南壁土層図 …………… 47	
第46図 B-14区西壁土層図 …………… 49	
第47図 SB04遺構図 …………… 51	

第48図	S P 681 (1)・S P 697 (2) 出土遺物	52	第72図	S I 05遺構図	71
第49図	S P 698 (1)・採集遺物 (2) 出土遺物	53	第73図	S W01遺構図	71
第50図	S P 673 (1・2)・ S E 600 (3・4・6・7)・S D601 (5) 出土遺物	54	第74図	S I 02 (1)・S I 04 (2・3)・ S I 05 (4・5)・S W01 (6・7)・ S D03 (8~10)・S X 68 (11・12) 出土遺物	72
第51図	S E 600遺構図	55	第75図	S D03遺構図	74
第52図	S D 601遺構図	55	第76図	S X 68遺構図	75
第53図	S X 629遺構図	57	(第123次調査D-7区)		
第54図	S X 629土層図	57	第77図	D-7区北壁土層図	79
第55図	S V01遺構図	59	第78図	D-7区西壁土層図	81
第56図	S P 420 (1)・S V01 (2・3)・ S V02 (4~6)・S E 400 (7~9)・ S U 400 (10)・S U 405 (13)・ S U 406 (12)・S D 404 (11)・ S K 404 (16~18)・S K 429 (14・15) 出土遺物	60	第79図	S E 505遺構図	83
第57図	S V02出土遺物	61	第80図	S E 505下層 (2)・S E 505 (1・3)・ S E 503 (4)・S K 762 (5~7)・ S X 746 (8~10) 出土遺物	84
第58図	S V01出土遺物	61	第81図	S E 503遺構図	84
第59図	S E 400遺構図	61	第82図	S X 617・618・758遺構図	85
第60図	S D 404・405遺構図	62	第83図	S X 617 (1)・S X 758 (2・3) 出土遺物	86
第61図	S K 404遺構図	63	第84図	S X 746・S X 04 (第1次面)・ S X 05 (第1次面) 遺構図	87
第62図	S K 409 (1・2・6)・S K 408 (3・4)・ S K 402 (5) 出土遺物	64	第85図	S P 593出土遺物	87
第63図	S B 03遺構図	65	第86図	S E 500遺構図	88
第64図	S P 283 (1)・S P 248 (3)・ S Y 211 (2・8・9)・S K 246 (4)・ S K 282 (5)・S K 200 (6・7) 出土遺物	66	第87図	S E 502遺構図	88
第65図	S Y 211出土遺物 (2)	67	第88図	S E 500 (1・5)・S E 502 (8)・ S U 500 (2)・S D 504 (3・4・6・9)・ S D 500 (7) 出土遺物	89
第66図	S Y 211遺構図	67	第89図	S U 500遺構図	90
第67図	S B 01遺構図	68	第90図	S D 504遺構図	90
第68図	S B 02遺構図	69	写真 1	S D 504動物遺体出土状況	91
第69図	S S 04 (1)・S E 02 (2・3) 出土遺物	70	第91図	S K 622 (1~4・7)・ S K 701 (5・6・8)・S K 581 (9)・ S K 587 (10) 出土遺物	91
第70図	S I 02遺構図	71	第92図	S X 504出土遺物	92
第71図	S I 04遺構図	71	第93図	S X 542遺構図	92
			第94図	S X 567・570遺構図	93
			第95図	S X 517・310 (第2次面) 遺構図	93

第96図	S V 302・303遺構図	94	第120図	S Y 08・09遺構図	112
第97図	S V 302 (1・2)・S V 303 (3・4)・ S E 300 (5・6) 出土遺物	95	第121図	S Y 01遺構図	113
第98図	S E 300遺構図	96	第122図	S Y 13遺構図	113
第99図	S E 302遺構図	96	第123図	S Y 07 (1)・S Y 13 (2) 出土遺物	114
第100図	S E 302下層 (1)・S E 302 (2~5) 出土遺物	97	第124図	S Y 01 (1・8)・S Y 13 (2・3)・ S U 11 (4・6)・S W 16 (5)・ S W 02 (7・9)・S W 14 (10)・ S W 82 (11) 出土遺物	115
第101図	S W 301遺構図	98	第125図	S U 11遺構図	116
第102図	S W 300遺構図	98	第126図	S W 16遺構図	116
第103図	S W 301 (1)・S W 300 (2~5) 出土遺物	99	第127図	S W 16出土遺物 (2)	116
第104図	S W 302遺構図	100	第128図	S W 02遺構図	117
第105図	S W 302 (1)・S D 300 (2・6)・ S D 303 (3・5)・ S D 302 (4・7・8)・ S K 337 (9・10)・ S K 356 (11・15・18)・ S K 377 (12~14)・S K 347 (16・17) 出土遺物	101	第129図	S W 14・15遺構図	117
第106図	S K 381 (1・3~5)・S X 315 (2) 出土遺物	102	第130図	S D 07遺構図	117
第107図	S X 317 (1)・S X 309 (2) 出土遺物	103	第131図	S D 01 (1・2)・S D 02 (3)・ S D 07 (4~8) 出土遺物	118
第108図	S B 01遺構図	104	第132図	S K 102 (1・3~8)・S K 139 (2) 出土遺物	119
第109図	「酒造場絵図面届書写」	105	第133図	S X 01・02遺構図	120
第110図	S S 16 (1)・S V 06 (2~4・6)・ S S 32 (5)・S E 05 (7) 出土遺物	105	第134図	S X 10遺構図	120
第111図	S V 06・15遺構図	106	第135図	S K 57 (1)・S X 01 (2~4)・ S X 02 (5)・S X 10 (6)・S X 03 (7)・ S X 42 (8・9) 出土遺物	121
第112図	S E 05遺構図	107	第136図	S X 42遺構図	121
第113図	S E 03遺構図	107	第137図	S X 42出土遺物	122
第114図	S E 03出土遺物	108	第138図	S X 17遺構図	124
第115図	S E 02遺構図	108	第139図	S X 17出土遺物	125
第116図	S E 02出土遺物	109	第140図	S X 17出土遺物 (2)	126
第117図	S E 07遺構図	110			
第118図	S E 07 (1・2)・S Y 08 (3)・ S Y 09 (4) 出土遺物	111	(結語)		
第119図	S E 06遺構図	112	第141図	伊丹郷町古絵図 (八木哲浩1982年)	130
			第142図	A-6区遺構変遷図	131
			第143図	A-7区遺構変遷図	131
			第144図	B-14区遺構変遷図	132
			第145図	D-7区遺構変遷図 (1)	134
			第146図	D-7区遺構変遷図 (2)	135

表 1	主要遺構一覧表 (1) ~ (4)	137
表 2	各調査区主要遺構年代表 (1) ~ (2).....	141
表 3	伊丹郷町遺物計測基礎データ (1) ~ (4).....	151
第147図	A-6区SE301・D-7区SK622 産地別・用途別構成比グラフ (1) ...	155
第148図	A-6区SK332・D-7区SK102 産地別・用途別構成比グラフ (2) ...	156
第149図	A-7区SX20産地別・用途別構成比 グラフ (3)	157

付 図

付図 1	第117次調査A-6区遺構全体図
付図 2	第117次調査A-7区遺構全体図
付図 3	第117次調査B-14区遺構全体図
付図 4	第123次調査D-7区遺構全体図 (1)
付図 5	第123次調査D-7区遺構全体図 (2)

図版目次

- 図版1 有岡城跡・伊丹郷町遺跡航空写真
1. 昭和23年
2. 昭和36年
- 図版2 第117次調査A-6区 遺構(1)
1. 第117次調査区A-6区第3次面全景
2. 第117次調査区A-6区第2次面全景
- 図版3 第117次調査A-6区 遺構(2)
1. 第117次調査区A-6区第1次面全景
2. SB301
3. SV301
4. SE301
5. SD301
- 図版4 第117次調査A-6区 遺構(3)
1. SD304・333
2. SK332
3. SX315
4. SV201
5. SI202検出状況
6. SI202
7. SY203
8. SU226
- 図版5 第117次調査A-6区 遺構(4)
1. SD203・204
2. SK208
3. SK201
4. SX244
5. SB01
6. SV01・02
7. SU03・04
8. SW01・02
- 図版6 第117次調査A-6区 遺物(1)
SE301・SK300・SK332・SY203
SV201・SI202
- 図版7 第117次調査A-6区 遺物(2)
SU226・SU229・SD201・SD203
SK208・SK224・SK201
- 図版8 第117次調査A-6区 遺物(3)
SX244・第1包含層・SV01・SV02・
SU03・SU04・SU05・SW01・SW02
- 図版9 第117次調査A-6区 遺物(4)
SK06
- 図版10 第117次調査A-7区 遺構(1)
1. 第117次調査A-7区第3次面全景
2. 第117次調査A-7区第2次面全景
- 図版11 第117次調査A-7区 遺構(2)
1. 第117次調査A-7区第1次面全景
2. SU200
3. SU209
4. SW109
5. SU113
- 図版12 第117次調査A-7区 遺構(3)
1. SK108
2. SW01
3. SK104
4. SD02
5. SD01
6. SK06・07
7. SX20
- 図版13 第117次調査A-7区 遺物(1)
SU200・SU209・SK214・SW109
SK104・SK108・SK113・SW01
- 図版14 第117次調査A-7区 遺物(2)
SD01掘形・SD01・SD02掘形・SD02・
SK06・SK07・SX20
- 図版15 第117次調査B-14区 遺構(1)
1. 第117次調査B-14区第4次面全景
2. 第117次調査B-14区第3次面全景
- 図版16 第117次調査B-14区 遺構(2)
1. 第117次調査B-14区第2次面全景
2. 第117次調査B-14区第1次面全景

図版17 第117次調査B-14区 遺構 (3)

1. 第4次面南西部全景
2. 第3次面南西部全景
3. 第2次面南西部全景
4. 第1次面南西部全景
5. SB04
6. SP681
7. SP697・698
8. SE600

図版18 第117次調査B-14区 遺構 (4)

1. SD601
2. SX629
3. SV02
4. SV01
5. SE400
6. SU400
7. SU405
8. SU406

図版19 第117次調査B-14区 遺構 (5)

1. SD404
2. SD405
3. SK404
4. SK402
5. SK408・409
6. SB03
7. SY211
8. SY211断面

図版20 第117次調査B-14区 遺構 (6)

1. SK246
2. SK282
3. SK200
4. SB01
5. SB02
6. SS04
7. SE02
8. SI02

図版21 第117次調査B-14区 遺構 (7)

1. SI04

2. SI05

3. SW01

4. SD03

5. SX68

図版22 第117次調査B-14区 遺物 (1)

SP681・SP697・SP698・SP673・
SD601・SE600・SX629・採集遺物・
SP420・SV01・SV02

図版23 第117次調査B-14区 遺物 (2)

SV02・SV01・SE400・SU400・SU405・
SU406・SD404・SK404・SK402・SK409

図版24 第117次調査B-14区 遺物 (3)

SK408・SP283・SP248・SK282・SK246・
SK200・SY211・SS04・SE02・SI02・
SI04

図版25 第117次調査B-14区 遺物 (4)

SI05・SW01・SD03・SX68

図版26 第123次調査D-7区 遺構 (1)

1. 第123次調査D-7区第4次面全景
2. 第123次調査D-7区第3次面全景

図版27 第123次調査D-7区 遺構 (2)

1. 第123次調査D-7区第2次面全景
2. 第123次調査D-7区第1次面全景

図版28 第123次調査D-7区 遺構 (3)

1. SE505
2. SE503
3. SX617・618・758
4. SX618横木検出状況

5. SX618

6. SE500

7. SE502

8. SD504

図版29 第123次調査D-7区 遺構 (4)

1. SX567・570

2. SX517

3. SV302・303

4. SV303

5. SE300

6. SW301
 7. SW300
 8. SW302
- 図版30 第123次調査D-7区 遺構(5)
 1. SB01
 2. SV06・15
 3. SE05
 4. SE03
 5. SE07
 6. SE06
 7. SY08・09
- 図版31 第123次調査D-7区 遺構(6)
 1. SY01
 2. SY13
 3. SU11
 4. SW16
 5. SW02
 6. SX10
 7. SW14
 8. SW15
- 図版32 第123次調査D-7区 遺構(7)
 1. SD07
 2. SX01・02
 3. SX42
 4. SX17
- 図版33 第123次調査D-7区 遺物(1)
 SE505下層・SE505・SE503・SK762・SX746・
 SX617・SX758・SP593・SE502
- 図版34 第123次調査D-7区 遺物(2)
 SE500・SU500・SD504・SK622・SK701・
 SK581・SK587・SX504
- 図版35 第123次調査D-7区 遺物(3)
 SV302・SV303・SE300・SE302下層・SE302・
 SW301・SW300
- 図版36 第123次調査D-7区 遺物(4)
 SW300・SW302・SD300・SD303・SD302・
 SK337・SK356・SK377・SK347
- 図版37 第123次調査D-7区 遺物(5)
 SK381・SX315・SX317・SX309・SK353・
 SS16・SV06・SS32・SE05・SE03
- 図版38 第123次調査D-7区 遺物(6)
 SE02・SE07・SY08・SY09・SY07・
 SY13
- 図版39 第123次調査D-7区 遺物(7)
 SY01・SU11・SW16・SW02・SW14・
 SW82・SD01・SD02
- 図版40 第123次調査D-7区 遺物(8)
 SD07・SK139・SK102・SX01・SX10・
 SX03・SX42
- 図版41 第123次調査D-7区 遺物(9)
 SX42・SK57・SX02・SX17・SV15

調査参加者名簿

◆外業の部

大手前女子大学	入谷安紀子	勝田さつき	川上 啓子	(25期生)
	内田 知絵	村上 美子		(26期生)
	田中万紀子			(27期生)

◆内業の部

大手前女子大学	岩田 朱美	竹内 里奈		(31期生)
	村瀬 由美			(33期生)

第1章 事業の経過

阪急電車伊丹駅の東方から東北方にかけての一角は、伊丹市の中心街地として、すっかり整備され、新しい景観に生まれかわった。伊丹郷町の氏神としてまつられている猪名野神社に通じる南北の参道を中心にその東西に広がる区域を対象とし、この区域の南側を東西に通る抜ける県道の拡幅と直線化をはかる「宮ノ前地区市街地再開発事業」は伊丹市によって立案され、昭和五十九年（1984）より実施されてきたが、このほどようやく完成し、早々に建設されていた音楽ホールに加えて3棟の店舗付高層住宅が年次を経て竣工して、文字通り中心市街地となっている。

市街地再開発事業の実施された区域は、戦国時代のさ中、荒木村重によって構築された有岡城の惣構の中にふくまれ、その地域を受けついでいわゆる近世・近代の都市遺跡・伊丹郷町の中核であった場所である。従って埋蔵文化財包蔵地として発掘調査を行い、記録保存をはかる必要があり、このための調査が伊丹市教育委員会によって企画され、昭和六十二年（1987）度にはじまり、平成十二年（2000）に至るまで実施されてきた。この経緯には様々な事情があり、当初の計画をはるかに超えて、13年の歳月を要したことになる。

「宮ノ前地区市街地再開発に伴う有岡城跡・伊丹郷町の発掘調査」と名付けたこの事業は、当初、対象地域の中央部を貫通する県道の拡幅工事部分については兵庫県教育委員会による担当とし、その他の区域については、宮ノ前商店街をはさんだ西側にA・B—大手前女子大学、東側にC・D—伊丹市教育委員会に区画し、それぞれに委託して発掘調査を実施することになっていた。

こうして、昭和六十二年（1987）度より調査が開始されたが、再開発の対象区域には多くの立退き、解体を要する旧家屋があり、発掘調査は、当初の期間を除いて停滞することもあった。従って、調査を断続的にしか行うことができないといった事情もあり、調査の委託も上記以外の機関が加わることもあった。

大手前女子大学も、昭和六十二～三年度は、同年5月に開設された史学研究所の事業として、文化財調査室に有岡城跡・伊丹郷町調査部において掌にあたるというふうに紆余曲折があった。これらのくわしい経過については、既刊の『有岡城跡・伊丹郷町』Ⅱ～Ⅵにくわしく述べているので、重複を避けてここでは省略する。このうち、大手前女子大学の調査グループが現場における発掘調査を実施した区域における調査資料および出土遺物の整理と検討、それに加えて報告書の作成・刊行までの一連の作業については、平成五年（1993）度より6ヵ年継続事業として、改めて伊丹市より委託を受け、2ヵ年を区切り担当した現場を単位として作業を進めてきた。その詳細は次の通りである。

年 度	対 象 区 域	成 果
平成5～6年	第43次調査 第51次調査A-1・2・3・4区 第78次調査A-5区・B-8区	有岡城跡・伊丹郷町Ⅳ
平成7～8年	第51次調査B-1-1・1-4・2-1・2-2・3・D-2・D-2-2区 第63次調査D-4・B-5区 第97次調査D-6・B-13区	有岡城跡・伊丹郷町Ⅴ
平成9～10年	第51次調査B-1-2・1-3区 第63次調査B-4・6区 第78次調査B-7区 第83次調査B-9・10区 第86次調査B-11-1・B-11-2・B-12区	有岡城跡・伊丹郷町Ⅵ

以上は大手前女子大学史学研究所の事業として進めてきたが、現地における発掘調査はこれまでの報告書に収録したもの以外にも部分的に担当した区域があり、これについての調査資料および出土遺物の整理作業を行う必要から、重ねて市教育委員会よりその方法についての打診があった。すでに大学としての方針は、6ヵ年継続事業の完了する平成十年末をもって終結させるということが決定されており、大学への委託事業

とすることができないという事情があった。このため、種々の状況を勘案した上で市教育委員会と協議し、藤井を代表とする「伊丹郷町調査研究会」を組織し、この名において引き続き委託事業として作業を進めてきた。

こうして、平成十一年（1999）～十二年（2000）の2ヵ年の継続事業として、これまでと同じ方法で進めたが、作業の実施場所については、市教育委員会のご厚意で、伊丹市埋蔵文化財口酒井整理事務所の一室を提供していただいた。この事業にふくまれる対象区域は次の通りである。

対象区域	発掘調査実施期間	回数
A-6・A-7・B-14区	平成4年10月12日～平成5年2月27日	第117次調査
D-7区	平成5年4月30日～平成7月31日	第123次調査

なお、報告書の名称はこれまでの事業を踏襲して『有岡城跡・伊丹郷町Ⅶ』とした。

この作業は、これも現場での発掘調査を終始、指導・監督してもらった大手前栄養文化学院の川口宏海助教授（平成十二年4月より大手前大学社会文化学部教授）を中心に、調査員として長年この事業に従事してきた史学科卒業生、赤松和佳・小出匡子・渡辺晴香・佐藤由美の諸君によって進められてきた。その推進に当たっては伊丹市教育委員会生涯学習部関係諸氏のご理解とご支援の賜物であるが、中でも小長谷正治氏のお力添えに拠るところが大きい。文中であるが厚く御礼申し述べておきたい。

これ以外にも、再開発区域に隣接する市立文化会館の改築に伴う調査や再開発区域の最終となった石橋家住宅跡地の調査についても、市教育委員会の要請で、前記の本学関係者や多数の学生が調査員、調査員補助員として参加していることを付記しておきたい。

大手前女子大学が関わった発掘調査とそれに伴う資料と出土遺物の整理、そして報告書の作成・刊行はこれで完結を迎えることになった。振り返ってみると、当初、大手前女子短期大学への移転・開学がきっかけとなって、昭和六十年（1985）度における三井パークマンションに伴う調査を振り出しに、昭和六十一年（1986）度におけるJ R伊丹駅前市街地再開発事業に伴う調査を挟んで昭和六十二年（1987）度からの宮ノ前地区市街地再開発事業に伴う調査に続いたのである。通算すると16年、思えば長い年月であった。はじめてこの調査について依頼を受けた時から、私の携わる業務は、この仕事をスムーズに運営する組織づくりと、関係諸機関、中でも市教育委員会ならびに市開発部の関係者との交渉であった。これらについても報告書の端々に書きとどめておいたが、考古学ブームともいえる昨今の世相の中で、遺跡・遺物の発見が大きく報道されても、その背景にあつて表面には出ることの無い舞台裏のことながらも、多くの人々に知っていただきたい思いである。現場での作業は前記のメンバーの献身的な努力によって進めることができ、長い年月ではあったが、これで調査担当者としての大任を果たした。

常々書き記し主張してきたことであるが、市街地再開発事業の実施が直接の動機であったが、その対象区域が、近世の在郷町として全国的に知られた伊丹郷町であったことから、これを考古学的見地から遺跡としてとらえ、有岡城の惣構にはじまり、在郷町を経て近代・現代につづく都市遺跡を記録しておく必要を痛感し、それを実践するための努力であった。幸い関係各位のご理解と、この調査に携わった者全体の協力で現在にいたったが、これで終了したわけではなく、多くの課題がのこされているように思われる。

それはともかく、今後のことは次の世代に受け継いでもらうこととし、長年にわたってこの事業にかかわってきた私は、これを最後に引退することとしたい。

（藤井直正）

第2章 調査方法

第1節 調査区割と図面割

有岡城跡・伊丹郷町遺跡は、南北約1.7km、東西0.8kmを測る広大な都市遺跡である。したがって、昭和61年に行ったJ R伊丹駅の第23次調査の際に、遺跡全体の調査区割と図面割を設定した。その後の調査はすべてこれに従っている。

調査区割は、国土座標の第V系の $X = -134.400\text{m}$ 、 $Y = +98.800\text{m}$ を北西の基点とし、50m方眼を大区画の上位の区割として、東西横列をA・B・C～X、南北縦列を1・2・3～36とし、A1、B2などと呼称することにした(第2図)。さらに、その中の最小単位を5mグリットとし、50m大区画の北西隅から東西横列をa・b・c～j、南北縦列を1・2・3～10とし、a1、b2などと呼称することにした。したがって、最終的に各5mグリットは、A1-a1、B2-b1などと呼称することにした(第1図)。

図面割については、調査区割および伊丹市1/500の道路台帳との整合性を考えて、同じ上記の座標値を基点にして設定した。詳細は、既刊の発掘調査報告書(藤井他『有岡城跡・伊丹郷町Ⅱ』1992年、藤井他『有岡城跡・伊丹郷町Ⅳ』1995年)を参照されたい。

第2節 基準点と水準点の設置

現地調査にあたっては、基準点は、昭和62年に設置した開口トラバース(藤井他『有岡城跡・伊丹郷町Ⅳ』1995年参照)のT7($X = -134946.807$ 、 $Y = +99408.897$ 、O.P.=19.080m)、T8($X = -134954.304$ 、 $Y = +99360.813$ 、O.P.=19.023m)を利用し、調査区域内に5mメッシュ杭を設置した。ポイント設置は、(株)写測エンジニアリング社に委託した。

水準点は、伊丹市公共基準点の旧社会経済会館(現・伊丹第一ホテル北館)前のNO.14の最新値、昭和53年のT.P.=16.640mを基準とし、大阪湾岸であることを考慮して、O.P.(大阪湾中等潮位)換算(T.P.+13m)して、各トラバースポイントに移設して使用することとした。

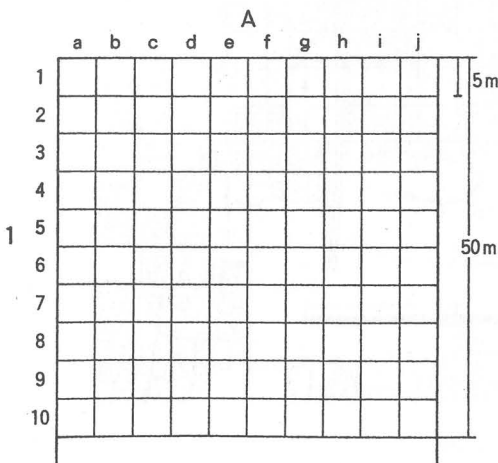
第3節 調査の方法

現地調査にあたっては、時間的制約から最上層のまでの土層を機械によって掘削し、以下は人力による遺構掘削を行った。

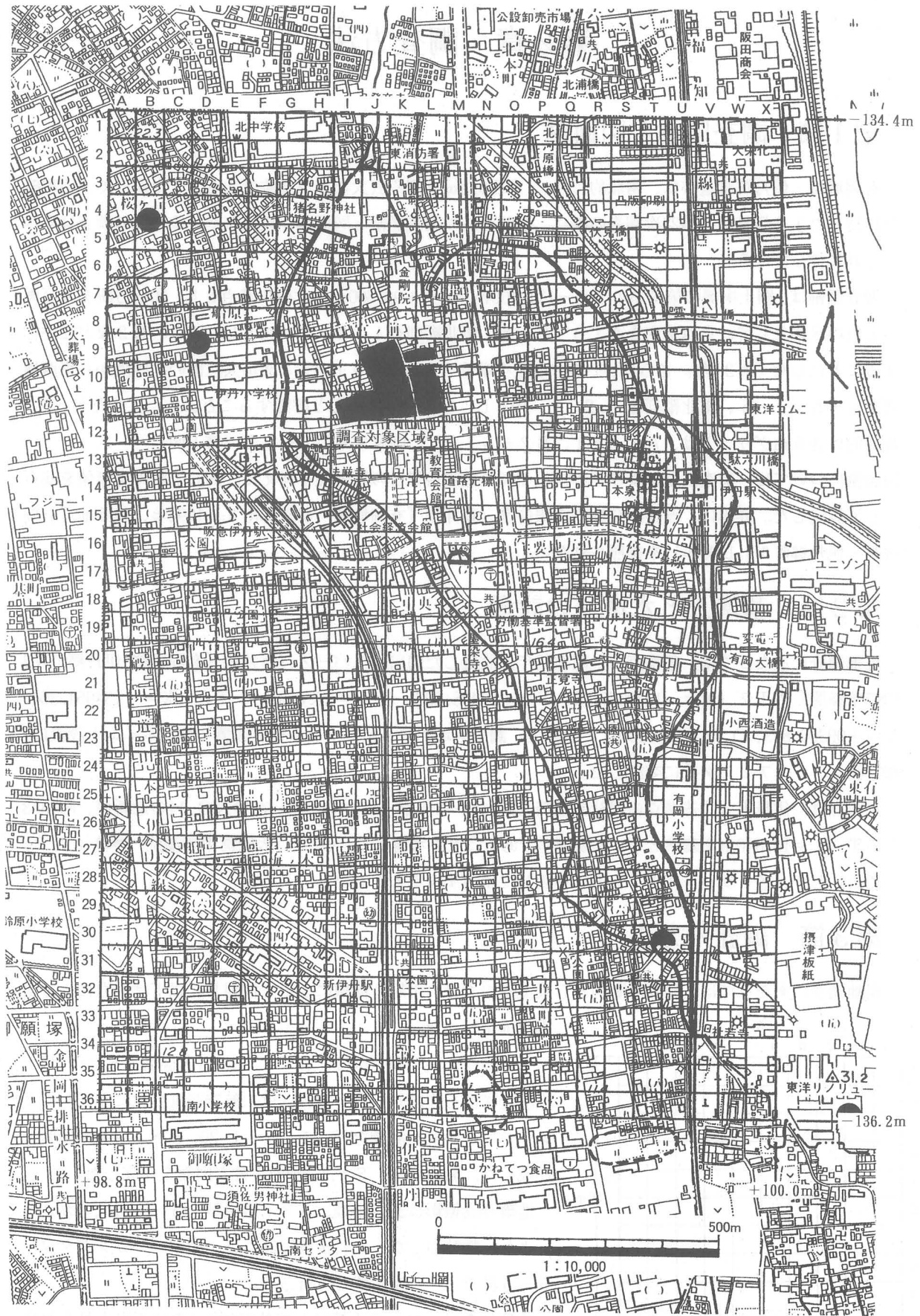
平面図は、狭い調査区は、 $S = 1/20$ 手書き図面と $S = 1/40$ 平板測量図面を作成し、広い調査区は、航空測量会社に委託してクレーンによる航空測量を行って、 $S = 1/20$ 、 $S = 1/100$ の図面を作成した。断面図は、 $S = 1/20$ の手書き図面を作成した。

遺構写真撮影は35mm小型、6×7版中型、5×7版大型カメラにより、随時おこなった。全景写真には、固定ローリングタワー5～6段を1～2基設置して行った。

整理作業は、コンテナ箱にして約300箱にのぼる出土品を対象としている。作業は、平成11年6月から平成13年3月まで行った。



第1図 5m方眼割図



第2図 有岡城跡・伊丹郷町遺跡調査区割図



第3図 調査地点位置図

第3章 調査成果

第1節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡の時期区分について

有岡城跡・伊丹郷町遺跡の遺構・遺物の様相は、基本的に中世～近世初頭の在城期（Ⅰ・Ⅱ期）と近世の伊丹郷町期（Ⅲ期）および近代期（Ⅳ期）に大別できる。伊丹郷町期（Ⅲ期）は、さらにⅢ-1～3期に細分できる。また、それぞれはさらにa・bの小期に区別することができる。従って時期区分は次の通りとなる。

- Ⅰ期 伊丹城期（～天正二年・1574）
- Ⅱ期 荒木村重の有岡城及び池田之助（元助）の後期伊丹城期（天正二年・1574～天正十一年・1583）
- Ⅲ期 近世の在郷町・伊丹郷町期（天正十一年・1583～明治時代中頃）
 - 1期 16世紀末～17世紀中頃
 - a 16世紀末～17世紀初頭
 - b 17世紀前半～17世紀中頃
 - 2期 17世紀後半～18世紀後半
 - a 17世紀後半～18世紀初頭
 - b 18世紀前半～18世紀後半
 - 3期 18世紀後半～19世紀後半
 - a 18世紀後半～19世紀初頭
 - b 19世紀前半～19世紀後半
- Ⅳ期 近代（明治時代中頃以降）

以下の調査結果では、調査面の古い順に記述を進めるが、遺構の所属時期についてはこの時期区分を用いて表記する。

第2節 第117次調査A-6区

A-6区は、西・南・東側は『有岡城跡・伊丹郷町Ⅳ』（藤井直正他1995年）で報告した第51次調査A-3区・第78次調査A-5区・B-8区とそれぞれ接している。また東側は、『有岡城跡・伊丹郷町Ⅴ』（藤井直正他1997年）で報告した第51次調査B-2-2区とも接している。この地区は、『天保十五年（1844）伊丹郷町分間絵図』（第141図）によると、昆陽口村にあたり、『元禄七年（1694）柳沢吉保領伊丹郷町絵図』（第141図）では、「百姓善右衛門」の屋敷地の北側にあたると考えられる。調査面積は118㎡である。

1. 基本層序

遺構面は、3面検出した。地山面は、O.P.=+19.000～19.100mを測り、ほぼ平坦であった。地山直上に第3次遺構面（現地表面より約45cm下）を検出した。その上に整地層と考えられる黄褐色砂質土層（第5図東壁第6層、現地表面より約35cm下）が堆積し、さらにその上に、黄褐色系の粘質土層（第5図東壁第4・19層、現地表面より約25cm下）が堆積、この上面を第2次遺構面とした。この面には、一部三和土が見られたが、壁面土層では確認できなかった。さらにその直上に、三和土層と考えられる黄色系の粘質土層（第5図東壁第10・17層、現地表面より約15cm下）が堆積しており、この上面を第1次遺構面とした。

2. 第3次面の遺構と遺物

第3次面では、16世紀末～17世紀にかけての掘立柱建物や井戸・耕作用の溝を検出した。

S B 301

S B 301（第6図・図版3）は、調査区北東部に位置する掘立柱建物である。規模は、桁行2間以上（南北2.46m）、梁行1間（東西3.94m）を測る。柱穴より遺物は出土しなかったが、埋土は一様にオリーブ色砂質土であり、これまでの周辺の調査で、この土は16世紀後半～17世紀代の包含層、または遺構に伴うものと判明している。さらに、この建物の範囲内に16世紀後半～末のS E 301がみられることから、16世紀末以降～17世紀代に建てられていた建物と考えられる。Ⅲ-1期に属する。

S V 301

S V 301（第7図・図版3）は、調査区北部に位置する竈である。平面形は不整形を呈し、検出長0.6m、検出幅0.56m、深さは0.07mを測る。検出状況から、上部は削平され、底部のみ残存している。表面には炭化物が薄くたまり、その周辺は赤く焼け、焼土がみられたことから、燃焼室ではないかと考えられる。焚き口は不明である。出土遺物が少なく、年代を決めるのは難しいが、この遺構の上面第2次面で18世紀後半～19世紀初頭の遺構がみられることから、18世紀後半以前のものではないかと考えられる。Ⅲ-2 b期に属する遺構である。

S E 301

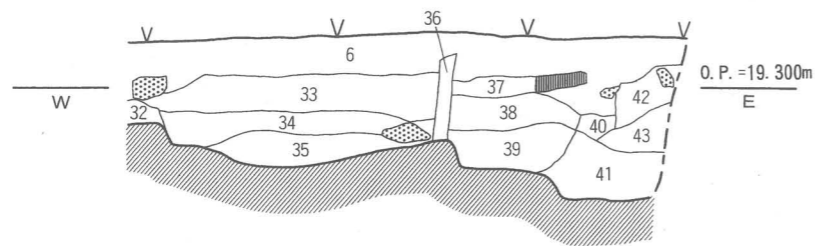
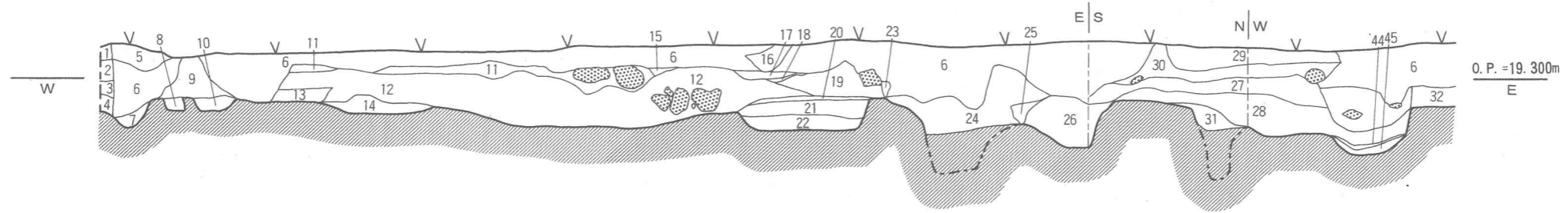
S E 301（第8図・図版3）は、調査区北東部に位置する素掘りの井戸である。平面形は不整形を呈し、長径1.15m、短径0.95m、深さ3m以上を測る。川口宏海氏の井戸の分類（川口1999年）A I a型式に属する。この遺構からは、一括の資料を得ることができ、計測を行った（第4章第2節参照）。

第9図-1・3は、中国製品である。1は青花碗である。いわゆる「饅頭心」の碗で、器高（残）1.6cm、高台径（推）4.3cmを測る。見込みには、花文が描かれている。高台内には「萬」「攸」の文字がみられ、「萬福攸同」の吉祥句が書かれている。小野正敏氏の分類（小野1982年）碗E群Ⅷ類に属する。3は、青花皿である。口径（推）10.4cm、器高（残）2.2cmを測る。底部は欠損しているが、碁笥底タイプの皿と思われ、小野氏の分類皿C群Ⅰ類に属する。2は、土師質土器皿である。口径（推）6.8cm、器高（残）1cmを測る。胎土は浅黄橙色（10Y R 8/3）を呈する。手づくね成形で、内外面ともナデ調整が施されている。川口宏海氏の分類（川口1997年c）A R（有岡城期）2型式A類に類似する。4は、軒平瓦である。全長（残）7.8cm、瓦当部厚3.3cm、文様区厚2.2cmを測る。文様は唐草文で、文様区内には離れ砂が付着している。瓦当周縁部は周縁に沿ってナデ調整、瓦当上部には強いナデ調整後に面取りを施している。瓦当顎下部から瓦当部裏面、平瓦部との接合部分までヨコナデ調整を施している。また、平瓦部凹凸面ともナデ調整が施されている。この瓦は、J R 駅前地区第23次調査S F 01（藤井直正他『有岡城跡・伊丹郷町遺跡Ⅱ第1分冊』1992年）の有岡城期の遺構から出土している瓦と同範である。

出土遺物を概観すると、16世紀後半～末と考えられる。Ⅱ期～Ⅲ-1 a期に属する遺構である。周辺の調査区では、この時期の井戸の検出例が少なく、好資料となった。

S D 301

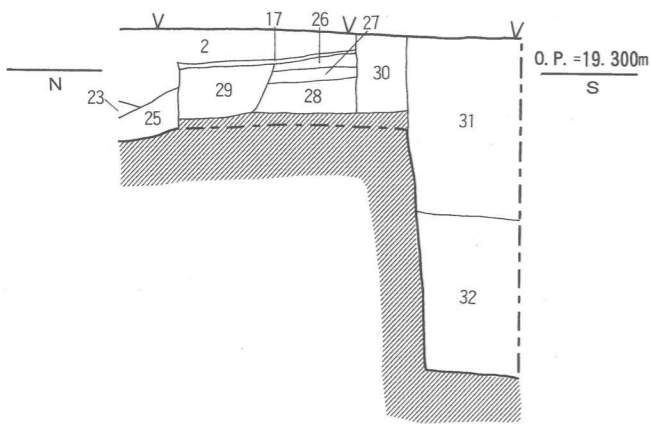
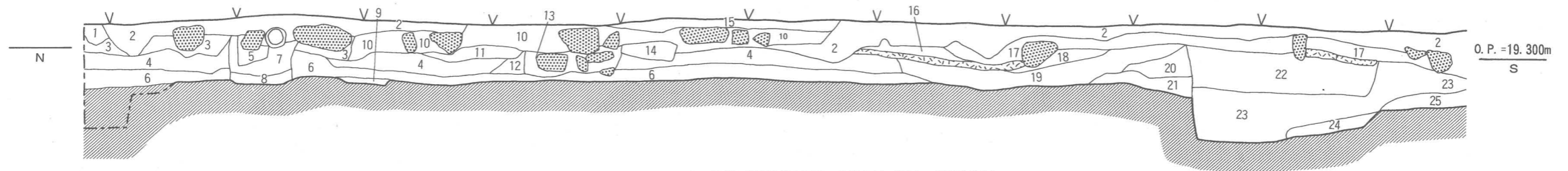
S D 301（第6図・図版3）は、調査区東壁沿いに位置する溝である。検出長2.3m、検出幅0.15m、深さ0.04mを測る。S D 301の東側には、この溝に対応する第51次調査B-2-2区S D 15があり、これに続く第51次調査B-3区S D 08（藤井他1997年）、第78次調査B-8区S D 04、第167次調査B-16区S D 100（未報告）があつて、一連の道路の側溝であつたと考えられている。埋没時期はそれぞれ違うが、掘削時期は有岡



1. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/3
2. ぶい黄褐色粘質土層 10 Y R 4/3 (炭化物含む)
3. 暗褐色粘質土層 10 Y R 3/4 (炭化物含む)
4. 暗褐色粘質土層 10 Y R 3/3
5. 明褐色粘質土層 7・5 Y R 5/8 (瓦・1cmの礫・炭化物含む)
6. 攪乱
7. 褐色粘質土層 7・5 Y R 4/6
8. 褐色砂質土層 10 Y R 4/4
9. ぶい黄褐色粘質土層 10 Y R 4/3
10. 褐色粘質土層 10 Y R 4/6
11. 灰オリーブ褐色砂質土層 5 Y 4/3 (3cmの礫含む)
12. 黒褐色炭化物層 10 Y R 2/2 (瓦・炭化物・焼土多量に含む)
13. 褐色粘質土層 10 Y R 4/4
14. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y 4/3
15. 明赤褐色砂質土層 5 Y R 5/6
16. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y 5/2
17. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y 4/2 (炭化物若干含む)
18. 褐色粘質土層 10 Y R 4/6 (0.5cmの礫含む)
19. 黒色炭化物層 10 Y R 2/1 (炭化物・焼土多量に含む)
20. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/3 (炭化物含む)
21. 暗オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 3/3 (1cm大の礫・炭化物・焼土含む)
22. 褐色粘質土層 10 Y R 4/6 (2cmの礫・炭化物少々含む)
23. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/4 (炭化物若干含む)
24. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/6 (焼土含む)
25. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/4
26. 明赤褐色粘質土層 5 Y R 5/8 (炭化物含む)
27. 黄褐色粘質土層 10 Y R 5/6 (炭化物・焼土含む)
28. 褐色粘質土層 10 Y R 4/6 (炭化物・焼土含む)
29. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/3
30. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/3
31. 黄褐色砂質土層 2・5 Y 5/4
32. 褐色粘質土層 10 Y R 4/6 (1cmの礫若干含む)
33. 橙色粘質土層 7・5 Y R 6/6 (炭化物・焼土含む)
34. 黒褐色炭化物層 10 Y R 2/2 (炭化物多量に含む)
35. 暗褐色粘質土層 10 Y R 3/3 (炭化物・焼土含む)
36. ぶい黄色粘質土層 2・5 Y 6/3
37. 明褐色砂質土層 7・5 Y R 5/6 (焼土含む)
38. ぶい黄色砂質土層 2・5 Y 6/4
39. 褐色粘質土層 10 Y R 4/4 (3cmの礫・炭化物・焼土含む)
40. ぶい黄色粘質土層 2・5 Y 6/4 (1cmの礫含む)
41. 褐色粘質土層 10 Y R 4/6 (炭化物・焼土含む)
42. 灰褐色粘質土層 7・5 Y 4/2 (炭化物・焼土・10cmの礫含む)
43. ぶい黄褐色粘質土層 10 Y R 5/3 (5cmの礫・焼土含む)
44. 黄褐色砂質土層 2・5 Y 5/3
45. ぶい黄色粘質土層 10 Y R 5/4
46. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/3 (瓦・10cmの礫含む)



第4図 A-6区北壁土層図



1. におい黄色粘質土層 2・5 Y 6/4 (焼土・炭化物含む)
2. 攪乱
3. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/4 (焼土・炭化物含む)
4. におい黄色粘質土層 2・5 Y 6/3 (2~3cmの礫含む)
5. 黄灰色粘質土層 2・5 Y 6/1
6. 黄褐色砂質土層 2・5 Y 5/3
7. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/4 (1cm以内の礫若干含む)
8. 浅黄色粘質土層 2・5 Y 7/4 (1cm以内の礫若干含む)
9. 灰オリーブ色砂質土層 5 Y 5/3 (SP301)
10. 灰黄色粘質土層 2・5 Y 7/2
11. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y 7/6 (5cm以下の礫含む)
12. 灰黄褐色粘質土層 10 Y R 5/2
13. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 5/3
14. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/4 (焼土・炭化物若干含む)
15. 浅黄色粘質土層 2・5 Y 7/3 (焼土・炭化物若干含む)
16. 黄褐色粘質土層 10 Y R 7/8
17. 浅黄色粘質土層 2・5 Y 7/4 (1cm程度の礫若干含む、三和土)
18. におい黄色砂質土層 2・5 Y 6/3
19. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 5/3 (3cm以上の礫含む)
20. 浅黄色砂質土層 2・5 Y 7/4 (3cm程度の礫含む)
21. 暗灰黄色砂質土層 2・5 Y 5/2 (1cm以下の礫・焼土・炭化物若干含む)
22. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y 4/2 (瓦・3cm以上の礫・黄橙色粘質土 10 Y R 7/8 若干含む)
23. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y 5/2 (3~5cmの礫・粘土・炭化物若干含む、SK223)
24. オリーブ黒色砂礫層 5 Y 3/1 (SK330)
25. 灰オリーブ色粘質土層 5 Y 5/3 (10cm以上の礫含む)
26. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/4 (5cm程度の礫含む)
27. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/3 (5cm程度の礫含む)
28. 暗灰黄色土層 2・5 Y 4/2 (3cm以内の礫・炭化物若干含む)
29. オリーブ黄色粘質土層 5 Y 6/4
30. 灰オリーブ色粘質土層 5 Y 5/2
31. 明黄褐色粘質土層 10 Y R 6/8 (遺物多量に含む)
32. 黄褐色粘質土層 10 Y R 5/8 (10~15cmの礫含む)



第5図 A-6区東壁土層図

城期である。従って、S D301は道路の西側側溝と思われる。

この溝は、出土遺物はなかったが、前述したS B301の柱穴に切られており、16世紀末以前の遺構と考えられる。Ⅱ期に属する遺構である。

S D304・305

S D304・305（第10図・図版4）は、調査区西部に位置する南北方向に延びる溝である。S D304は、検出長4.5m、幅0.45m、深さ0.1mを測る。S D305は、検出長1.3m、幅0.32m、深さ0.05mを測る。遺物は出土しなかったが、S D304・305ラインは、『元禄七年（1694）柳沢吉保領伊丹郷町絵図』（第141図）では「善右衛門」の屋敷地西端のラインと一致し、地割溝ではないかと考えられる。さらに、埋土のオリーブ色砂質土は16世紀後半～17世紀代の包含層、または遺構のものと判明しており、この時期におさまる溝と考えられる。このことから、前述したS B301に関する遺構ではないかと考えられる。Ⅲ-1期に属する遺構である。

S D333

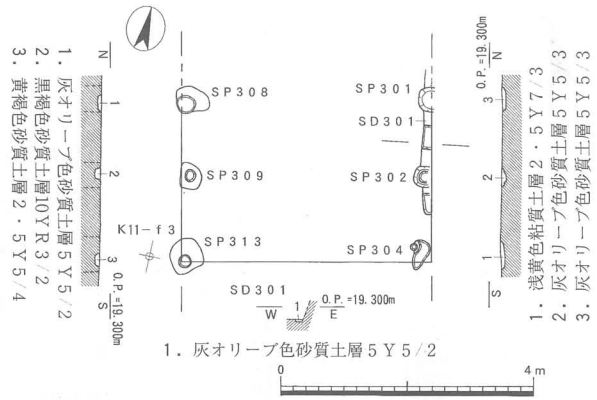
S D333（第10図・図版4）は、前述したS D304の東側に位置する。検出長4.65m、幅1m、深さ0.08mを測る。この溝は、元禄の絵図の屋敷地のラインにのらず、耕作用の溝とも考えられる。埋土は16世紀後半～17世紀代の包含層、または遺構のもの

で、この溝も、S B301に関する遺構ではないかと考えられる。Ⅲ-1期に属する遺構である。

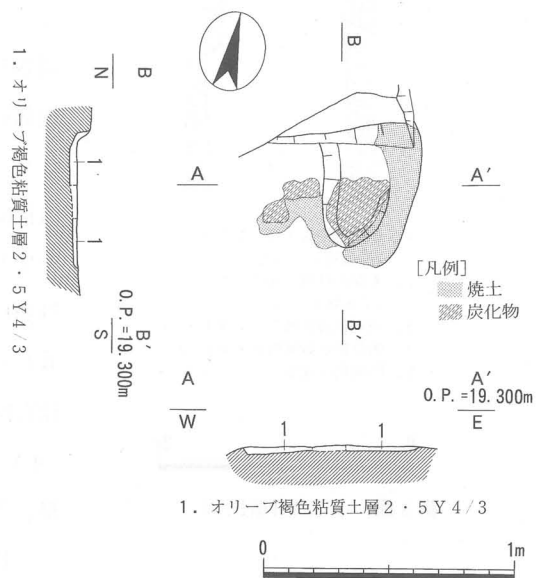
S K300

S K300（表1）は、調査区東部に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長さ2.2m、幅1.43m、深さ0.32mを測る。ここからは、遺物が多量に出土した。

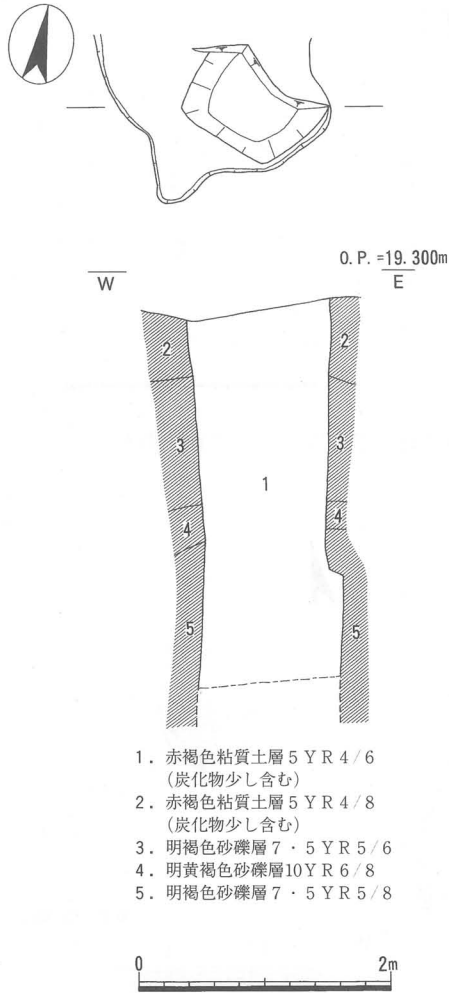
第9図-5は、肥前磁器染付輪花鉢である。口径（推）22.8cm、器高（残）6.2cmを測る。口縁部は折縁で、輪花に作られている。呉須の発色はあまり良くなく、内面口縁部にみられる唐草文も鮮明ではない。大橋康二氏の編年（大橋1993年）Ⅲ期に属する。6は、唐津系陶器刷毛目文碗である。口径10.7cm、器高7.1cm、高台径4.8cmを測る。外面は横方向に、内面は見込みから口縁にむかって白化粧土による刷毛目文を施している。高台断面は三角形を呈する。大橋氏の編年Ⅲ期に属する。7は、土師質土器柿釉灯明皿である。口径（推）11.1cm、器高1.8cmを測る。胎土はにぶい橙色（5YR7/4）を呈し、やや粗い。ロクロ成形で、外面底部はヘラケズリ調整され、外面口縁部から内面にかけて透明釉が施されている。口縁部には灯芯痕がみられた。8は、ミニチュア土製品の牛の人形である。長さ7.1cm、最大幅1.8cm、高さ4.1cmを測る。後脚部は欠損していた。型合わせ成形で、合わせ目をヘラケズリ調整している。



第6図 S B301・S D301遺構図



第7図 S V301遺構図



第8図 SE301遺構図

1. 赤褐色粘質土層 5 Y R 4 / 6
(炭化物少し含む)
2. 赤褐色粘質土層 5 Y R 4 / 8
(炭化物少し含む)
3. 明褐色砂礫層 7 · 5 Y R 5 / 6
4. 明黄褐色砂礫層 10 Y R 6 / 8
5. 明褐色砂礫層 7 · 5 Y R 5 / 8

ここに紹介した遺物はわずかであるが、出土した遺物全体をみると、年代観は17世紀末～18世紀前半と考えられる。Ⅲ-2期に属する遺構である。

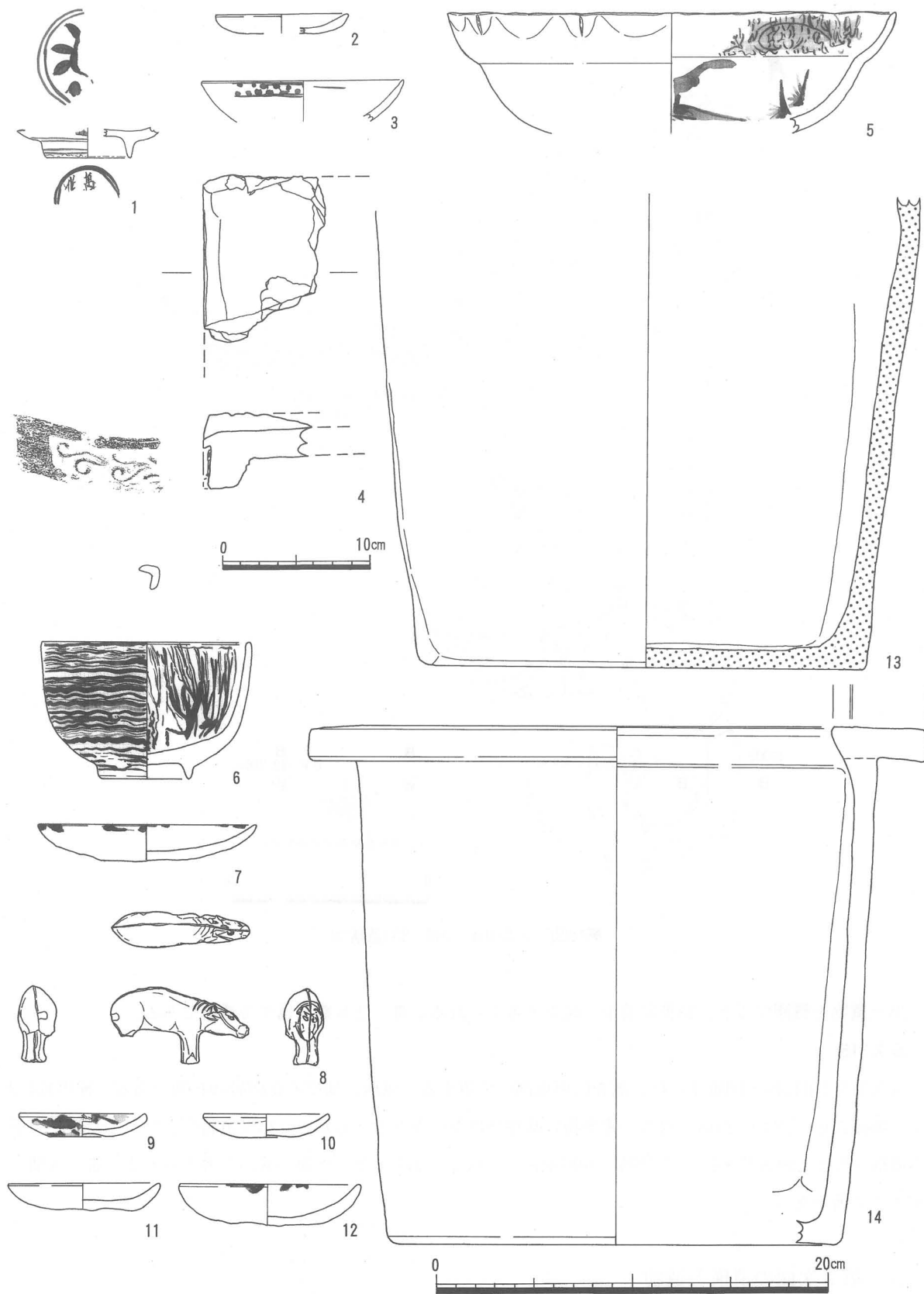
S K 332

S K 332 (第11図・図版4) は、調査区南西部に位置する。平面形は不整形を呈し、長さ1.12m、幅1.04m、深さ0.22mを測る。この遺構からは、土師質土器類 (灯明皿・火鉢・炬燵・風炉等) がまとめて出土しており、計測を行った (第4章第2節参照)。

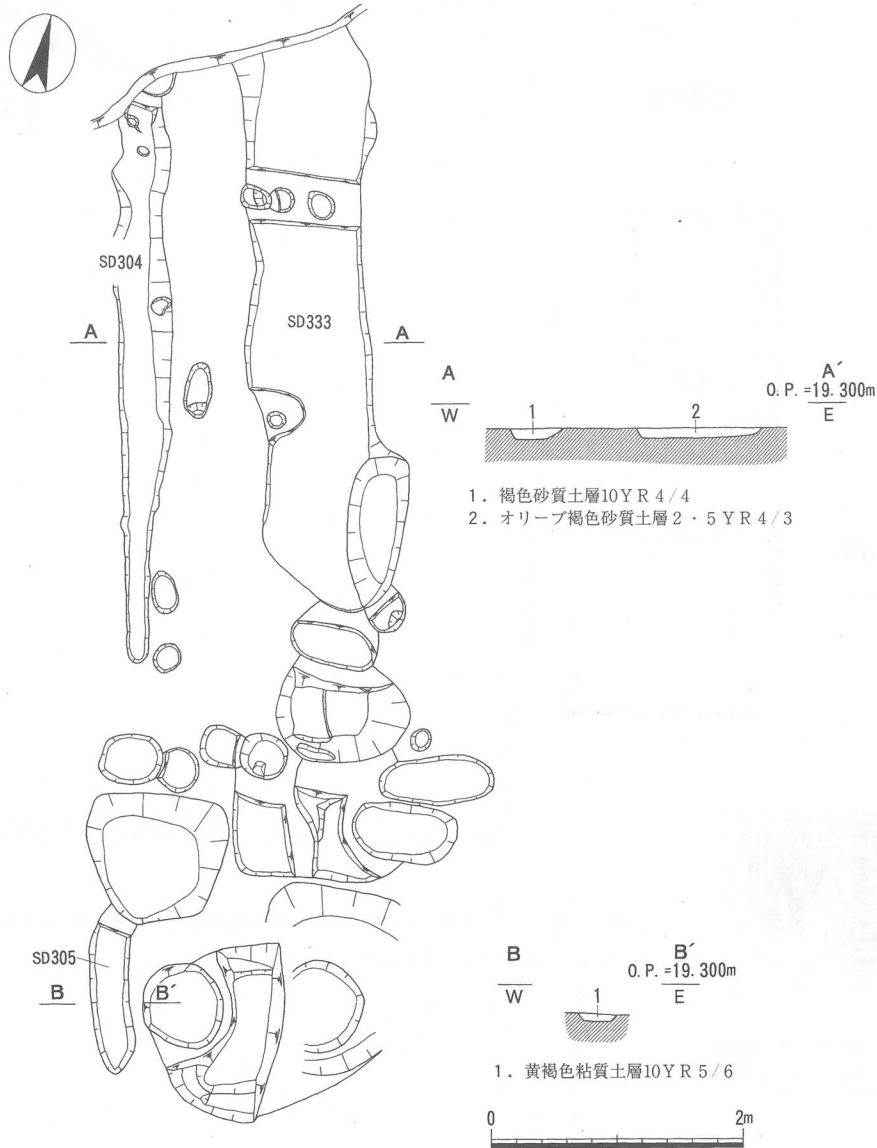
第9図-9・10は、土師質土器柿釉灯明皿である。9は、口径6.5cm、器高1.2cmを測る。胎土はにぶい黄橙色 (10 Y R 7 / 3) を呈し、ロクロ成形である。底部は、糸切り後ヘラケズリ調整し、口縁端部から内面にかけて透明釉を施している。口縁端部に2カ所、重ね焼きの際に付着したと思われる痕跡がみられた。内面口縁部から外面にかけて煤が付着していた。10は、口径6.5cm、器高1.3cmを測る。胎土は浅黄橙色 (7.5 Y R 8 / 4) を呈し、ロクロ成形である。底部は、右回転糸切痕がみられた。外面口縁部から内面にかけて透明釉が掛けられている。煤は付着していなかった。11・12は、土師質土器皿である。11は、口径7.8cm、器高1.4cmを測る。胎土は、にぶい黄橙色 (10 Y R 7 / 4) を呈する。手づくね成形で、外面は指頭圧調整後ナデ調整、内面はナデ調整が施されている。煤は付着していなかった。12は、口径9.3cm、器高2.2cmを測る。胎土は、にぶい黄

色 (10 Y R 7 / 4) を呈する。手づくね成形で、外面底部は指頭圧調整後ナデ調整、口縁部内外面はヨコナデ調整、内面底部にはナデ調整が施されている。口縁部に、灯芯痕がみられたことから、灯明皿と考えられる。ここでは、皿がこの他にも多数出土している。図版6-13は、口径9.4cm、器高2.2cmを測る。胎土は、にぶい黄橙色 (10 Y R 7 / 3) を呈する。手づくね成形で、外面底部は指頭圧調整後ナデ調整、内外面口縁部はヨコナデ調整、内面底部はナデ調整が施されている。外面には煤が付着していた。13は、瓦質土器火鉢である。器高 (残) 24.5cm、底部一辺23cmを測り、方形である。板作り成形で、外面は、底部と体部の接合部に面取りが施されているが、あとは未調整で、外面体部と底部には砂が付着していた。内面はナデ調整が施されている。小川望氏の分類 (小川1988年) 1 d類に属する。14は、土師質土器炬燵である。方形を呈し、口縁部一辺 (推) 31.8cm、器高26.5cm、底部一辺 (推) 22.6cmを測る。胎土は粗く、dull yellow orange (10 Y R 7 / 3) を呈する。口縁部と体部は別に作り、接合部はヨコナデ調整が施されている。底部は欠損が著しいが、おそらく口縁部や体部と同じように別に作り、接合・調整を施したと考えられる。口縁部上面には口縁に沿って、ヘラによる沈線が施されている。外面は、体部から底部にかけて未調整で砂が付着していた。内面体部はナデ調整が施されている。

その他にも土師質土器風炉などが出土している。火に関係するものが出土遺物の半数以上を占めており、意図的なものか、今後さらに検討する必要がある。



第9図 SE301下層 (1・2)・SE301 (3・4)・SK300 (5~8)・SK322 (9~14) 出土遺物



第10図 S D304・305・333遺構図

出土遺物を概観すると、18世紀前半～後半と考えられる。Ⅲ-2 b 期に属する遺構である。

S X315

S X315 (第12図・図版4) は、調査区南東部に位置する。東西に延びる花崗岩の石列である。検出長4.2m、幅0.75m、深さ0.28mを測る。建築物の基礎ではないかと考えられる。出土遺物は少なかったが、上面の遺構(第2次面S K251)の年代観が19世紀前半～後半であり、それ以前のものと考えられる。Ⅲ-3期に属する遺構である。

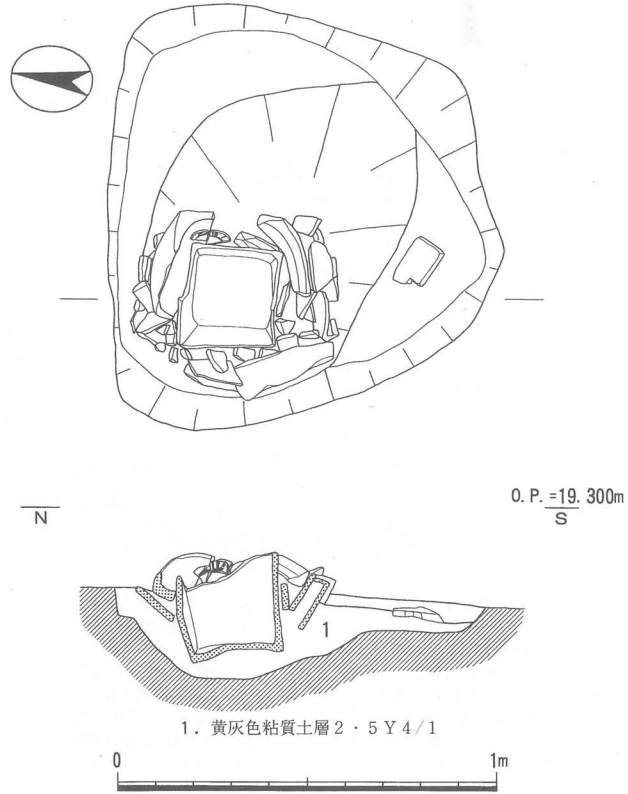
3. 第2次面の遺構と遺物

第2次面は、建物の礎石や柱穴は確認できなかったが、調査区北側間口から6～7mの範囲で三和土がみられた。この下から、享保十四年(1729)の火災の焼土処理土壌(S K208)が検出されたことから、火災以降に建てられた建物に伴うものと思われる。また、18世紀後半の火災の焼土処理土壌(S K201)も検出し、火災の範囲を知る好資料となった。

S V 201

S V 201 (第13図・図版4)は、調査区北東部に位置する竈である。主に西側が赤く焼けており、燃烧室と考えられ、東側が焚き口と考えられる。燃烧室の大きさは、直径0.67m、深さ0.27mを測る。

第14図-2・3は、肥前磁器である。2は、染付碗である。口径(推)9.8cm、器高5cm、高台径(推)4cmを測る。口径に比べると高台径が小さく、半球形である。外面に呉須で草木文が描かれている。大橋氏の編年IV期に属する。3は、白磁瓶である。器高(残)23.6cm、高台径9.9cmを測る。外面頸部から高台部にかけて透明釉が施されているが、高台畳付は露胎である。内面は一部釉が流れているが、無釉である。大橋氏の編年IV期に属する。出土遺物を概観すると、18世紀前半~後半と考えられる。III-2b期に属する遺構である。

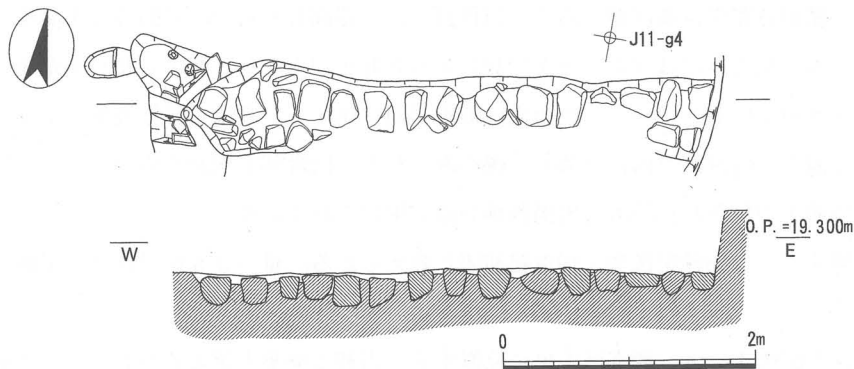


第11図 S K 332遺構図

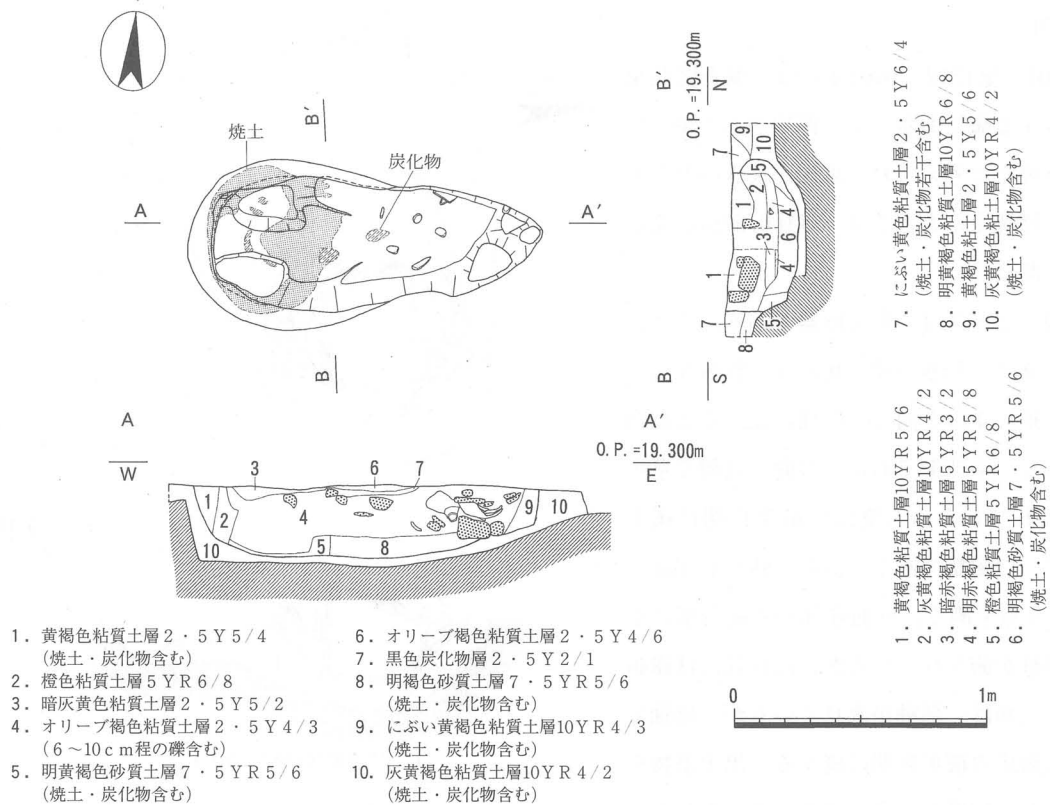
S I 202

S I 202 (第15図・図版4)は、調査区北西部に位置する。土師質土器火消壺を埋置したものである。内容物は認められなかったが、胞衣壺と考えられる。この遺構は、北側間口から6mの範囲で検出した三和土を切って検出された。掘形は、はっきりと確認できなかったが、平面形は円形を呈していたと考えられる。掘形の直径0.28m、深さ0.15mを測る。

第14図-4・5は土師質土器火消壺である。4は、火消壺蓋である。口径14.7cm、器高3.5cm、つまみ径3.4cmを測る。胎土は0.1cm程の礫を含み、light yellow orange (7.5Y R 8 / 4) を呈する。粘土円盤に粘土紐輪積み成形し、内外面口縁部はヨコナデ調整が施されている。外面天井部は未調整で、離れ砂痕がみられる。つまみ部はハリツケ後、周りにナデ調整を施している。5は、火消壺身である。口径12cm、器高15.5cm、底径13.8cmを測る。胎土は、0.1cm程の礫を含み、dull orange (7.5Y R 7 / 4) を呈する。ロクロ成形で、



第12図 S X 315遺構図



第13図 S V 201遺構図

内面口縁部から外面体部にかけてヨコナデ調整が施されている。外面底部は未調整で、離れ砂が付着している。4・5とも、川口宏海氏の編年（川口1995年）Ⅱ-2型式に属する。

出土遺物を概観すると、19世紀前半～後半と考えられる。Ⅲ-3 b 期に属する遺構である。

S Y 203

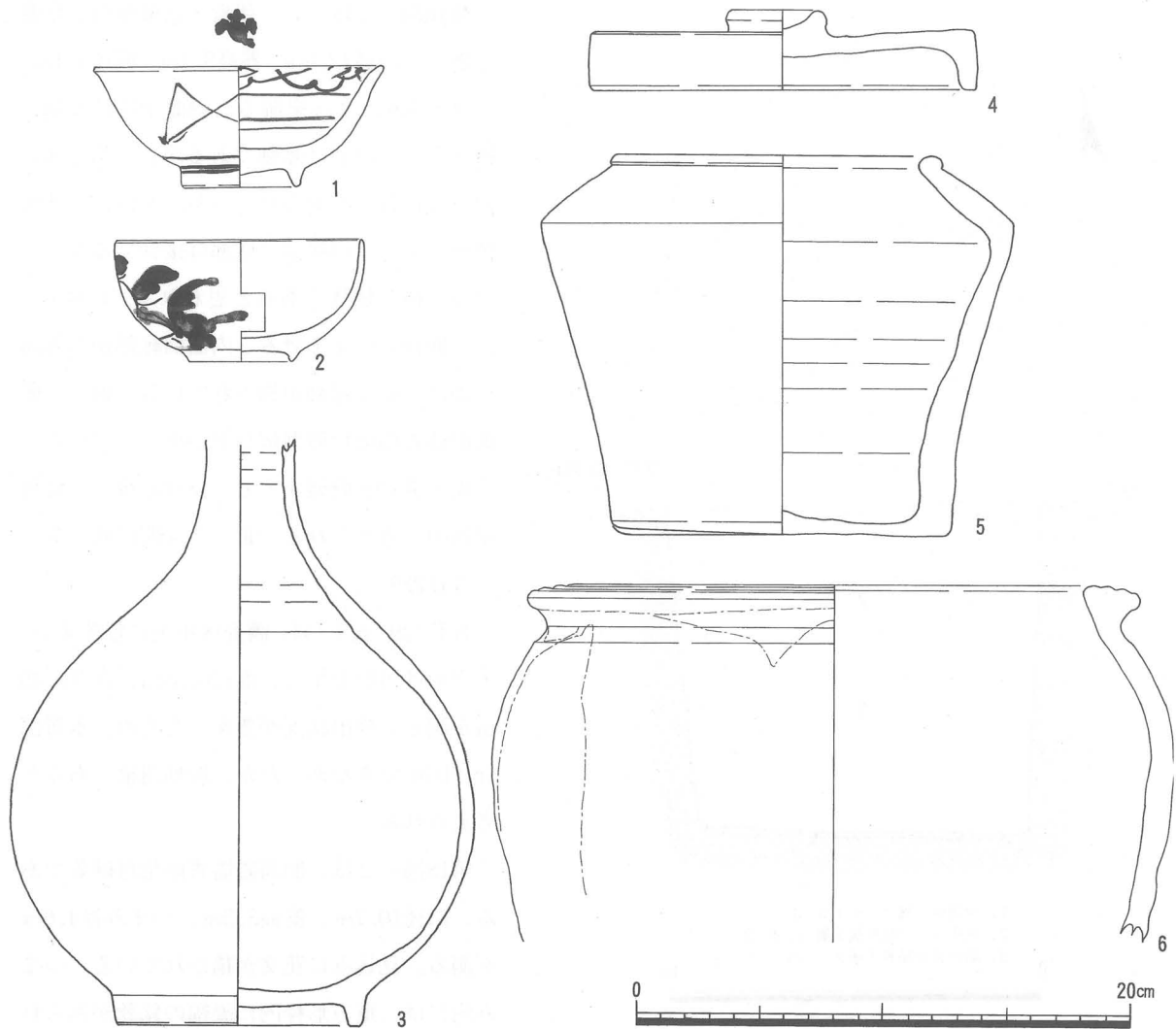
S Y 203（第16図・図版4）は、調査区中央に位置する水琴窟である。掘形は別の遺構によって切られているが、平面形は楕円形を呈すると思われる。掘形の長径0.45m以上、短径0.42m、深さ0.07mを測る。丹波焼甕を逆さまに使用したものであるが、底部は破損しており、全体構造はわからない。甕内から肥前磁器染付碗が完形で出土した。碗には砂礫がたまっており、窟底の貯水・滴水の設備として利用されていたと考えられる。この遺構に隣接して、年代観が同時期の便槽遺構（S U 226）がある。おそらく、この水琴窟は便所使用後の手洗い排水処理として利用されていたと考えられる。

第14図-1は、肥前磁器染付端反碗である。口径11.7cm、器高4.9cm、高台径4.7cmを測る。外面には折松葉文が描かれている。見込みにはコンニャク印判による五弁花がみられ、蛇ノ目輪ハギが施されている。釉ハギ上にはアルミナ砂が付着していた。大橋氏の編年Ⅴ期に属する。6は、丹波焼甕である。口径21cm、器高（残）14.4cmを測る。口縁部上面に3条の沈線がみられた。口縁部上面から内面にかけて灰釉、外面口縁部は無釉、体部は塗土が施され、随所に黒褐色釉が流し掛けられている。

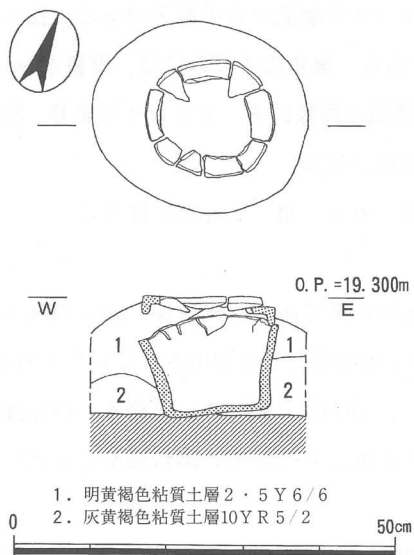
出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。Ⅲ-3 a 期に属する遺構である。

S U 226

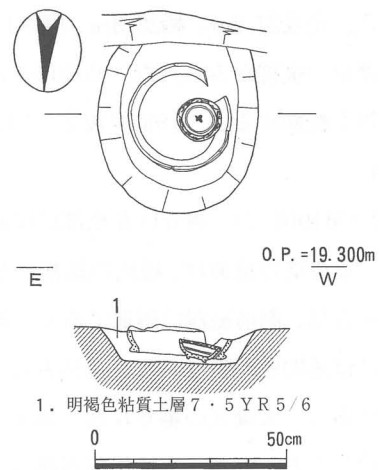
S U 226（第17図・図版4）は、調査区中央に位置する。当初は廃棄土壌と思われたが、木桶の底が検出され、便槽桶と考えられる。掘形は不整形を呈し、直径1m、深さ0.9m以上を測る。



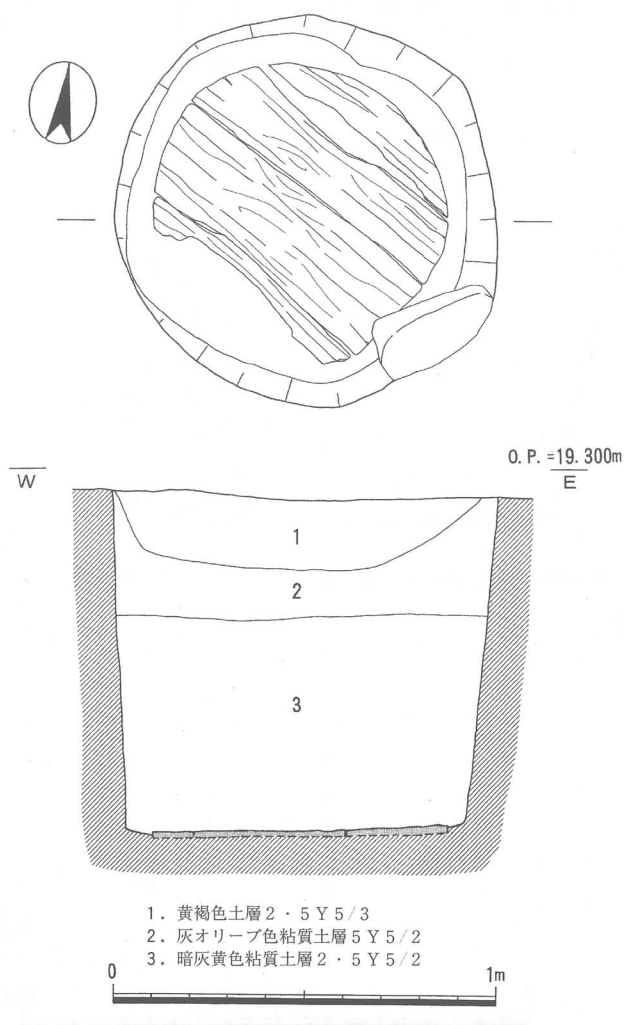
第14図 SV201 (2・3)・SI202 (4・5)・SY203 (1・6) 出土遺物



第15図 SI202遺構図



第16図 SY203遺構図



第17図 SU226遺構図

1. 黄褐色土層 2・5 Y 5/3
2. 灰オリーブ色粘質土層 5 Y 5/2
3. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y 5/2

1.2cmを測る。胎土は、light orange (5 Y R 7.5/8) を呈する。内面から外面口縁部まで透明釉が施されている。底部には右回転糸切痕がみられた。4は、ミニチュア土製品の芥子面子である。長さ3.3cm、幅2.7cm、厚さ1.3cmを測る。型押し成形で、器形は男性の顔である。裏側のくぼみには、墨書がみられた。9は、椀瓦である。全長27.2cm、幅28.3cm、厚さ1.8cmを測る。凹面は周縁にそってヨコナデ調整、端は面取りされている。葦足の痕跡がみられた。凸面は未調整で、離れ砂痕が残る。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。Ⅲ-3 a 期に属する。

SD201

SD201 (第19図) は、調査区北東部に位置する南北に延びる溝である。検出長4.6m、幅0.45m、深さ0.07mを測る。この溝の位置は、現代の地割りと一致しており、地割溝として利用されていたと考えられる。

第18図-5は、肥前磁器白磁皿である。器高(残)1.5cm、高台径(推)4cmを測る。口縁部は欠損していた。内面には透明釉が掛けられ、見込みには蛇ノ目釉ハギが施されている。高台脇やや上部から高台部にかけて露胎である。大橋氏の編年Ⅳ期に属する。

他に図化しなかったが、京焼風陶器碗(大橋氏編年Ⅳ期)・土師質土器焙烙(難波洋三氏の分類D類・E類(難波1992年))などが出土している。出土遺物を概観すると、18世紀前半～後半と考えられる。Ⅲ-2 b 期

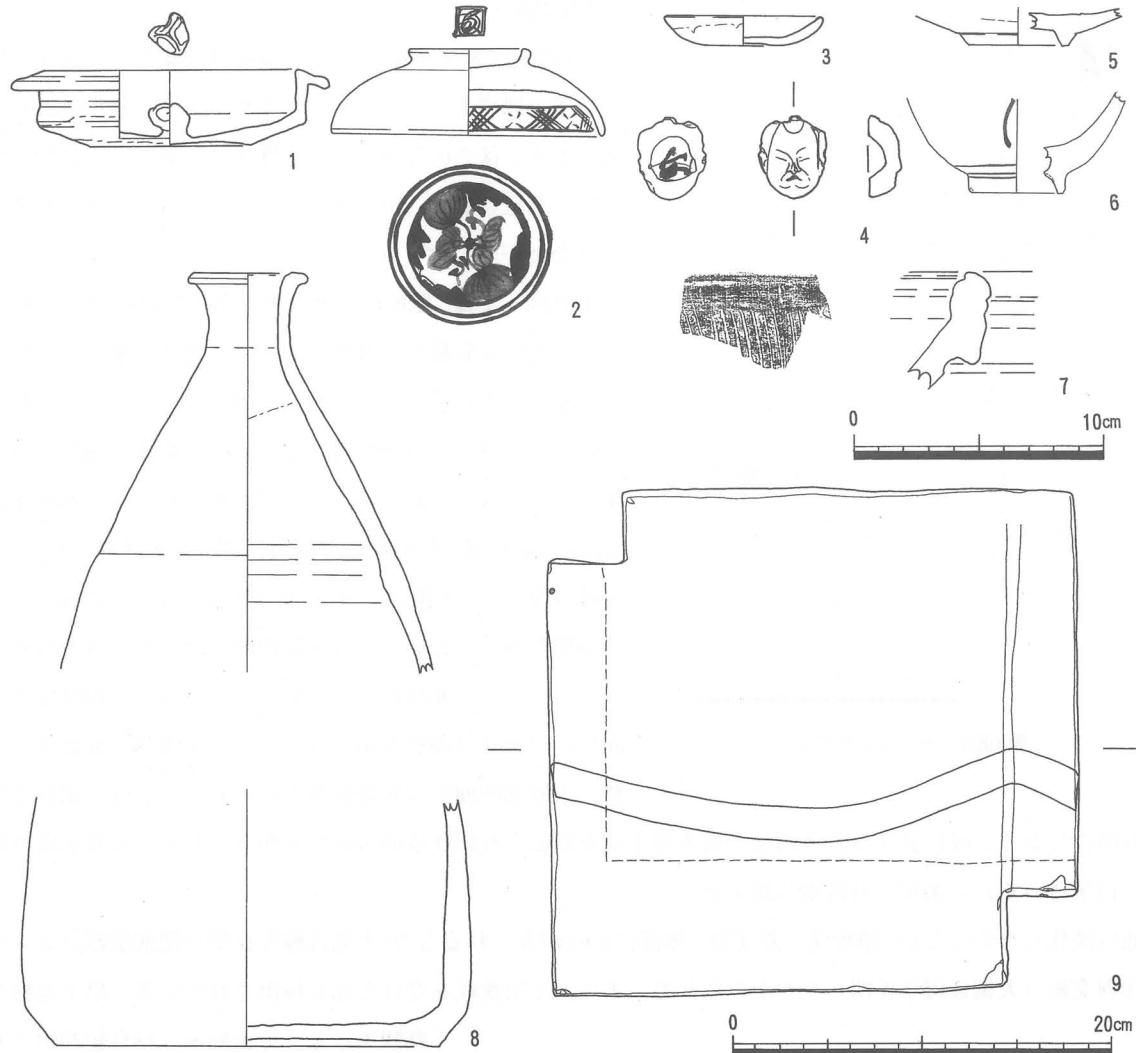
第18図-1は、京・伊賀・信楽焼系土瓶蓋である。口径12.8cm、器高3.1cm、底径6.4cm、つまみ部幅1.7cmを測る。内面全体に灰釉が掛けられ、外面は無釉であるが、一部底部に沿って白色土が塗られている。8は、丹波焼徳利である。口縁部と底部は接合できなかったが、同一個体であると思われる。口径4.7cm、底径15.3cmを測る。内面口縁部から外面にかけて赤土部釉が施されている。他に、肥前磁器青磁染付筒型碗などが出土している。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。Ⅲ-3 a 期に属する。

SU229

SU229(表1)は、調査区中央に位置する。平面形は円形を呈し、直径0.58m、深さ0.45mを測る。検出状況が悪かったため、木質部分は図化できなかったが、埋桶遺構であると考えられる。

第18図-2は、肥前磁器青磁染付碗蓋である。口径10.7cm、器高3.5cm、つまみ径4.6cmを測る。見込みに花文が描かれている。つまみ内には二重方形枠内に渦福の銘款がみられる。大橋氏の編年Ⅳ期に属する。3は、土師質土器柿釉灯明皿である。口径6.2cm、器高



第18図 SU226 (1・8)・SU229 (2～4・9)・SD201 (5)・SD203 (6・7) 出土遺物

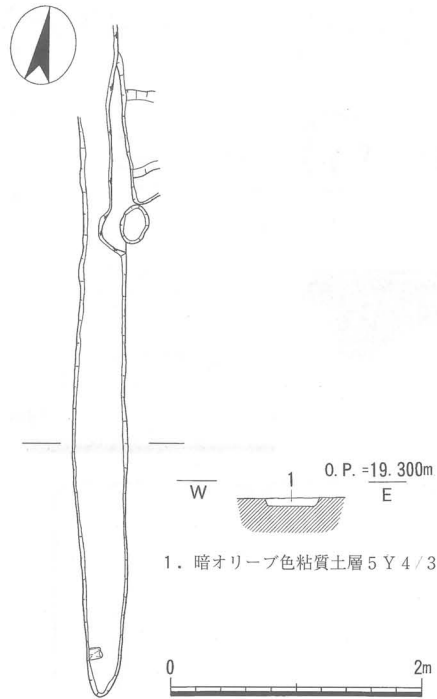
に属する遺構である。このSD201の西側には、後述するSK208があり、享保の大火災の焼土処理土壌と考えられることから、火災以降に建てられた建物に関する溝ではないかと考えられる。

SD203・204

SD203・204 (第20図・図版5) は、調査区南西部に位置する溝である。SD203は検出長3.5m、幅0.7m、深さ0.05mを測る。SD204は検出長1.9m、幅0.38m、深さ0.24mを測る。2カ所共、埋土に黄色系の礫混粘土が入っており、建物の基礎か建物に関する遺構ではないかと考えられる。遺物は、SD203のみ出土している。

第18図-6は、肥前磁器染付碗である。器高(残)4cm、高台径(推)3.6cmを測る。高台畳付は露胎である。大橋氏の編年IV期に属する。肥前磁器では他に、コンニャク印判文碗(大橋氏編年IV期)が出土していた。7は、堺焼播鉢である。口縁部のみ若干残存していた。胎土は0.1cm程の礫を含み、灰色(5Y4/1)を呈する。播目は7本単位である。口縁部は内面に段がみられ、外縁部の沈線も明確にみられた。口縁部外縁部よりやや下辺まで回転ヘラケズリ調整を施している。白神典之氏の型式分類(白神1992年)II型式に属する。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～末と考えられる。III-2b～3a期に属する遺構である。

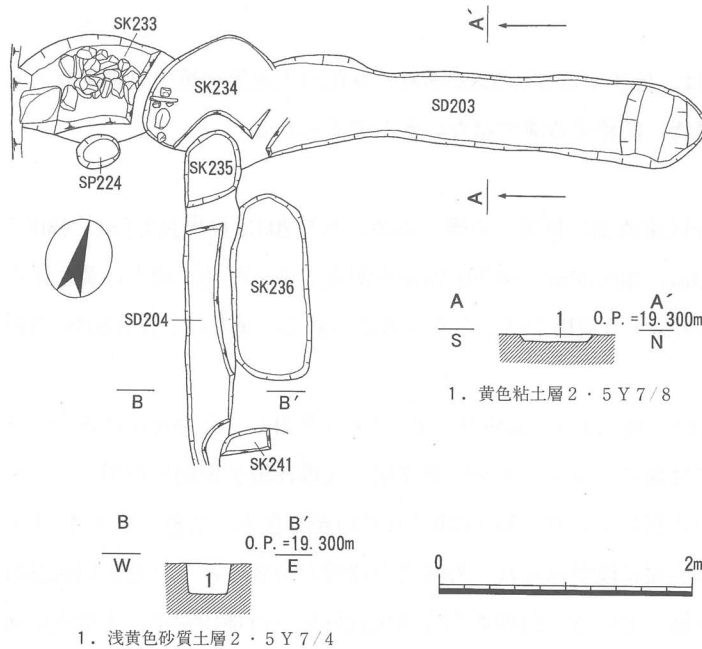


第19図 S D201遺構図

煙管吸口である。吸口長7cm、吸口部の最大径1cmを測る。吸口作成時の接合痕がみられる。古泉弘氏の変遷（古泉1987年）の第IV～VI段階に属する。

他に図化しなかったが、嬉野焼二彩手皿（体部に折れがみられるもの・大橋氏編年IV期）・肥前磁器コンニャク印判文碗（大橋氏編年IV期）などがみられた。また、2次焼成を受けた瓦も検出されている。出土遺物を

概観すると、17世紀末～18世紀初頭と考えられ、享保十四年（1729）の火災の処理土壌ではないかと考えられる。III-2a期に属する遺構である。



1. 浅黄色砂質土層 2・5 Y 7/4

第20図 S D203・204遺構図

S K 208

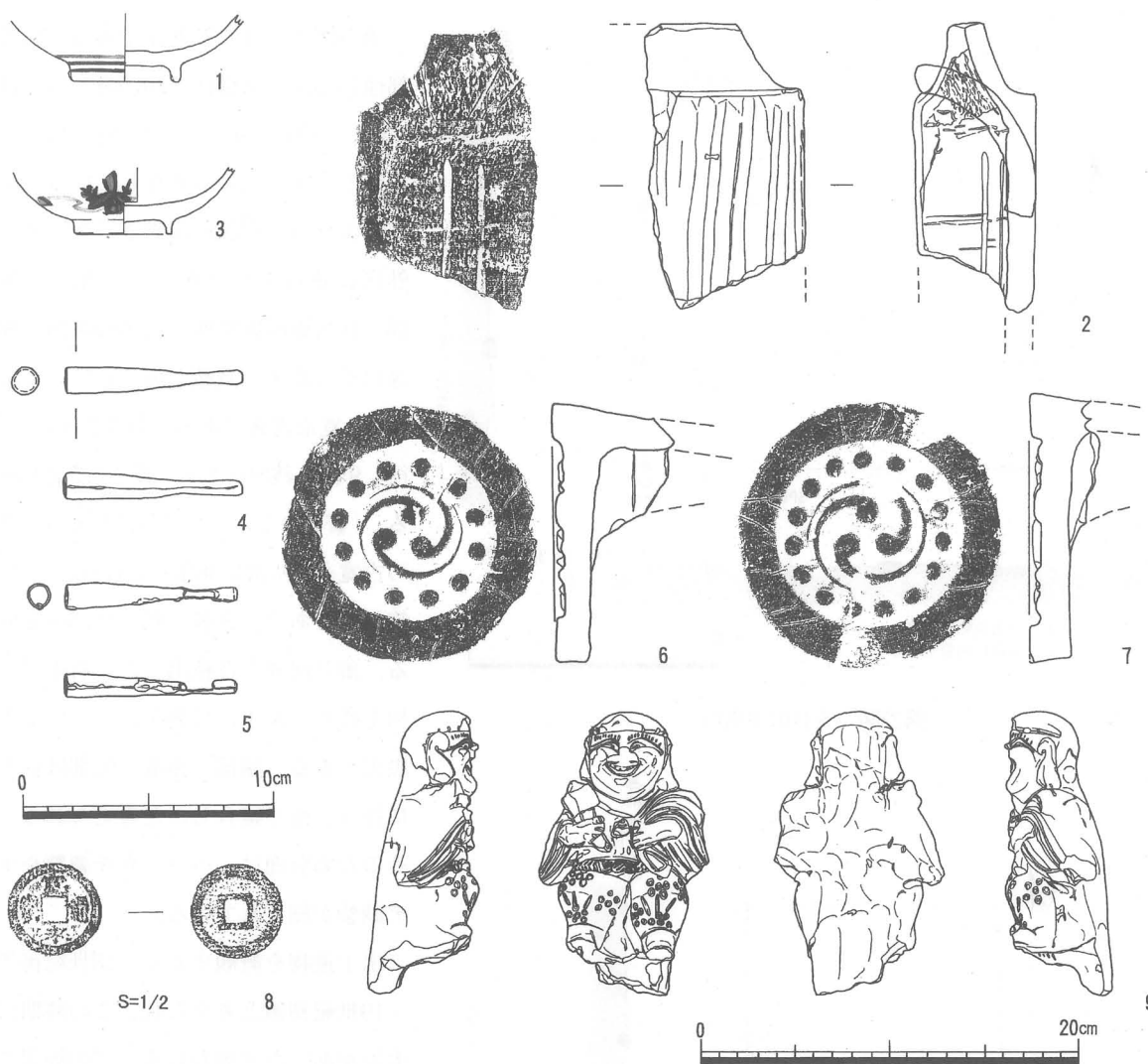
S K 208（表1・図版5）は、調査区北東部に位置する焼土処理土壌である。平面形は不整形を呈し、検出長3.1m、幅2.25m、深さ0.53mを測る。埋土は1層で、全体的にはにぶい黄色粘質土（10Y R 6/3）であるが、炭化物や焼土や瓦などが多く含まれていた。

第21図-1は、肥前磁器染付碗である。器高（残）2.8cm、高台径4.2cmを測る。内面見込みには蛇ノ目釉ハギが施され、釉ハギ上にはアルミナ砂が付着している。また、高台畳付にもアルミナ砂が付着している。大橋氏の編年IV期に属する。2は、丸瓦である。全長（残）15.4cm、丸瓦部高6.5cm、丸瓦部厚1.6cm、玉縁部長3.7cm、玉縁部高3.6cm、玉縁部厚1.3cmを測る。丸瓦部凸面は、縦方向にヘラミガキ調整が施されている。丸瓦部凹面には、布目痕があり、さらにその上に叩板のタタキ痕がみられる。両側縁は縦方向にヘラケズリ調整が施されている。玉縁部凸面はナデ調整、玉縁部凹面には布袋紐痕がみられる。5は、銅合金製

S K 224

S K 224（表1）は、調査区中央から東に広がる土壌である。この遺構は、土層断面図を観察すると、2時期の遺構が切り合っていることがわかった。平面形は隅丸長方形を呈する。長さ4m、幅2.08m、深さ0.61mを測る。出土遺物も多く、上層では、京・伊賀・信楽焼系土瓶（鉄釉・灰釉のもの）などが出土し、下層では、ここで図化したものが出土した。

第21図-3は、肥前磁器染付碗である。器高（残）2.7cm、高台径（推）3.8cmを測る。外面には、手描きとコンニャ



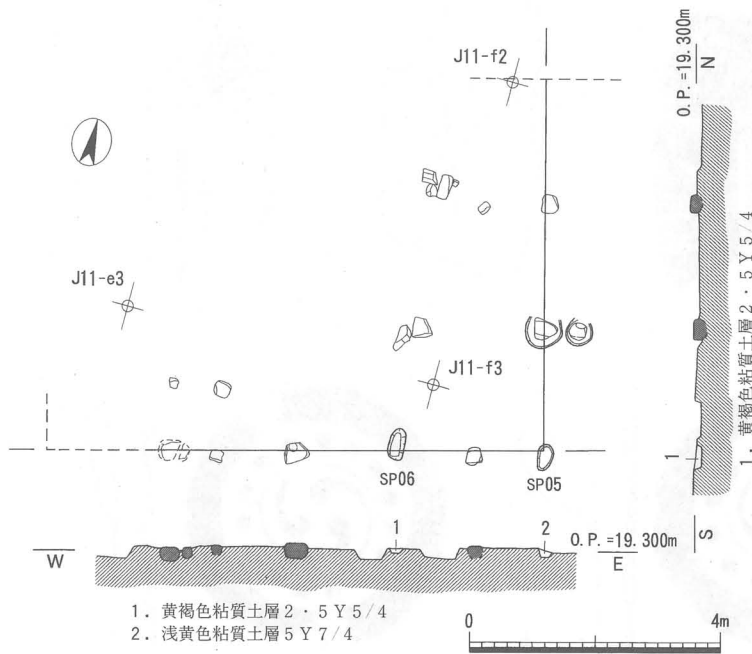
第21図 SK208 (1・2・5)・SK224 (3・4・6)・SK201 (7～9) 出土遺物

ク印判で文様が施されている。高台畳付には砂が付着している。大橋氏の編年IV期に属する。4は、銅合金製煙管吸口である。吸口長7.1cm、吸口部の最大径1.1cmを測る。吸口部作成時の接合痕がみられる。古泉氏の変遷第IV～VI段階に属する。6は、軒丸瓦である。全長(残)6.5cm、瓦当部径13.8cm、文様区径9.5cm、内区径5.3cm、周縁部幅2.4cm、瓦当部厚1.8cmを測る。瓦当部文様は、内区は左巻き三ツ巴文、外区は連珠を12個配する。瓦当周縁部・瓦当周縁部側面は周縁にそってナデ調整が施されている。瓦当部裏面は不定方向にナデ調整後、周縁にそってナデ調整が施されている。丸瓦部はほとんど欠損しているが、凸面は縦方向にナデ調整が施されている。丸瓦部凹面では、瓦当部と丸瓦部の接合部分に横方向のナデ調整が施されている。

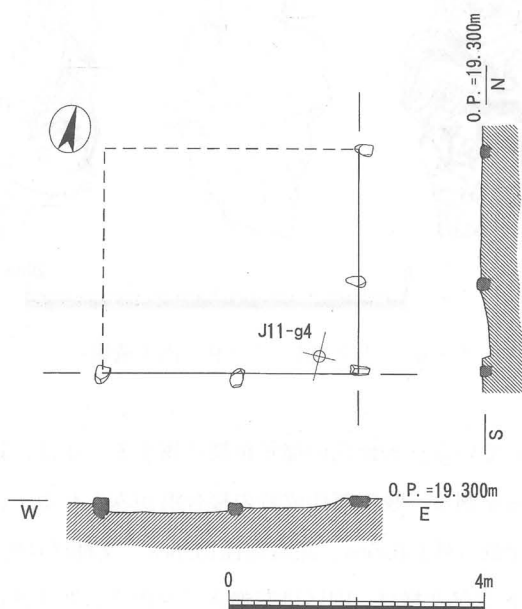
出土遺物を概観すると、下層土壌は18世紀前半、上層土壌は19世紀前半～後半と考えられる。それぞれⅢ-2b期、Ⅲ-3b期に属する遺構である。

SK201

SK201(表1・図版5)は、調査区北部北壁沿いに検出した遺構である。平面形は不整形を呈し、長さ2.7m、検出幅1.6m、深さ0.27mを測る。埋土は、黒褐色炭化物層(10YR2/2)で、焼土や瓦も多量に含まれていた。火災の処理土壌と考えられる。



第22図 S B01遺構図



第23図 S B02遺構図

第21図-7は、軒丸瓦である。瓦当部径14.3cm、文様区径10.9cm、内区径6.9cm、周縁部幅1.9cm、瓦当部厚2.3cmを測る。瓦当部のみ残存している。瓦当部文様は、内区に左巻き三ツ巴文、外区に連珠を15個配する。瓦当周縁部・瓦当周縁部側面・瓦当部裏面は周縁にそってナデ調整が施されている。

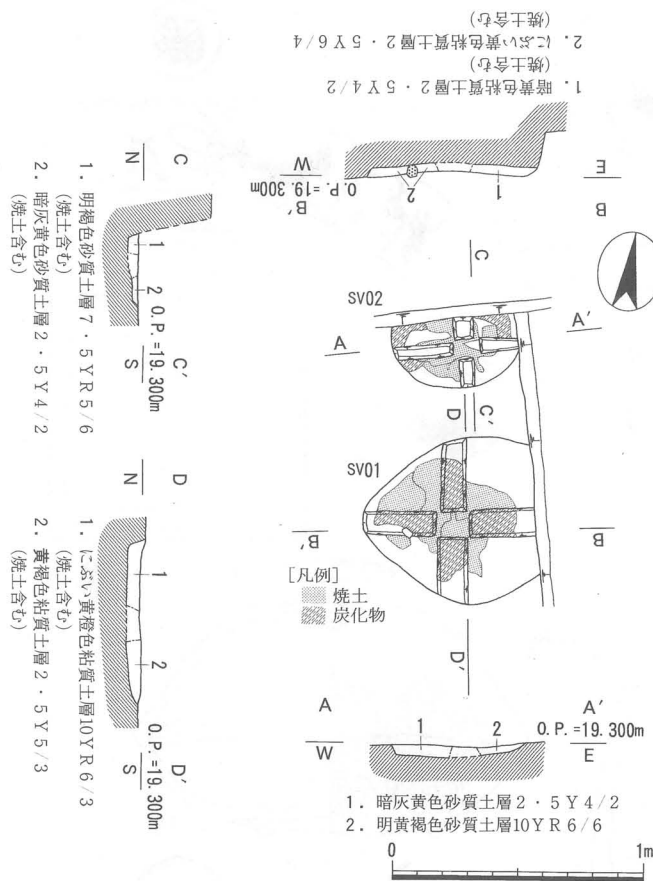
8は、寛永通寶である。外径2.5cm、内径1.9cm、銭厚0.1cm、重さ2.3gを測る。「寶」の字が「ス貝」になる、1期の古寛永（初鑄1636年）である。9は、飾り瓦である。全長（残）19.5cmを測る。飾り部分だけ検出した。右手に小槌を持ち、左手には袋を持っている大黒天である。頭部・体部・瓦部は別々に作り、後で接合したと考えられる。そのため裏面は、ヘラミガキ調整やナデ調整が施されている。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀初頭と考えられ、この時期に火災があったと思われる。この周辺では、第51次調査B-2-2区・B-3区等で、同じ時期の火災の処理土壌が検出されている。古野將盈『有岡庄年代秘記』（八木哲浩他『伊丹市史第4巻』伊丹市役所1968年）では、宝暦元年（1751）と明和二年（1765）に北少路村で部分的な火災があったとされているが、遺物の年代観はこれより新しい

様相を示しており、『有岡庄年代秘記』成立以降（記録は文政年間まで）の火災である可能性があると考えられている（川口1997年a）。S K201は、18世紀後半～19世紀初頭にかけての火災の範囲を考える上で好資料となった。また、この遺構は三和土を切って検出されており、18世紀後半～19世紀初頭以前に建物が建っていたと考えられる。Ⅲ-3 a期に属する遺構である。

S X244

S X244（表1・図版5）は、調査区南東部に位置する。平面形は長方形で、検出長4m、幅1.4m、深さ1.72mを測る。出土遺物は近代以降のものが多く、防空壕であると思われる。時代は違うが、第3次面S X315の石列は、ちょうど防空壕の北側ラインにあたる。昭和二十三年の航空写真（図版1）では、この辺りは



第24図 SV01・02遺構図

4. 第1次面の遺構と遺物

第1次面では、礎石建物SB01・02を検出している。また、調査区北側より南へ11mの範囲内で、これに伴う三和土を部分的に検出した。三和土は、第2次面で述べた18世紀後半～19世紀初頭の火災の焼土処理土壌SK201の上で検出しており、これ以降に建物が建てられたと考えられる。また、埋甕SW01・02、埋桶SU03・04・05、竈SV01・02などを検出した。

SB01

SB01(第22図・図版5)は、調査区北部に検出した礎石建物である。梁行4間(東西7.88m)、桁行3間(南北5.91m)を測る。この礎石建物は、前述した18世紀後半～19世紀初頭の火災の焼土処理土壌SK201の上面で検出されており、また、昭和二十三年及び昭和三十六年の航空写真(図版1)にみられる建物と同じである。よって、19世紀初頭以降～20世紀前半までに建てられたもので、Ⅲ-3～Ⅳ期に属する。

SB02

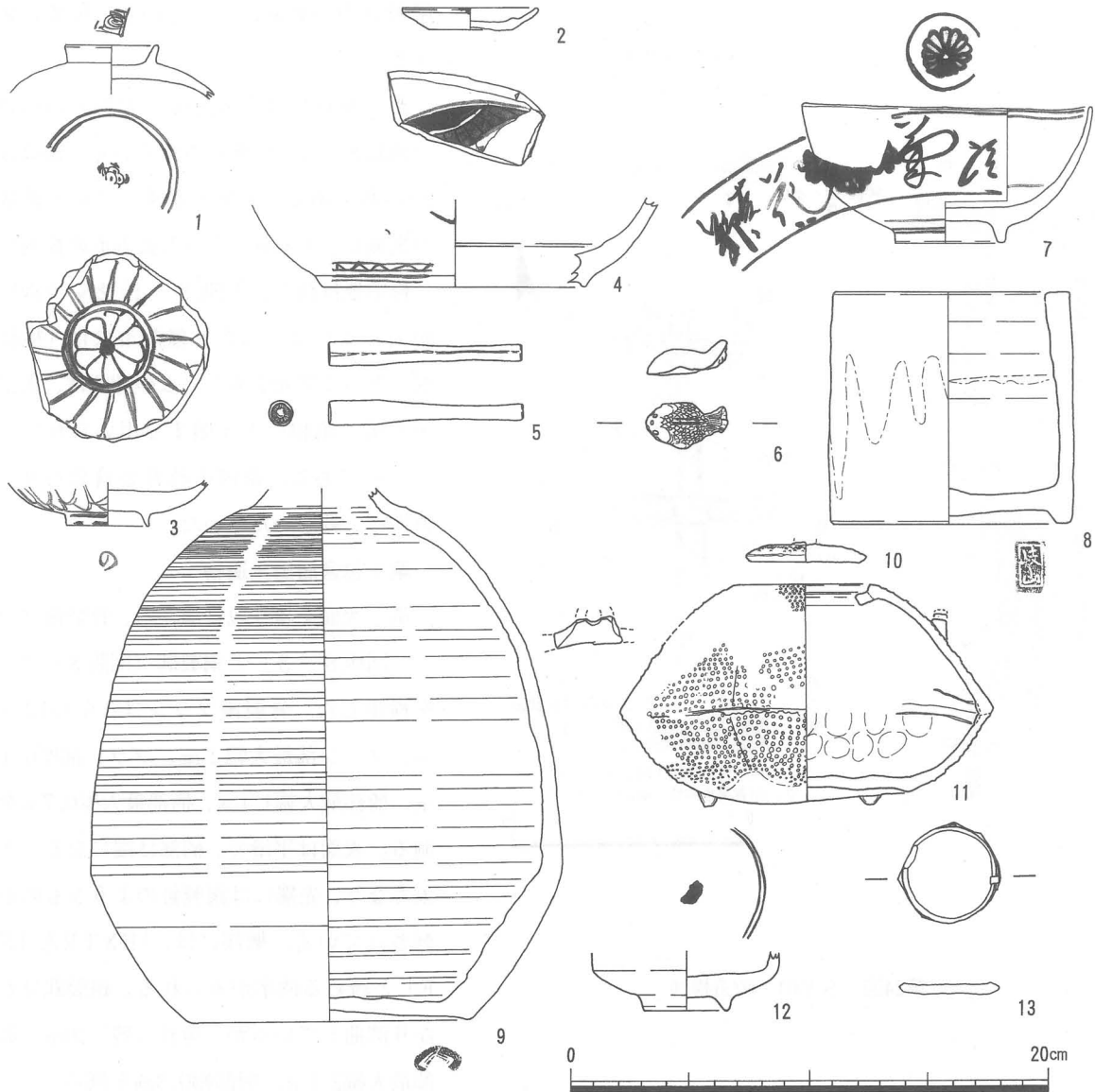
SB02(第23図)は、調査区南東部に検出した礎石建物である。東西3.94m、南北3.5mを測る。SB01と同様にⅢ-3～Ⅳ期に属すると考えられる。

屋敷地内の裏庭になっている。Ⅳ期に属する。

出土遺物には、備前焼の大黒天の置物(図版8-1)が検出されている。器高は20cm程である。大黒天が乗っている徳俵の裏側に、0.8cm×1cmの長方形の枠内に「備前焼桃蹊堂」(図版8-1')という押印が入っている。現在も備前市には「桃蹊堂」という窯元があり、この押印は、大正末年頃～昭和三十年頃まで用いられていたものである。備前市教育委員会石井啓氏にご教示いただいた。

第1包含層出土遺物

第1次面を覆う包含層から、骨製歯ブラシ(図版8-3)と銅製匙(図版8-2)を検出した。骨製歯ブラシは、全長12.5cm、ブラシ部最大幅1cm、ブラシ部厚0.4cm、柄部最大幅1.1cm、柄部最大厚0.7cmを測る。表面は平滑で、柄部は端になるほど太くなり、先端には銅製釘のようなものが刺さっている。柄部には、「EXTRA IN E」と読める欧字がみられる。銅製匙はかなり湾曲しているが、全長(残)10cm、匙部最大幅2.1cm、柄部幅0.3cmを測る。



第25図 S V01 (1)・S V02 (2)・S U03 (3)・S U04 (4)・S U05 (5～9・11)・
S W01 (12・13)・第1包含層 (10) 出土遺物

S V01・02

S V01・02 (第24図・図版5) は、調査区北東端に位置する竈である。燃燒室が2基並ぶ。S V01の平面形は不整形で、検出長0.69m、幅0.66m、深さ0.05mを測る。S V02は、検出長0.5m、検出幅0.28m、深さ0.05mを測る。S V01・02とも検出状況から、竈の底部にあたると思われる。焚き口は東側である。

第25図-1は、S V01より出土した、肥前磁器青磁染付蓋である。器高(残)2.1cm、つまみ径(推)3.9cmを測る。内面見込みには、二重圏線内に手描きの五弁花がみられる。高台内には、渦福の銘がみられる。大橋氏の編年IV期に属する。2は、S V02より出土した、土師質土器柿釉灯明皿である。口径(推)5.7cm、器高0.9cmを測る。内面から外面底部中程まで透明釉が掛けられている。外面底部には、右回転糸切痕がみられる。口縁部には煤が付着している。

検出した遺物は少ないが、概観すると、S V01出土遺物は、18世紀後半でⅢ-2b期、S V02出土遺物は、18世紀後半～19世紀初頭でⅢ-3a期に属すると考えられる。遺物では、18世紀のものが出土しているが、

面としては、礎石建物S B01の竈にあたる可能性がある。

S U03・04

S U03・04（第26図・図版5）は、調査区南部に位置する。平面形はどちらも円形を呈する。S U03は、木桶の直径0.47m、深さ0.12m、掘形の直径0.62m、深さ0.14mを測る。S U04は、木桶の直径0.45m、深さ0.25m、掘形の直径0.68m、深さ0.25mを測る。どちらも内面に白い附着物がみられた。便槽桶と考えられる。

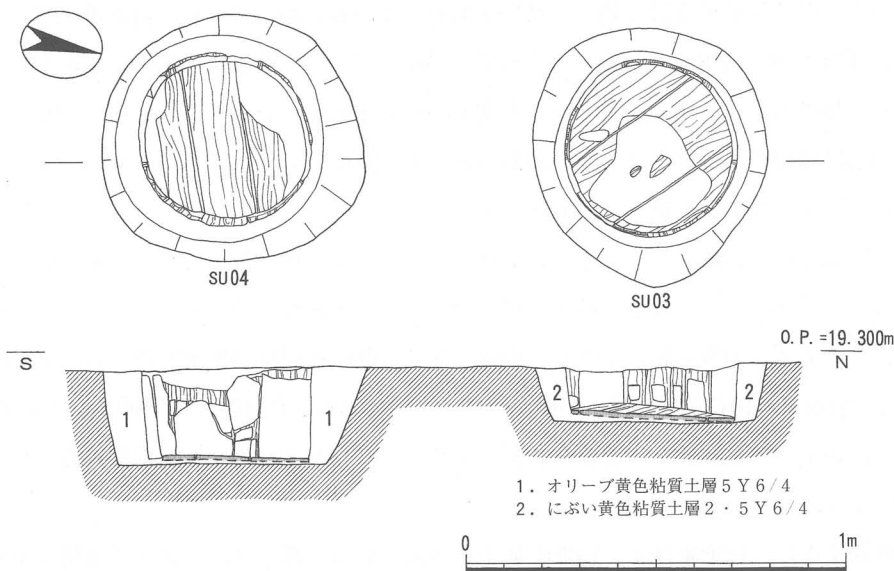
第25図-3は、S U03の掘形より出土した、肥前磁器染付碗である。器高（残）1.9cm、高台径3.5cmを測る。内面には菊花文、外面は二重網目文、高台内には「の」字の銘がみられる。高台畳付は露胎である。大橋氏の編年IV期に属する。他に、18世紀後半～19世紀初頭の京・伊賀・信楽焼土瓶蓋、19世紀末～20世紀初頭の染付皿が出土している。4は、S U04の掘形より出土した遺物で、肥前磁器青磁染付鉢である。器高（残）3.8cm、高台径（推）10.1cmを測る。内面に青磁釉が施されているが、見込みは呉須で半花文が描かれている。大橋氏の編年IV期に属する。

出土遺物を概観すると、どちらも設置時期は18世紀後半以降で、廃絶時期は20世紀初頭と考えられる。Ⅲ-3期～Ⅳ期と考えられる。

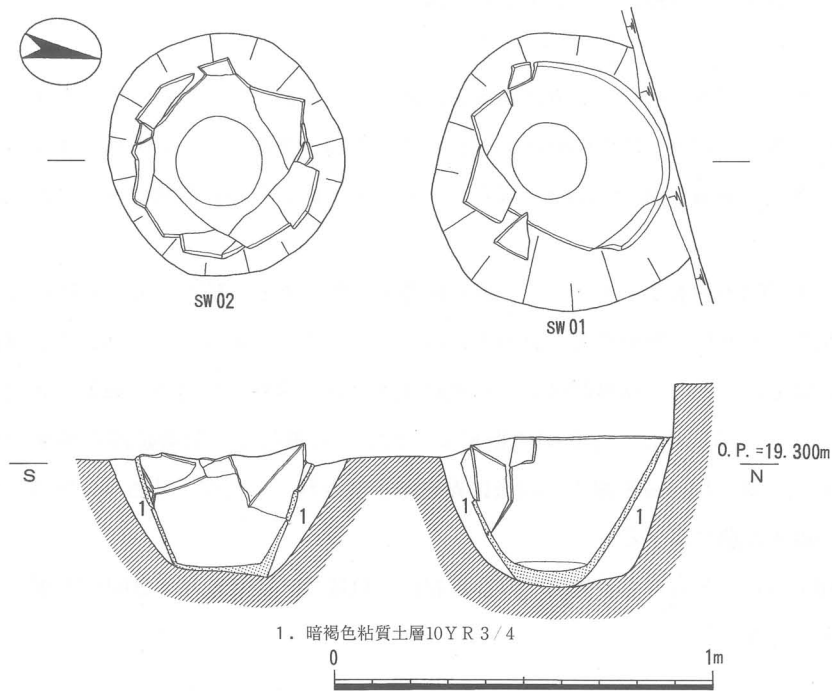
S U05

S U05（表1）は、調査区南部に位置する。検出状況から、埋桶跡と考えられる。掘形の平面形は不整形で、長さ1.94m、検出幅1.36mを測る。木桶跡部分は、直径1.05m、深さ0.7mを測る。埋土は、上層に3層ほど薄い層がみられたが、ほとんどがオリブ褐色粘質土（2.5Y 4/4）であり、遺物もこの層から多く出土している。

S U05出土遺物は、第25図-5～11である。5は、銀製かと思われる煙管吸口である。吸口長8.2cm、吸口部の最大径1cmを測る。外面には、吸口部作成時の接合痕がみられる。内部には木製のラウの一部が残存している。6は、ミニチュア土製品で、金魚である。型押し成形で、裏側は未調整である。最大長3.4cm、最大幅2cm、最大厚さ0.8cmを測る。7は、肥前磁器染付碗である。口径12.2cm、器高6cm、高台径5cmを測る。高台畳付は露胎で砂が付着している。見込みには、コンニャク印判で菊花文が描かれている。外面はコン



第26図 S U03・04遺構図



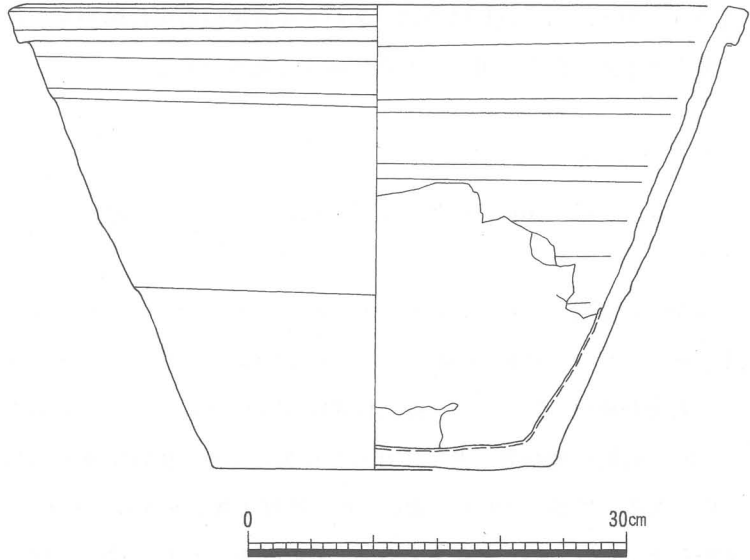
第27図 SW01・02遺構図

ニャク印判で葉文が、手描きで「花ハ吉□□の」「菊□」と描かれている。伊丹市立博物館の石川道子氏にご教示いただいた。大橋氏の編年Ⅳ期に属する。8は、産地不明軟質施釉陶器火入れである。口径（推）10cm、器高9.7cm、高台径9.9cmを測る。胎土はlight orange（5 Y R 7.5/8）を呈する。まず、白色土を塗り、その上から透明釉を掛け、さらに灰釉を流し掛けている。高台内には「岐山」（縦1.8cm×横1cm）の銘がみられる。美濃に「岐山焼」という陶窯があるが（加藤唐九郎1972年）、それを真似たものではないかと思われる。9は、備前焼徳利である。器高（残）22.3cm、底径11.8cmを測る。外面には塗土が施され、黄ゴマがみられる。外面底部に、「◆」の刻印がみられる。備前焼の刻印に似たものはあるが、全く同じものはない（桂又三郎1973年）。10・11は産地不明軟質施釉陶器である。10は、蓋である。この遺物は、第1包含層より出土したものであるが、後述する11と胎土や釉色が似通っているため、組み合う蓋と考えると、ここに掲載した。口径5.1cm、器高（残）0.8cmを測る。つまみ部は欠損していた。胎土はpale beige（9 Y R 8.5/1.5）を呈する。外面は型押しによる突起がみられ、緑色釉（strong yellowish green 10 G Y 4.5/7）が施されている。内面は周縁に沿ってヘラケズリ調整が施され、無釉である。11は、土瓶である。口径（推）5.4cm、器高9.2cm、胴部径15.7cmを測る。胎土は、pale beige（9 Y R 8.5/1.5）を呈する。器形は八角算盤玉形で、上部と下部を別々に成形し、つなぎ合わせたものである。接合部は、さらに粘土紐で補強されている。内面上部は、不定方向にナデ調整、蓋受け部周辺は強いナデ調整が施されている。蓋受け部は、別に粘土をハリツケ、ヘラケズリ調整を施している。内面下部は、強い指頭圧調整痕がみられ、見込みには薄く釉（pale yellow green 10 G Y 8/1.5）が掛かっている。外面は、底部際まで型押しによる突起がみられ、緑色釉（deep green 5 G 3.5/7）を施し、肩には耳がハリツケられている。底部には三足の脚がハリツケられ、若干煤が付着している。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀前半と考えられる。Ⅲ－3期に属する遺構である。

SW01・02

S W01・02 (第27図・図版5) は、調査区西部に位置する便槽甕である。S W01は北壁にかかって検出したが、どちらも掘形の平面形は、ほぼ円形である。S W01の掘形は、直径0.75m、深さ0.35mを測り、S W02の掘形は、直径0.65m、0.3mを測る。現在の地割に当てはめてみると、この便槽甕は、調査区西隣りの屋敷地内の遺構であると考えられる。



第28図 S W01出土遺物

第25図-12・13は、S W01より出土した遺物である。12は、肥前磁器青磁染付筒型碗である。器高(残)2.5cm、高台径(推)3.7cmを測る。外面から

高台内にかけて青磁釉が施されている。高台畳付は露胎である。見込みには呉須で文様が描かれている。大橋氏の編年IV期に属する。13は、土師質土器柿釉灯明皿の底部である。長径4.3cm、短径4.2cm、厚さ0.4cmを測る。胎土は、浅黄橙色(7.5Y R 8/4)を呈する。底部にあたるので、上面は透明釉が施され、下面は右回転の糸切痕がみられ、無釉である。これは、面子として使用したものではないかと考えられる。

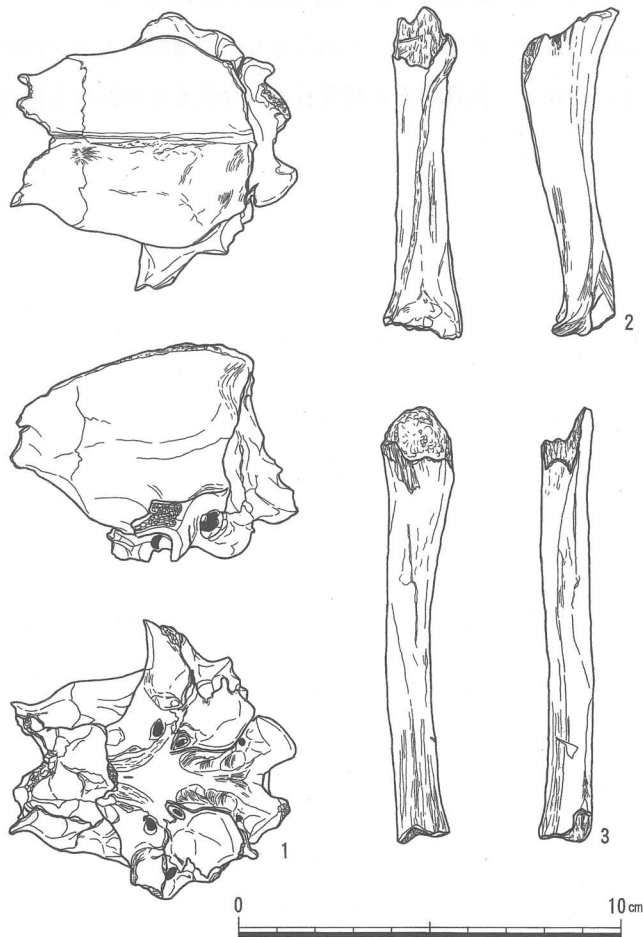
第28図-1は、S W01の大谷焼鉢である。口径59cm、器高37.4cm、底径26.9cmを測る。内面には、白色の付着物がみられる。川口宏海氏の型式分類(川口2000年)Ⅲ-1型式に属する。S W02(図版8-18)も大谷焼鉢である。器高(残)31cm、底径27cmを測る。

S W02では、あまり遺物は検出できなかったが、S W01とほぼ同時期と考えられる。出土遺物を概観すると、19世紀末~20世紀前半と考えられる。IV期に属する遺構である。

S K 06

S K 06(表1)は、調査区南西部に位置する。不整形を呈し、長さ1.38m、検出幅0.38m、深さ0.22mを測る。ここからは、犬の骨を検出し、残存状況の良いものを図化した。

第29図-1は、頭部である。全長7.5cm、高さ5.6cmを測る。2は、上腕骨である。全長(残)8.8cmを測る。3は、脛骨である。全長(残)



第29図 S W01出土遺物

11.5cmを測る。出土遺物は他に、瀬戸・美濃焼磁器染付碗がみられた。出土遺物を概観すると、19世紀前半～後半と考えられる。Ⅲ-3b期に属する遺構である。

5. まとめ

A-6区では、16世紀後半～20世紀初頭にかけての遺構を検出した。以下、時代を追ってまとめることにする。

調査区北東部に、16世紀後半～末と考えられるSE301を検出した。また、16世紀末までに廃絶した道の側溝と考えられるSD301を検出した。周辺の調査では、この時期の遺構の検出例は少なく、大きな成果であった。建物が検出されるのは、掘立柱建物SB301からで、建てられた時期は、16世紀末～17世紀代である。また、同じ時期の地割溝と考えられるSD304・305や耕作用溝SD333も検出した。その後18世紀代に入ると、享保十四年(1729)の火災に遭い(焼土処理土壙SK208)、整地され、北より7mの範囲で三和土が敷かれ、建物が建てられていたと考えられる。この三和土に伴う礎石や柱穴は確認できなかった。調査区中程より南には、建物基礎のSD203やSX315がみられ、この辺りにも建物が存在していたと考えられる。18世紀後半～19世紀初頭頃、この調査区は火災に遭う(焼土処理土壙SK201)。その後、新たに三和土が敷かれ、礎石建物SB01・02が建てられていたと考えられる。この時期に伴うと考えられる便槽遺構SU03・04を調査区南部で検出している。このSB01・02は、昭和二十三年・三十六年の航空写真にみられるように、戦後以降も存続していた。その後、建て替えられ、調査前の既存建物に至る。

また、この調査区では、火に関係するものが多く出土した遺構(SK332)を検出した。年代観は、18世紀前半～後半と考えられ、土器系のもので遺物の大半が占められている。今回は、検討する時間が十分ではなかったが、一括性のある好資料で、今後もその性格を検討していきたいと考えている。

第3節 第117次調査A－7区

A－7区は、昆陽口通から北に入る、山行道と呼ばれていた道の西側に位置する。この山行道は、『寛政八年（1796）伊丹細見図』（第141図）には記されていないが、『天保十五年（1844）伊丹郷町分間絵図』（第141図）に記されており、その間に造られたと考えられる道である。また、『延宝五年（1677）伊丹郷町地味委細絵図』（第141図）によると「小屋口村」（昆陽口村）とあり、『天保十五年伊丹郷町分間絵図』（第141図）においても、「昆陽口村」の範囲に位置している事が分かる。『元禄七年（1694）柳沢吉保領伊丹郷町絵図』（第141図）によると、「庄左衛門」の屋敷地の北側、日用「七兵衛」の屋敷地の南側にあたり、屋敷地の中でも裏手に相当する。調査面積は84.7㎡を測る。

1. 基本層序

遺構面は3面確認することができた。地山面はO. P. = +19.000～19.100mを測る。東壁・中央アゼ土層図（第30・31図）を観察すると、第3次面は地山面（現地表面より30cm～40cm下）であるが、一部第2次面で検出しきれなかった遺構もこの面で同時に検出している。この面の上層より、第2次面（第30図第11・16層など、現地表面より30cm下）を捉えた。（中央アゼ土層図については、この面以下の層から記録している。）さらにその上層で、第1次面（第30図第7・8層、現地表面より20cm下）を捉えた。

2. 第3次面の遺構と遺物

第3次面（地山直上面）は、17世紀後半～18世紀初頭の面である。この時期の遺構は土壙が中心で、建物に関する遺構などは検出されなかったことや、『元禄七年（1694）柳沢吉保領伊丹郷町絵図』では屋敷地の裏地にあたることなどから、裏庭的空間であったと考えられる。また、これ以前の時期の遺構については確認されなかったが、通りから奥まった位置に当たること、『寛文九年（1669）伊丹郷町絵図』に建物の記載が見られないことなどからも、宅地として利用されていなかったと考えられる。

S U 200

S U 200（表1・図版11）は、調査区北東部に位置し、遺構底部より桶の底板の痕跡と見られるものを検出したことから、埋桶遺構と考えられる遺構である。遺構の平面形は不整形円形を呈し、直径0.64m、深さ0.5mを測る。

第32図－1・2は肥前磁器である。1は染付広東型碗で、口径（推）11.2cm、器高6cm、高台径5.8cmを測る。外面体部には芙蓉手の皿によく見られる花卉文が描かれる。見込みには線描きにより十字花文が描かれている。高台畳付は露胎である。焼継ぎ痕が見られる。2はコンニャク印判文碗である。口径8.8cm、器高4.9cm、高台径3.4cmを測る。外面体部にはコンニャク印判により菊花文が施される。高台は内傾ぎみで、畳付は露胎で離れ砂が付着している。1は大橋康二氏の編年（大橋1993年）V期、2はIV期に属する。この他に、京・伊賀・信楽焼灰釉土瓶・鉄釉鍋、土師質土器丸火鉢、柿釉灯明皿、軒平瓦などが出土している。

遺構の時期は、上面の遺構（第2次面S K 113）の上限が19世紀初頭と見られることなどから、18世紀後半～末と考えられ、Ⅲ－3 a期に属する。

S U 209

S U 209（表1・図版11）は、調査区南東部に位置する埋桶遺構である。掘形の平面形は円形を呈し、掘形の直径1.19m、深さ0.61mを測る。

第32図-3は京・伊賀・信楽焼端反碗である。口径9cm、器高5.4cm、高台径4.1cmを測る。外面は成形後に面取りして装飾としている。体部高台付近にはヘラ彫りで箋文が施され、高台にはその際のヘラの痕が残る。内外面共に灰釉が施され、高台端部は無釉である。6は丸瓦である。全長(残)19.5cm、玉縁部長3.8cm、高さ6.5cm、体部幅14.2cm、を測る。体部凸面は縦方向ヘラミガキ調整、体部と玉縁部の境にはヨコナデ調整が見られる。凹面両側縁にはヘラケズリが施され、玉縁部には布袋紐痕が残る。体部には2箇所の釘穴が施されていることから軒丸瓦の後部と考えられる。この他には、肥前磁器青磁染付碗・染付二重網目文碗、京・伊賀・信楽焼鉄釉土瓶などが出土している。

出土遺物から概観すると、18世紀後半～19世紀初頭の遺構と考えられ、Ⅲ-3a期に属する。

S K 214

S K 214(表1)は、調査区南西部隅に位置する廃棄土壌と考えられる遺構である。平面形は周りの遺構に切られて不明であるが、検出長2.28m以上、検出幅0.68m以上、深さ0.31mを測る。遺構南端は調査区外へ延びるが、西端は以前報告した、本調査区西隣の第51次調査では遺構の続きが確認されておらず、調査区外に出てすぐに終わると思われる。

第32図-4は唐津系陶器刷毛目文碗である。器高(残)5.6cm、高台径5cmを測る。内外面共に、橙色地に白化粧土により刷毛目文を施している。高台はハの字に開き、畳付は露胎である。大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。5は土師質土器ミニチュア香炉である。口径(推)4.3cm、器高3.6cmを測る。胎土は赤褐色(5YR 7/4にぶい橙色)と灰白色(7.5YR 8/2)の土が練り込まれている。上下別々で型作り成形後に貼り合わせていると見られ、耳の下辺りに接合部が見られる。足はハリツケされている。体部外面と底部内面に雲母粉が多く見られる。内面は、上下貼り合わせ後丁寧にナデているが、外面は接合部を軽く削った程度である。7は、花崗岩製一石五輪塔である。残存高23.4cm、最大残存幅13.5cmを測る。地輪・空輪部はほぼ欠損している。この他に丹波焼播鉢、肥前磁器染付草花文碗などが出土している。

出土遺物から概観すると、17世紀後半～18世紀初頭の遺構であると考えられ、Ⅲ-2a期に属する。

3. 第2次面の遺構と遺物

この面は、18世紀前半～後半の遺構を中心とする面である。2次面でも3次面と同様に、土間面や柱穴など建物が建っていた痕跡は見られなかった。この面では、本来第3次面で検出すべき遺構も同時に確認した。その中には享保十四年(1729)の火災の焼土処理土壌と考えられる遺構も含まれ、火災面自体は検出されなかったが、この調査区でも享保十四年の火災の被害を受けていることが確認できた。

SW109

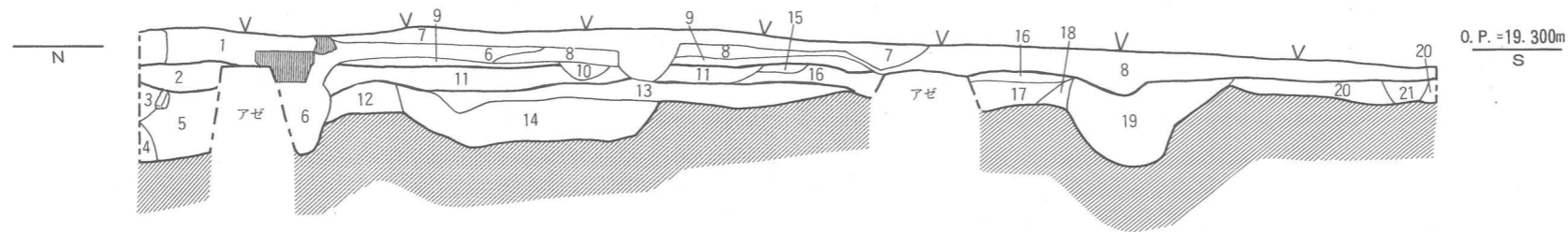
SW109(第34図・図版11)は、調査区南部中央に位置する埋甕遺構である。掘形の平面形は円形を呈し、掘形の直径0.35m、深さ0.15mを測る。

第35図は信楽焼甕である。底径15.2cmを測る。底部から約11cmのところ、分割成形した痕が見られる。内外面共に鉄釉が施されるが、底部外面は無釉である。外面体部には鉄釉の流し掛けが見られる。内面見込み、外面底部には重ね焼き痕の離れ砂が円形に付着している。

出土遺物から概観すると、19世紀前半～中頃の遺構と考えられ、Ⅲ-3b期に属する。

S U 113

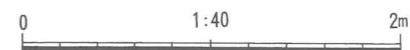
S U 113(第33図・図版11)は、調査区南東部に位置する埋桶遺構である。桶は造り変えられており、初段階の掘形直径0.55m、深さ0.4mを測る。次段階の桶掘形0.34m、深さ0.3mを測る。次段階の桶からは、肥



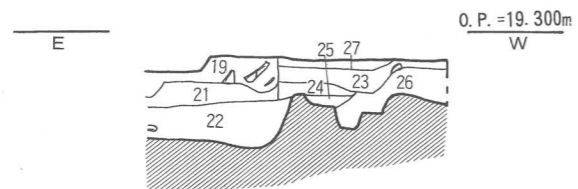
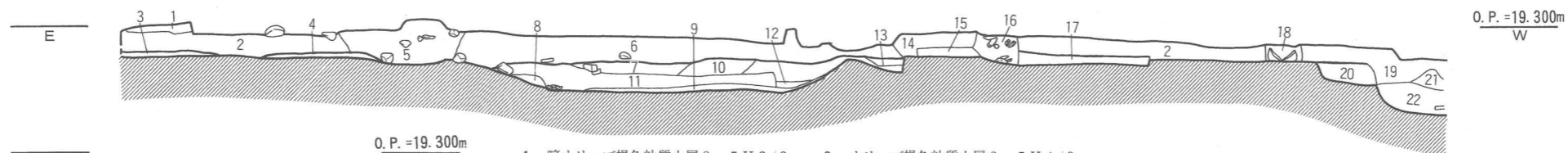
- 1. 攪乱
- 2. 黒褐色粘質土層 2・5 Y 3/2
- 3. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y 4/2
- 4. 黒褐色粘質土層 2・5 Y 3/2
- 5. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y 4/2
- 6. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/3
- 7. 暗オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 3/3

- 8. 浅黄色粘質土層 2・5 Y 7/3
- 9. におい黄褐色粘質土層 10Y R 4/3
- 10. 褐色粘質土層 10Y R 4/4
- 11. 暗褐色粘質土層 10Y R 3/4
- 12. におい褐色粘質土層 10Y R 4/3
- 13. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/3
- 14. 暗オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 3/3

- 15. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/4
- 16. 黄褐色粘質土層 10Y R 5/8
- 17. 暗オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 3/3
- 18. オリーブ褐色粘質土層 10Y R 4/4
- 19. におい黄褐色粘質土層 10Y R 5/4
- 20. におい黄色粘質土層 2・5 Y 6/3
- 21. 暗褐色粘質土層 10Y R 3/3



第30図 A-7区東壁土層図



- 1. 暗オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 3/3
- 2. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/4
- 3. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/6
- 4. 黄褐色粘質土層 10Y R 5/8
- 5. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/6
- 6. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/4
- 7. 暗オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 3/3
- 8. 褐色粘質土層 10Y R 4/6

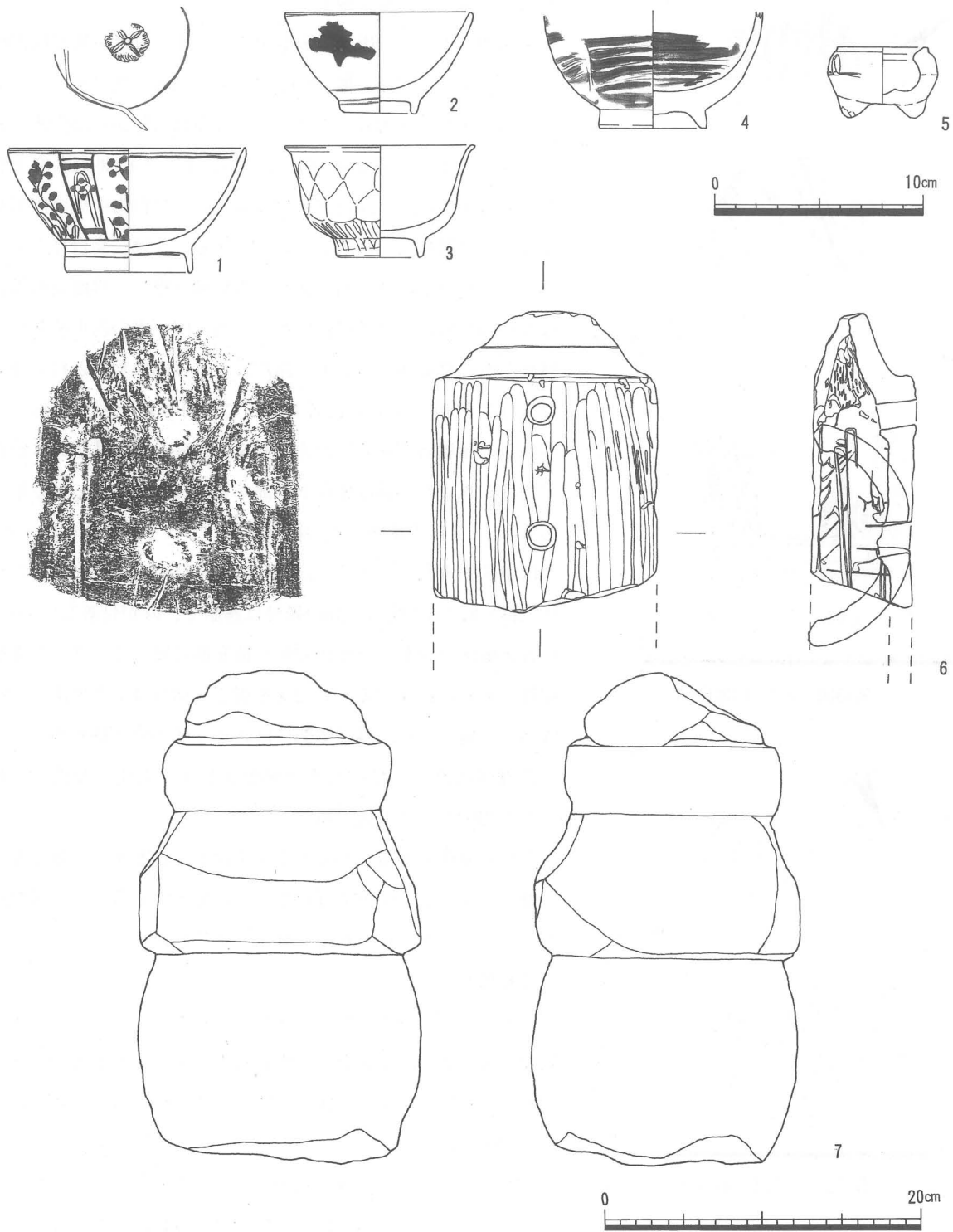
- 9. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/3
- 10. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/6
- 11. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/4
- 12. 褐色粘質土層 10Y R 4/4
- 13. におい褐色粘質土層 10Y R 5/4
- 14. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/6
- 15. 褐色粘質土層 10Y R 4/6
- 16. におい褐色粘質土層 10Y R 4/3

- 17. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/6
- 18. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/3
- 19. 暗オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 3/3
- 20. 褐色粘質土層 10Y R 4/4
- 21. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/4
- 22. 黒褐色粘質土層 2・5 Y 3/2

- 23. 黄褐色粘質土層 10Y R 5/8
- 24. 暗オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 3/3
- 25. 黄褐色粘質土層 10Y R 5/6
- 26. 暗オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 3/3
- 27. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/3



第31図 A-7区中央アゼ土層図

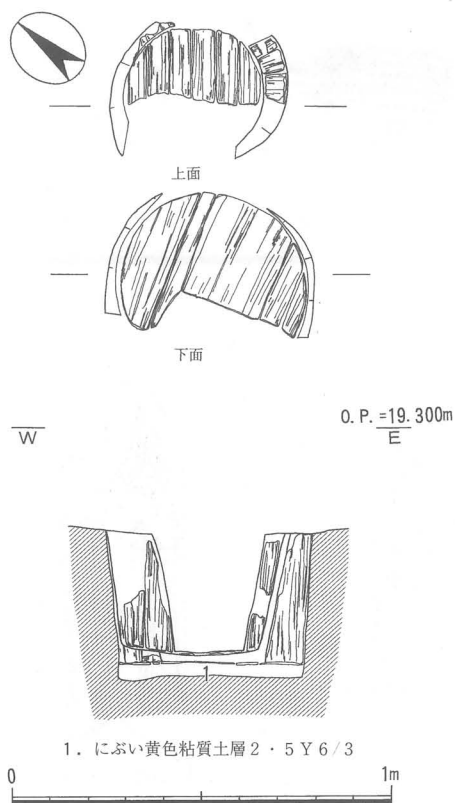


第32図 SU200 (1・2)・SU209 (3・6)・SK214 (4・5・7) 出土遺物

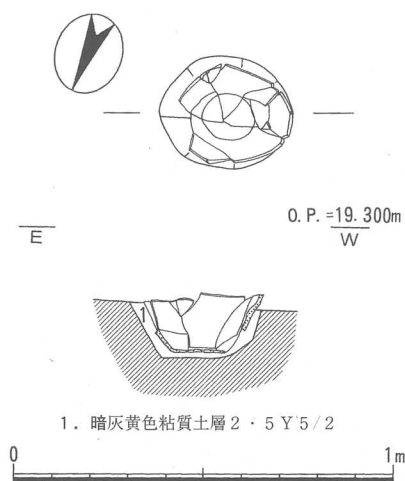
前磁器銅板摺碗や、京・伊賀・信楽焼系鉄釉鍋などが出土している。出土遺物から概観すると、19世紀後半～末の遺構と考えられ、Ⅲ-3b～Ⅳ期に属する。

S K104

S K104 (表1・図版12) は調査区中央に位置する土壌で、第1次面で検出された享保十四年(1729年)の火災による焼土処理土壌と見られるS K07の直下に当たる。平面形は長方形を呈し、検出長2.6m以上、幅



第33図 SU113遺構図



第34図 SW109遺構図

2.12m、深さ0.23mを測る。

第36図-1~3は唐津系陶器である。1・3は京焼風陶器碗である。1は、口径(推)8.6cm、器高5.8cm、高台径5cmを測る。内外面共に透明釉を掛けるが、外面高台際から高台内にかけて露胎である。外面体部には呉須によって楼閣山水文を描く。高台径は広く、高台内の削りは浅い。高台内中央の円形削り付近に篆書体で「富永次」の銘が入る。3は、高台径5cmを測る。これも1同様に内外面共に透明釉を掛け、外面高台部付近から高台内にかけて露胎である。高台内中央の円形削りから外れた所に草書体で「清水」銘が入る。体部はわざと打ち掻いたように欠損しており、面子などに転用されていたと思われる。2は鉛釉碗である。高台径4.6cmを測る。内外面共に鉛釉が掛けられるが、外面体部下半部から高台内にかけては露胎である。1・3は大橋康二氏の編年Ⅲ期、2はⅠ-2期に属する。4は中国製青花皿である。口径(推)13.2cm、器高2.7cm、高台径(推)8.2cmを測る。高台置付は露胎で、砂が付着している。小野正敏氏の分類(小野1982年)皿E群に属する。7は丹波焼播鉢である。口径(推)35.2cmを測る。播目は7本単位で、時計回りに施される。外面体部にはユビオサエ痕が強く残り、口縁部外縁帯直下まで回転ナデ調整を施す。大平茂氏の分類(大平1992年)V型式に属する。

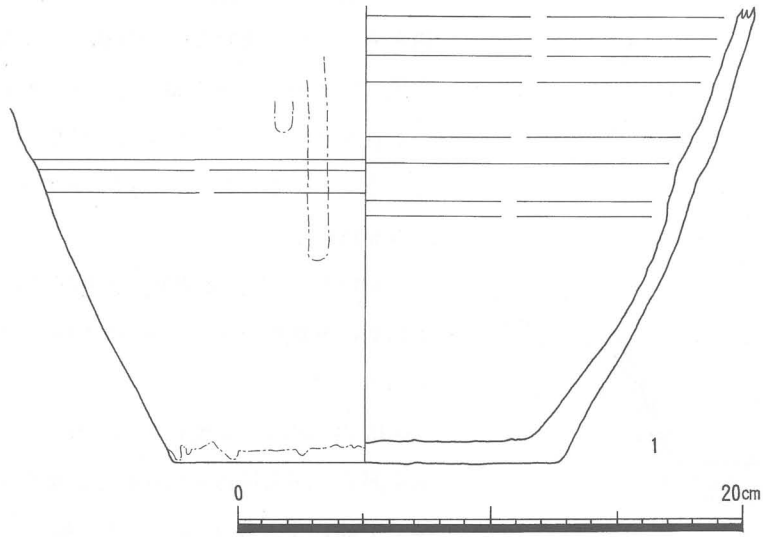
直上の遺構であるSK07が享保十四年(1729年)の焼土処理土壌であること、中国製青花などを伝品と考え、17世紀後半~末の年代が与えられる。Ⅲ-2a期に属する。

SK108

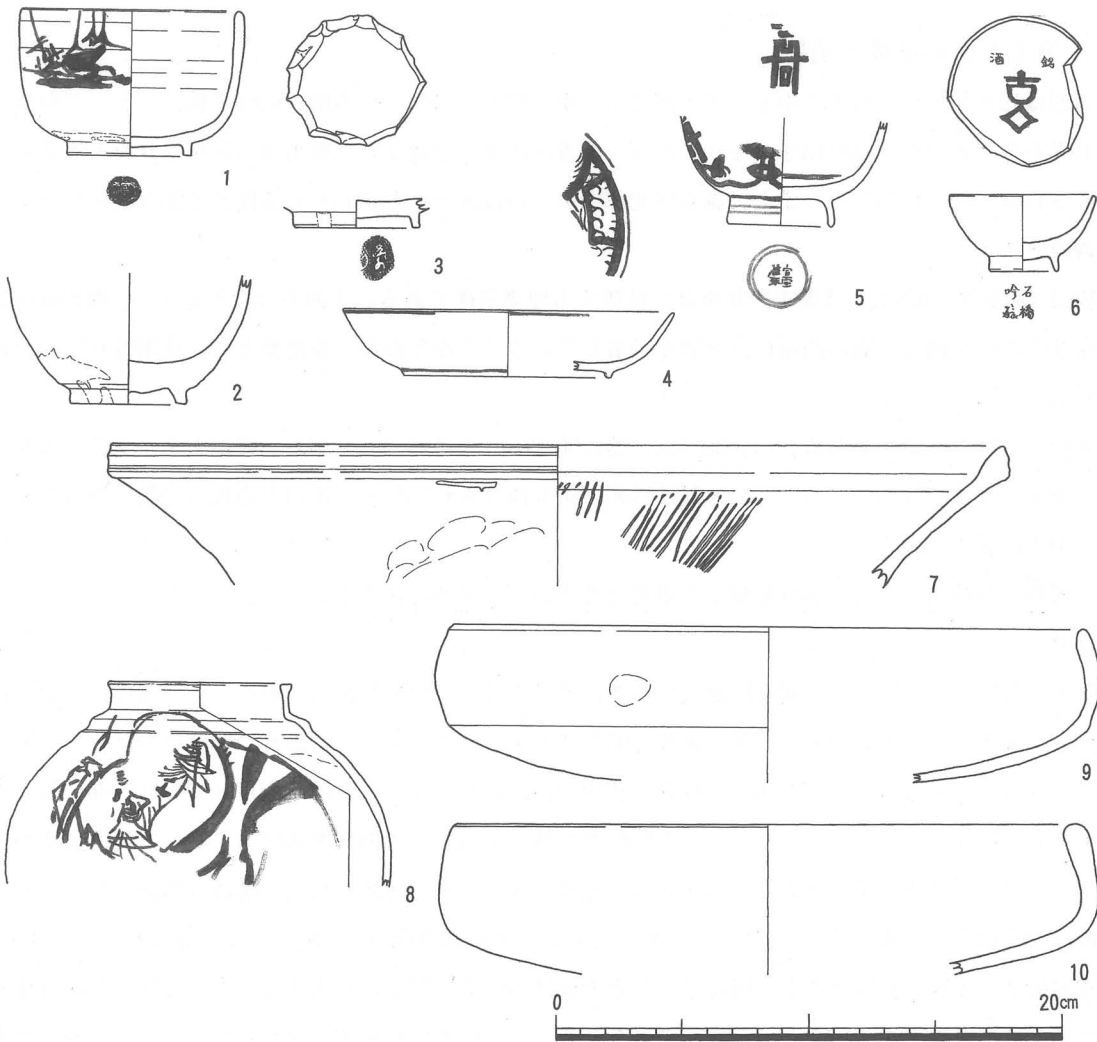
SK108(表1・図版12)は調査区南部中央に位置する、焼土処理土壌である。平面形は不整長方形を呈し、長さ2.22m、検出幅1.36m以上、深さ0.26mを測る。ここからは土師質土器焙烙が数多く出土している。

第36図-5は、中国製青花碗である。高台径4cmを測る。高台は高めで、少しハの字に広がる。高台内には「宣宝佳玩」の

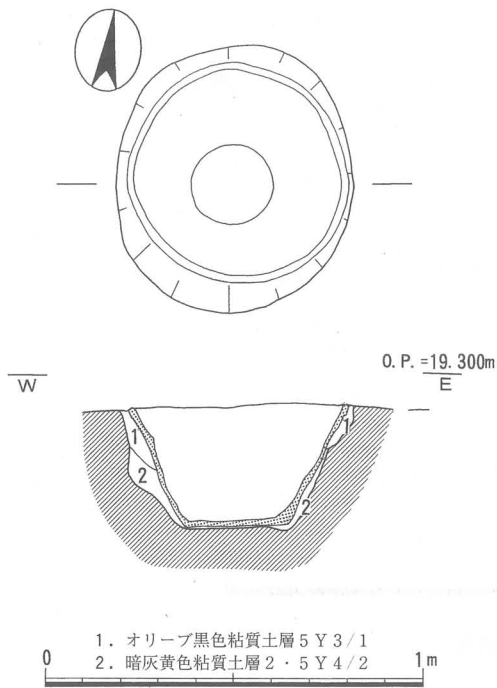
銘が入る。清朝前期のものか。8は京焼系銹絵土瓶である。口径(推)6.4cmを測る。外面体部には、白土を塗り、その上から人物の輪郭などを銹絵で施している。口縁部上面と、内面上半部は無釉で、それ以外の所には透明釉を施す。9・10は土師質土器焙烙である。9は口径(推)25cmを測る。胎土は橙色7.5YR7/6を呈する。外面底部は未調整で、離れ砂が付着している。外面体部は粗いナデ調整、外面口縁端部から内面体部にかけてはヨコナデ調整、内面見込みはナデ調整が施される。10は口径(推)24.6cmを測る。胎土は橙色7.5YR7/6を呈する。成形技法については9と同様である。9・10共に難波洋三氏の分類(難波1992年)E類に属す。この他に唐津系陶器呉器手碗、肥前磁器白磁皿、丹波焼播鉢などが出土している。



第35図 SW109出土遺物



第36図 SK104 (1~4・7)・SK108 (5・8~10)・SK118 (6) 出土遺物



第37図 SW01遺構図

4. 第1次面の遺構と遺物

この面は19世紀前半～後半を中心とする面であるが、現代にかけての遺構も同時に検出した。この面においても礎石や三和土などは検出されなかったが、調査区西側と北側より、敷地境に使用されたと考えられる石積溝S D01・02を検出した。また、調査区北部中央からは地下室と思われる遺構S X20を検出した。

SW01

SW01 (第37図・図版12) は調査区北東部に位置する埋甕遺構である。平面形は円形を呈し、掘形直径0.63m、深さ0.32mを測る。甕の内面に白色物が付着していることなどから、便槽甕として使用されていたと考えられる。

第39図-1は大谷焼甕である。口径58.6cm、器高36.2cm、底径25.5cmを測る。碗型のタイプで、体部の成形は三段階に分けて行われており、口縁部は外側に折り曲げられている。川口宏海氏の分類 (川口2000年) III-1型式に属する。

出土遺物から概観すると、20世紀前半の遺構と考えられ、IV期に属する。

SD01

SD01 (第38図・図版12) は調査区北端で東西に延びる溝で、検出長16mを測る。この溝は、以前に報告した第51次調査A-2区SD06 (藤井直正他1995年) と同一の溝である。このSD06と合わせると、掘形幅1.2m、内矩幅0.6mを測る。0.2～0.3m程度の花崗岩河原石を2段積み上げて造られており、部分的に溝底に胴木を入れて沈下するのを防いでいる。土層断面を観察すると、東西断面共に第1層は最終的に埋められた埋土で、コンクリート片などを含むことから、近年に埋められたと思われる。溝は3回造り替えられている。最終的に造られた溝底は、コンクリート敷きである。その前段階は、漆喰によって溝底が造られている。西側断面第3・4層、東側断面第2層はさらにその前段階の溝の埋土に相当する。A-2区SD06は18世紀前半に素掘溝が構築されていたが、石積溝に造り替えられた段階でやや南にずれたと見えて、今回の調査区では、その反対側の肩部は検出されなかった。溝西端は、調査区西側の調査である第51次調査A-1区で検出されておらず、『天保十五年伊丹郷町分間絵図』(第141図) を見ても調査区西端で敷地が終わっていること

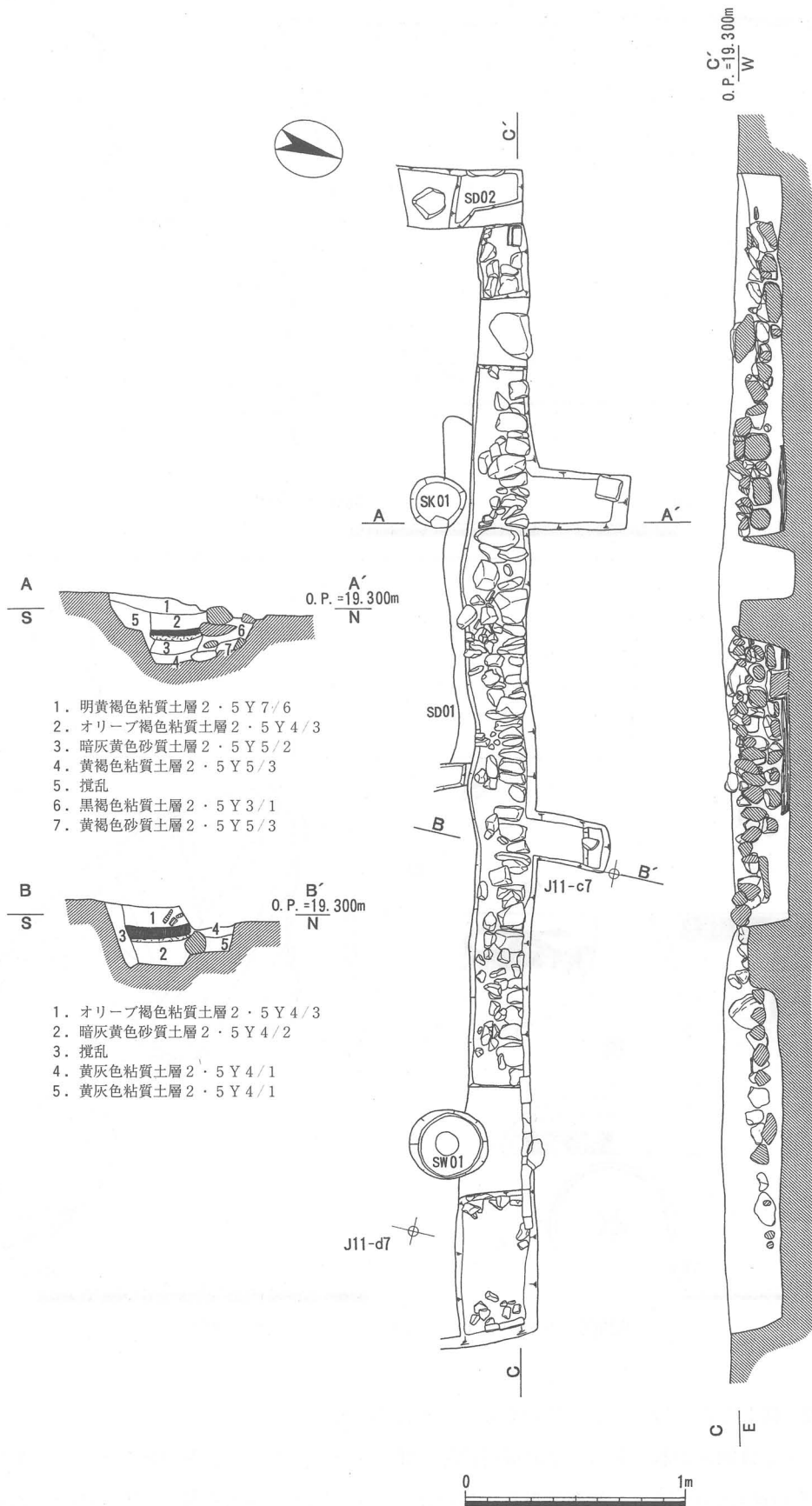
出土遺物から概観すると、17世紀後半～18世紀初頭の遺構と考えられ、遺物などの様相から享保十四年 (1729) の火災に伴う焼土処理土壌であると思われる。8は、混入の可能性がある。大量に出土した焙烙は、住人の職業に関わると考えられる。III-2 a期に属する。

SK113

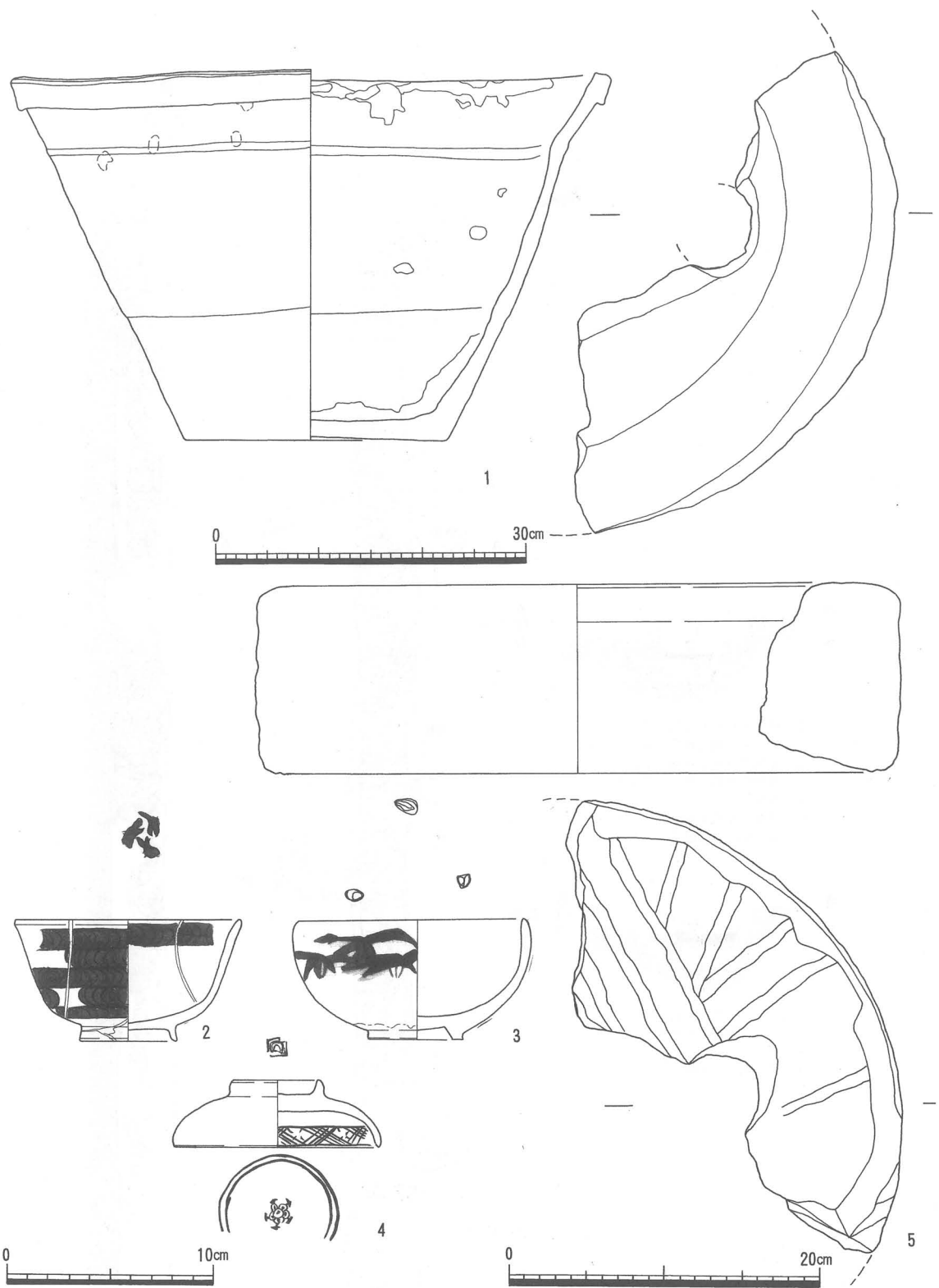
SK113 (表1) は調査区北東部に位置する土壌である。平面形は不整形を呈し、長さ0.72m、幅0.7m、深さ0.2mを測る。

図版13-19は、京焼かと思われる皿である。高台径8.4cmを測る。内面見込みに鉄絵で松葉文を描き、さらに瑠璃釉で上絵により果実状の文様を描く。高台は蛇の目高台で、畳付部のみ無釉である。

18世紀前半から後半の遺構である。



第38図 SD01遺構図



第39図 SW01 (1)・SD01 (2~5) 出土遺物

から、SD02と接したところで終わっているものと考えられる。

第39図-2・4は肥前磁器である。2は最終段階の埋土から出土した染付端反碗で、口径（推）11.2cm、器高5.9cm、高台径4.6cmを測る。腰部は張り、高台はハの字に開き、高台畳付は露胎である。外面体部・内面口縁部には流水文、内面見込みには鳥文を描く。焼継ぎ痕が見られる。3は掘形から出土した青磁染付碗蓋で、口径（推）10.2cm、器高3.3cm、つまみ径4.2cmを測る。内面口縁部には四方襷文、内面見込みには二

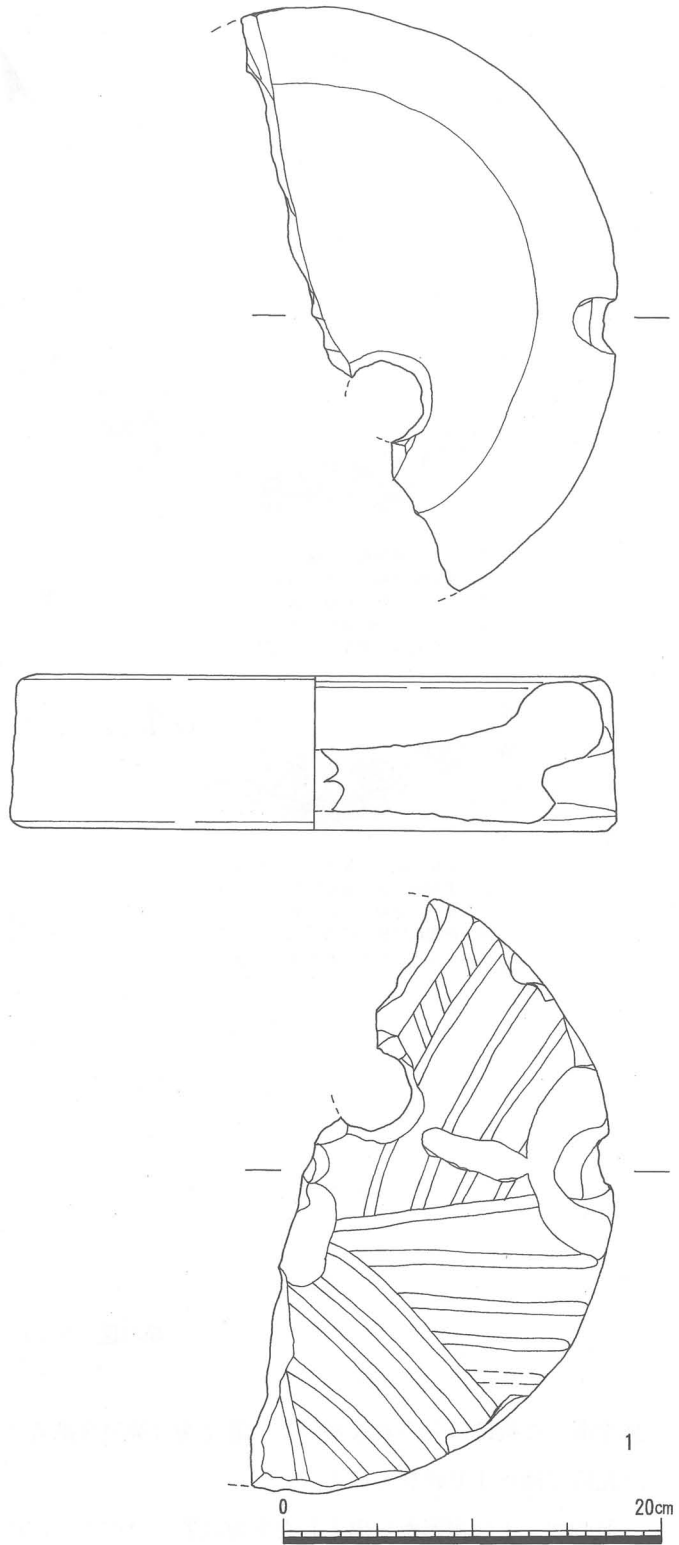
重圏線内に手描き五弁花文、高台内には渦福文が描かれている。2は大橋康二氏の編年Ⅴ期、3はⅣ期に属する。4は、溝内に張られたコンクリート直下から出土した京・伊賀・信楽焼碗である。口径11.3cm、器高6.1cm、高台径4.6cmを測る。外面底部は露胎である。高台は削り出し高台で、高台内の削りは深い。外面には鉄絵で笹文が描かれる。内面見込みには目痕が見られる。第39図-5・第40図は溝埋土の第1層から出土した花崗岩製上石臼である。第40図は直径(推)32cm、高さ8.2cmを測る。八分割で五本単位の播目である。臼上面は研磨されており、中央部より少しずれたところに供給孔、臼側面には挽木孔が見られる。第39図-5は直径41.6cm、高さ12.3cmを測る。播目部は磨耗が激しく、観察しにくい状態である。六分割か。臼上面の研磨は第40図の製品より粗く、中央部より少しずれたところに供給孔、臼側面には挽木孔が見られる。

図版14-3はコンクリート直下から出土した、京焼把手と思われる遺物である。刻印が見られるが、ほとんど欠落しているため判読は不明である。しかし、以前の第86次調査B-12区(藤井他1999年)で出土した同類と見られる遺物から、清水焼の製品ではないかと思われる。この他に肥前磁器染付筒型碗、京・伊賀・信楽焼鍋蓋、輸入コバルト染付碗などが見られ、19世紀初頭~20世紀前半まで漆喰底の溝が存続していたことがわかる。

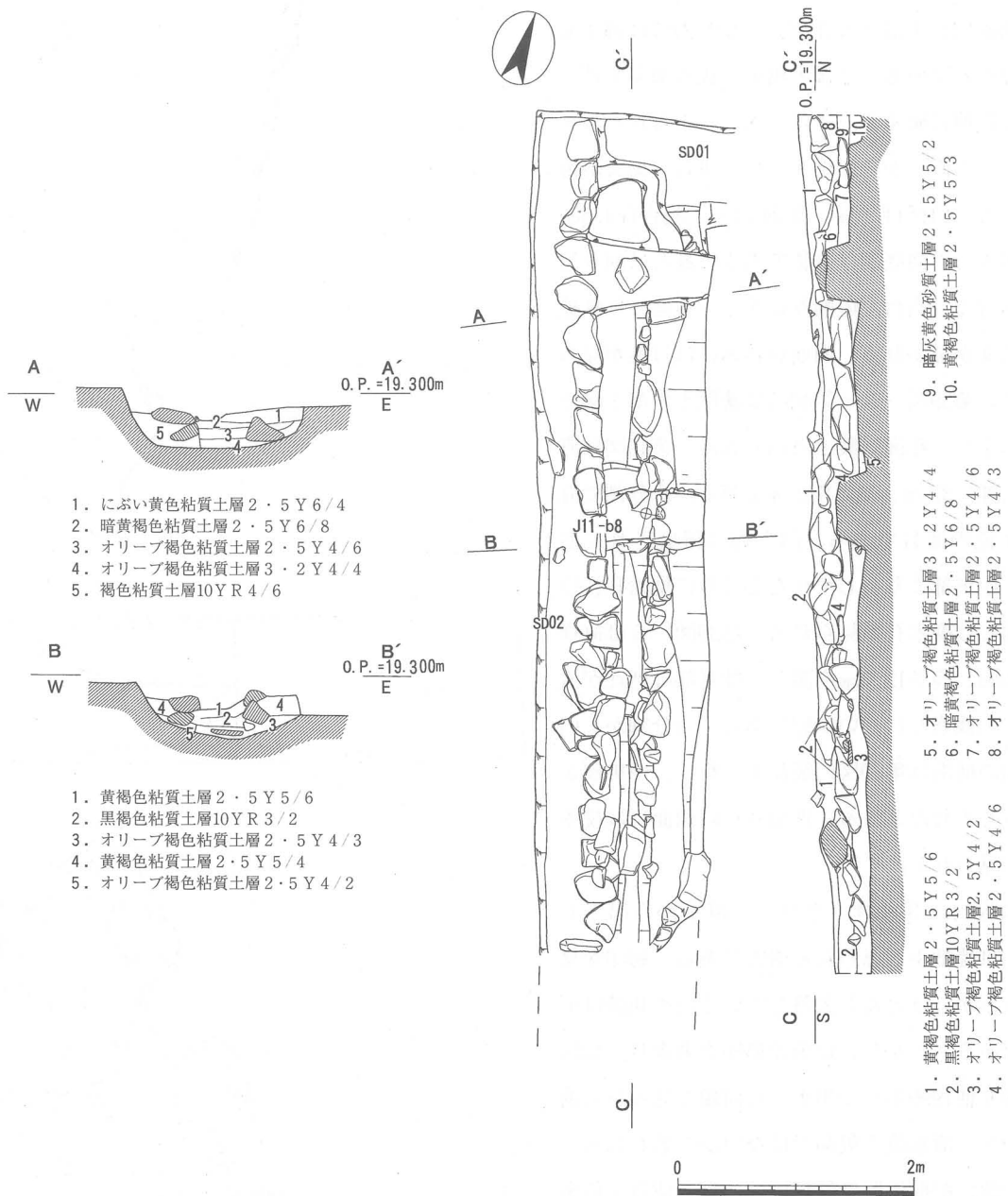
A-2区SD06は、18世紀前半~中頃という年代観が考えられているが、今回の調査では、掘形からの出土遺物から、18世紀後半に石積溝が作られ、19世紀初頭頃に漆喰底となり、20世紀前半にコンクリート底となったと考えられ、3回造り替えられて、現代まで使用されていた遺構と判明した。Ⅲ-3a~Ⅳ期に属する。

SD02

SD02(第41図・図版14-7)は調査区西側で南北に延びる溝である。検出長7.2m、内矩幅0.4mを測る。これもSD01と同様に0.2~0.3m位の花崗岩を2段に積んだ石積溝遺構であるが、漆喰やコンクリートで溝



第40図 SD01出土遺物(2)

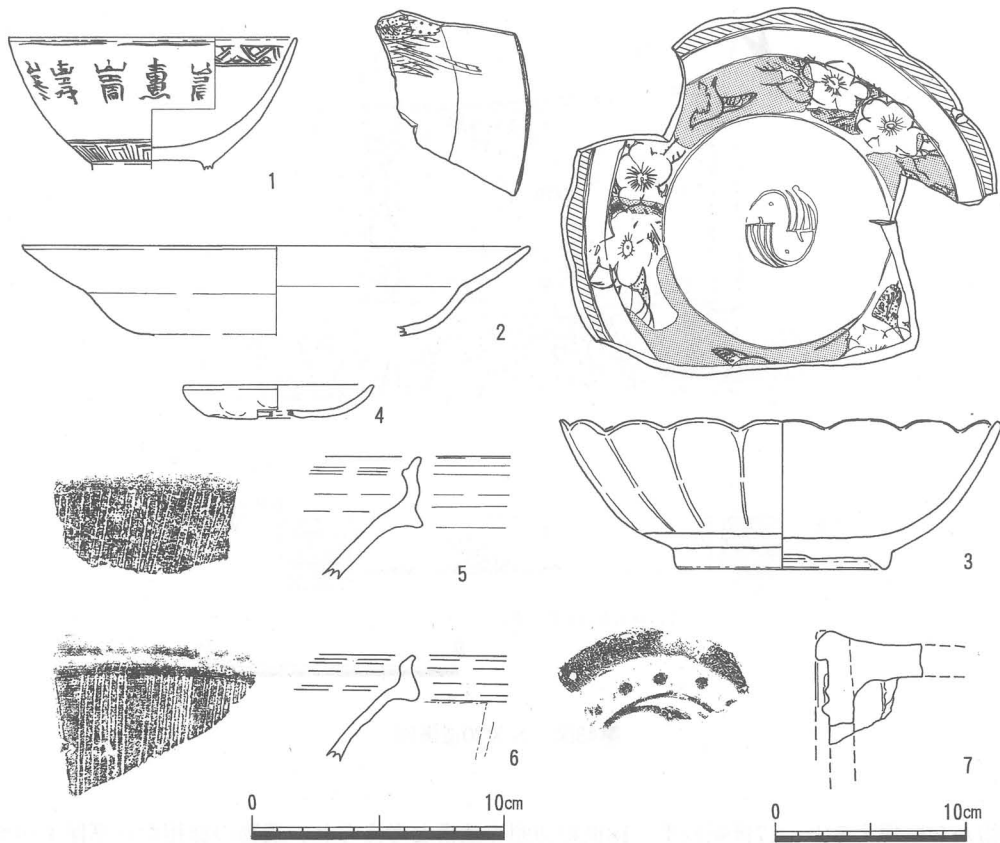


第41図 S D02遺構図

底を置いた痕跡は見られなかった。溝北端は第51次調査A-2区S D03（藤井直正他1995年）へ続き、南端は昆陽口通りまで延びている。

第42図-1は掘形から出土した肥前磁器染付碗で、口径（推）11.5cmを測る。外面には文字が描かれている。口縁端部は口銹が施されている。2は産地不明磁器色絵折縁皿である。口径（推）10.2cmを測る。上絵付けによって口縁端部は赤で緑を描き、内面体部から見込みにかけては緑や黒などで亀を描いている。焼継ぎ痕が見られる。3は肥前磁器色絵輪花鉢である。口径17.5cm、器高5.9cm、高台径8.3cmを測る。型作り成形で、高台は蛇ノ目凹型高台である。外面高台付近にコバルトで圏線を描いた。焼成後に上絵付けとしてゴム印により黒色で梅、朱色で鳥を描き、内面体部の空白部には橙色、内面口縁部は紫色が塗られている。

掘形出土遺物は20世紀代であり、この頃再構築されて現代まで使用されていた溝と考えられる。IV期に属する。



第42図 S D02 (1～3)・S K06 (4・5)・S K07 (6・7) 出土遺物

S K06

S K06 (表1・図版12)は調査区中央部に位置する焼土処理土壌と考えられる遺構である。平面形は不整形を呈し、長さ2.2m、検出幅1.57m、深さ0.03mを測る。

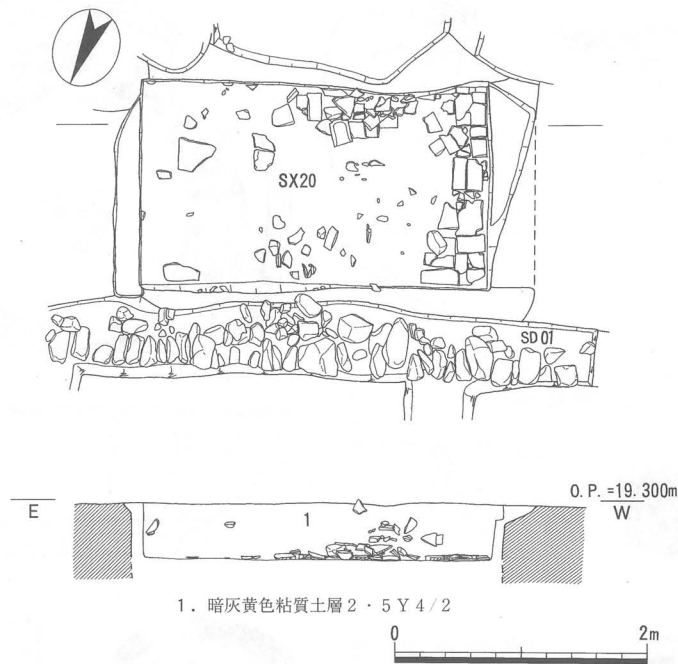
第42図-4は土師質土器皿である。口径7.6cm、器高1.4cmを測る。胎土はにぶい橙色7.5YR 7/3を呈する。内面はナデ調整、外面は手掌圧調整。口縁部はやや内湾する。器面の所々に煤が付着しており、見込み中央部には意図的と見られる穿孔も見られることなどから、蠟燭立てなどに転用されていた可能性がある。5は丹波焼播鉢である。口縁部は直立し、幅広い縁帯が受け口状になる。播目は8本単位である。大平 茂氏の分類Ⅶ型式に属する。

出土遺物を概観すると、17世紀後半～18世紀初頭の遺構と考えられ、遺物の様相から享保十四年(1729年)の火災の処理土壌であると考えられる。Ⅲ-2 a期に属する。

S K07

S K07 (表1・図版14)は焼土処理土壌と考えられる遺構で、調査区中央部S K06の東側に位置する。平面形は不整形を呈し、長さ2.4m、幅2.2m、深さ0.03mを測る。

第42図-6は丹波焼播鉢である。口縁端部は外方向にナデられる。播目は7本単位。口縁部外縁帯から内面にかけて鉄釉が施されている。大平 茂氏の分類Ⅵ型式に属する。7は軒丸瓦である。瓦当部径(推)16.2cm、文様径(推)13cm、周縁部幅1.6cmを測る。瓦当文様は内区に左巻き三ツ巴文、外区に連珠文を配している。凸面周縁部はヨコナデ、凸面丸瓦部は縦方向のヘラミガキが施される。裏面瓦当部と丸瓦部の接合部分はヨコナデ調整が施される。



第43図 S X20遺構図

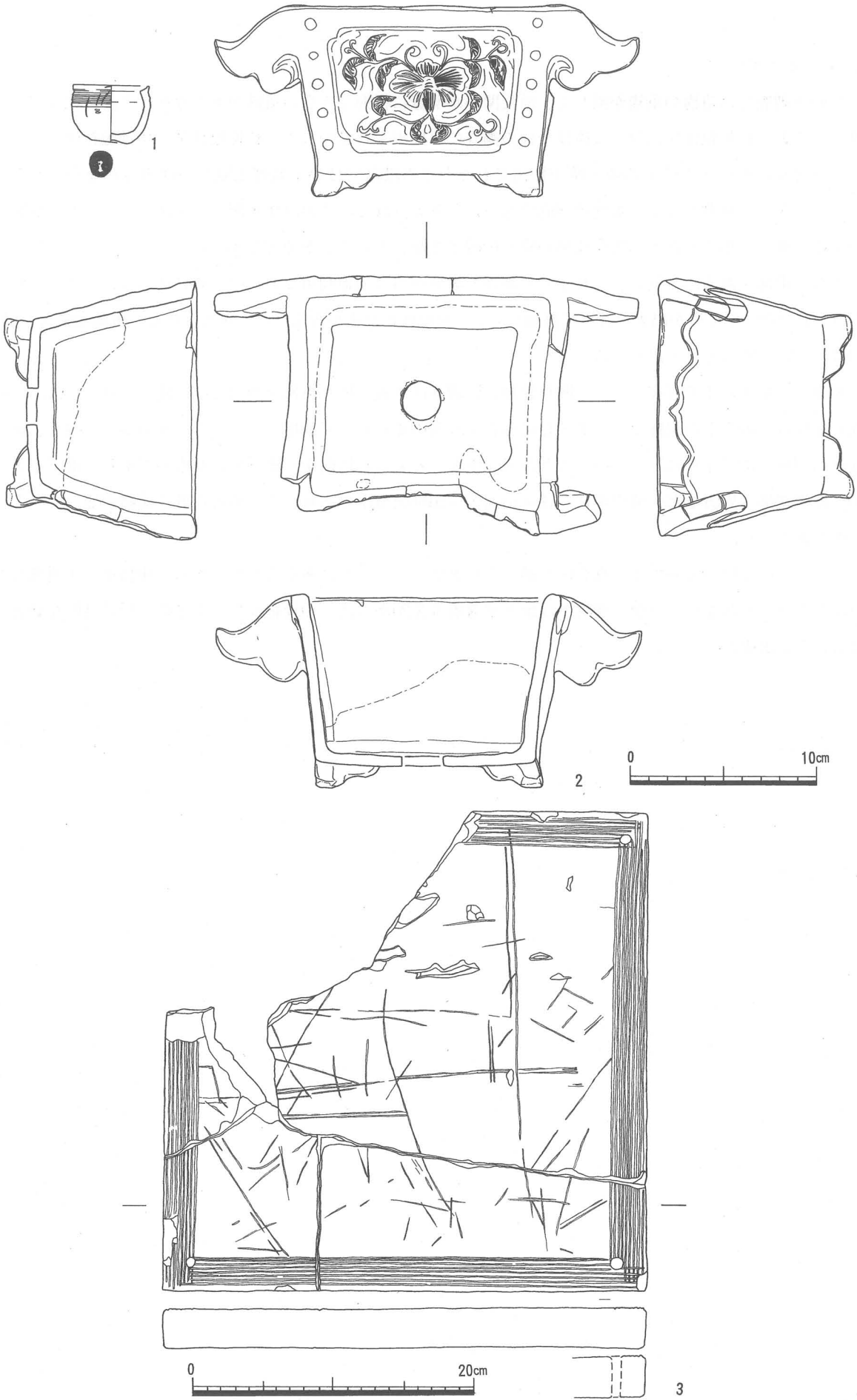
出土遺物から概観すると、17世紀後半～18世紀初頭の遺構と考えられ、遺物の様相から享保十四年（1729年）の火災の処理土壌であると考えられる。Ⅲ－2 a 期に属する。

S X20

S X20（第43図・図版14）は調査区北部に位置する地下室と思われる遺構である。平面形は長方形を呈し、長さ3.35m、幅2 m以上、深さ0.45m以上を測る。四壁は、約0.2mの厚さで粘土が張られており、底部は粘土を張った上から瓦や磚が敷き詰められている。この遺構の周辺からは、埋桶遺構や埋甕遺構が見られることから家屋が建っていたと考えられる。遺構の周りに柱穴や礎石が見られないことから、北側と西側の溝の石を利用した建物が建っていたと見られる。この遺構からは多量の遺物が出土しており、計測を行っている。詳細については第4章を参照していただきたい。

第44図－1は産地不明小壺である。口径（推）4.1cm、器高3.2cm、底径2 cmを測る。内面口縁部付近から底部にかけて塗土が施され、内面は無釉である。口縁部には蓋受状のものがついており、蓋を伴うものと思われる。外面底部には刻印「一」（縦0.6cm、横0.2cm）が見られる。備前焼の同種の小壺と類似しており、これを真似たものか。2は三田青磁植木鉢である。長さ23cm、幅13.8cm、高さ10.5cmを測る。一面ごとに型で板状に型取られたものを張り合わせて成形されている。底部には円形の穴が空けられており、植木鉢として作られたものである。内面半ばから底部まで青磁釉が掛けられている。内面下半部から見込みにかけて、脚部底については無釉である。3は磚である。一辺33.9cm、厚さ2.8cmを測る。上面はヘラミガキ調整、下面は未調整、側面はヨコナデ調整、角は面トリされている。四隅には穿孔が見られ、何らかの形で固定するためのものであると考えられる。上面周縁には櫛状工具で8～9本単位の櫛目が入られる。外面全体に雲母が見られる。この他に18世紀代の肥前磁器碗、唐津系陶器刷毛目文碗などが混じる。

出土遺物から概観すると18世紀代のものが混じるが、主体は19世紀前半～後半であり、この頃の遺構と考えられ、Ⅲ－3 b 期に属する。



第44図 S X20出土遺物

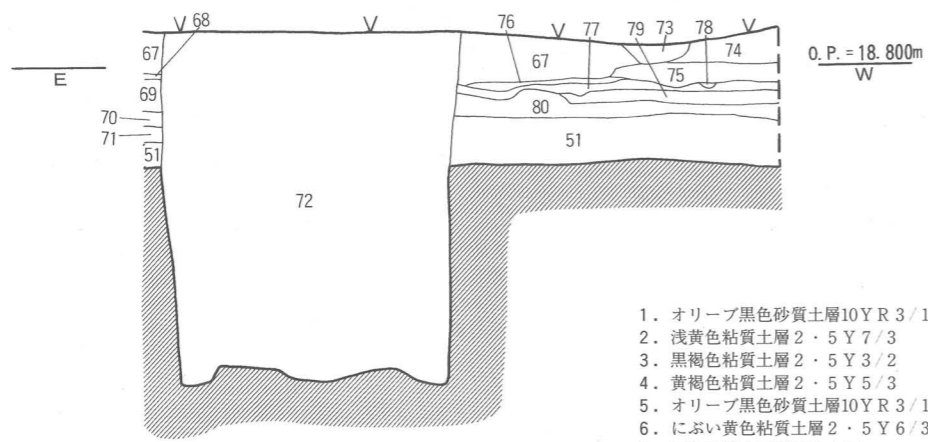
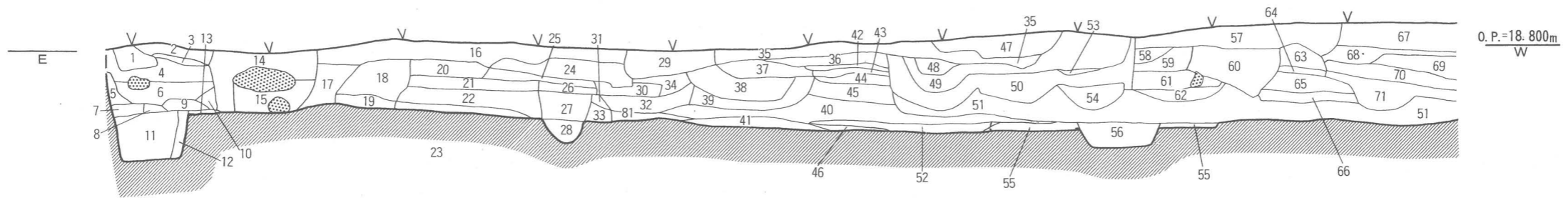
5. まとめ

今回の調査では遺構の重複が激しく、前後関係が明瞭に把握できない遺構が多く存在した。時代を追って概説すると、17世紀後半以前の遺構は今回の調査では検出されなかった。17世紀後半～18世紀初頭については、享保年間の火災の焼土処理土壌が検出された。この段階では焼土処理土壌しか検出されなかったことや、通りからの距離などから裏庭的空間であったと考えられる。この享保年間の火災後についても、建物に関する遺構は三和土を含め、既存建物が建つ段階まで確認することができなかった。

調査区東側を通る山行道は、これまでの調査で裏地利用（宅地利用など）のために作られたと考えられており、本調査区でも道が出来た時点で裏地から、土地の利用方法が変化したと考えられる。敷地境溝 S D01・02はこの際に作られたと思われる。

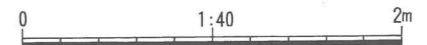
調査を開始するまで存在していた既存建物は、調査区敷地一杯に東側を間口として建てられていた。この既存建物は、調査前の記録から、溝 S D01の石を北側の礎石として利用していたことがわかっており、航空写真（昭和二十三年）に写っていることから、少なくともこれ以前から建っていたものである。地下室 S X 20、埋甕遺構 S W01などの遺構年代が19世紀前半～20世紀前半であり、この頃から既存建物が建っていた可能性がある。

このように今回の調査では、調査区が通りより奥まったところにあることなどから、建物を示す遺構などがほとんど見られなかったが、遺物では地下室遺構 S X 20からは、19世紀前半～後半の一括の良好な資料を得ることが出来た。

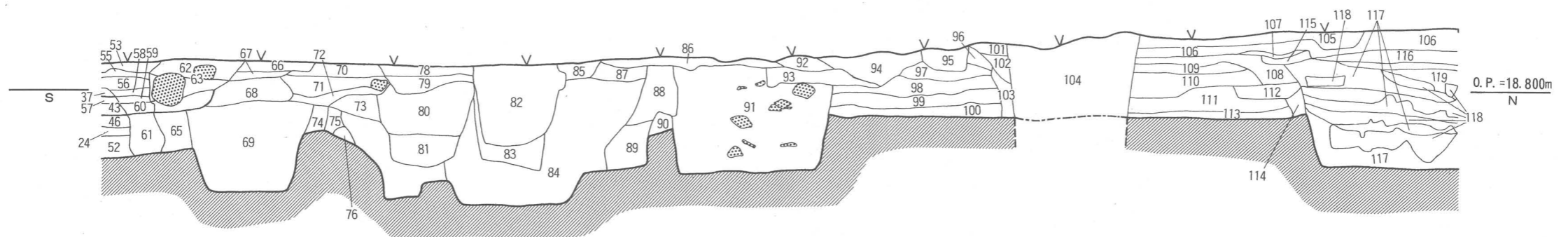
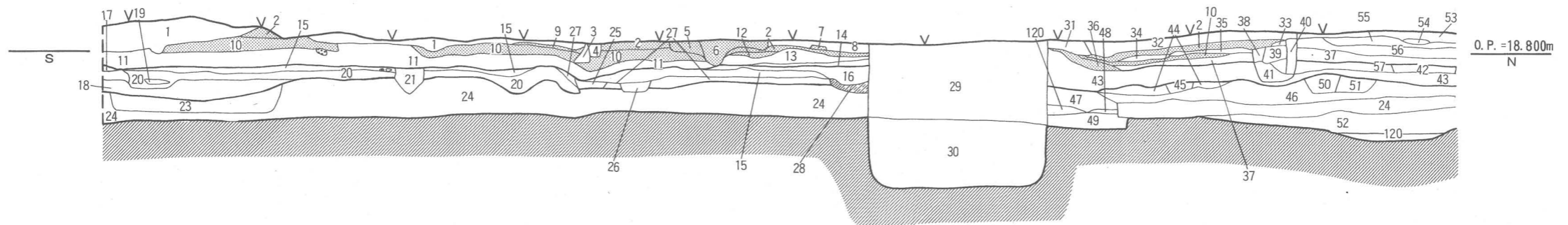


1. オリーブ黒色砂質土層10YR 3/1
2. 浅黄色粘質土層2・5Y 7/3
3. 黒褐色粘質土層2・5Y 3/2
4. 黄褐色粘質土層2・5Y 5/3
5. オリーブ黒色砂質土層10YR 3/1
6. におい黄色粘質土層2・5Y 6/3
7. 灰色砂質土層10YR 4/1
8. 黄色粘質土層2・5Y 7/8
9. 暗灰黄色粘質土層2・5Y 4/2
10. におい黄色粘質土層2・5Y 6/4
11. 明黄褐色粘質土層2・5Y 6/8
(1~4 cm位の礫多量に含む)
12. 明黄褐色粘質土層2・5Y 7/6

13. 明黄褐色粘質土層2・5Y 6/8
14. 黒褐色砂質土層10YR 2/2
(5~10cm位の礫多量に含む)
15. 黒褐色砂質土層10YR 2/3
(5~10cm位の礫多量に含む)
16. 浅黄色粘質土層2・5Y 7/3
17. におい黄色粘質土層2・5Y 6/4
18. におい黄褐色砂質土層10YR 4/3
19. 黄褐色砂質土層10YR 5/6
20. 暗灰黄色粘質土層2・5Y 4/2
21. 黄褐色粘質土層2・5Y 5/3
22. におい黄色粘質土層2・5Y 6/3
23. 黄褐色粘質土層10YR 7/8
24. 黄褐色粘質土層10YR 5/8
25. 暗灰黄色粘質土層2・5Y 5/2
(炭化物・焼土含む)
26. 明黄褐色粘質土層2・5Y 6/6
27. 暗灰黄色粘質土層2・5Y 5/2
28. におい黄色粘質土層2・5Y 6/4
29. 黒褐色砂質土層2・5Y 3/2
30. 暗灰黄色粘質土層2・5Y 5/2
31. 褐色粘質土層10YR 4/4
32. オリーブ褐色粘質土層2・5Y 4/4
33. 灰黄褐色粘質土層10YR 5/2
34. 黄褐色粘質土層2・5Y 5/3
35. 暗灰黄色粘質土層2・5Y 4/2
(0.5~1 cmの礫若干含む)
36. 暗灰黄色粘質土層2・5Y 5/2
37. オリーブ黄色粘質土層5Y 6/3
38. オリーブ褐色粘質土層2・5Y 4/3
39. 黄褐色粘質土層2・5Y 5/4
40. 暗灰黄色粘質土層2・5Y 4/2
41. 明黄褐色粘質土層2・5Y 7/6
42. 灰オリーブ色粘質土層7・5Y 5/2
43. 灰オリーブ色粘質土層5Y 6/2
(焼土・炭化物多量に含む)
44. 灰黄褐色粘質土層10YR 5/2
45. におい黄褐色粘質土層10YR 5/4
46. 浅黄色粘質土層2・5Y 7/3
47. におい黄褐色粘質土層10YR 5/4
48. 暗灰黄色粘質土層2・5Y 4/2
(炭化物・焼土若干含む)
49. 暗灰黄色粘質土層2・5Y 5/2
50. オリーブ黄色粘質土層5Y 6/3
51. 褐色粘質土層10YR 4/4
(0.5~1 cmの礫少量含む)
52. におい黄色粘質土層2・5Y 6/3
53. 褐色粘質土層7・5YR 4/3
54. 明黄褐色粘質土層2・5Y 7/6
55. におい黄色粘質土層2・5Y 6/4
56. 黄褐色粘質土層10YR 5/8
57. 黄褐色粘質土層10YR 5/6
58. オリーブ褐色粘質土層2・5Y 4/4
(0.5~3 cmの礫多量に含む)
59. におい黄褐色粘質土層10YR 5/4
60. 黄褐色粘質土層2・5Y 5/3
(0.5~3 cmの礫若干・瓦多量に含む)
61. 黄褐色粘質土層2・5Y 5/4
62. 浅黄色砂質土層5Y 7/3
63. 黄褐色粘質土層10YR 7/8
(5~10cmの礫多量に含む)
64. におい黄褐色粘質土層10YR 6/4
(焼土・炭化物多量に含む)
65. 黄褐色粘質土層10YR 5/6
66. 黄褐色粘質土層2・5Y 5/3
67. におい黄褐色粘質土層10YR 6/3
(炭化物多量に含む)
68. におい黄褐色粘質土層10YR 5/3
69. 灰黄褐色粘質土層10YR 5/2
70. 黄褐色粘質土層2・5Y 5/3
71. 黄褐色粘質土層10YR 7/8
(5~10cmの礫多量に含む)
72. オリーブ黄色砂質土層5Y 6/3
73. 黄褐色粘質土層2・5Y 5/3
(焼土・炭化物多量に含む)
74. 表土
75. 明黄褐色粘質土層10YR 6/6
76. におい黄褐色粘質土層10YR 5/4
77. におい黄褐色粘質土層10YR 4/3
78. 淡黄色粘質土層5R 8/3
79. におい黄褐色粘質土層10YR 6/4
80. 灰黄褐色砂質土層10YR 5/2
81. 明褐色粘質土層2・5Y 6/8



第45図 B-14区南壁土層図



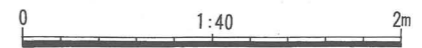
1. 表土
2. 暗赤褐色炭化物・焼土層 5 Y R 3 / 4
3. 黄色粘質土層 2 · 5 Y 8 / 6
4. 黄褐色粘質土層 2 · 5 Y 5 / 3
5. 黒褐色炭化物・焼土層 7 · 5 Y R 3 / 1
6. 黒褐色炭化物・焼土層 7 · 5 Y R 3 / 1 (遺物含む)
7. 橙色焼土層 7 · 5 Y R 7 / 6
8. 黄橙色粘質土層 10 Y R 7 / 8

9. 暗赤褐色炭化物・焼土層 5 Y R 3 / 3
10. 黒褐色炭化物・焼土層 10 Y R 3 / 1
11. 黄褐色粘質土層 10 Y R 8 / 8
12. 明赤褐色焼土層 5 Y R 5 / 8
13. 明黄褐色粘質土層 10 Y R 6 / 8
14. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 5 / 3
15. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 5 / 4
16. 浅黄色粘質土層 2 · 5 Y 7 / 4
17. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 4 / 3
18. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 6 / 4
19. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 6 / 4
20. 褐色粘質土層 10 Y R 4 / 6
21. オリーブ褐色粘質土層 2 · 5 Y 4 / 6
22. 灰黄褐色砂質土層 10 Y R 5 / 2
23. 黄褐色粘質土層 10 Y R 8 / 8
24. 褐色粘質土層 10 Y R 4 / 4
25. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 5 / 3
26. 黄褐色粘質土層 10 Y R 7 / 8
27. 黄褐色粘質土層 10 Y R 5 / 6
28. 黒褐色炭化物層 7 · 5 Y R 3 / 1
29. オリーブ色粘質土層 5 Y 5 / 8
30. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 5 / 6
31. オリーブ褐色粘質土層 2 · 5 Y 4 / 4
32. 黄褐色粘質土層 2 · 5 Y 5 / 4
33. 浅黄色粘質土層 2 · 5 Y 7 / 3
34. 浅黄色粘質土層 2 · 5 Y 7 / 4
35. 暗灰黄色粘質土層 2 · 5 Y 4 / 2
36. 褐色炭化物・焼土層 7 · 5 Y R 4 / 6
37. 橙色粘質土層 7 · 5 Y R 6 / 8
38. 浅黄色粘質土層 2 · 5 Y 7 / 4

39. 灰黄褐色粘質土層 10 Y R 4 / 2
40. 浅黄色粘質土層 2 · 5 Y 7 / 4
41. におい黄褐色粘質土層 2 · 5 Y 6 / 4
42. 黒褐色粘質土層 10 Y R 3 / 2
43. 灰黄色粘質土層 2 · 5 Y 6 / 2 (3~5cmの礫・瓦多量に含む)
44. 暗灰黄色粘質土層 2 · 5 Y 5 / 2
45. 灰黄褐色粘質土層 10 Y R 4 / 2
46. 暗オリーブ褐色粘質土層 2 · 5 Y 3 / 3
47. 暗灰黄色粘質土層 2 · 5 Y 4 / 2
48. 明黄褐色粘質土層 10 Y R 6 / 6
49. 黄褐色粘質土層 10 Y R 7 / 8
50. 灰黄褐色粘質土層 10 Y R 4 / 2
51. 黄褐色粘質土層 2 · 5 Y 5 / 3 (3~4cmの礫多量に含む)
52. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 6 / 3
53. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 7 / 3
54. 黄褐色粘質土層 10 Y R 7 / 8
55. 黒褐色粘質土層 2 · 5 Y 3 / 2
56. 暗灰黄色粘質土層 2 · 5 Y 4 / 2
57. 暗灰黄色粘質土層 2 · 5 Y 5 / 2
58. 灰黄褐色粘質土層 10 Y R 4 / 2
59. 黄褐色粘質土層 2 · 5 Y 5 / 3
60. オリーブ黒色粘質土層 5 Y 2 / 2
61. 灰オリーブ色粘質土層 5 Y 4 / 2
62. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 5 / 3
63. 暗灰黄色粘質土層 2 · 5 Y 4 / 2
64. 黄褐色粘質土層 2 · 5 Y 4 / 1
65. 黄褐色粘質土層 10 Y R 7 / 8
66. 黒褐色粘質土層 2 · 5 Y 3 / 2

67. 橙色粘質土層 7 · 5 Y R 6 / 8
68. 黄灰色粘質土層 2 · 5 Y 4 / 1 (10~15cmの礫多量に含む)
69. 淡黄色砂層 2 · 5 Y 8 / 4 (5~10cmの礫・灰色 7 · 5 Y 4 / 1 の粘土多量に含む)
70. 浅黄褐色粘質土層 10 Y R 8 / 3
71. 灰黄褐色粘質土層 10 Y R 5 / 2
72. 暗灰黄色粘質土層 2 · 5 Y 4 / 2
73. 灰オリーブ色粘質土層 5 Y 5 / 2
74. 黄褐色粘質土層 10 Y R 7 / 8
75. 暗灰黄色粘質土層 2 · 5 Y 5 / 2
76. 黄色粘質土層 2 · 5 Y 8 / 6
77. 灰黄色粘質土層 2 · 5 Y 6 / 2
78. 灰白色粘質土層 2 · 5 Y 8 / 2
79. 暗灰黄色粘質土層 2 · 5 Y 5 / 2
80. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 4 / 3
81. 明黄褐色粘質土層 10 Y R 6 / 6
82. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 4 / 3 (5~15cmの礫多量に含む)
83. オリーブ黒色粘質土層 10 Y 3 / 1
84. オリーブ褐色粘質土層 2 · 5 Y 4 / 3
85. 灰白色粘質土層 2 · 5 Y 8 / 2
86. 黄色粘質土層 2 · 5 Y 8 / 6
87. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 7 / 3
88. 暗灰黄色粘質土層 2 · 5 Y 5 / 2
89. 灰褐色粘質土層 7 · 5 Y R 4 / 2 (焼土・炭化物多量・3~5cmの礫若干含む)
90. 明黄褐色粘質土層 2 · 5 Y 7 / 6
91. 黄褐色粘質土層 10 Y R 7 / 8
92. 浅黄色粘質土層 2 · 5 Y 7 / 6

93. 灰黄色粘質土層 2 · 5 Y 6 / 2 (3~5cmの礫多量に含む)
94. 黄色粘質土層 2 · 5 Y 8 / 6
95. 淡黄色砂層 2 · 5 Y 8 / 3 (0.5cm~2cmの礫多量に含む)
96. 暗灰黄色粘質土層 2 · 5 Y 5 / 2
97. 黄灰色粘質土層 2 · 5 Y 5 / 1
98. 灰オリーブ色粘質土層 5 Y 5 / 2
99. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 7 / 4
100. 明黄褐色粘質土層 10 Y R 7 / 6
101. 灰黄色粘質土層 2 · 5 Y 5 / 2
102. 明黄褐色粘質土層 2 · 5 Y 6 / 6
103. 黄褐色砂層 2 · 5 Y 5 / 6
104. オリーブ色砂礫層 5 Y 5 / 8
105. 暗灰黄色粘質土層 2 · 5 Y 4 / 8
106. オリーブ色砂層 5 Y 6 / 6
107. 黄褐色粘質土層 2 · 5 Y 5 / 6
108. 灰色粘質土層 5 Y 4 / 1
109. 黄褐色粘質土層 2 · 5 Y 5 / 3
110. 暗灰黄色粘質土層 2 · 5 Y 5 / 2
111. 灰黄色粘質土層 2 · 5 Y 6 / 2
112. 灰白色土層 2 · 5 Y 8 / 1
113. 明黄褐色粘質土層 10 Y R 6 / 6
114. 明黄褐色粘質土層 2 · 5 Y 7 / 6
115. 淡黄色粘質土層 5 Y 8 / 3
116. 灰黄褐色粘質土層 10 Y R 4 / 2
117. 黄褐色粘質土層 10 Y R 7 / 8
118. 灰白色粘質土層 2 · 5 Y 8 / 1
119. 暗灰黄色粘質土層 2 · 5 Y 4 / 2
120. 明褐色粘質土層 2 · 5 Y 6 / 8



第46図 B-14区西壁土層図

第4節 第117次調査B-14区

B-14区は、幹線道路の昆陽口通りに面し、『天保十五年（1844）伊丹郷町分間絵図』（第141図）によると「昆陽口村」にあたることがわかる。さらに『元禄七年（1694）柳沢吉保領伊丹郷町絵図』（第141図）では、西半分が屋敷主「彦右衛門」、東半分が屋敷主「勘右衛門」の敷地に相当すると思われる。元禄七年以降は屋敷境を殆ど変更することなく、東側と西側で面々と建物が移り変わって行く。調査面積は272.2㎡である。

1. 基本層序

遺構面は4面検出した。地山面は、O.P.=18.300m前後を測る。地山直上に、褐色粘質土層（第46図西壁第24層、現地表面より0.5m下）、その上には、暗オリーブ褐色粘質土層（第46図西壁第46層、現地表面より0.4m下）が堆積していた。その上に、灰黄色粘質土の整地層（第46図西壁第43層、現地表面より0.3m西壁下）が堆積し、その上層には、火災を受けた三和土層（第46図西壁第37層、現地表面より0.2m下）、さらに焼土混じりの整地層（第46図西壁第35層、現地表面より0.15m下）、その上層には、火災を受けた第1次面三和土層（第46図西壁第13層、現地表面より0.1m下）を検出した。

2. 第4次面の遺構と遺物

4次面では三和土・礎石は検出されなかった。しかし、南側間口から7.5m付近で柱穴を数ヶ所検出し、1棟の掘立柱建物（SB04）が復元できた。他にも柱穴は数ヶ所検出され、なかには石臼を根石として使用しているものもみられた（SP681・697・698）。したがって、建物の規模はわからず復元できなかったが掘立柱建物が他にも存在していたことが考えられる。また調査区南西部から須恵器片を含む溝（SX629）を検出した。

SB04

SB04は、調査区南東部に位置する掘立柱建物である（第47図・図版17）。柱穴の掘形の平面形は円形を呈する。東西の桁行約3.14m以上、南北の梁行3.26m以上である。柱穴から出土遺物はなかったが、直下の遺構SX629が埋めもどされたのが16世紀後半であり、その直後に建物が建てられたと思われる。Ⅱ～Ⅲ-1期に属する。

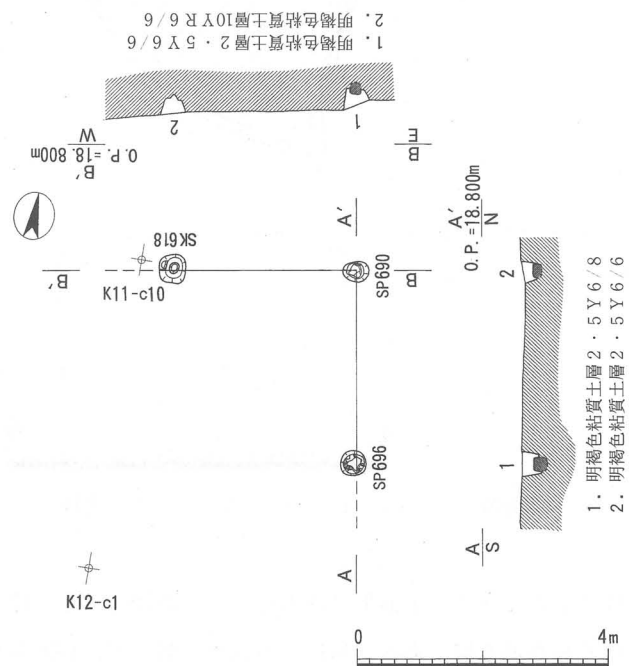
SP681

SP681は、調査区東側中央に位置する（表1・図版17）。平面形は円形を呈し、直径0.3m、高さ0.11mを測る。石臼を根石に使用している。

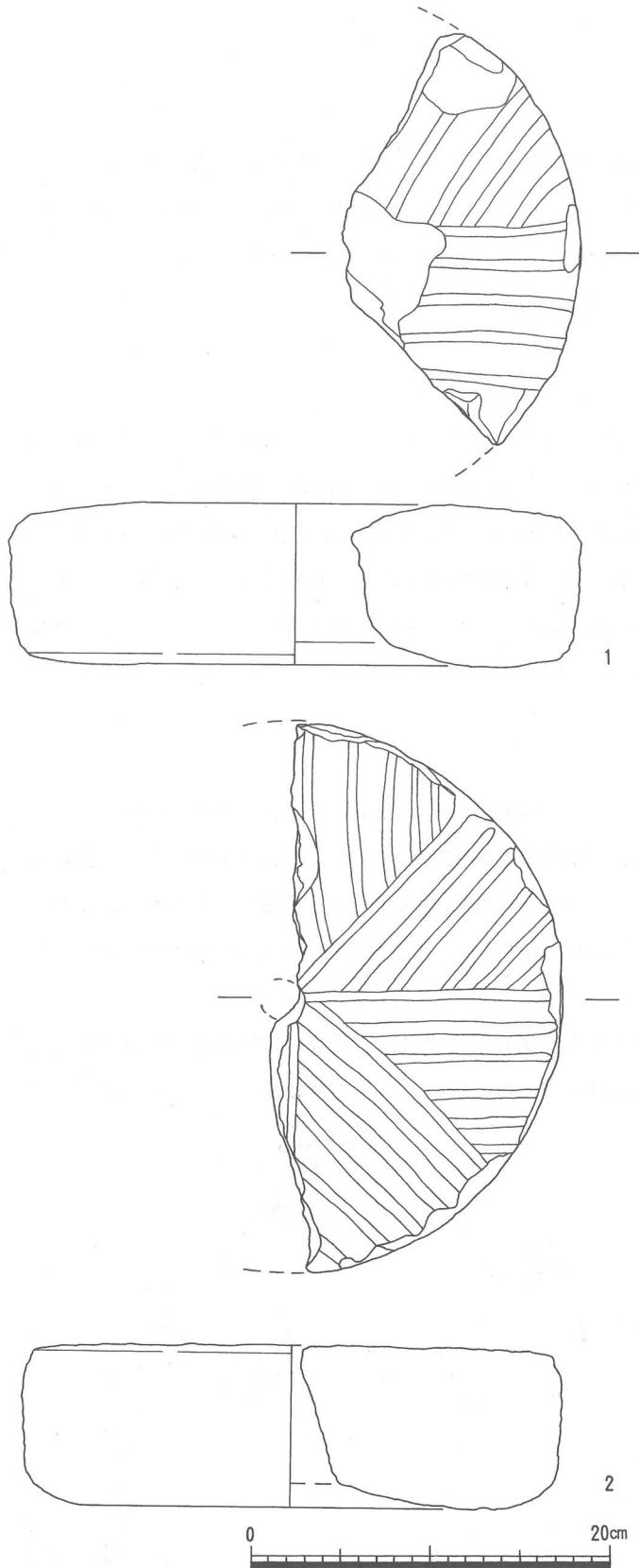
第48図-1は花崗岩製下石臼である。直径32.2cm、高さ9.2cmを測る。上面の目は5条1単位とし8本彫られていたと思われる。遺構面の年代から考えて17世紀前半、もしくはそれ以前のものと思われる。Ⅱ～Ⅲ-1期に属する。

SP697

SP697は、調査区南東部に位置する（表1・図版17）。平面形は楕円形を呈し、長径0.5m、短



第47図 SB04遺構図



第48図 SP681 (1)・SP697 (2) 出土遺物

伴うものである。平面形は円形を呈し、直径0.95m、深さ2.8m上を測る。筒型に真っすぐに掘られており、第6層が湧水層である。川口宏海氏の分類（川口1999年）A I a 型式に属する。

第50図-3は、京焼系陶器碗である。口径8.9cm、器高5.3cm、高台径2.9cmを測る。半球型の丸碗で、外面

径0.43m、深さ0.56mを測る。石臼を根石に使用している。

第48図-2は、花崗岩製下石臼である。直径30.3cm、高さ9.1cmを測る。上面の目は6条1単位とし8本彫られている。

16世紀後半～17世紀中頃の遺構と考えられ、Ⅱ～Ⅲ-1期に属する。

SP698

SP698は、SP697の西側に位置する（表1・図版17）。平面形は円形を呈し、直径0.34m、深さ0.34mを測る。石臼を根石に使用している。

第49図-1は、花崗岩製下石臼である。直径30.3cm、高さ8.9cmを測る。上面の目は6条1単位とし8本彫られている。前記のSP697と接合でき、同一のものである。

16世紀後半～17世紀中頃の遺構と考えられ、Ⅱ～Ⅲ-1期に属する。

SP673

SP673は、調査区南東部に位置する（表1）。平面形は楕円形を呈し、長径0.48m、短径0.33m、深さ0.4mを測る。

第50図-1は須恵器甕である。外面体部に平行タタキ調整が施されている。鎌倉～南北朝時代のもと思われる。2は、肥前磁器染付碗である。口径（推）9.8cmを測る。外面体部には一重網目文が描かれている。呉須の発色はあまりよくない。大橋康二氏の編年（大橋1993年）Ⅲ期に属する。

出土遺物を概観すると、17世紀中頃の遺構と考えられ、Ⅲ-1b期に属する。

SE600

SE600は、調査区中央やや北西に位置する素掘りの井戸である（第51図・図版17）。上面では検出できなかったが、本来は1次面に

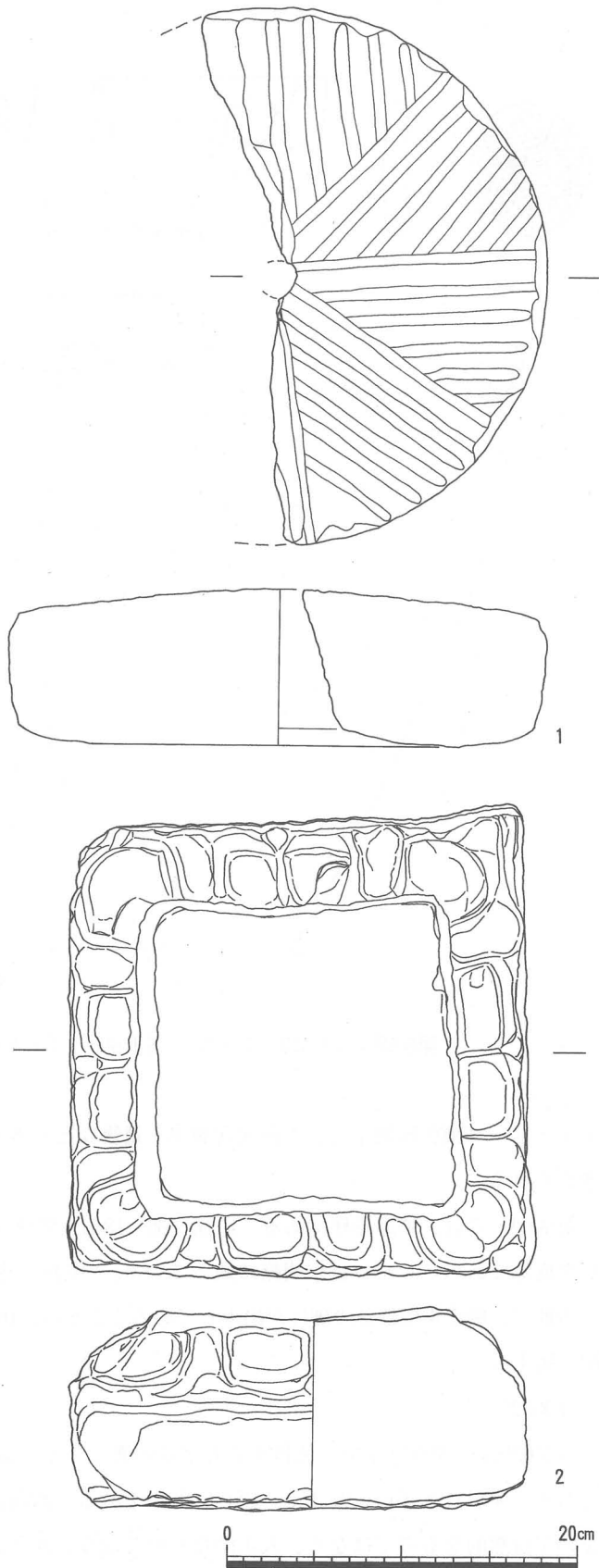
体部に赤、緑、黒色で笹文を描いている。4は、軟質施釉陶器である。器種は不明。口径6cm、器高3.7cmを測る。胎土はやや粗く0.1cm位の礫を含み、色調は橙色(7.5YR 7/6)を呈す。口縁部を除き内外面に透明釉が施され、脚の付け根部分には雲母がみられる。型づくり成形で、脚は2足のみ残っていたが3足であると考えられる。足の付け根部分に縦1.5cm、横0.9cmの篆書及び楷書による「若」の刻印がみられる。6は、土師質土器焙烙である。胎土は、にぶい橙色(5YR 6/4)を呈す。口径(推)40cm、器高(残)7cmを測る。口縁部外縁帯が外へ張り出すタイプである。内面と外面口縁部直下から底部にかけて炭化物が付着している。調整は内面体部はナデ調整、外面口縁部はヨコナデ調整、外面体部は未調整である。口縁端部に、粘土を足した把手が付される。難波洋三氏の分類(難波1992年)G類に属する。7は、丹波焼甕である。底径20.6cmを測る。外面体部は塗土が施され、灰釉を流し掛けしている。外面底部は無釉である。図版22-11は、砥石である。縦10.1cm、横6.6cm、厚さ1.6cmを測る。褐色を帯びる浅黄色(2.5Y 5/3)を呈した凝灰岩製の砥石である。また、図化していないが瓦が多量にみられ、鉄釘、炭も出土している。

さらに、この遺構からは多量の貝類が出土している。出土した貝類の種類は、軟体動物斧足類に属するハマグリ、シジミの2種類である。ハマグリの大きさは、高さ2.5cm、長さ2.5~3.5cmのもの、シジミは高さ1.5cm、長さ1.6cmのものが中心であった(赤松1999年)。

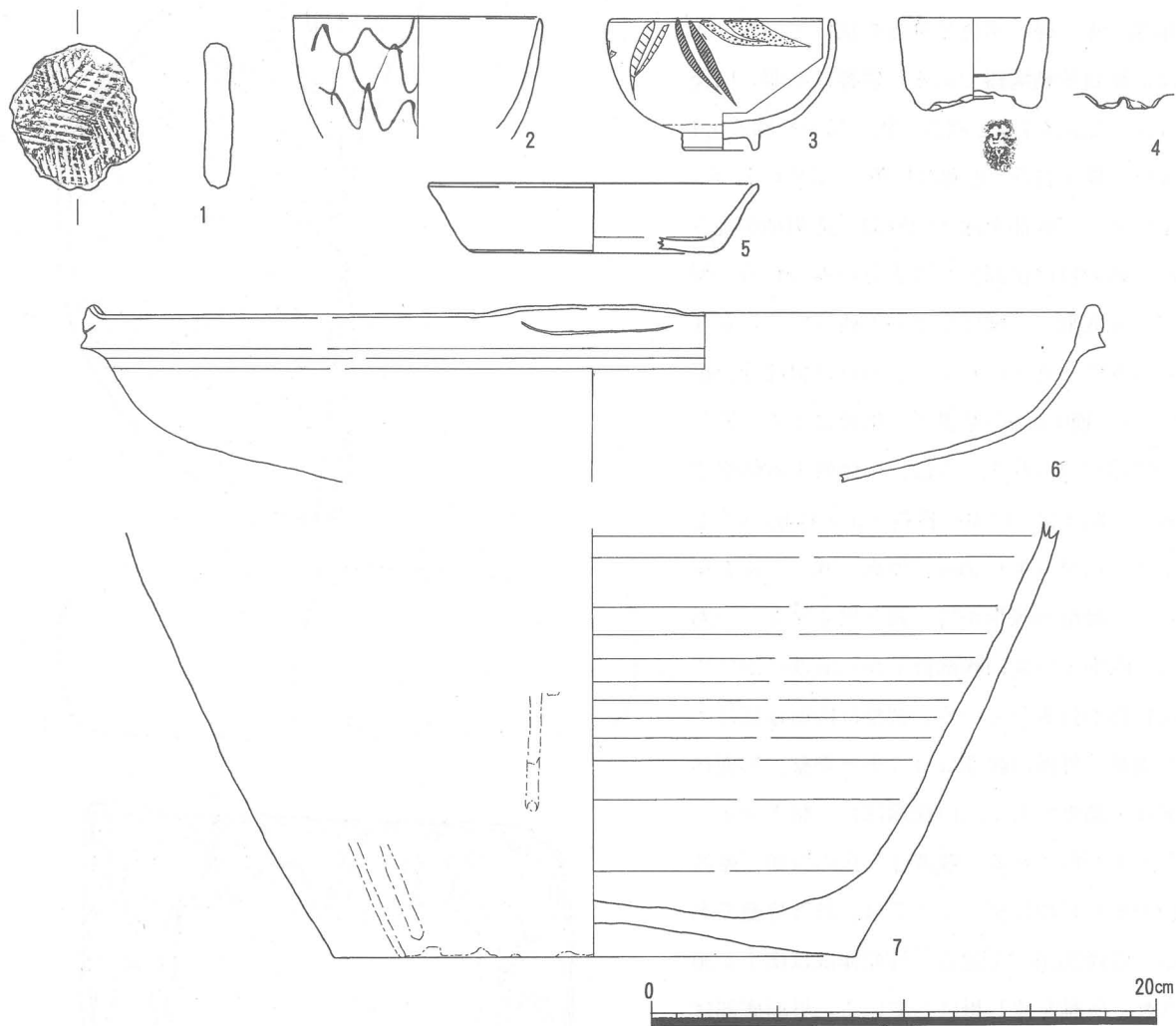
出土遺物を概観すると、18世紀後半~19世紀前半の遺構と考えられ、Ⅲ-3期に属する。

S D 601

S D 601は、調査区北部位置し、南北に延びる溝である(第52図・図版18)。検出長2.35m、幅0.34m、深さ0.09mを測る。溝の断面形は台形を呈し、埋土は1層である。この溝の南側にS D 603を検出しており、この溝と関係があると思われる。この他に、調査区中央東側よりS D 602・S D 606を検出した。2ヶ所とも埋



第49図 S P 698 (1)・採集遺物 (2) 出土遺物



第50図 S P 673 (1・2)・S E 600 (3・4・6・7)・S D 601 (5) 出土遺物

土がオリーブ褐色砂質土で、上面包含層出土遺物などと考え合わせて、17世紀前半までの耕作に関わる溝と考えられる。

第50図-5は、須恵器杯である。口径(推)13cm、底径(推)9.6cmを測る。器壁が薄く、マキアゲ、ミズビキ成形である。ロクロ目が明瞭に残っている。中村 浩氏の編年(中村1981年)IV型式第1段階に属する。その他に、唐津系陶器鉢の破片が出土していることから、16世紀末~17世紀初頭の遺構と考えられ、Ⅲ-1 a 期に属する。

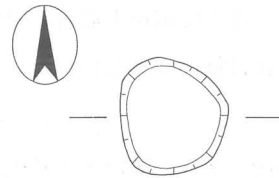
S X 629

S X 629は、調査区中央に位置するL字状の溝である(第53図・第54図・図版18)。西方向と南方向に延びており、検出長18.9m、幅3m、深さ0.25mを測る。断面は、両端が緩やかに傾斜し、遺構の性質はわからないが自然的なものではなく、人工的なものではないかと思われる。埋土は2層を数え、下層の明褐色粘質土層は北側のB-11-1区やB-1-3区(藤井直正他1999年)やB-3区(藤井直正他1997年)からも検出されており、ここからは図化できなかったが須恵器瓦片や図版22-12の土師器片など飛鳥V期の遺物が出土している。また、図版22-13の16世紀後半の丸瓦が埋土上層から検出されていることからその頃に埋めもどされたと思われる。

出土遺物を概観すると、16世紀後半以前で、古い時期からの遺構と考えられる。

採集遺物

第49図-2は、花崗岩製組合せ五輪塔の蓮華座である。一辺26.9cm、高さ11.5cmを測る。上部を平らにして受座を造り、その下の回りに簡略化した反花を刻んでいる。17世紀後半までにつくられている。



3. 第3次面の遺構と遺物

3次面では、三和土は検出されなかった。礎石・礎石痕は数ヶ所検出されたが、建物の規模はわからなかった。また、西壁沿い中央で元禄年間(1699・1702年)と享保十四年(1729)の火災の焼土処理土壌(S K408・409)を検出した。

S P 420

S P 420は、調査区中央に位置する(表1)。平面形は円形を呈し、直径0.32m、深さ0.29mを測る。この面でもこのような柱穴がみられ復元はできないが掘立柱建物が建てられていたと考えられる。

第56図-1は、丹波焼甕である。器高(残)10.5cm、底径(推)18cmを測る。胎土の色調は、grayish yellow (2.5Y7.5/2)を呈し、0.1~0.2cm位の礫を含む。外面は塗土が施され、内面は無釉である。底部は未調整である。

出土遺物を概観すると、17世紀後半の遺構と考えられ、Ⅲ-2 a 期に属する。

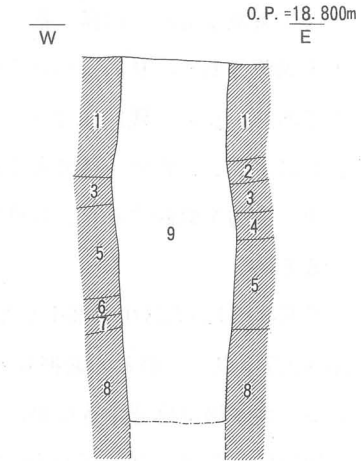
S V 02

S V 02は、調査区南東部に位置する竈である(表1・図版18)。平面形は不整形を呈し、長さ3.87m、幅1.78m、深さ0.44mを測る。第3次面検出時には直上にS K434があったため、それを取り除いたあとに検出された。

第56図-4は、土師質土器灯明皿である。口径(推)7cm、器高(残)1.6cmを測る。手づくね成形である。内外面共炭化物が多量に付着しているが灯明の為か、竈内で2次焼成を受けた為かは不明である。5は、瀬戸・美濃焼天目茶碗である。高台径4.3cm、器高(残)1cmを測る。高台内がやや曲線的に削り込まれた内反り高台である。高台部のみで面子に使用されていたと思われる。6は、白磁碗である。口径(推)16cm、器高(残)3cmを測る。胎土は若干粗く、黒い斑点がみえる。外へ分厚く折り返した口縁外面に釉だまりがみられる。横田・森田分類(1978年)Ⅳ-2類に属する。第57図-1は、備前焼甕である。口径(推)73.2cm、器高(残)10.1cmを測る。口縁を外側に折り返し太い玉縁に作ったもので、口縁部内面と外面肩部に黄ゴマがみられる。乗岡 実氏の編年(1999年)近世1期に属する。

出土遺物を概観すると、16世紀後半~17世紀初頭の遺構と考えられ、Ⅱ~Ⅲ-1 a 期に属する。

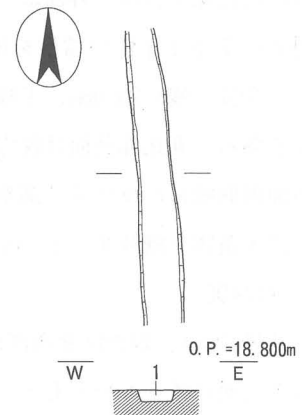
S V 01



- 1. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y 6/8
- 2. 黄褐色砂礫土層 10Y R 7/8
- 3. にぶい黄色砂礫層 2・5 Y 6/4
- 4. オリーブ黄色砂礫土層 5 Y 6/3
- 5. 明黄褐色砂礫土層 10Y R 6/8
- 6. オリーブ褐色礫層 2・5 Y 4/4 (涌水層)
- 7. 黄褐色砂礫層 10Y R 5/8
- 8. 黄褐色粘礫層 10Y R 5/6
- 9. 暗灰黄色砂礫層 2・5 Y 4/2



第51図 S E 600遺構図



- 1. にぶい黄褐色粘質土層 10Y R 6/3



第52図 S D 601遺構図

S V01は、調査区南側中央に位置する竈である（第55図・図版18）。平面形は不整形を呈し、長さ0.81m、幅0.53m、深さ0.04mを測る。第3次面検出時にはS K434に切れ、遺構の残存状態が悪く、竈の底部のみで、上部は検出できなかった。さらに下面のS V02を切っていることから、S V02をつくり替えたものと思われる。

第56図-2は、瀬戸・美濃焼天目茶碗である。高台径3.2cm、器高（残）0.6cmを測る。高台内の削り込みが浅い輪高台である。高台部のみでS V01と同様面子に使用されていたと思われる。3は、瓦質土器ミニチュア茶釜である。口径（推）2.1cm、器高2.8cmを測る。鏝部より上はヘラミガキ調整、鏝部下より底部はナデ調整である。耳部はハリツケした後、ナデ調整を施し棒状のもので穿孔している。第58図-1は、角細工である。長さ（残）13.7cm、幅1.1cmを測る。鹿角の表面を削り細工している。寺島良安の『和漢三才図会』によると、簪の一種である通簪と思われる。

出土遺物を概観すると、17世紀初頭～前半の遺構と考えられ、Ⅲ-1期に属する。

S E 400

S E400は調査区中央部やや北西よりに位置する（第59図・図版18）。平面形は円形を呈し、直径1.65m、深さ2.7m以上を測る。素掘りの井戸である。断面形は、筒型に掘られているが下方はラッパ状に広がっている。湧水層は確認できなかった。川口宏海氏の分類A I a型式に属する。

第56図-7は、フイゴの羽口である。全長（残）11.2cm、幅10.5cm、孔径2.2～2.5cmを測る。外形・孔径とも直線的で、外面上部にはスラグが付着し、外面全体にナデ調整を施し丁寧に仕上げている。胎土中には0.1cm位の礫を若干含むが分布の偏りはみられない。伊藤幸司氏の分類（伊藤1992年）I類に属する。またこの他に、鉄滓も10片位出土していることから、近辺で小鍛冶をしていたと思われる。8は、下層から出土した、瀬戸・美濃焼輪髹皿である。口径（推）8.9cm、器高1.9cm、高台径（推）5cmを測る。腰部に稜があり、底部は低い削り出し高台で、ねっとりした灰釉が全面に施されている。内面は焼成時重ね積みをするため、中央底部を高台と同じだけまるく釉をふきとっている。高台内には輪トチンの痕がみられる。9も、下層から出土した、備前焼播鉢である。外面体部にロクロ成形を思わせる凸凹を巡らしている。胎土に0.05～0.1cmの白色礫を含み、外面は火災に遇ったためか変色している。内面には縦に7本1単位、さらにその上から斜めに7本1単位の播目を施している。乗岡 実氏の編年近世1期bに属する。図版23-8は、丸瓦である。全長（残）23.9cm、玉縁部長3.5cm、厚さ2.4cm、高さ5.8cm、体部幅（残）11.3cm、玉縁部幅（残）5.8cmを測る。丸瓦部凸面は縦方向に弱くヘラミガキ調整、丸瓦部凹面にはコピキA痕がみられる。また丸瓦部凹面両側縁にヘラケズリ調整が施されている。玉縁部凸面はヨコナデ調整、玉縁部凹面は布目が残る。

出土遺物を概観すると、16世紀末～17世紀初頭の遺構と考えられ、Ⅲ-1 a期に属する。

S U 400

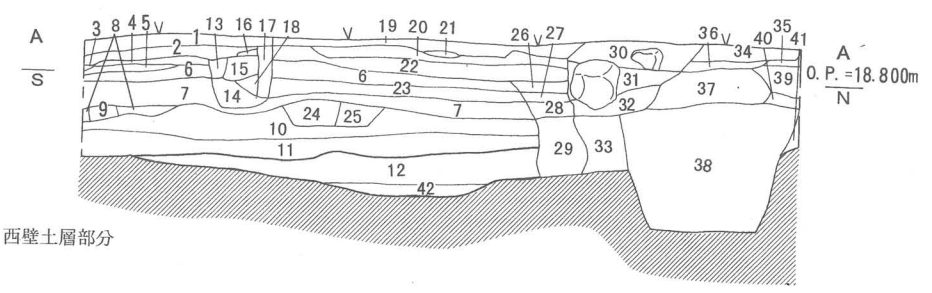
S U400は、調査区北西部に位置する埋桶遺構である（表1・図版18）。上面では検出できなかったが本来は1次面に伴うものである。掘形の平面形は円形を呈し、掘形の直径0.78m、内径の直径0.58m、深さ0.23mを測る。残存状態は悪く、底部は小片のみしか確認できなかった。周辺には廃棄土壌が多いことから裏庭に位置すると思われる。

第56図-10は、肥前磁器染付猪口である。口径6.7cm、器高3.3cm、高台径（推）2.8cmを測る。外面体部の文様は、呉須の発色が悪く滲んではっきりしないが笹文と思われる。高台脇と高台内には釉だまりができていて、高台畳付は露胎で、離れ砂が付着する。大橋康二氏の編年V期に属する。

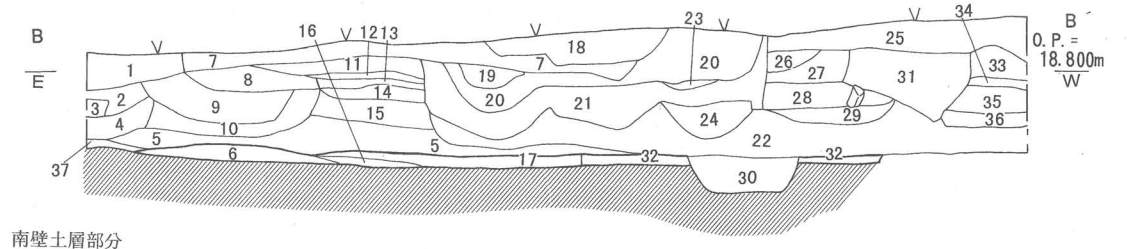
出土遺物を概観すると、19世紀前半～後半の遺構と考えられ、Ⅲ-3 b期に属する。



第53図 SX629遺構図



- | | | |
|--|---|--|
| 1. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/4 | 16. 浅黄色粘質土層 2・5 Y 7/3 | 31. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y 4/2 |
| 2. 暗赤褐色炭化物・焼土層 5 Y R 3/4 | 17. 灰黄褐色粘質土層 10 Y R 4/2 | 32. 黄灰色粘質土層 2・5 Y 4/1 |
| 3. 浅黄色粘質土層 2・5 Y 7/4 | 18. 黒褐色粘質土層 10 Y R 3/2 | 33. 黄褐色粘質土層 10 Y R 7/8 |
| 4. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y 4/2 | 19. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 7/3 | 34. 黒褐色粘質土層 2・5 Y 3/2 |
| 5. 黒褐色炭化物・焼土層 10 Y R 3/1 | 20. 黒褐色粘質土層 2・5 Y 3/2 | 35. 橙色粘質土層 7・5 Y R 6/8 |
| 6. 橙色粘質土層 7・5 Y R 6/8 | 21. 黄褐色粘質土層 10 Y R 7/8 | 36. 黄灰色粘質土層 2・5 Y 4/1
(10~15cmの礫多量に含む) |
| 7. 浅黄色粘質土層 2・5 Y 6/2
(3~5cmの礫・瓦多量に含む) | 22. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y 4/2 | 37. 淡黄色砂層 2・5 Y 8/4
(5~10cmの礫・灰色 7・5 Y 4/1の粘土多量に含む) |
| 8. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y 5/2 | 23. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y 5/2 | 38. 浅黄褐色粘質土層 10 Y R 8/3 |
| 9. 灰黄褐色土層 10 Y R 4/2 | 24. 灰黄褐色土層 10 Y R 4/2 | 39. 灰黄褐色粘質土層 10 Y R 5/2 |
| 10. 暗オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 3/3 | 25. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/3
(3~4cmの礫多量に含む) | 40. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y 4/2 |
| 11. 褐色粘質土層 10 Y R 4/4 | 26. 灰黄褐色粘質土層 10 Y R 4/2 | 41. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y 5/2 |
| 12. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 6/3 | 27. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/3 | 42. 明褐色粘質土層 2・5 Y 6/8 |
| 13. 浅黄色粘質土層 2・5 Y 7/4 | 28. オリーブ黒色粘質土層 5 Y 2/2 | |
| 14. におい黄褐色粘質土層 2・5 Y 6/4 | 29. 灰オリーブ色粘質土層 5 Y 4/2 | |
| 15. 灰黄褐色粘質土層 10 Y R 4/2 | 30. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 5/3 | |



- | | | |
|---|--|---|
| 1. 黒褐色砂質土層 2・5 Y 3/2
(3~5cmの礫・瓦を多量に含む) | 14. 灰黄褐色粘質土層 10 Y R 5/2 | 27. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 5/4 |
| 2. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/3 | 15. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 5/4 | 28. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/4 |
| 3. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y 5/2 | 16. 浅黄色粘質土層 2・5 Y 7/3 | 29. 浅黄色砂質土層 5 Y 7/3 |
| 4. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/4 | 17. におい黄色粘質土層 2・5 Y 6/3 | 30. 黄褐色粘質土層 10 Y R 5/8 |
| 5. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y 4/2 | 18. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 5/4 | 31. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/3
(0.5~3cmの礫若干・瓦多量に含む) |
| 6. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y 7/6 | 19. 灰黄色粘質土層 2・5 Y 4/2
(炭化物・焼土若干含む) | 32. におい黄色粘質土層 2・5 Y 6/4 |
| 7. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y 4/2
(0.5~1cmの礫若干含む) | 20. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y 5/2 | 33. 黄褐色粘質土層 10 Y R 7/8
(5~10cmの礫多量に含む) |
| 8. オリーブ黄色粘質土層 5 Y 6/3 | 21. オリーブ黄色粘質土層 5 Y 6/3 | 34. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 6/4
(焼土・炭化物多量に含む) |
| 9. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/3 | 22. 褐色粘質土層 10 Y R 4/4
(0.5~1cmの礫少量含む) | 35. 黄褐色粘質土層 10 Y R 5/6 |
| 10. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/4 | 23. 褐色粘質土層 7・5 Y R 4/3 | 36. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/3 |
| 11. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y 5/2 | 24. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y 7/6 | 37. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y 6/8 |
| 12. 灰オリーブ色粘質土層 7・5 Y 5/2 | 25. 黄褐色粘質土層 10 Y R 5/6 | |
| 13. 灰オリーブ色粘質土層 5 Y 6/2
(焼土・炭化物多量に含む) | 26. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/4
(0.5~3cmの礫多量に含む) | |



第54図 SX629土層図

S U 405

S U 405は、調査区北東部に位置する（表1・図版18）。平面形は円形を呈し、直径0.86m、深さ0.3mを測る。また、すぐ北側のS K 406も埋桶遺構でありS U 405はそれを作り替えた可能性がある。

第56図-13は、肥前磁器染付碗である。器高（残）1.5cm、高台径4.1cmを測る。焼成が悪く、呉須の発色も悪い。高台畳付は露胎である。大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。

出土遺物を概観すると、18世紀後半の遺構と考えられ、Ⅲ-2 b～3 a期に属する。

S U 406

S U 406は、調査区中央やや北よりに位置する（表1・図版18）。掘形のみ検出した。掘形の平面形は楕円形を呈し、長径0.9m、短径0.53m、深さ0.46mを測る。1次面で、このすぐ南側から便槽用甕S W 01を検出したことから、この遺構も便槽用であると考えられる。

第56図-12は、瀬戸・美濃焼磁器皿である。口径（推）11.1cm、器高2.3cm、高台径6.7cmを測る。黒色釉を銅版摺で「高砂」の老夫婦を描いている。この他に、銭種不明であるが銭貨が2枚出土している。

出土遺物を概観すると、20世紀初頭に廃絶され、それ以前に設けられた遺構と考えられ、Ⅳ期に属する。

S D 404

S D 404は、調査区西部を南北に走る溝である（第60図・図版19）。検出長4m、幅0.71m、深さ0.08mを測る。溝の断面形は台形を呈し、埋土は1層である。遺構全体に礫石が敷かれており、建物の基礎ではないか考えられる。

第56図-11は、肥前磁器染付碗である。器高（残）2.3cm、高台径4.6cmを測る。厚手のくらわんか手のもので、高台畳付は露胎で砂が付着している。大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。

出土遺物を概観すると、17世紀後半～末の遺構と考えられ、Ⅲ-2 a期に属する。

S D 405

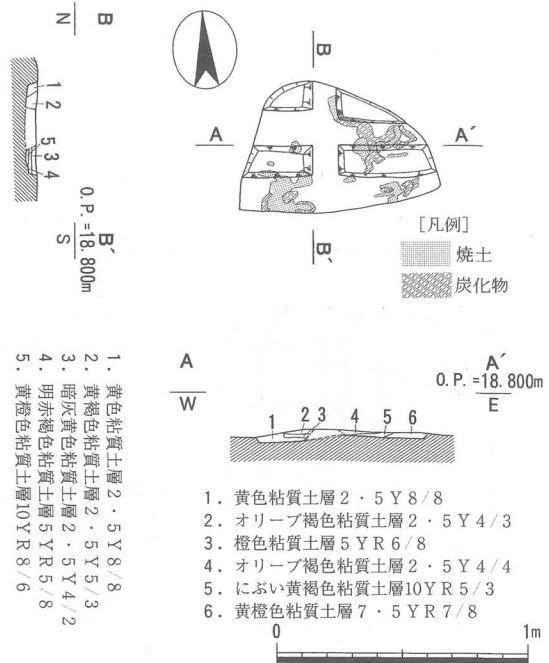
S D 405は、S D 404の南側に位置する（第60図・図版19）。検出長2.3m、幅0.44m、深さ0.07mを測る。溝の断面形は台形を呈し、埋土は1層である。S D 404と同様に全体に礫石が敷かれており、S D 404と同様に建物の基礎ではないかと思われる。

17世紀後半～末の遺構と考えられ、Ⅲ-2 a期に属する。

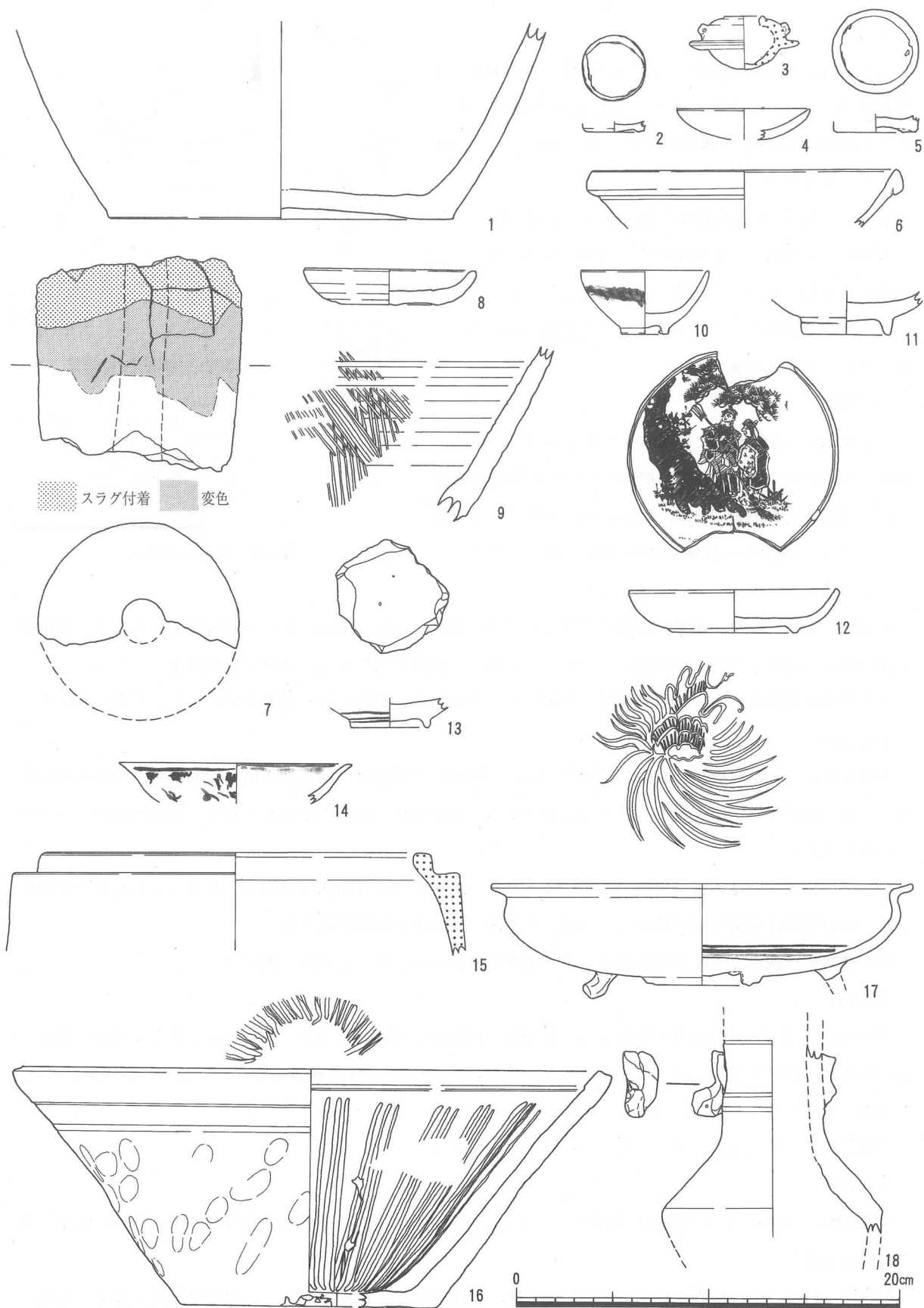
S K 429

S K 429は、調査区中央やや南に位置する（表1）。平面形は楕円形を呈し、長径1.26m、短径0.96m、深さ1.17mを測る。

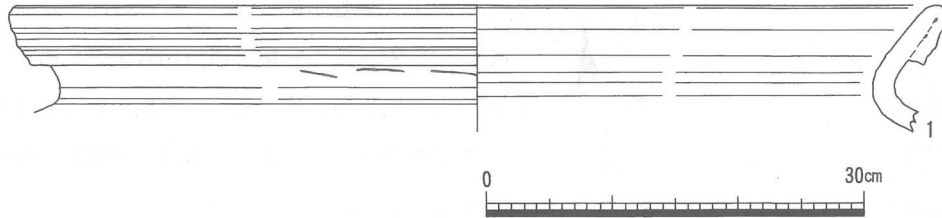
第56図-14は、中国製青花皿である。口径（推）12cmを測る。器壁が薄く、口縁部は端反になる。外面には草花文が描かれている。小野正敏氏の分類（小野1982年）染付皿B 1群Ⅵ類に属する。15は、瓦質土器火鉢である。口径（推）20.6cm、器高（残）5.4cmを測る。外面はヘラミガキ調整、内面はヨコナデ調整を施している。口縁端部内外面はヘラ削り調整がみられる。



第55図 S V 01遺構図



第56図 SP420 (1)・SV01 (2・3)・SV02 (4~6)・SE400 (7~9)・SU400 (10)・SU405 (13)・SU406 (12)・SD404 (11)・SK404 (16~18)・SK429 (14・15) 出土遺物



第57図 S V02出土遺物

出土遺物を概観すると、14・15は16世紀後半のもので下層から出土している。上層では17世後半の肥前磁器碗が出土している。したがって、上層のものが混入だとすればⅡ期に属する。混入でなければⅢ-2 a期に属する可能性がある。

S K 404

S K 404は、調査区中央北部に位置する(第61図・図版19)。平面形は長方形を呈し、長径3.23m、短径2.47m、深さ0.31mを測る。この土壌からは多くの礎石が敷かれるように検出したことなどから、単なるゴミ穴ではなく東側建物に関する蔵の基礎遺構と考えられる。

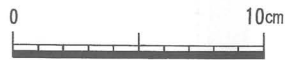
第56図-16は、丹波焼播鉢である。口径(推)30cm、器高12.5cm、底径(推)13cmを測る。口縁部から体部外面上部はロクロナデ調整、中部は指頭圧調整、下部はヘラナデ調整を施している。底部は未調整である。内面には3本1単位のクシ描きの播目がみられる。内面中部から底部にかけて播鉢陶片を窯道具にした重ね焼きの痕が残っている。外面底部にも同様にみられる。大平 茂氏の編年(大平1992年)Ⅰ型式と思われる。17は、肥前磁器青磁折縁皿である。口径(推)21.8cm、器高5.4cm、高台径5.8cmを測る。内面に釉下彩で牡丹文がみられる。脚は1足だけ残存しているが3足あったと思われる。高台畳付は露胎で多量の砂が付着している。三ツ股窯製品である。大橋康二氏の編年Ⅱ-1期に属する。18は、丹波焼仏花瓶である。器高(残)10.4cmを測る。瓶子形のものでロクロ成形である。外面体部に塗土が掛けられている。耳部には2つ耳が張り付けてある。

出土遺物を概観すると、17世紀初頭~後半の遺構と考えられ、Ⅲ-1 a~2 a期に属する。

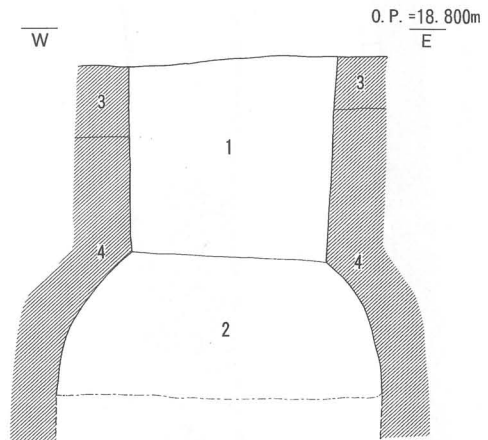
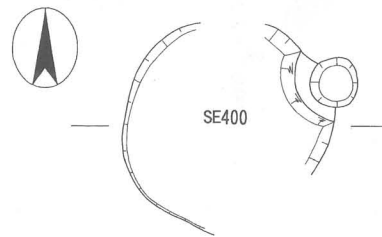
S K 402

S K 402は、調査区北西部に位置する(表1・図版19)。平面形は長方形を呈し、長径2.5m、短径1.94m、深さ0.42mを測る。

第62図-5は、土師質土器皿である。口径(推)7.8cm、器高1.6cmを測る。口縁部内外面ともヨコナデ調整、見込みは不



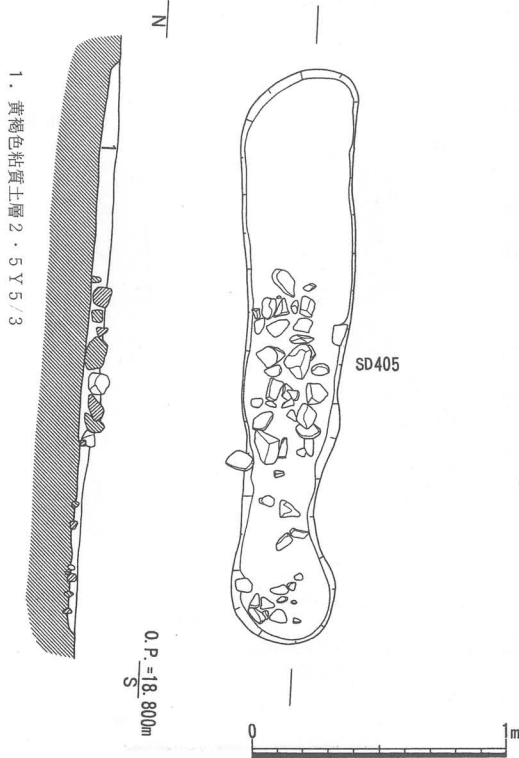
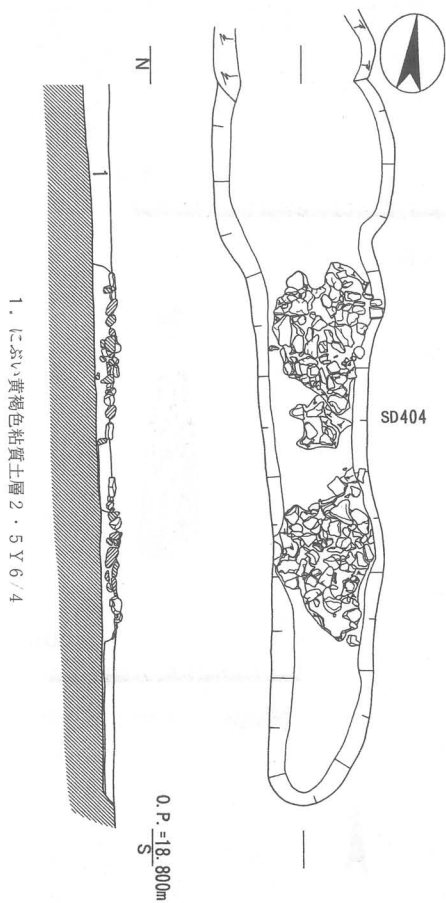
第58図 S V01出土遺物



- 1. 黒色炭化物層 2・5 Y 2/1
- 2. にぶい黄色砂礫層 2・5 Y 6/4
(5~15cmの礫多く含む)
- 3. 明黄褐色砂礫層
- 4. 黄色砂礫層 2・5 Y 8/6



第59図 S E400遺構図



第60図 S D404・405遺構図

定方向のナデ調整が施されている。外面は指頭圧調整している。川口宏海氏の分類（川口1997年c）のIT（伊丹郷町期）・1型式A類に属する。この他にも5個体程度の土師質土器皿が出土している。また、高台無釉の肥前磁器皿、嬉野焼皿などが出土している。

出土遺物を概観すると、17世紀後半の遺構と考えられ、Ⅲ-2 a期に属する。

S K 408

S K 408は、調査区西側に位置する（表1・図版19）。平面形は不整形を呈し、長さ1.05m、幅0.55m、深さ0.39mを測る。西壁を観察すると（第46図）、S K 408の埋土には炭化物や焼土が多量に堆積していた（第46図第89層）。ここからは、火を受けた遺物が出土していることから、火災焼土処理土壌と思われる。また、これを切って第46図第84層がみられ、それをさらに切って、後に述べる享保十四年の火災焼土処理土壌S K 409が造られている。

第62図-3は、京焼風陶器碗である。口径（推）8.8cm、器高5.6cm、高台径（推）5cmを測る。器壁は薄く、高台内と高台脇の削り込みが鋭く、高台内には円刻が施されている。外面体部には呉須で丁寧に楼閣山水文が描かれ、大橋康二氏の編年Ⅲ期に属する。4は、唐津系陶器器手碗である。口径（推）10.6cm、器高7.7cm、高台径（推）4.3cmを測る。高台畳付は露胎である。大橋康二氏の編年Ⅲ期に属する。この他に、高台無釉肥前磁器皿、唐津系陶器刷毛目文鉢などが出土している。

出土遺物を概観すると、17世紀後半～末の遺構と考えられ、Ⅲ-2 a期に属する。遺物の様相などから、元禄年間（1699年・1702年）の大火災の際の焼土処理土壌と思われる。

S K 409

S K 409は、S K 408の南側に隣接する焼土処理土壌である（表1・図版19）。平面形は不整形を呈し、長さ1.04m、幅0.38m、深さ0.69mを測る。西壁を観察すると、第2次面で検出した享保十四年（1729）の火災に遭った三和土を切った形でS K 409（第46図第81層）が掘られていた。

第62図-1は、肥前磁器染付碗である。口径（推）9.8cm、器高5.1cm、高台径4.1cmを測る。外面体部に手書きで雨降り文が描かれている。高台畳付は露胎で、離れ砂が付着する。大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。2は、銅製品であ



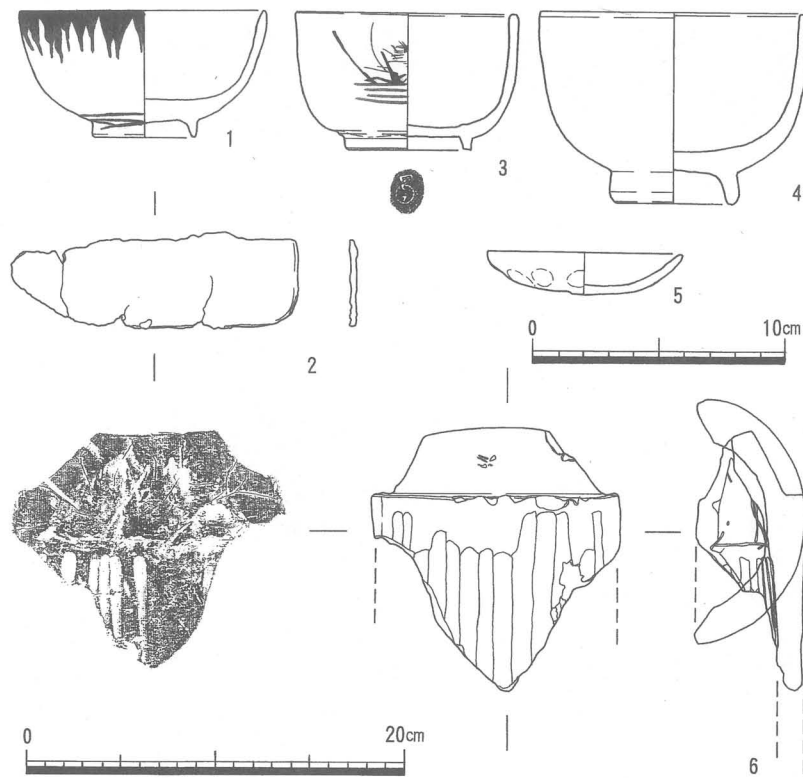
第61図 S K404遺構図

る。全長（残）11.5cm、厚さ0.2cmを測る。非常に薄い板状のものであるが用途は不明である。6は、丸瓦である。全長（残）13.7cm、玉縁部長3.3cm、厚さ1.4cm、高さ5.8cm、体部幅13.3cm、玉縁部幅11.4cmを測る。丸瓦部凸面は縦方向にやや強いヘラナデ調整、後端部には面取りを施している。丸瓦部凹面は縦方向に叩板によるタタキがみられる。玉縁部凹面は布目が残る。玉縁部凸面にはヨコナデ調整を施している。この他に、肥前磁器草花文碗などが出土している。

出土遺物を概観すると、17世紀後半～18世紀初頭の遺構と考えられ、Ⅲ-2 a期に属する。遺物の組成から享保十四年（1729）の大火災の際の焼土処理土壌と思われる。

4. 第2次面の遺構と遺物

調査区東側と西側では様相が違っていた。西側からは、1次面の三和土を取り除くと、間口より北へ約12.1mの範囲まで部分的であるが火災に遭った三和土を検出した。さらに、掘り下げるとまた火災に遭った



第62図 S K 409 (1・2・6)・S K 408 (3・4)・S K 402 (5) 出土遺物

三和土を検出した。礎石・礎石痕が検出されなかった
ので、建物の規模は不明で
ある。東側では、三和土は
検出されなかったが、礎
石・礎石痕よりS B 03が復
元できた。その他に北壁東
部分から享保十四年(1729)
の大火災の処理土壌(S K
200)を検出した。また、S
B 03の礎石列とS K 200の
西側端はほぼ一致すること
が分かった。このことから
S B 03の範囲から焼土層が
検出されなかったが、S K
200によって処理したので
はないかと思われる。また

3次面西壁北部で、元禄年間の大火災の処理土壌(S K 408)と享保十四年の火災の処理土壌(S K 409)を検出したことから、西側は東側より一時期古い火災に遭っていたことがわかった。

S B 03

S B 03は、調査区東側に位置する(第63図・図版19)。南側を間口とする礎石建物である。建物の大きさは桁行3.75間以上(東西7.39m)、梁行6間以上(南北11.81m)を測る。後述する柱穴S P 248、283、S K 246などがこれを構成する。これらはいずれも浅く、礎石抜き取り痕と考えられる。出土した遺物の年代観が、18世紀前半以降であることから、享保の火災後に建てられたと思われる。Ⅲ-2 b 期に属する。

S P 248

S P 248は、調査区中央東壁よりに位置する(表1)。平面形は楕円形を呈し、長径0.92m、短径0.64m、深さ0.21mを測る。S B 03に伴う礎石痕の柱穴である。

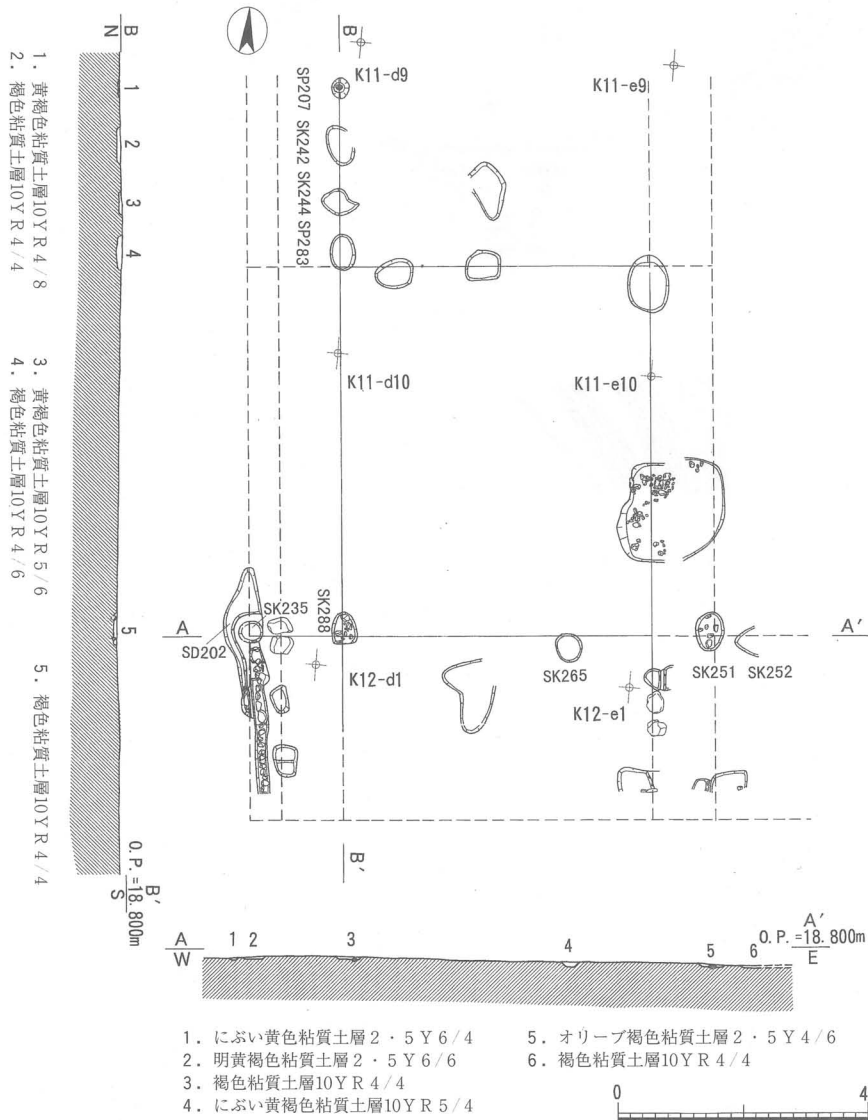
第64図-3は、肥前磁器染付碗である。器高(残)1.8cm、高台径4cmを測る。外面には草花文が描かれ、高台内には「太明年製」の2行4字銘が判読し難い崩れた書法で書かれている。高台畳付は露胎で、離れ砂が付着する。大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。この他に肥前磁器一重網目文碗、青磁染付碗、京焼風陶器碗などが出土している。

出土遺物を概観すると、17世紀後半~18世紀後半の遺構と考えられ、Ⅲ-2 期に属する。

S P 283

S P 283は調査区中央部に位置する(表1)。平面形は楕円形を呈し、長径0.58m、短径0.4m、深さ0.09mを測る。S B 03に伴う礎石の抜き取り痕の柱穴である。

第64図-1は、肥前磁器青磁皿である。器高(残)3.6cm、高台径(推)6.6cmを測る。焼成が悪く、釉がgrayish leaf(5GY7.5/2)に変色している。高台脇と高台内には釉だまりがみられる。内面には陽刻葉文がみられる。高台畳付は露胎で、離れ砂が付着する。大橋康二氏の編年Ⅲ期に属する。17世紀中頃の遺



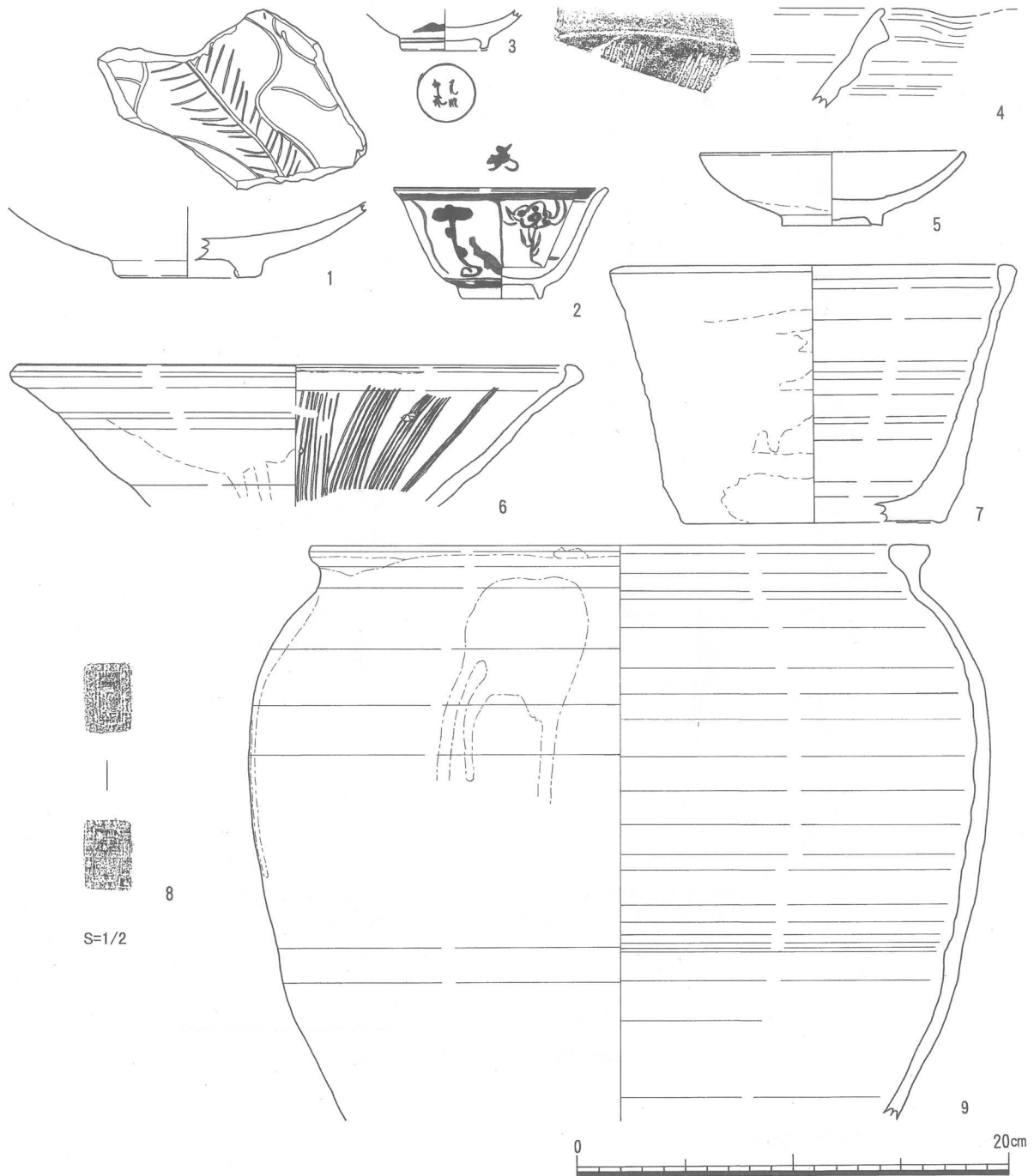
第63図 SB03遺構図

物である。Ⅲ—1 b期に属する。

SY211

SY211は、調査区中央やや北よりに位置する（第66図・図版19）。水琴窟としたが違う可能性もある。掘形の平面形は楕円形を呈し、長径0.7m、短径0.67m、深さ0.25mを測る。丹波焼甕の半裁されたものと底部の残る信楽焼甕を重ねあわせて逆位に埋めたものである。南側の第1次面SB01に関係するものと思われる。また、この南西方向に、便槽遺構（SW01・SU406）を検出したことから、便所使用後の手洗い排水処理として使われたと思われる。

第64図—2は、肥前磁器染付碗である。口径（推）10cm、器高5.1cm、高台径（推）3.1cmを測る。外面には芝祝寿文、見込みには花文が描かれている。高台畳付は露胎である。大橋康二氏の編年V期に属する。8は、一分銀の銅製模造銭である。長さ2.3cm、幅1.6cm、厚さ0.2cm、重さ5gを測る。表面は「一分銀」の3文字が刻まれ、裏面には上部に「定」字印が陰刻され、下部には「銀座常店」の文字がある。側面が平滑であることから鑄造期間が1837～1854年の天保一分銀を模造したものと思われる。9は、丹波焼甕である。口径（推）28.7cm、器高（残）26.7cmを測る。内面に灰釉、外面には塗土の上から灰釉を流し掛けしている。



第64図 SP283 (1)・SP248 (3)・SY211 (2・8・9)・SK246 (4)・
SK282 (5)・SK200 (6・7) 出土遺物

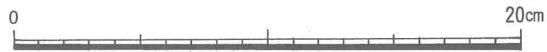
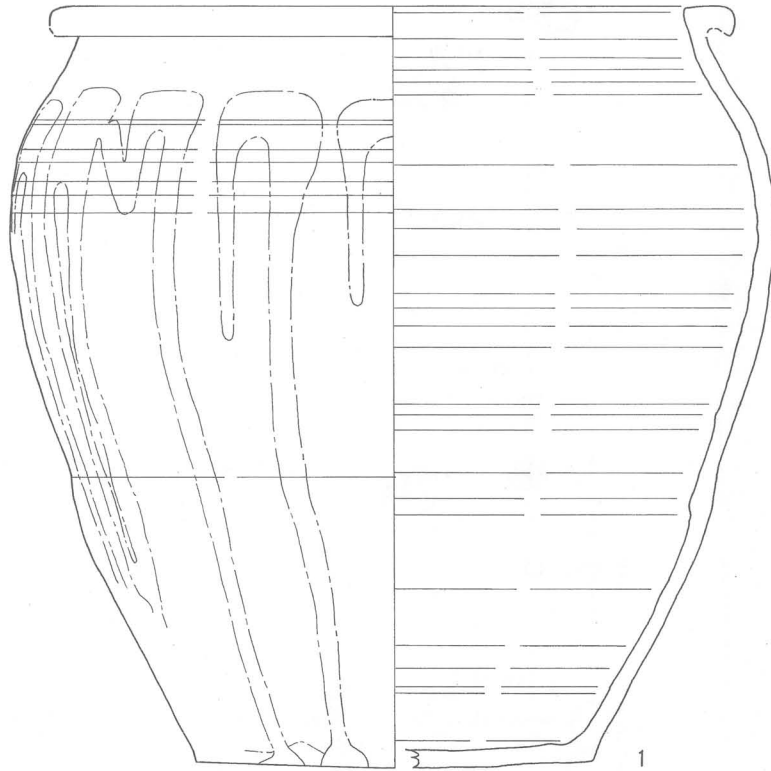
第65図-1は、信楽焼甕である。口径（推）26.7cm、器高33.5cm、底径（推）15.7cmを測る。体部は外側に張り出し丸味を帯びている。体部内外面には鉄釉が施され外面肩部より、灰釉が流し掛けられている。内面底部には2つの砂目が見られる。外面底部は未調整であるが、判読不明の墨書が見られる。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀前半の遺構と考えられ、Ⅲ-3期に属する。

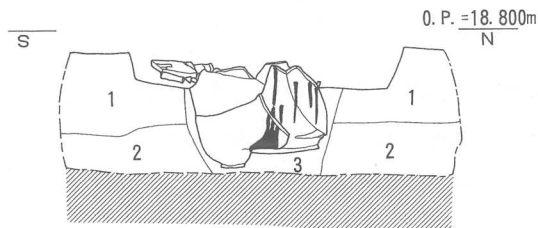
SK246

SK246は、調査区中央やや東よりに位置する（表1・図版20）。平面形は不整形を呈し、長さ0.97m、幅0.53m、深さ0.08mを測る。SB03に伴う礎石痕の柱穴である。

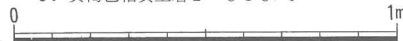
第64図-4は、丹波焼播鉢である。器高（残）4.7cmを測る。胎土に0.05～0.1cm位の礫を多量に含む。大平茂氏の編年Ⅲ型式に属する。出土遺物は、17世紀前半のものであるが、古いものが混入していると考え



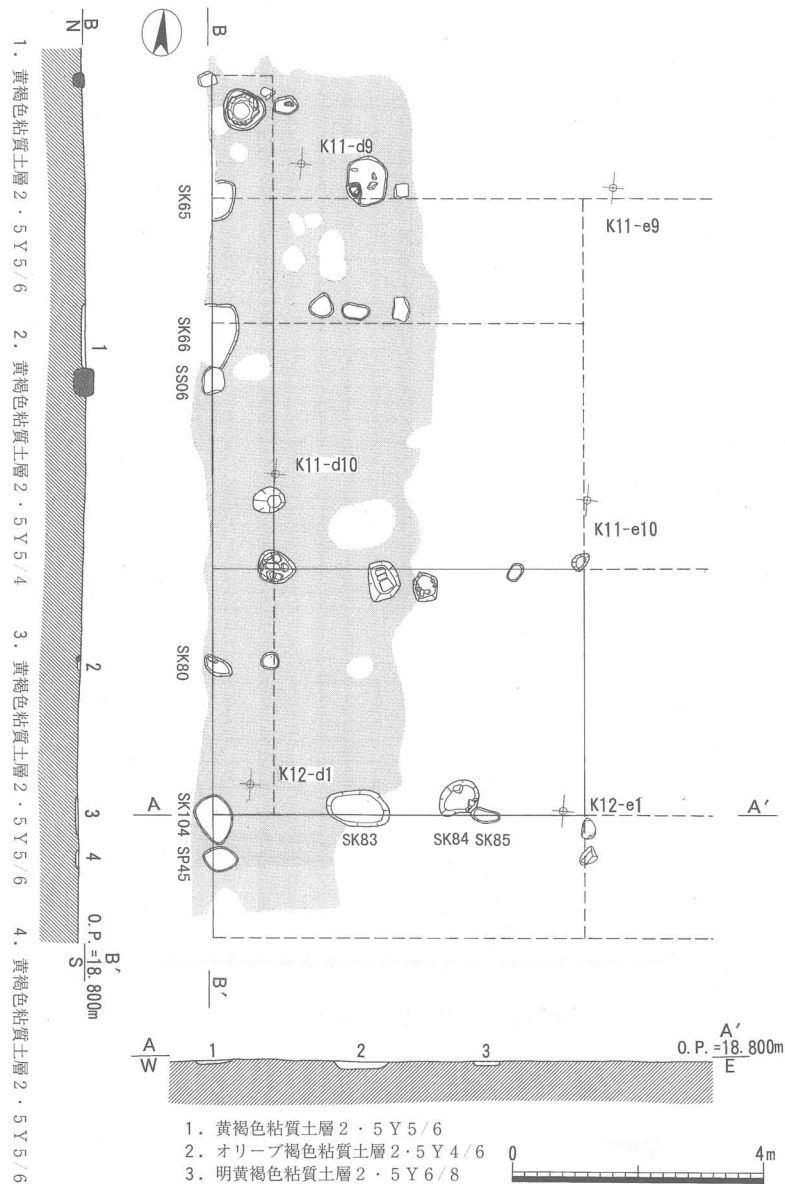
第65図 S Y 211出土遺物 (2)



- 1. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/4
- 2. 明褐色粘質土層 2・5 Y 6/8
- 3. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/4



第66図 S Y 211遺構図



第67図 SB01遺構図

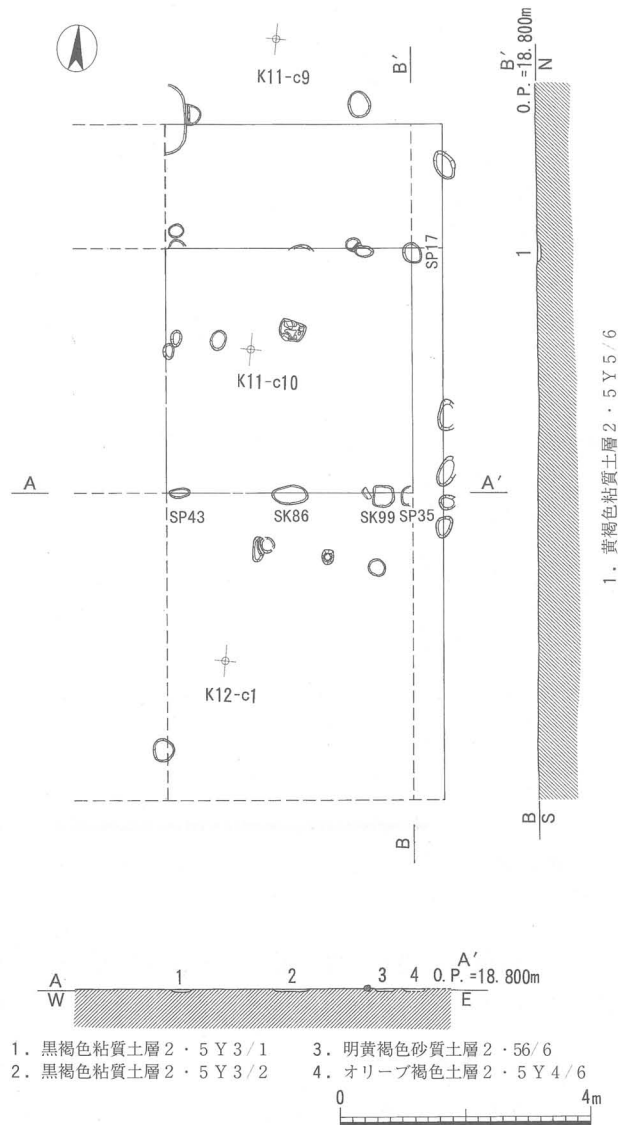
られる。Ⅲ—1 b 期に属する。

S K 200

S K 200は調査区北壁沿いの東側に位置する焼土処理土壌である（表1・図版20）。平面形は長方形を呈し、検出長3.5m、検出幅1.25m、深さ0.38mを測る。遺構の北端は調査区外へと延びており、北側の調査区B—17—3区S K 200（未報告）につながる。

第64図—6は、丹波焼播鉢である。口径（推）25.6cm、器高（残）6.6cmを測る。胎土に0.1～1cm位の白色礫を多量に含んでいる。内面から外面中程にかけて鉄釉が掛けられている。外面は回転ナデ調整、口縁部は強いナデ調整、口縁部内面はヨコナデ調整を施している。体部内面には8本1単位のクシ描の播目を設けている。7は、丹波焼鉢である。口径（推）18.6cm、器高13cm、底径（推）12.2cmを測る。外面には灰釉が横に流れて掛かっている。この他に、肥前磁器染付碗・皿、土師質土器瓦灯、平・丸瓦、焼けた壁土などが出土している。

出土遺物を概観すると、17世後半～18世紀初頭の遺構と考えられ、Ⅲ—2 a 期に属する。遺物の様相などから、享保十四年（1729）の大火災の際の焼土処理土壌と思われる。



第68図 S B02遺構図

S K 282

S K 282は、調査区南東部に位置する（表1・図版20）。平面形は楕円形を呈し、長径0.76m、短径0.65m、深さ0.13mを測る。

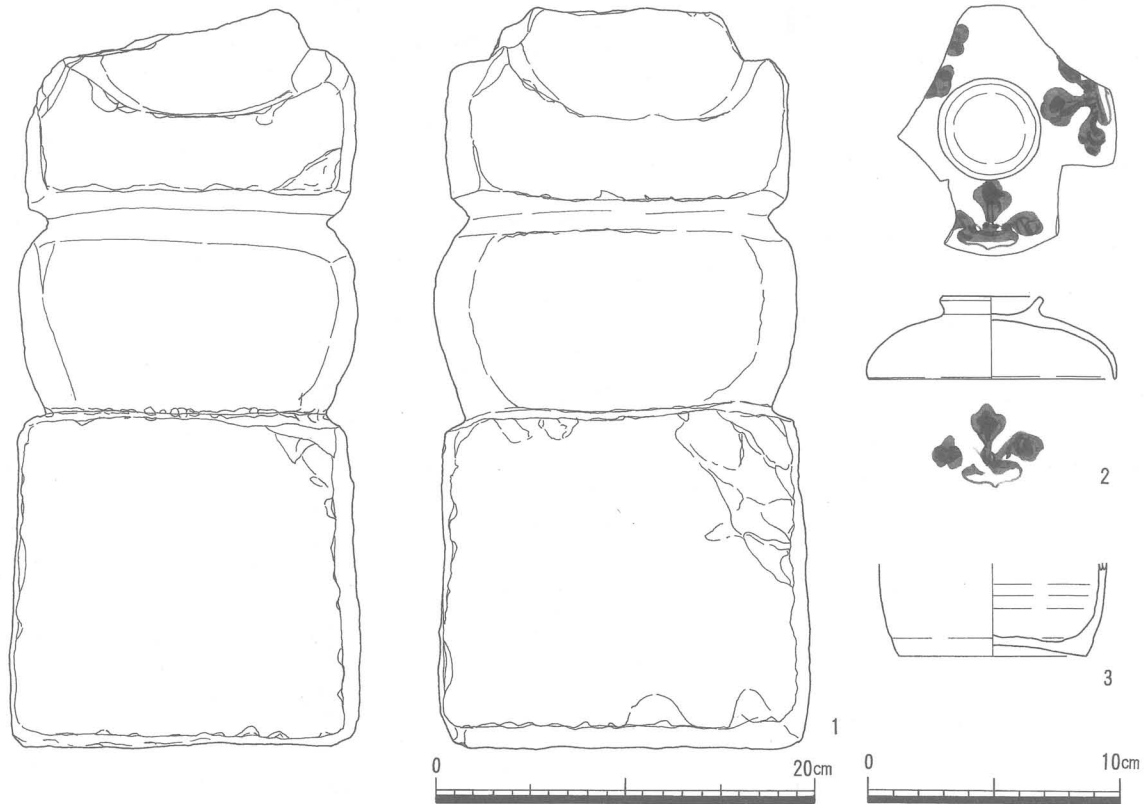
第64図-5は、嬉野焼皿である。口径（推）12.2cm、器高（残）3.5cm、高台径（推）4.6cmを測る。内面には青緑釉、外面には体部中程まで透明釉を掛け、見込みには蛇ノ目釉ハギを施している。この他に、肥前磁器染付碗・皿、唐津系陶器刷毛目文碗など比較的多くの出土遺物がみられる。

出土遺物を概観すると、17世紀末～18世紀初頭の遺構と考えられ、Ⅲ-2 a 期に属する。

5. 第1次面の遺構と遺物

1次面では、昆陽口通りに面して建つ既存建物の前身と考えられるS B01、S B02を中心として、それに伴う井戸・便槽などを検出した。

調査区中央からは屋敷境の石積溝（S D03）を検出し、この溝の東側と西側とでは様相が違っており、別の敷地だったと思われる。東側では、間口から北へ約13.6mの範囲で三和土を検出した。これに伴う礎石・



第69図 S S04 (1)・S E02 (2・3) 出土遺物

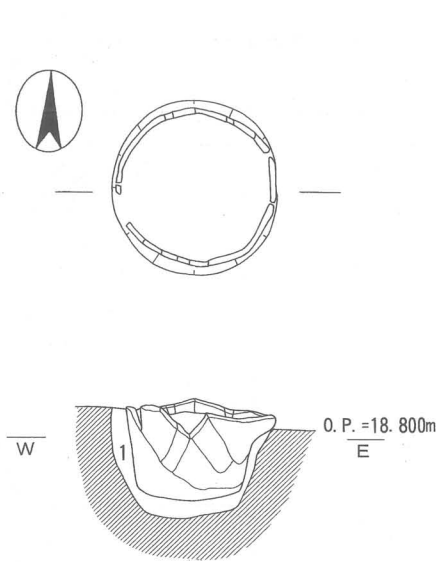
礎石痕からS B01が復元できた。西側でも礎石・礎石痕からS B02が復元できた。また、間口から北へ約12.5mの範囲で三和土が検出されたが、これはS B02に伴う三和土ではなく、西壁土層を観察すると、1時期下の享保十四年(1729)の大火災の被災面であることがわかった。第1次面に伴う礎石抜き取り痕もあるはずであるが上層からの柱穴と入り混じっており、分離できなかった。また、調査区中央から北側では、廃棄土壌を多く検出し、便槽甕もみられることから、裏庭的空間だったと思われる。

S B01

S B01は、調査区東側に位置する(第67図・図版20)。南側を間口とする礎石建物である。建物の大きさは桁行3間以上(東西5.91m以上)、梁行6間(南北11.8m)を測る。この建物の北西に便槽甕S W01が付属する。同時期の井戸S E01が東側にあることから東側が通り庭だったと思われる。年代については、下面の遺構から18世紀後半までの遺物が出土しており、19世紀初頭以降に建てられたと考えられる。また、既存建物と思われる建物が、昭和二十三年と三十六年の航空写真(図版1)で確認されているが、1次面で検出した礎石、礎石痕と既存建物とは一致しなかった。したがってS B01は既存建物の前身と思われる。時期は19世紀前半～20世紀初頭のうちに収まると考えられ、Ⅲ-3b～Ⅳ期に属する。

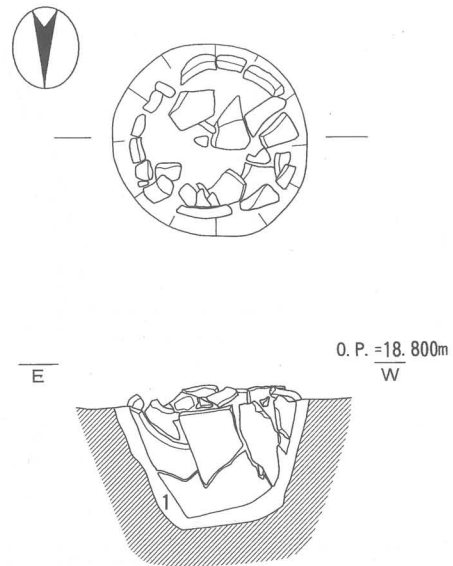
S B02

S B02は、調査区西側、S B01の西側に位置する(第68図・図版20)。南側を間口とする礎石建物である。建物の大きさは桁行2間以上(東西3.54m以上)、梁行5間半(南北10.8m)を測る。建物西側奥に井戸S E02があることから考えると、西側が通り庭だったと想定される。この建物の礎石根石遺構と考えられるS K94からは18世紀後半～19世紀初頭の遺物が出土しており、19世紀初頭以降に建築されたと考えられる。また、既存建物と思われる建物が、昭和二十三年と三十六年の航空写真で確認されているが、既存建物に1次面で検出し



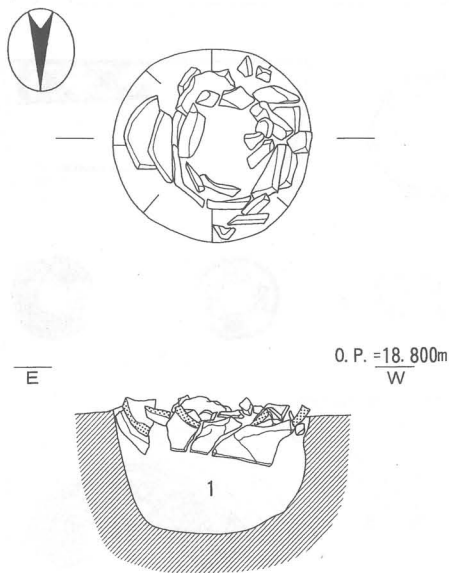
1. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y 4 / 2

第70図 S I 02遺構図



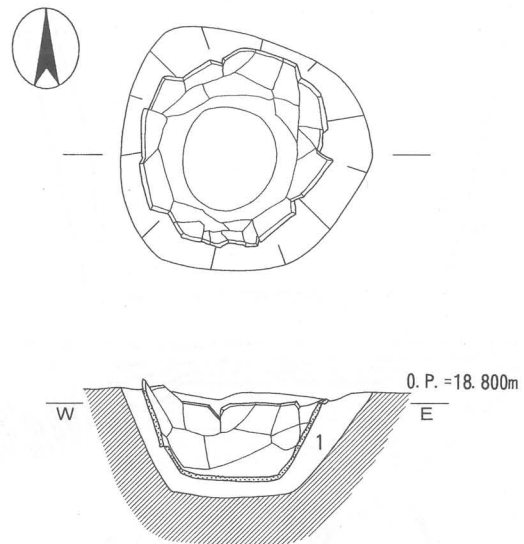
1. 褐色粘質土層 10 Y R 4 / 6
(炭化物・焼土含む)

第71図 S I 04遺構図



1. オリーブ黒色粘質土層 5 Y 3 / 1
(炭化物含む)

第72図 S I 05遺構図



1. 灰白色砂質土層 10 Y R 8 / 1

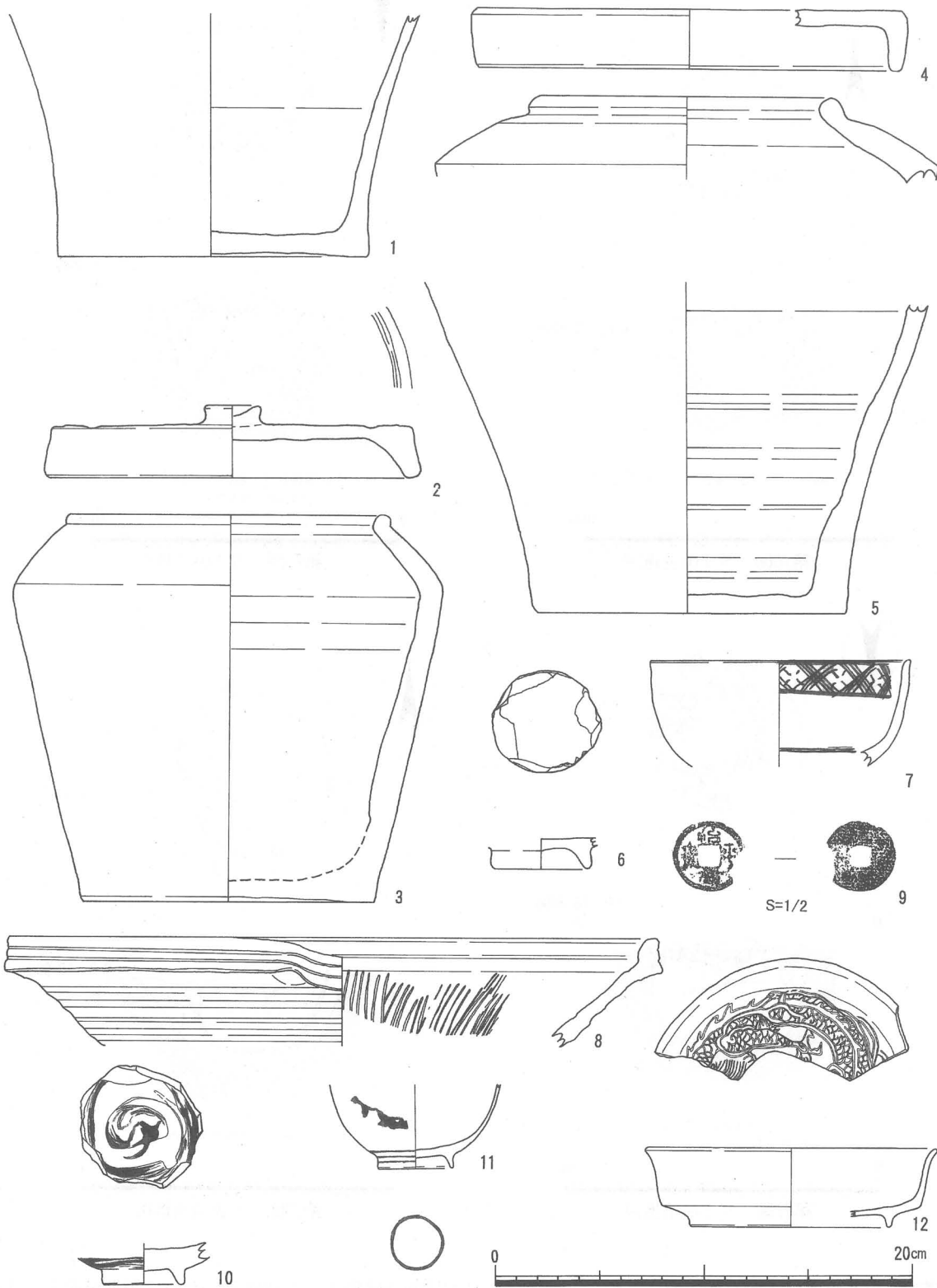
第73図 S W 01遺構図

た礎石、礎石痕とはあわなかった。このことから、S B 02は既存建物より1時期前のもので20世紀前半にはなくなっていることがわかった。Ⅲ-3～Ⅳ期に属する。

S S 04

S S 04は調査区南東部に位置する(表1・図版20)。平面形は楕円形を呈し、長径0.56m、短径0.49mを測る。第1次面のS B 01に伴う礎石の根石である。花崗岩製一石五輪塔を使用している。

第69図-1は、花崗岩製一石五輪塔である。高さ(残)39.6cm、最大幅19.7cmを測る。地水火輪部が残存



第74図 S I 02 (1)・S I 04 (2・3)・S I 05 (4・5)・S W 01 (6・7)・
S D 03 (8~10)・S X 68 (11・12) 出土遺物

する。火輪部は笠石上部が欠損している。地輪部と火輪部には鉄サビが付着している。一石五輪塔は16世紀後半以降～17世紀代までのものであり、転用されたと考えられる。

19世紀前半～20世紀初頭の遺構と考えられ、Ⅲ-3 b～Ⅳ期に属する。

S E 02

S E 02は、西壁北部に位置する（表1・図版20）。平面形は円形を呈し、西側に延びる。長さ1.4m、深さ0.68m以上を測る。素掘りの井戸である。湧水層は確認できなかった。川口宏海氏の分類A I a型式に属する。南側に隣接しているS B 02に関係するものと思われる。

第69図-2は、肥前磁器染付蓋である。口径（推）9.8cm、器高（残）3.3cm、つまみ径4.1cmを測る。外面に3つ、内面中央に1つかぶら文が描かれている。つまみ端部は無釉である。大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。3は、丹波焼徳利である。器高（残）3.7cm、底径（推）7.4cmを測る。外面全体に鉄釉が掛けられ、外面底部はさらに灰釉が掛けられている。内面は無釉である。この他に、肥前磁器染付筒型碗、瀬戸・美濃焼灰釉瘦瓶、京・伊賀・信楽焼鉄釉鍋などが出土している。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀初頭の遺構と考えられ、Ⅲ-3 a期に属する。

S I 02

S I 02は、調査区中央やや北よりに位置する（第70図・図版20）。火消壺を胞衣容器に使用した、胞衣壺遺構である。掘形の平面形は円形を呈し、掘形の直径0.26m、深さ0.14mを測る。S B 01の北端で庭との境目にあたりと考えられる場所に位置している。

第74図-1は、土師質土器火消壺である。器高（残）11.8cm、底径15cmを測る。外面表面は摩耗が激しいため調整は不明である。体部と底部の接合部は、ヘラケズリ調整が施されている。内面には回転ナデ調整を施している。底部は未調整である。川口宏海氏の編年（川口1995年）Ⅱ-2型式に属する。

出土遺物は、19世紀前半～後半で、Ⅲ-3 b期の遺構である。

S I 04

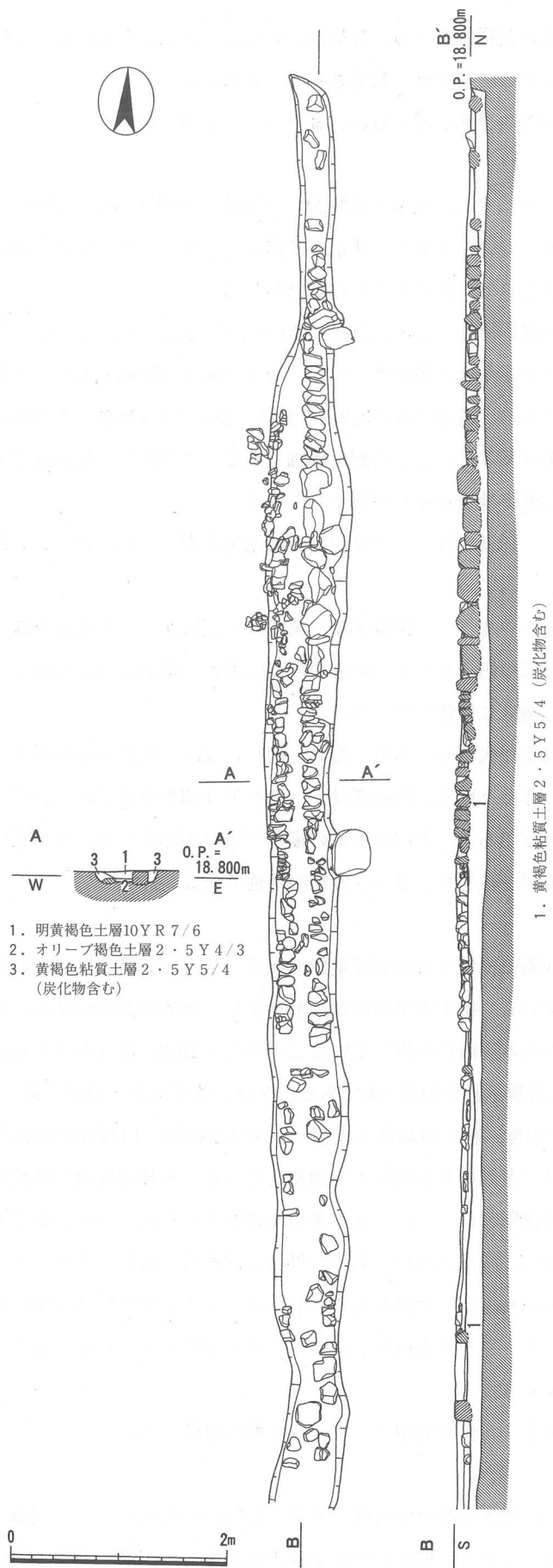
S I 04は調査区南西部隅に位置する胞衣壺遺構である（第71図・図版21）。この遺構もS I 02と同様に火消壺を胞衣容器に使用している。掘形の平面形は円形を呈し、掘形の直径0.26m、深さ0.17mを測る。S B 02の床下にあたりと考えられる場所に位置していることからS B 02に伴うものと思われる。

第74図-2・3は、土師質土器火消壺・蓋である。2は、蓋である。口径（推）17.8cm、器高3.5cm、つまみ径2.7cmを測る。粘土円盤に粘土紐輪積み成形し、天井部内面と口縁部内外面を回転ナデ調整している。その後、つまみ部をハリツケし周りを回転ナデ調整している。天井部外面には離れ砂が付着し、板目痕がみられる。さらに天井部外面周縁にヘラによる一条の沈線がみられる。3は、壺である。口径（推）15cm、器高18.8cm、底径14cmを測る。ロクロ成形である。外面は回転台を利用し丁寧にヨコナデ調整を施し、内面は外面体部に比べてやや強い回転ナデ調整が施されている。外面体部と底部の境に接合部がみられ、強いヘラケズリ調整が施されている。また外面肩部にはヘラミガキ調整がみられる。底部は未調整である。川口宏海氏の編年Ⅱ-1型式に属する。

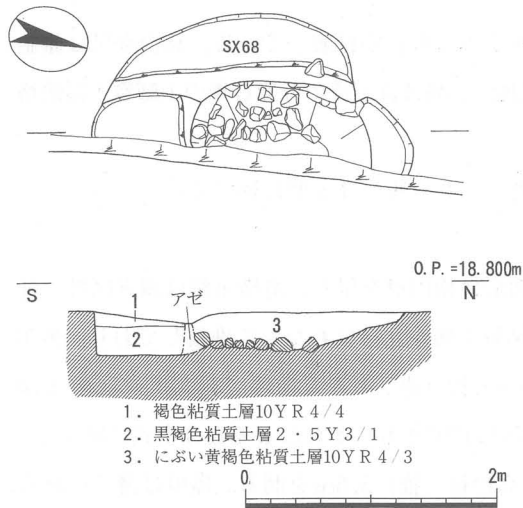
出土遺物は、18世紀後半～19世紀初頭で、Ⅲ-3 a期の遺構である。

S I 05

S I 05は調査区南西に位置する胞衣壺遺構である（第72図・図版21）。この遺構もS I 02・S I 04と同様に火消壺を胞衣容器に使用している。掘形の平面形は円形を呈し、掘形の直径0.26m、深さ0.18mを測る。この遺構もS B 02の床下にあたりと考えられる場所に位置していることからS B 02に伴うものと思われる。



第75図 S D03遺構図



第76図 SX68遺構図

SW01

SW01は、調査区中央やや北よりに位置する（第73図・図版21）。埋甕遺構である。掘形の平面形は円形を呈し、直径0.66m、深さ0.28mを測る。埋甕内側には白色物が付着しており、便槽用として使用されていたものと思われる。またSW01の北側で桶SU406を検出した（第3次面）。ここは母屋建物の裏端に位置し、引き続きこの位置に便槽が設置されたと思われる。SW01が設置されたのが、甕の年代観とSU406出土遺物から20世紀初頭以降と考えられ、SB01に伴う便槽と考えられる。

第74図-6は、掘形から出土した唐津系陶器呉器手碗である。器高1.5cm、高台径（推）4.7cmを測る。高台暈付は露胎である。面子に使用されていたと思われる。大橋康二氏の編年Ⅲ期に属する。7は、肥前磁器青磁染付碗である。口径（推）12.6cm、器高（残）5.1cmを測る。内面口縁部に四方襷文が描かれている。大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。図版25-5は、大谷焼甕である。底径30cm、器高（残）26.3cmを測る。出土遺物のうち、掘形からは17世紀後半～18世紀後半の遺物が出土しているが、大谷焼甕は19世紀末～20世紀初頭のものである。Ⅳ期に属する。

SD03

SD03は、調査区中央で南北に延びる屋敷境の石積溝である（第75図・図版21）。検出長13.4m、幅0.7m、深さ0.2mを測る。また、この溝の続きが北側のB-17-3区SD08（未報告）の西側で検出されている。溝の断面形はU字形を呈し、埋土は3層である。溝の左右に0.05～0.3m程度の花崗岩を積んでいる。掘形から、18世紀後半～19世紀初頭の遺物が出土しており、この頃に構築されたと思われる。また、溝内埋土からは、19世紀以降の遺物が出土していないため、19世紀初頭には埋没したと考えられ、石積溝としては短期間しか使用されなかったと思われる。またSD03を挟んで東側、SB01の礎石の一部にSD03の石が使用されていることから建物を建てる際には溝は埋没していたと考えられる。

第74図-8は、丹波焼播鉢である。口径（推）31cm、器高（残）5.2cmを測る。胎土に0.1～0.2cm位の礫を含む。粘土紐巻き上げ成形で、外面はロクロナデによる凸凹が目立つ。内面体部には7本1単位のクシ描の播目を設けている。大平茂氏の分類Ⅷ型式に属する。9は、治平元寶（篆書）である。外径2.3cm、内径2cm、銭厚0.1cm、重さ2.2gを測る。治平元寶は中国銭で、北宋の英宗が即位して元号を治平に改元した後、1064年に鑄造したものである。これは中国銭をコピーした模鑄銭と思われる。背文は無文である。10は、唐津系陶器刷毛目文碗である。器高（残）2cm、高台径（推）3.9cmを測る。内面見込みを中心に体部全体に白

第74図-4・5は、土師質土器火消壺・蓋である。4は、蓋である。口径（推）19.4cm、器高2.9cmを測る。粘土円盤に粘土紐輪積み成形し、天井部内面と口縁部内外面を回転ナデ調整している。つまみ部は欠損している。5は、壺である。口径（推）13.8cm、器高（口縁部）4.0cm、底径14.7cmを測る。外面は回転台を利用し丁寧にヨコナデ調整が施され、内面は粗い回転ナデ調整が施されている。体部と底部の接合部は、強いヘラケズリ調整が施されている。底部は未調整で、離れ砂痕がみられる。川口宏海氏の編年Ⅱ-2型式に属する。

出土遺物は、19世紀前半～19世紀後半で、Ⅲ-3b期の遺構である。

化粧土による刷毛目文を施している。見込みには蛇ノ目釉ハギがみられ砂が付着している。高台畳付は露胎で、離れ砂が付着する。大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。その他に、難波洋三氏の分類G類の土師質土器焙烙などが出土している。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀初頭の遺構と考えられ、Ⅲ—3 a 期に属する。

S X 68

S X 68は調査区東壁中央に位置する（第76図・図版21）。平面形は楕円形を呈し、遺構東側は調査区外に延びる。全長2 m、幅（残）1.1 m、深さ0.35 mを測る。黒褐色粘質土層が20 cmにわたって堆積しており（第76図第2層）、池ではないかと考えられる。またS X 68からS X 70へと掘り直された可能性がある。このような池状遺構は他の宮ノ前地区の調査でも確認され分類されている（川口1997年 b）。それによると3型式に属する。

第74図-11は、肥前磁器染付碗である。器高（残）4.1 cm、高台径（推）3.6 cmを測る。器壁は薄く、高台部のづくりも薄い。外面には松竹文を描き、高台畳付は露胎である。大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。12は、肥前白磁皿である。口径（推）14.1 cm、器高（残）3.8 cm、高台径（推）9.8 cmを測る。器壁が非常に薄い腰折皿で、内面に陽刻龍文がみられる。高台畳付は露胎である。

出土遺物を概観すると、17世紀後半～末の遺構と考えられ、Ⅲ—2 a 期に属する。

6. まとめ

B-14区では、20世紀頃までの遺構を検出することができた。時代を追ってまとめると、第4次面では調査区中央に須恵器片を含む古い時期の溝を確認できた。この溝は埋土の堆積状況から16世紀後半頃埋めもどされており、その直後に掘立柱建物が建てられていることがわかった。

その後、17世紀代には、規模は分からないが石臼を根石にもつような掘立柱建物が建てられる。

17世紀後半には、地口から12.1 mのところまで三和土が敷かれ礎石建物が建てられるが、その後ここでも、他の地区でもみられた享保十四年（1729）の火災痕がみられ、大火災だったことが伺える。また享保十四年（1729）よりも古い元禄年間の火災と考えられる火災痕も調査区西側で確認できた。これらの火災に遭った三和土の検出状況から、調査区東側と西側では様相が異なり、東側と西側は別の屋敷地であることがわかった。この様相差は、以後現代まで続く。

享保十四年の火災後は、東側は桁行3.75間以上、梁行6間以上の礎石建物が建てられる。西側も、南側地口から北へ7.5 mの範囲で建物が建てられるが規模は分からなかった。

その後19世紀初頭以降には東側・西側とも建て替えられており、東側にはS D 03を埋めた後に、桁行3間以上、梁行6間の礎石建物S B 01が建てられる。その後、S B 01は昭和二十三年の航空写真（図版1）には既存建物が写っていることから、19世紀前半～20世紀初頭のうちには既存建物に建て替えられている。また、西側にも桁行2間以上、梁行5間半の礎石建物S B 02が建てられる。S B 02も昭和二十三年の航空写真には既存建物が写っていることから同様の変遷をしたと考えられる。

また、調査区南側の地口から13.5 mより北側は、時代を通して、井戸や廃棄土壌などが多く検出されていることから、裏庭的空間だったと思われる。

このように、古い時期からの土地利用の変遷を確認できたことは大きな成果であった。さらに、元禄年間（1699年・1702年）と享保十四年（1729）の北少路村の大火災痕を確認できたことで、郷町の火災の広がりを知ることができた。

第5節 第123次調査D-7区

D-7区は、猪名野神社に通じる参道沿いの東側に位置する。『天保十五年（1844）伊丹郷町分間絵図』（第141図）によると、「米屋町」にあたることが分かる。また、明治十九年（1886）に出された『伊丹酒造組合文書』の「酒造場絵図面届書写」（第109図）によると、石橋茂一氏がここで酒造業を営んでおり、石橋氏の酒蔵だったことが分かった。

1. 基本層序

遺構面は4面である。地山面はO.P.=+18.800m前後を測る。北壁を観察すると、地山直上に褐色粘質土層（第77図第59層、現地表面より0.8m下）、その上には、火災を受けた三和土層（第77図第58層、現地表面より0.78m下）が堆積していた。更に上層には、焼土層（第77図第57層、現地表面より0.65m下）が堆積し、その上に、黄褐色粘質土層の整地層（第77図第43層、現地表面より0.5m下）、その上層に、第1次面三和土層（第77図第2・24層、現地表面より0.2m下）が堆積していた。

2. 第4次面の遺構と遺物

第4次面は、重複しているため掘削できなかった本来3次面に属する遺構を多く検出した。

S E 505

S E 505は、調査区中程に位置する（第79図・図版28）。平面形は円形を呈し、直径0.9m、深さ4m以上を測る。素掘りの井戸であり、川口宏海氏の分類（川口1999年）A I a型式に属する。

第80図-1は、嬉野焼小碗である。高台径3.4cmを測る。器形は高台高が高く、高台と高台脇の境が明瞭である。また、高台内の削りは丁寧で、高台脇と同じ高さまで削られている。釉薬は内面から高台脇に銅緑釉が掛けられている。大橋康二氏の編年のⅢ期に属する（大橋1993年）。2は、肥前磁器染付仏飯具である。口径7.6cm、器高5cm、脚部径4.2cmを測る。器高は低くて、坏部が浅広いタイプである。底部の削り込みは浅く、外面脚部下方から脚部高台内にかけて無釉である。大橋康二氏の編年Ⅳ期に属するものである。3は、嬉野焼鉢である。口径20.5cm、器高7.1cm、高台径6.2cmを測る。器形は、体部の立ち上りが浅く、高台断面は箱型を呈する。また、高台内の削りは高台脇より深く削られており、見込みには蛇ノ目釉ハギがみられる。釉調はdull yellow (2.5Y 6/3)を呈し、内面から外面高台脇まで施している。大橋康二氏の編年Ⅳ期に属するものである。

出土遺物を概観すると17世紀後半～18世紀初頭と考えられる。Ⅲ-2 a期に属する。

S E 503

S E 503は、東壁沿いの南側に位置する（第81図・図版28）。掘形の平面形は円形を呈し、直径1.3m、深さ2.2m以上を測る。S E 503は、井側上部に粘土を約15cmの幅で円形に巡らし、瓦・礫を交互に埋め込んでおり、川口宏海氏の分類A I b型式に属する。この直上には屋敷境背割石積溝（S D 07）を検出しており、この溝を造る際埋め戻されたと思われる。

第80図-4は、京焼系陶器筒型碗である。口径7.5cm、器高5.7cm、高台径4.7cmを測る。内面から外面体部下部まで灰釉が施されており、高台は無釉である。外面体部の1ヵ所に鉄絵で笹文を描いている。そのほかには、難波洋三氏の分類のE類に属する土師質土器焙烙（難波1992年）や大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する肥前磁器染付碗が出土している。

出土遺物を概観すると、大橋康二氏の編年Ⅴ期に属する肥前磁器（広東型碗・端反碗）が出土していないことから、18世紀中頃～18世紀後半でも早い段階と思われる。Ⅲ－2 b 期に属する。

S K 762

S K 762は、調査区中程に位置する（表1）。平面形は楕円形を呈し、長さ1.38m、幅0.54m、深さ0.41mを測る。出土遺物の年代観から、本来3次面に属すると考えられる。

第80図－5は、肥前磁器染付碗である。口径10cm、器高8.2cm、高台径6.7cmを測る。器壁は薄くて、体部が真直ぐに立ち上る筒型碗である。また、高台断面はU字型を呈し、高台畳付は露胎である。外面体部には楼閣山水文が描かれており、高台内には1重圈線内に「大明」の銘がみられる。呉須の発色も良好である。大橋康二氏の編年Ⅲ期に属する。6は、土師質土器湊焼蓋である。口径23cmを測る。胎土は、1mm程度の礫を多く含み、色調はlight yellow orange (7.5Y R 8/4) を呈する。成形は、円盤状の粘土板に粘土紐を巻きつけてこれを天井部とし、外面は体部と天井部の接合部を回転ナデしている。また、内面は不定方向ではあるが丁寧にナデ調整を施している。7は土師質土器焙烙である。口径23.4cmを測る。胎土の色調は、にぶい黄橙色 (10Y R 7/3) を呈する。外面は、体部下部に右上がりの平行叩き痕がみられ、口縁部上部には荒いヨコナデ調整を施す。内面口縁部はヨコナデ調整、内面底部にはナデ調整が施されている。また、外面全体に煤が付着している。難波洋三氏の分類A類に属する。

出土遺物を概観すると、17世紀前半～中頃と考えられる。Ⅲ－1 b 期に属する。

S X 617・618・758

S X 758は、調査区中央に位置する（第82図・図版28）。平面形は長楕円形を呈し、長径3.75m、短径1.25m、深さ0.95mを測る。遺構内中央には、長径1.3m、短径1.2m、深さ0.45mの楕円形の落ち込みがあり、酒搾り用船場遺構と考えられる。遺構内には、男柱を支える横木や礎石が残っていた。S X 758の直上に煉瓦造りの酒搾り遺構（S X 17）が検出されており、その南に接して垂壺遺構が検出されている。この垂壺遺構の掘形から出土した遺物の年代観や検出した位置などから、S X 758にも用いられていたものと考えられる。

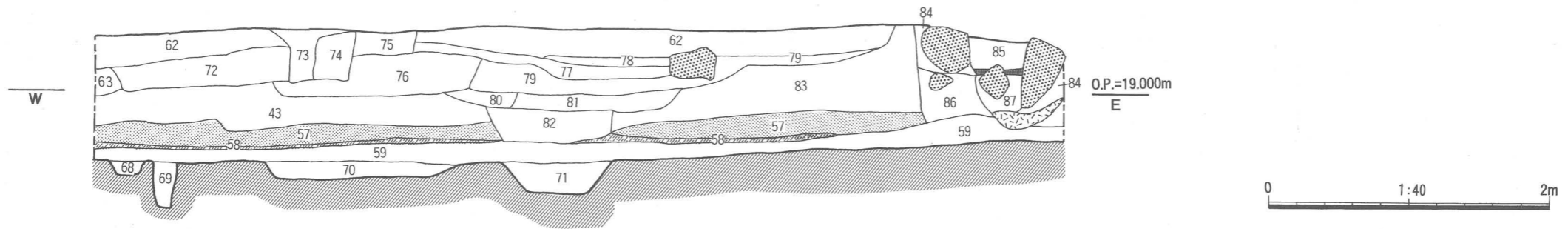
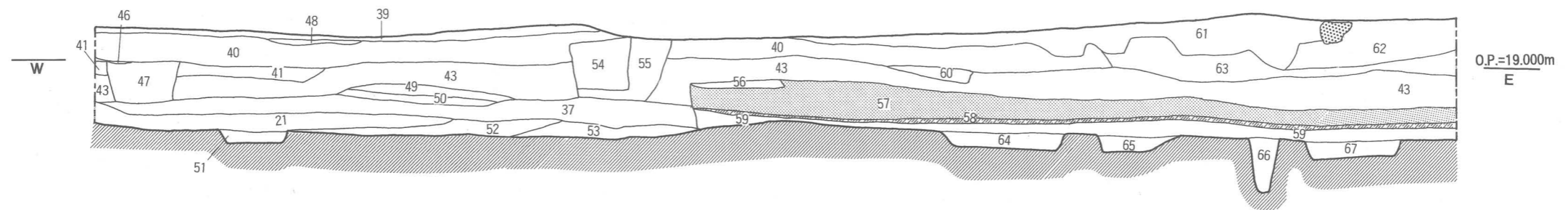
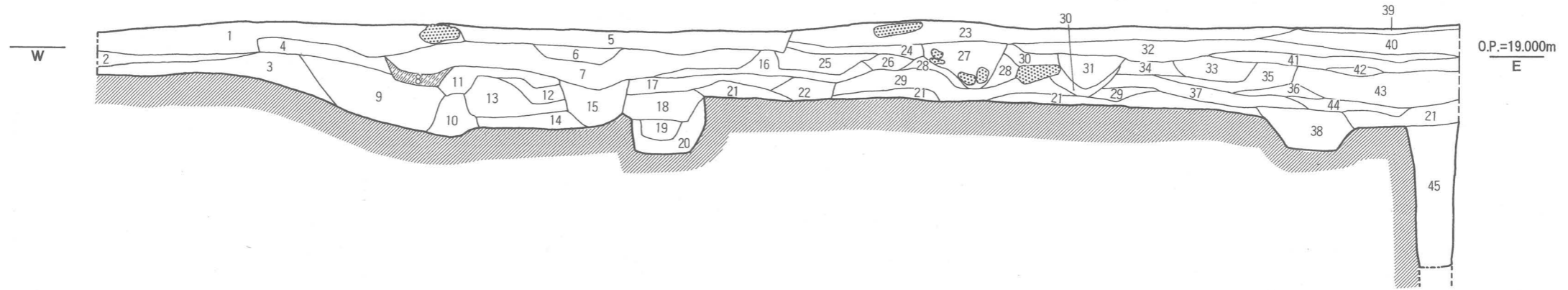
さらに、第3次面で検出したS X 617・618は酒搾り用船場遺構で、遺構の年代観からS X 758に伴うものと考えられる。S X 617の平面形は長楕円形を呈し、長径3.25m、短径1.55m、深さ0.9mを測る。遺構内中央には、直径1m、深さ0.75mの楕円形の落ち込みがあり、男柱の掘形跡と考えられる。遺構内には男柱を支える横木や礎石が残っていた。S X 618の平面形は円形を呈し、直径1.4m、深さ0.75mを測る。遺構内には、垂壺を固定するための漆喰がみられた。小長谷正治・川口宏海氏の分類（小長谷・川口1996年）の2類（一槽さし連基型）に属する。

第83図－1は男柱の横木である。残存長125.8cm、幅14.6cmを測る。木皮を剥がしただけのものである。2・3も1と同様で、男柱の横木である。2本に分かれているが本来は同じものと思われる。これも1と同じで木皮を剥がしただけのものである。2・3の大きさは、2は残存長99.8cm、幅4.8cm、3は残存長64cm、幅8.2cmを測る。

S X 617・618・758の酒搾り用船場遺構の造られた年代は、掘形から出土した遺物（大橋康二氏の編年Ⅳ・Ⅴ期に属する肥前磁器染付碗や丹波焼甕）から、18世紀後半～19世紀初頭と思われる。このことから、第1次面で検出したS B 01（酒蔵）に伴うものと思われる。廃絶年代については、煉瓦造りの搾り場に造り替えられるまでと思われる。よって、Ⅲ－3 a 期～Ⅳ期に属する。

S X 746

S X 746は、調査区中程に位置する（第84図）。長楕円形を呈し、長径3.4m、短径1.5m、深さ1.78mを測



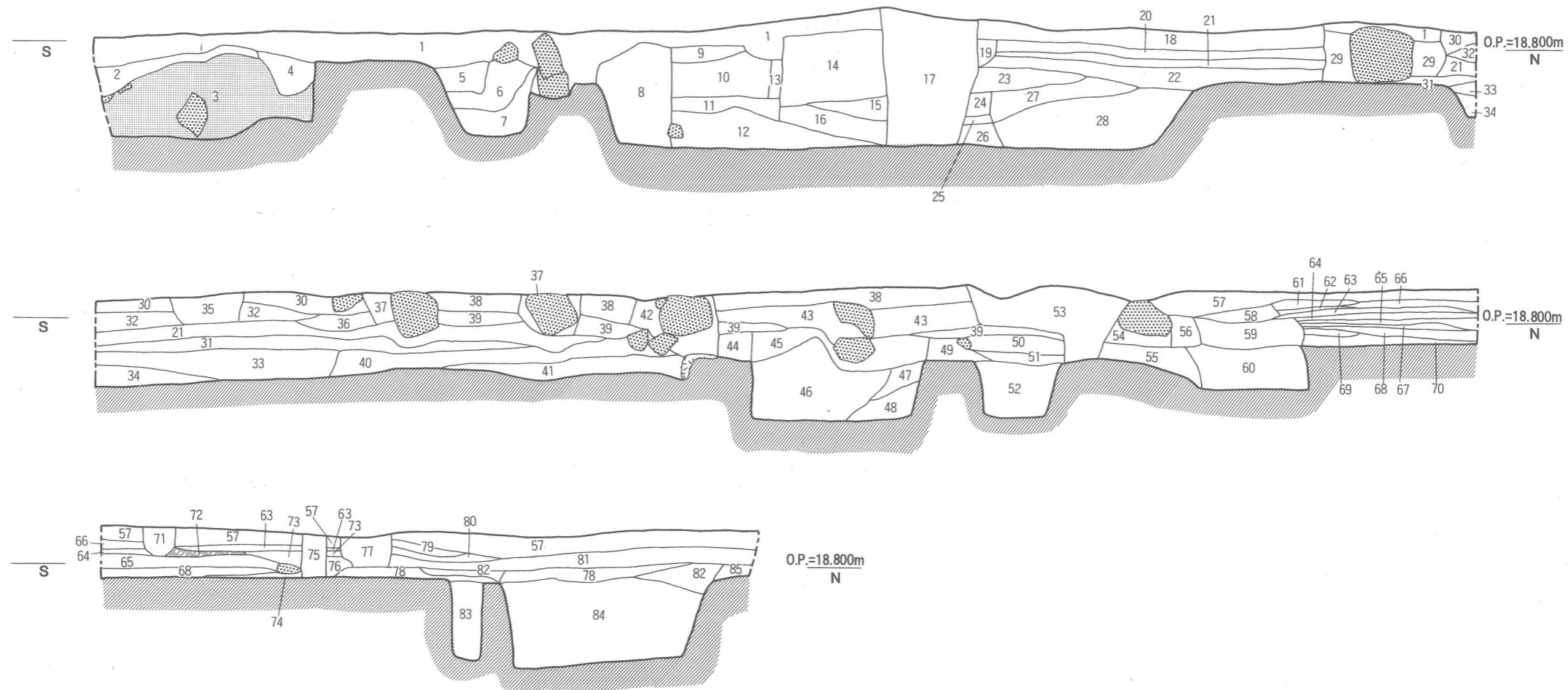
1. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4 / 6
2. 明褐色粘質土層 2・5 Y 5 / 6
(第1次面三和土層)
3. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 6 / 8
4. 明黄褐色粘質土層 10 Y R 6 / 8
5. におい黄褐色粘質土層 2・5 Y 6 / 3
6. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 5 / 4
7. 褐色粘質土層 10 Y R 4 / 4
8. 黒褐色炭化物層 2・5 Y 3 / 2
9. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4 / 3
10. 黄褐色粘質土層 10 Y R 5 / 8
11. 明黄褐色粘質土層 10 Y R 6 / 6
12. 明黄褐色粘質土層 10 Y R 6 / 8
13. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y 5 / 2
14. 褐色粘質土層 10 Y R 4 / 6
15. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y 4 / 2
16. 褐色粘質土層 7・5 Y R 4 / 6
17. 黄褐色粘質土層 10 Y R 5 / 6
18. 灰黄褐色粘質土層 10 Y R 5 / 2
19. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 5 / 3
20. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5 / 4
21. 黒褐色粘質土層 2・5 Y 3 / 2
22. 攪乱
23. 黄褐色粘質土層 10 Y R 5 / 8
(第1次面三和土層)

25. におい黄色粘質土層 2・5 Y 6 / 4
26. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5 / 6
27. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5 / 4
28. 褐色粘質土層 7・5 Y R 4 / 4
29. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y 4 / 2
30. 黄褐色粘質土層 10 Y R 5 / 6
31. におい黄色粘質土層 2・5 Y 6 / 4
(遺物多量に含む)
32. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4 / 3
(5 cm以下の礫・遺物多量に含む)
33. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y 6 / 6
34. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5 / 6
35. におい黄色粘質土層 2・5 Y 6 / 4
36. 明黄褐色粘質土層 10 Y R 6 / 8
37. 褐色粘質土層 10 Y R 4 / 4
38. 黒褐色粘質土層 10 Y R 3 / 2
39. 表土
40. 褐色粘質土層 10 Y R 4 / 6
41. におい黄色粘質土層 2・5 Y 6 / 3
42. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y 6 / 6
43. 黄褐色粘質土層 10 Y R 5 / 6
44. 浅黄色粘質土層 2・5 Y 7 / 4
45. 黄褐色粘質土層 10 Y R 5 / 6
(8 cm以下の礫含む)
46. 黒褐色粘質土層 10 Y R 2 / 2

47. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 6 / 4
48. 灰黄色粘質土層 2・5 Y 7 / 2
49. におい黄色粘質土層 2・5 Y 6 / 4
50. 明黄褐色粘質土層 10 Y R 6 / 6
51. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4 / 3
52. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 5 / 3
53. 黄褐色粘質土層 10 Y R 5 / 6
54. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5 / 3
55. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y 4 / 2
56. におい黄褐色粘質土層 2・5 Y 5 / 3
57. 褐色粘質土層 10 Y R 4 / 4
58. 黒褐色三和土層 10 Y R 3 / 2
59. 褐色粘質土層 10 Y R 4 / 4
60. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 4 / 3
(炭化物・焼土含む)
61. 黒褐色粘質土層 2・5 Y 3 / 2
62. におい黄褐色粘質土層 2・5 Y 6 / 3
63. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5 / 4
64. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4 / 3
65. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5 / 3
66. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4 / 3
67. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 5 / 4
68. 明褐色粘質土層 7・5 Y R 5 / 6
69. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 5 / 3
70. 明黄褐色粘質土層 10 Y R 6 / 6

71. 灰黄褐色粘質土層 10 Y R 5 / 2
72. 灰黄褐色粘質土層 10 Y R 4 / 2
73. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 4 / 3
(遺物含む)
74. 灰黄褐色粘質土層 10 Y R 5 / 2
75. 攪乱
76. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 4 / 3
77. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y 4 / 2
78. 黄褐色砂礫層 2・5 Y 5 / 3
79. 黒褐色粘質土層 2・5 Y 3 / 1
80. 明黄褐色土層 10 Y R 6 / 6
81. 明黄褐色粘質土層 10 Y R 6 / 8
82. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 5 / 4
83. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5 / 3
84. 暗褐色粘質土層 7・5 Y R 3 / 4
85. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5 / 3
86. 黒褐色粘質土層 10 Y R 2 / 2
87. 暗オリーブ色粘質土層 5 Y 4 / 3

第77図 D-7区北壁土層図



1. 表土
2. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/3
3. 赤褐色焼土層 5 Y 9/6
4. 灰黄褐色粘質土層 10 Y R 4/2
5. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/3
(遺物多量を含む)
6. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y 6/6
7. 灰黄色粘質土層 2・5 Y 6/2
8. 灰黄褐色粘質土層 10 Y R 3/2
(遺物多量を含む)
9. 黄褐色粘質土 2・5 Y 5/3
10. 灰黄色粘質土層 2・5 Y 6/2
11. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y 5/2
12. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 5/4
13. 灰黄褐色粘質土層 10 Y R 5/2
14. 暗オリーブ色粘質土層 5 Y 4/4
15. 灰オリーブ色粘質土層 5 Y 5/2
16. 黄褐色粘質土 2・5 Y 5/3
17. 攪乱
18. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 5/4
19. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 5/3
20. 黄色粘質土層 2・5 Y 6/8
21. 灰オリーブ色粘質土層 5 Y 6/2
(第1次面三和土層)

22. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 6/4
23. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/3
24. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 5/4
25. 灰黄褐色粘質土層 10 Y R 4/2
26. 黄褐色粘質土層 10 Y R 5/8
27. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/3
28. 明黄褐色粘質土層 10 Y R 6/6
29. 明黄褐色粘質土層 10 Y R 6/8
30. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/3
31. 黄褐色粘質土層 10 Y R 5/8
32. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/3
33. 褐色粘質土層 10 Y R 4/4
34. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/4
35. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/4
36. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/4
37. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/4
38. 黄褐色粘質土層 10 Y R 5/6
39. 褐色粘質土層 10 Y R 4/6
40. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/6
41. 褐色粘質土層 7・5 Y R 4/6
42. 明褐色粘質土層 7・5 Y R 5/8
43. 褐色粘質土層 10 Y R 4/4
44. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/4
45. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/6


46. 褐色粘質土層 10 Y R 4/4
47. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/4
48. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 5/4
49. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 5/3
50. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/3
51. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/4
52. 黄灰色粘質土層 2・5 Y 6/1
53. 攪乱
54. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/4
55. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/4
56. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 5/4
57. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/6
58. 褐色粘質土層 7・5 Y R 4/6
59. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y 4/2
60. 灰白色粘質土層 7・5 Y 7/2
61. 浅黄色粘質土層 7・5 Y 7/3
62. 褐色粘質土層 10 Y R 4/6
63. 灰白色粘質土層 7・5 Y 7/2
(既存建物の三和土層)
64. 褐色粘質土層 10 Y R 4/6
65. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/6
66. におい黄色粘質土層 2・5 Y 6/4
67. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/4

68. 明黄褐色粘質土層 10 Y R 6/6
(第1次面三和土層)
69. 灰白色粘質土層 5 Y 7/2
(第1次面三和土層)
70. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 5/4
71. 攪乱
72. 黒褐色炭化物層 10 Y R 3/2
73. 黄褐色粘質土層 10 Y R 5/8
74. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/4
75. 攪乱
76. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/6
77. 攪乱
78. 褐色粘質土層 10 Y R 4/6
79. 明黄褐色粘質土層 7・5 Y R 5/8
80. 灰色砂質土層 7・5 Y 6/1
81. 明黄褐色粘質土層 7・5 Y 5/6
82. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/4
83. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/6
84. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 6/3
85. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 5/4



第78図 D-7区西壁土層図

る。S X746の中央には、直径0.45m、深さ0.45m位の楕円形の落ち込みがあり、これも酒搾り用船場遺構と考えられる。第1次面で検出したS X05の平面形は楕円形を呈し、S X746の南隣に接していることから、垂壺の掘形遺構と思われる。このことから、S X746とS X05が組み合わせると一槽さし単基型となると考えられ、小長谷正治・川口宏海氏の分類の1類に属する。また、S X746とS X05を検出した地点は、第1次面で検出したS B01（酒蔵）の北側の屋敷地内に位置することから、北側の屋敷地でも酒造業を営んでいたと考えられる。

第80図-8は、硯である。全長11.5cm、幅6.1cm、高さ1.1cmを測る。粘板岩製で、底部には刃物傷のようなものがみられる。9・10は、銅製品である。9は、器種不明である。器形は長方形を呈し、長辺7.4cm、短辺3.8cm、厚さ0.1cmを測る。中央には一辺1.5cmの正方形の孔が開けられ、上下の端に直径0.1mmの穿孔がみられる。機械などにつけるラベルと思われ、表面にみられる「」マークによって、住友系の会社の製品であることがわかった。10は、火箸である。長さ21.5cm、厚さ0.5cmを測る。これらの他には、瀬戸・美濃磁器染付蓋・大谷焼甕などが出土した。

出土遺物を概観すると、19世紀後半と考えられる。Ⅲ-3 b期に属する。

3. 第3次面の遺構と遺物

第3次面は、調査区全体で三和土は検出されなかった。しかし、猪名野神社参道から東へ10m付近に柱穴痕が集中していることから、掘立柱建物が存在していたと思われる。これらの年代であるが、掘形から出土した遺物の年代観から17世紀前半頃と考えられる。その他には、本来第2次面に伴うであろう酒搾り用船場遺構などを検出した。

S P 593

S P 593は、調査区東側中程に位置する（表1）。平面形は円形を呈し、直径0.18m、深さ0.2mを測る。

第85図は、木製品である。大きさは、長さ26.5cm、幅7.5cm、厚さ2.5cmを測る。形は舟形を呈し、中央には直径2.5cmの穿孔がみられる。材質は桧か？用途は不明である。

S E 500

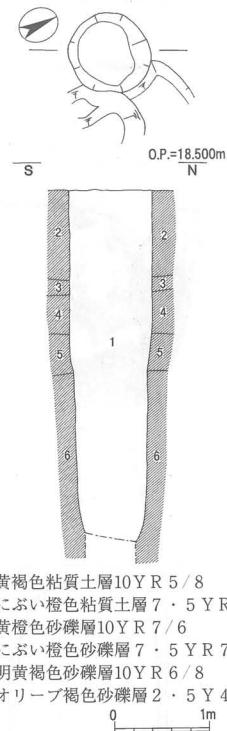
S E 500は、北壁沿いの中程に位置する（第86図・図版28）。平面形は円形を呈し、直径0.81m、深さ3.8m以上を測る。素掘りの井戸で、川口宏海氏の分類A I a型式に属する。

第88図-1は、肥前磁器染付碗である。口径11.6cmを測る。器壁は薄く、体部はやや湾曲しながら真直ぐ立上っている。外面には、折れ枝に菊文が描かれ、呉須の発色も良好である。大橋康二氏の編年Ⅱ-2期に属する。5は、中国製青花皿である。口径23.6cm、器高4.9cm、高台径12.1cmを測る。器壁は厚く、体部に描かれた呉須の発色も悪い。内面に描かれた文様は草花文である。畳付には砂が付着している。漳州窯の製品と思われる。

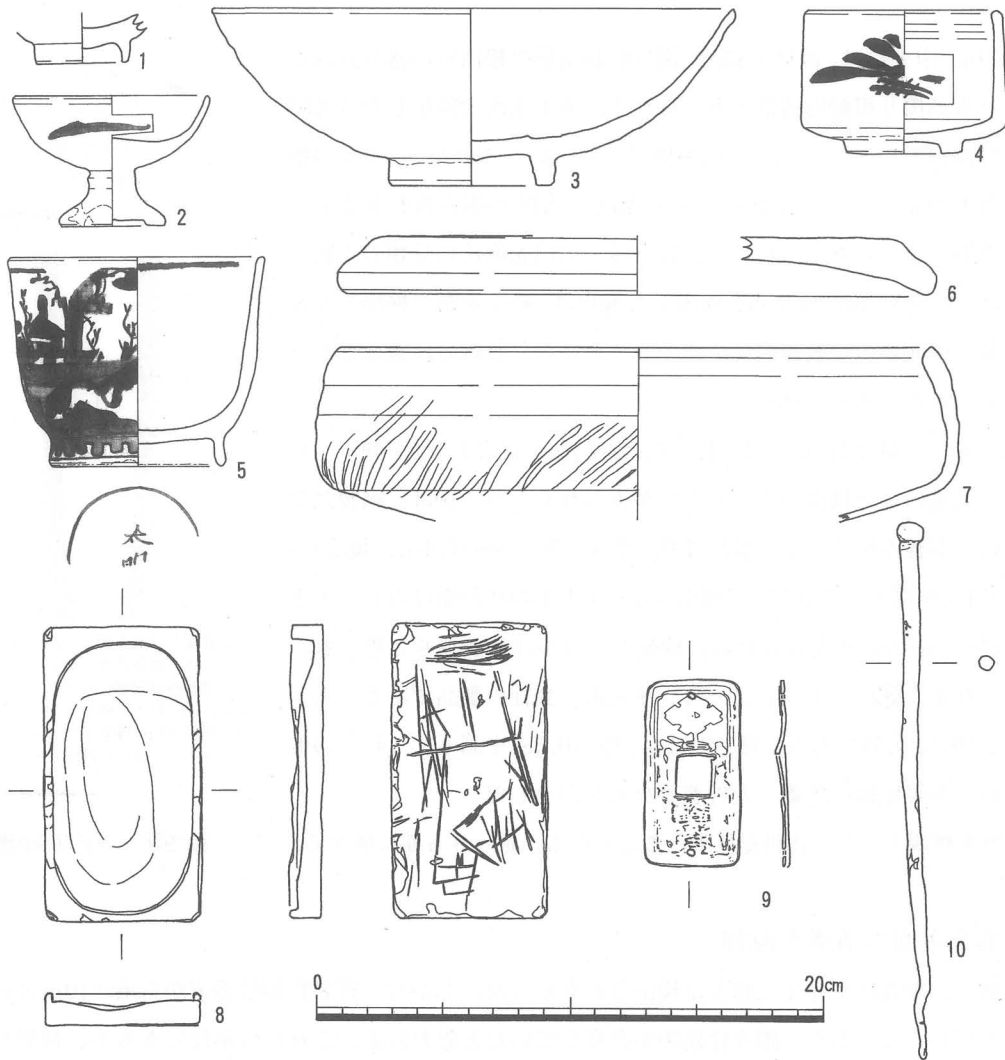
出土遺物を概観すると、17世紀中頃と考えられる。Ⅲ-1 b期に属する遺構である。

S E 502

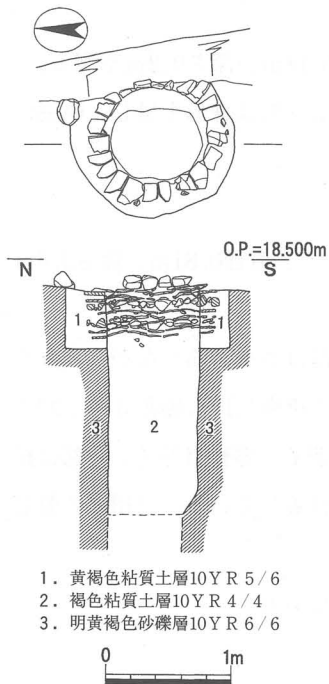
S E 502は、調査区中程の東側に位置する（第87図・図版28）。平面形は楕円形を呈し、長径1.1m、短径1



第79図 S E 505遺構図



第80図 SE505下層 (2)・SE505 (1・3)・SE503 (4)・
SK762 (5~7)・SX746 (8~10) 出土遺物



1. 黄褐色粘質土層10YR 5/6
2. 褐色粘質土層10YR 4/4
3. 明黄褐色砂礫層10YR 6/6

第81図 SE503遺構図

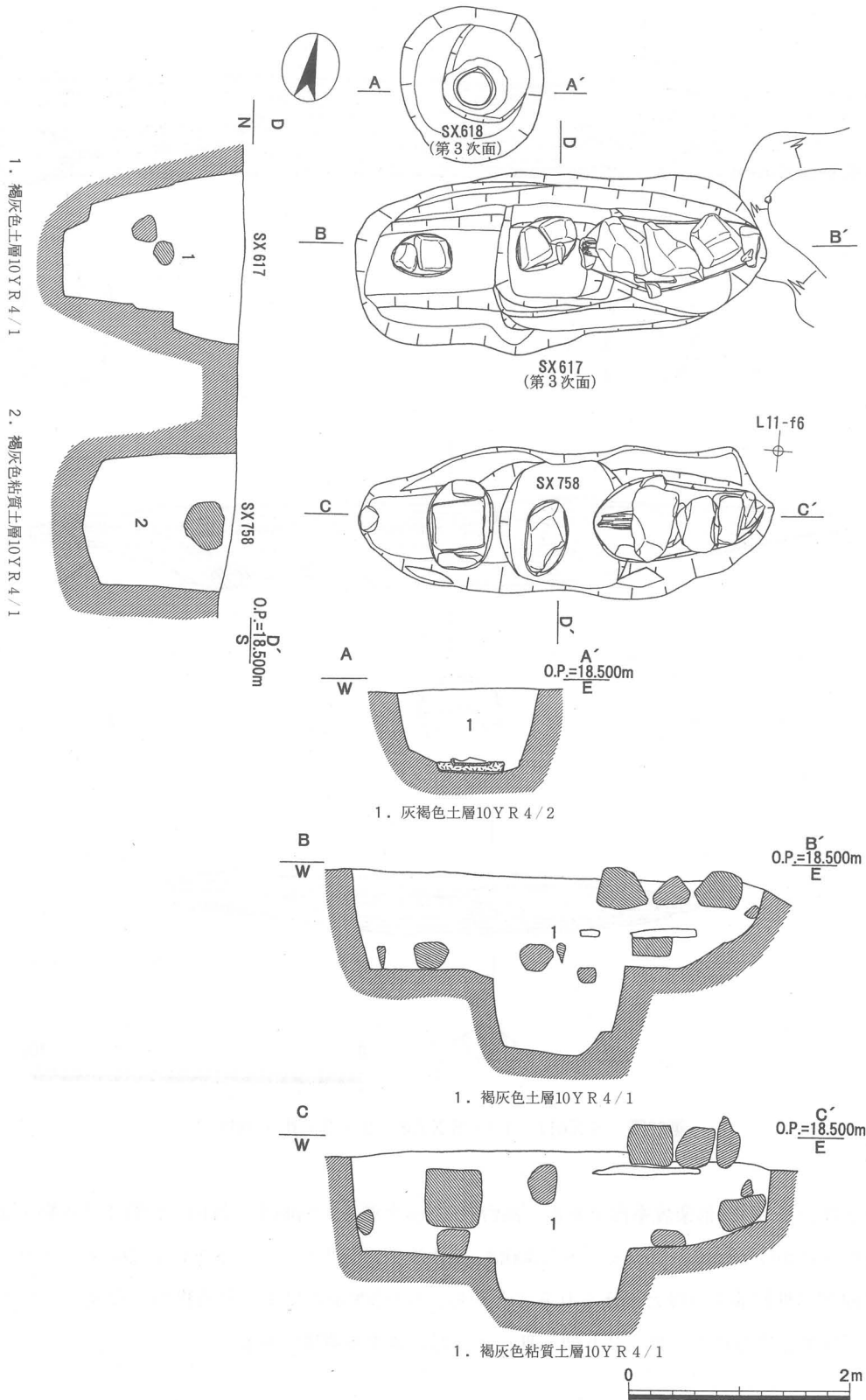
m、深さ3.15m以上を測る。素掘りの井戸で、川口宏海氏の分類A I a 型式に属する。

第88図-8は軒丸瓦である。全長27.8cm、丸瓦部幅14.3cm、玉縁部長4cm、丸瓦部高7.3cm、瓦当部径15.2cm、文様区径10.7cm、周縁部幅2.1cm、内区径7.6cm、瓦当部厚2.4cmを測る。瓦当部文様は内区に左巻き三ツ巴文、外区に連珠文を配する。連珠数は15個である。調整は、瓦当周縁部と瓦当部裏面は周縁に沿ってナデ調整を施している。丸瓦部は、凸面は縦方向にヘラミガキ調整、凹面はコビキB痕・布目痕とヘラ削り調整がみられる。瓦当面には雲母が付着している。その他には、大橋康二氏の編年IV期に属する肥前磁器染付梅樹文碗や丹波焼甕が出土している。

出土遺物を概観すると、18世紀後半と考えられる。III-2 b 期に属する遺構である。

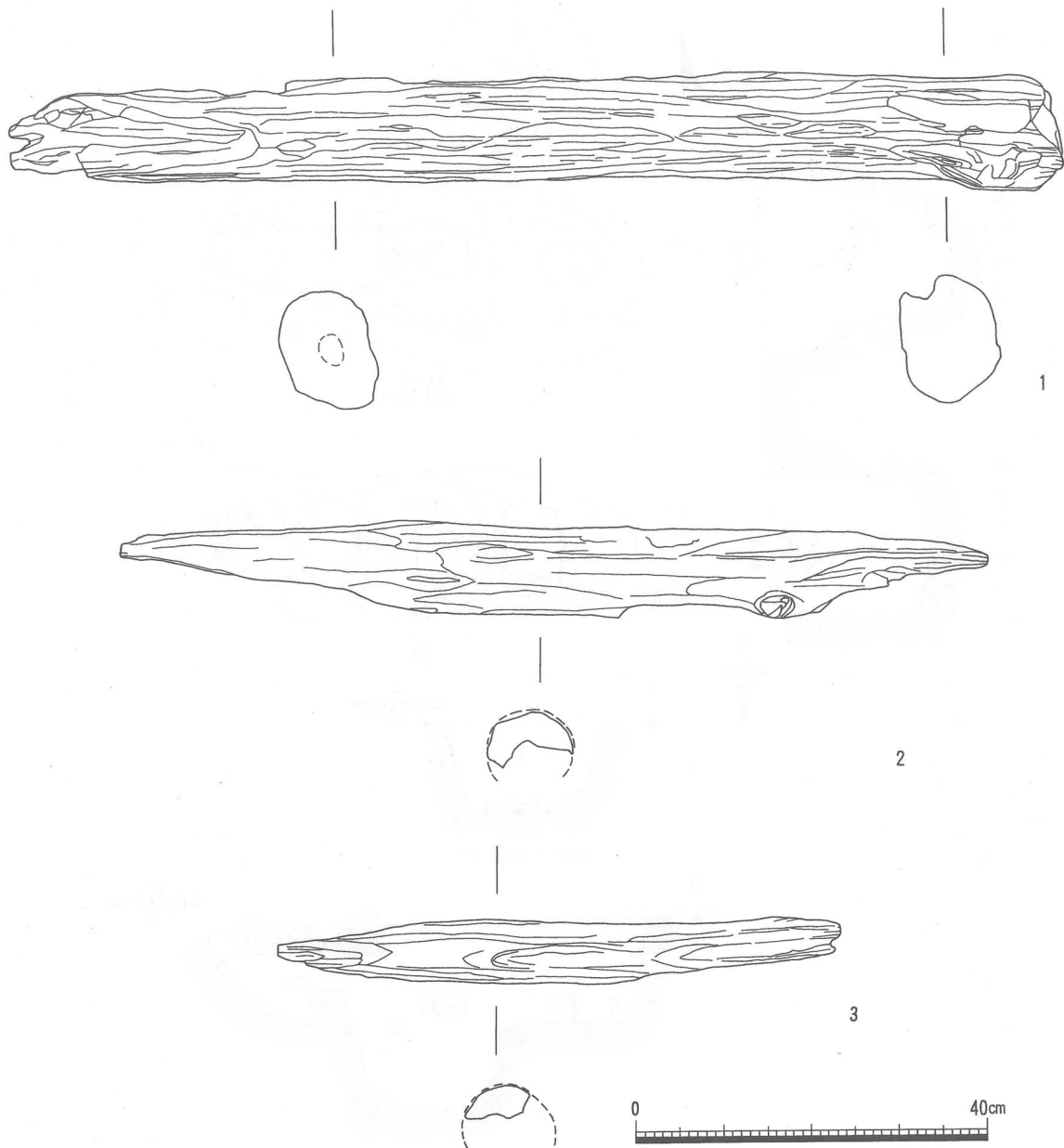
S U500

S U500は、調査区南東隅に位置する (第89図)。掘形の平面形は円形を呈



第82図 S X617・618・758遺構図

し、直径0.85m、深さ0.06mを測る。埋桶遺構であるが、桶は底部しか残っていなかった。この上面付近では、S U500と同時期の埋桶や埋甕・井戸などを多く検出している。これらの遺構は昆陽口通りに面した建物に伴うものと思われ、S U500も同様と考えられる。



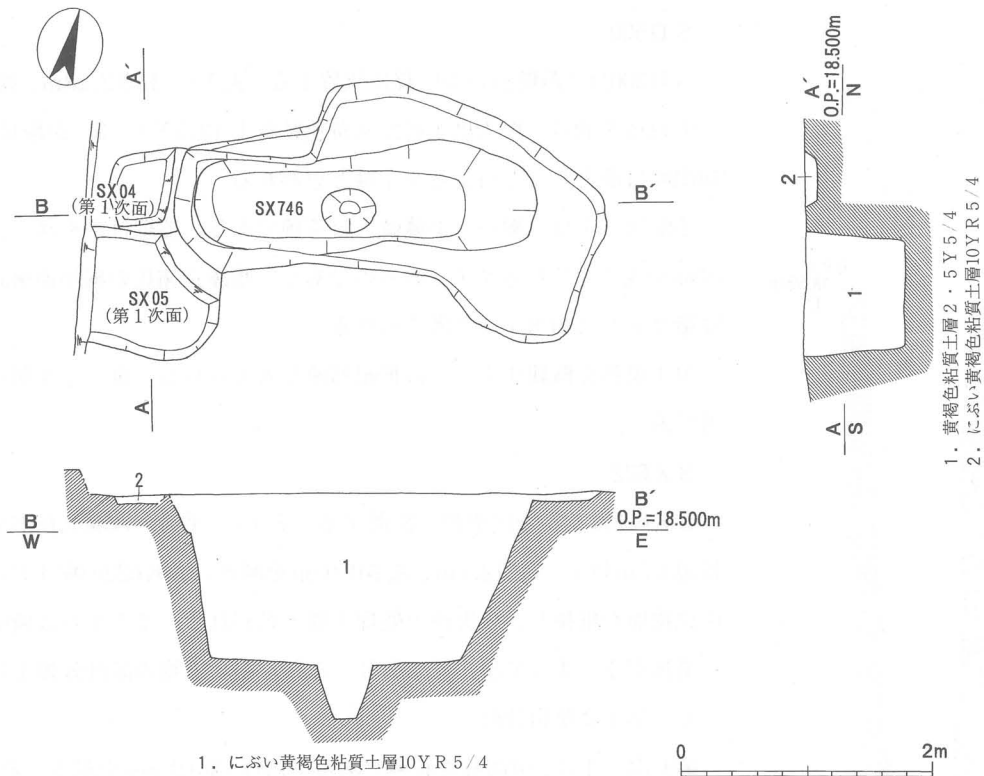
第83図 S X617 (1)・S X758 (2・3) 出土遺物

第88図-2は、京・伊賀・信楽焼系統碗である。高台径4.5cmを測る。内面から外面高台脇まで灰釉を施し、高台脇より高台内にかけては無釉である。S U500は、第1次面で検出しているS E06に切られており、S E06の遺構年代観が19世紀前半以降と考えられることから、S U500から出土した遺物の年代観と合わせて考えると、18世紀後半と思われる。Ⅲ-2 b期～Ⅲ-3 a期に属する遺構である。

S D504

S D504は、調査区中程の西側に位置し、南北に延びる溝である(第90図・図版28)。検出長7.8m以上、幅2m、深さ0.15mを測る。断面形は、両端が緩やかに傾斜している。埋土は1層で明黄褐色土(10YR 6/6)が堆積していた。

このような遺構としては、D-7区の北側に位置する第51次調査D-2区S D401・D-2-2区S D401・第63次調査D-4区S D301・第97次調査D-6区S D202などが検出されており、S D504はおそらくこれら



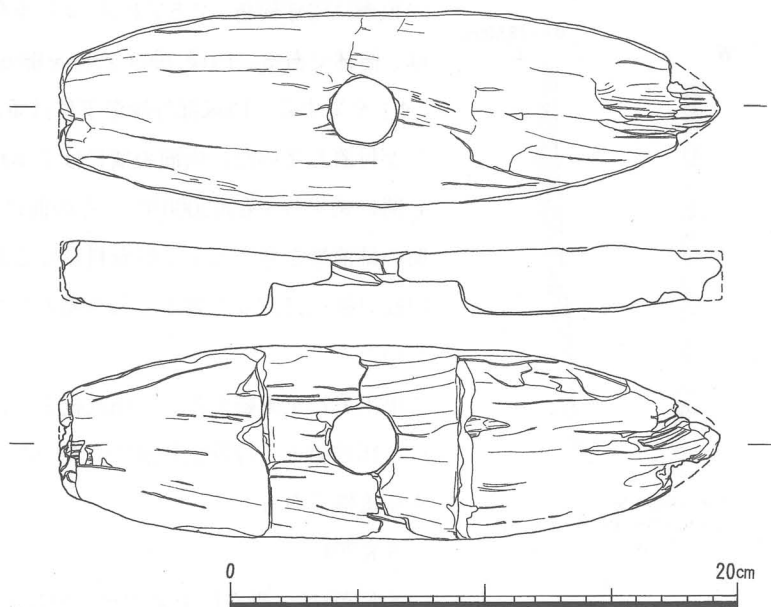
第84図 SX746・SX04（第1次面）・SX05（第1次面）遺構図

に類する溝と考えられる。流路は北→南である。

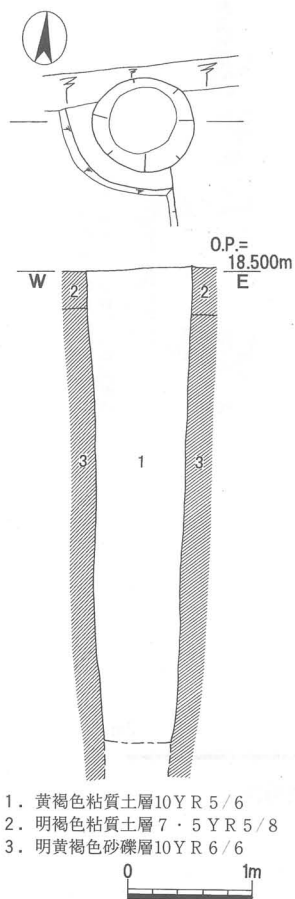
第88図-3は、瀬戸・美濃焼天目茶碗である。口径11.4cmを測る。体部の器壁は薄い。器形は口縁部が強くくびれるタイプのものである。藤澤良祐氏の編年大窯第4段階前期に属する（藤澤1999年）。4は、須恵器壺類底部である。底径9cmを測る。底部にはミズビキ成形がみられる。6は、志野焼である。非常に小片であるが、おそらく器種は向付と思われる。9は、軒丸瓦である。瓦当部径（推）13.6cm、文様区径（推）4.8cm、周縁部幅1.9cm、瓦当部厚3cmを測る。調整は、瓦当周縁部と瓦当部裏面部は周縁に沿ってナデ調整を施している。また、文様区の1カ所に、直径5mm、深さ8mmの穿孔がみられたが、意味は不明である。

写真1は動物遺体である。牛脚部の一部であると思われる。大阪府教育委員会の宮崎泰史氏のご教示による。出土状況から、どこかで解体されここに捨てられたと考えられる。

出土遺物を概観すると、須恵器などを除くと17世紀初頭と考えられる。Ⅲ-1a期に属する遺構である。

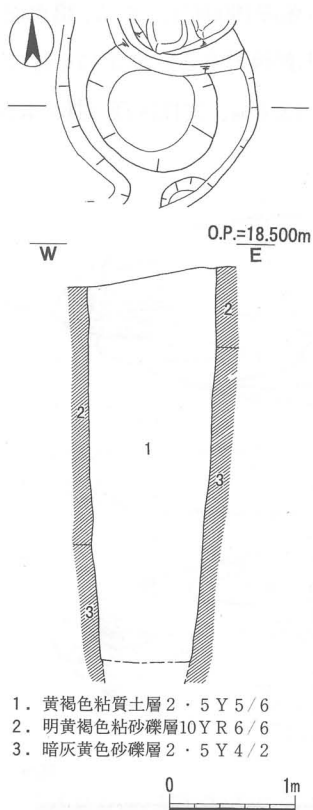


第85図 SP593出土遺物



1. 黄褐色粘質土層10YR 5/6
2. 明褐色粘質土層7・5YR 5/8
3. 明黄褐色砂礫層10YR 6/6

第86図 SE 500遺構図



1. 黄褐色粘質土層2・5Y 5/6
2. 明黄褐色粘砂礫層10YR 6/6
3. 暗灰黄色砂礫層2・5Y 4/2

第87図 SE 502遺構図

S D 500

S D 500は、西壁沿いの中程に位置する(表1)。長さ2.28m、幅0.4m、深さ0.11mを測る。埋土は1層で灰黄色粘質土(2.5Y 6/2)が堆積していた。検出時は溝としてとらえたが土壌と思われる。

第88図-7は、瀬戸・美濃焼天目茶碗である。器壁はやや薄く、器形は口縁部が浅くくびれるタイプのものである。藤澤良祐氏の編年連房式登窯第1段階2か3に相当すると考えられる。

出土遺物を概観すると、17世紀初頭と考えられる。Ⅲ-1 a期に属する遺構である。

S K 622

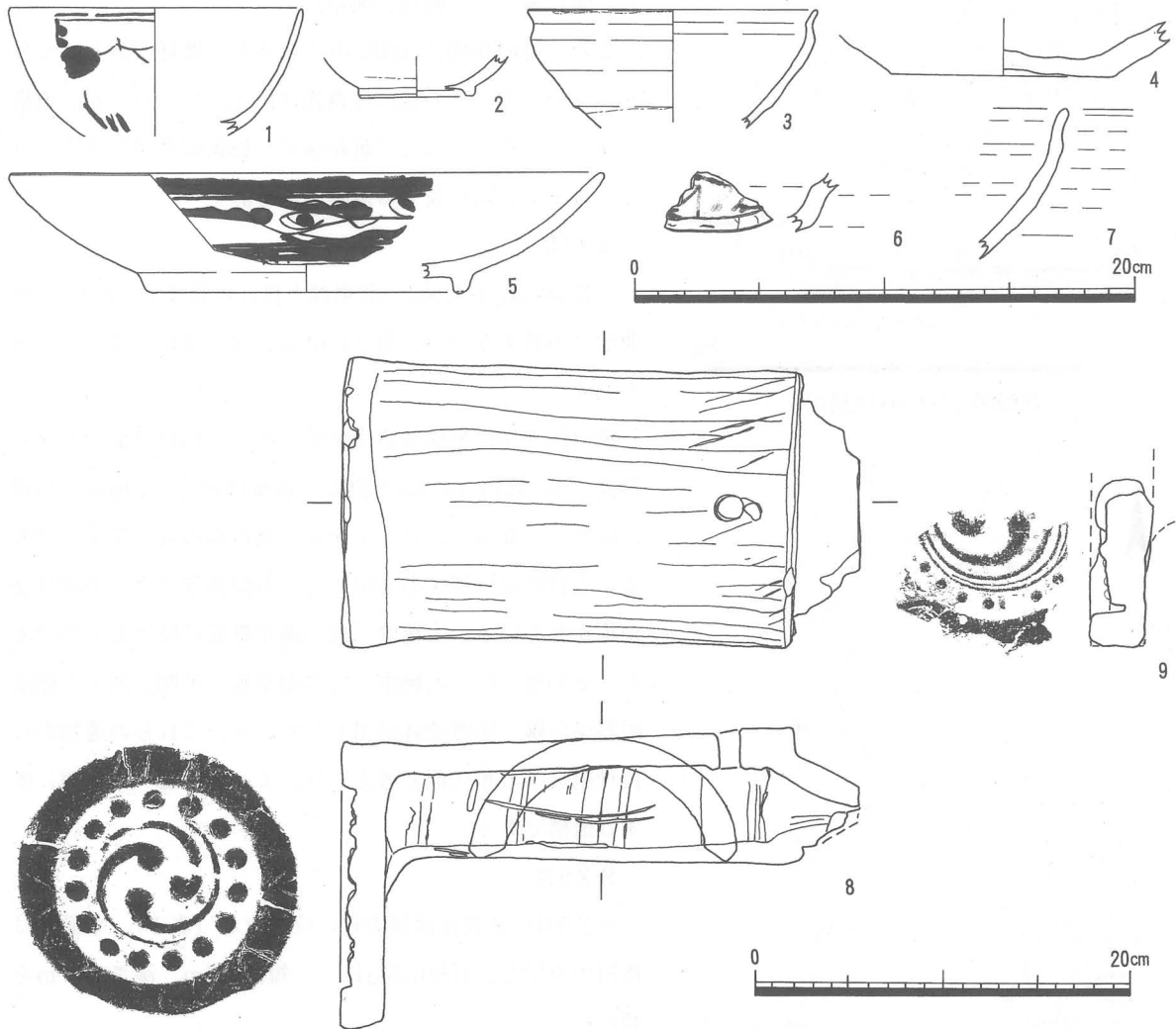
S K 622は、調査区中程に位置する(表1)。平面形は隅丸長方形を呈し、長辺3.3m以上、短辺2.7m、深さ0.05mを測る。S K 622の埋土には、黒褐色炭化物層が堆積し、火災焼土処理土壌と思われる。ここからは備前焼を中心に遺物がまとまって出土しており、これら出土遺物の計測分類をおこなっている(第4章第147図)。

第91図-1は、中国製青花碗である。口径(推)9.8cmを測る。器壁は薄く、呉須の発色も良好である。外面に描かれている文様は、高台脇は蓮弁文、体は草花文である。2は、唐津焼胎土目積皿である。口径(推)13.3cm、器高3.7cm、高台径5.1cmを測る。器形は、高台脇から扇状に開きながら立ち上がり、明瞭な腰部を持たないタイプで村上伸之氏の分類のA 2 d類に属する(村上1997年)。釉の色調はgrayish yellow (5.5Y 7/1.5)であり、内面にみられる胎土目は村上伸之氏の分類2 a類に属する(村上1997年)。3・7は、備前焼である。3は、徳利である。口径(推)5.2cmを測る。外反した口縁で、短い頸部をもつ徳利である。胎土は黒色鉍物粒を含み、きめは細かい。断面の色調は暗赤褐色(2.5Y R 3/4)を呈する。全体に黄ゴマがみられる。7は、播鉢である。口径(推)27cmを測る。断面の色調は暗赤褐色(2.5Y R 3/4)を呈する。口縁部外縁帯下には重ね焼痕がみられ、口縁部外面には黄ゴマが付着していた。内面の播目は7本単位である。乗岡実氏の編年近世1 c期に属する(乗岡2000年)。その他にも、甕や壺類が出土しており、この時期の備前焼を考える上で好資料になるとと思われる。4は、丹波焼壺である。口径(推)11.2cmを測る。火消壺として使用したのか内面全体に煤が付着していた。

出土遺物を概観すると、16世紀末~17世紀初頭と考えられる。このことから、16世紀末~17世紀初頭に火災があったことがわかった。Ⅲ-1 a期に属する遺構である。

S K 701

S K 701は、調査区東側中程に位置する(表1)。平面形は不整形を呈し、長さ3.46m、幅0.9m以上、深さ0.43mを測る。



第88図 SE500 (1・5)・SE502 (8)・SU500 (2)・SD504 (3・4・6・9)・SD500 (7) 出土遺物

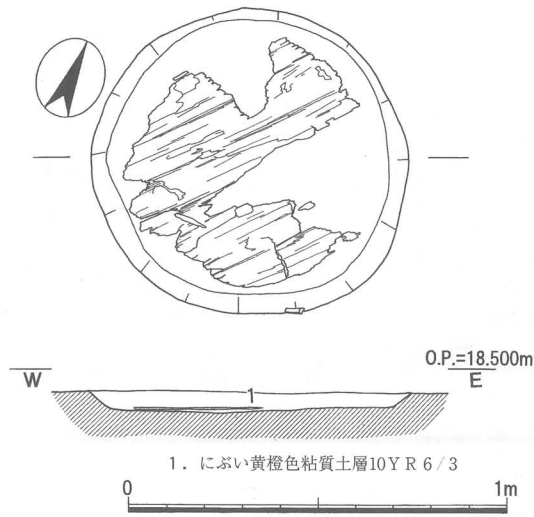
第91図-5は、唐津焼碗である。高台径4.7cmを測る。非常に焼成状況が悪く、胎土の色調がdull reddish yellow (2.5Y7.5/6)を呈する。釉調もdull yellow (5.5Y9/1.5)と白っぽく発色している。大橋康二氏の編年I期に属する。6は、上野・高取焼系徳利である。口径(推)6cmを測る。口縁部内外面に藁灰釉が施されている。8は、丹波焼播鉢である。口径(推)28.2cmを測る。口縁端部の断面は長方形を呈する。調整は、内面口縁部はナデ調整、外面口縁部には指圧調整後、ナデ調整を施している。口縁部端面に1条の沈線がみられる。内面の播目はヘラによる一本引きである。岡崎正雄氏の口縁部分類のa類に属する(岡崎1989年)。

出土遺物を概観すると、16世紀末~17世紀初頭と考えられる。Ⅲ-1a期に属する遺構である。

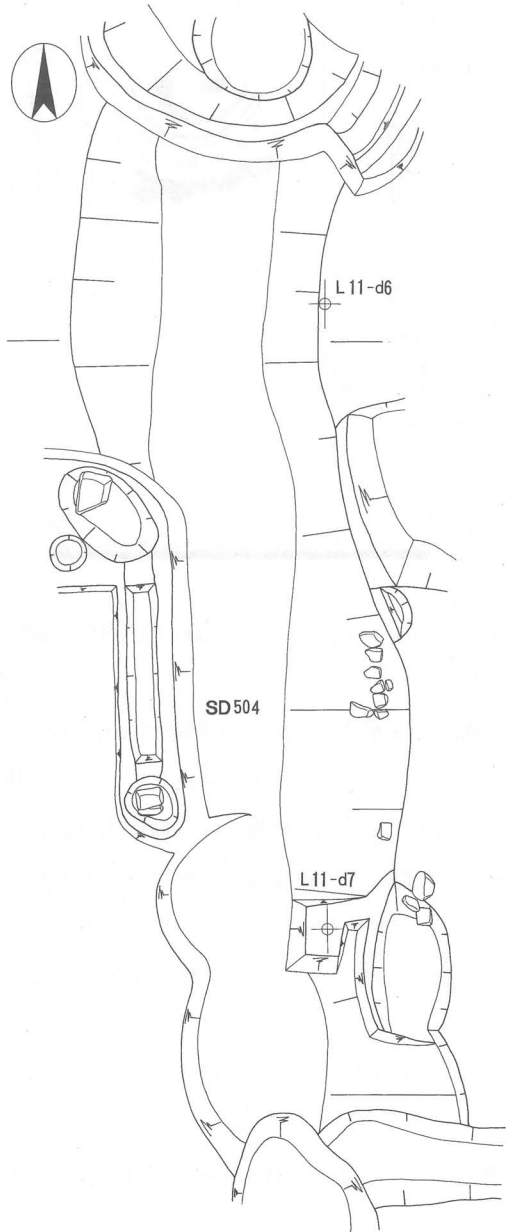
S K 581

S K 581は、南壁沿いの中程に位置する(表1)。平面形は不整形を呈し、長さ0.71m、幅0.25m、深さ0.37mを測る。

第91図-9は土師質土器焼塩壺である。口径5.8cm、器高9.6cm、底径(残)5.9cmを測る。器形は、底部が平底で、充填していた粘土塊は欠落している。口縁部は突起状の蓋受けがみられるものである。外面体部は磨耗していてわからないが、内面体部には接着痕と布目痕がみられる。形態は、両角まり氏の分類C2-b



第89図 S U500遺構図



第90図 S D504遺構図

一ハ類に属する（両角1996年）。

また、外面体部には印がみられるが、磨耗が激しくて分からなかった。その他には遺物は出土していないが、遺構の切り合いなどから、17世紀後半～18世紀初頭と考えられる。Ⅲ-2 a 期に属する遺構である。

S K 587

S K 587は、S K 581の北東部上側に位置する（表1）。平面形は不整形を呈し、長さ1.61m、幅1.59m、深さ0.44mを測る。

第91図-10は肥前磁器染付碗である。口径（推）9.1cm、器高7cm、高台径4.4cmを測る。器壁は厚くて、体部は口縁に向かって真直ぐに立ち上がり、高台高の高いタイプである。高台断面はU字型を呈する。外面体部には一重網目文が描かれている。大橋康二氏の編年Ⅲ期に属するものである。その他には、大橋康二氏の編年Ⅲ・Ⅳ期に属する肥前磁器染付碗・嬉野焼鉢が出土しており、これらの遺物から17世紀後半の年代観と考えられ、よって、Ⅲ-2 a 期に属する遺構である。

S X 504

S X 504は調査区西側中程に位置する（表1）。平面形は楕円形を呈し、長径0.5m以上、短径0.3m、深さ0.07mを測る。

遺構内には石臼がみられ、検出状況から建物の基礎と思われるが規模は分からなかった。

第92図-1は花崗岩製上臼である。大きさは直径32.3cm、高さ11cmを測る。体部には、挽き手を挿入する楕円形の孔が1ヵ所みられた。臼上面は5cm程度凹み、下面は5条1単位としておそらく6分割されていたと思われる。その他には遺物は出土していないが、Ⅲ-2 b 期に属する遺構に切られていることから、18世紀初頭と考えられる。Ⅲ-2 a 期に属する遺構である。

S X 542

S X 542は、北壁付近中程に位置する（第93図）。平面形は長楕円形を呈し、長径2.45m、短径1.55m、深さ0.9mを測る。遺構内中央には、一辺0.75m、深さ0.65m程度の正方形の落ち込みがあり、酒搾り用船場遺構と考えられる。

ただ、これに伴う垂壺遺構は確認できなかった。埋土は3層で、第2・3層には焼土混じりの土層が堆積し、最上層

の1層には多量の瓦が含まれていた。出土した瓦の中には、火を受けて白く変色したものもみられ、このことから火災を受けた後、ここに処理したと思われる。出土遺物は図化しなかったが、大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する肥前磁器染付碗がみられた。また、第2次面でこの付近から元禄十二年(1699)・元禄十五年(1702)の火災に伴う焼土層および焼土処理土壌がみられることから、これらの火災に伴うものと考えられる。Ⅲ-2a期に属する遺構である。

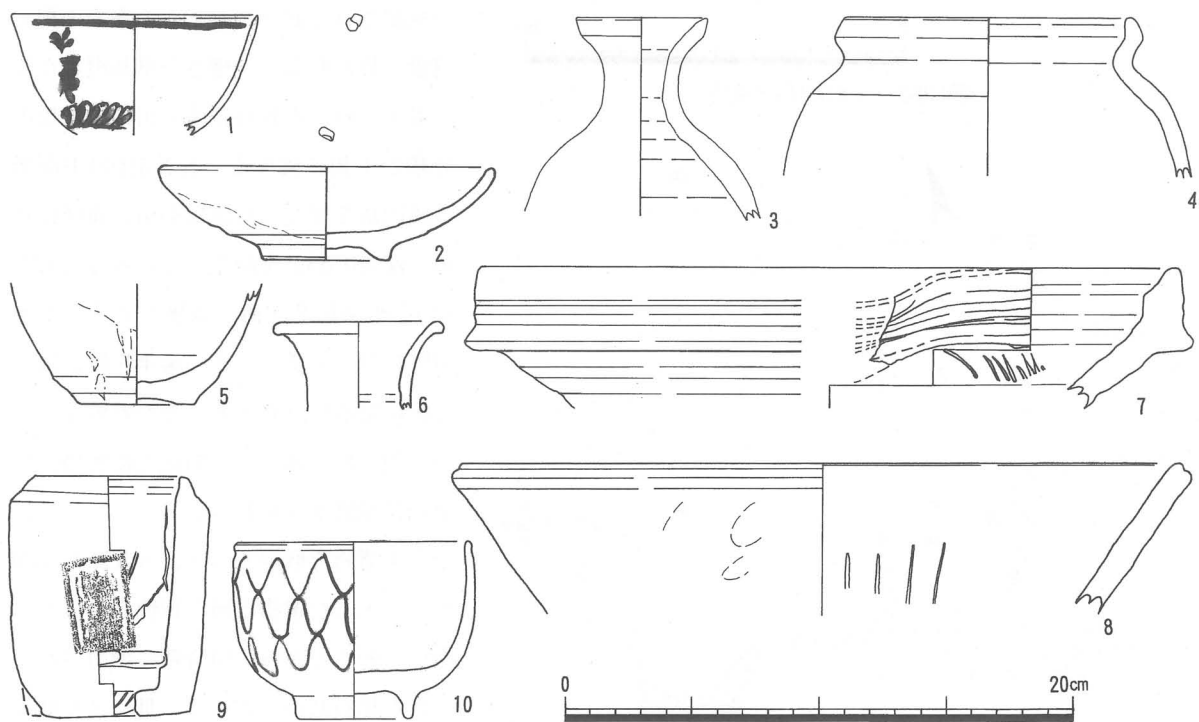


写真1 S D504動物遺体出土状況

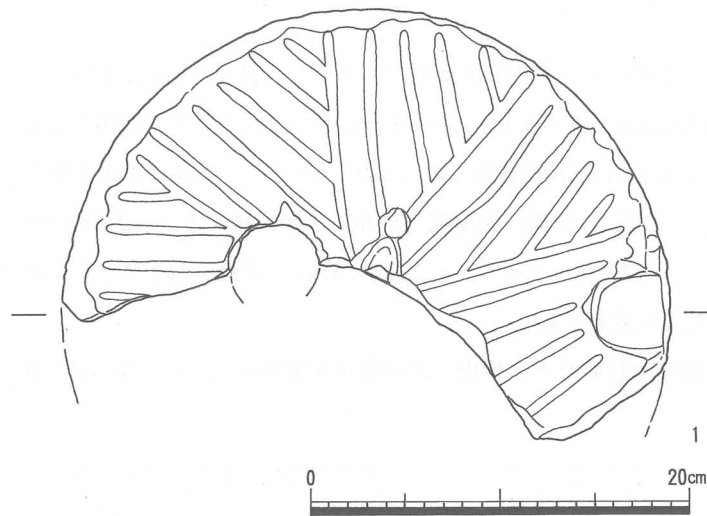
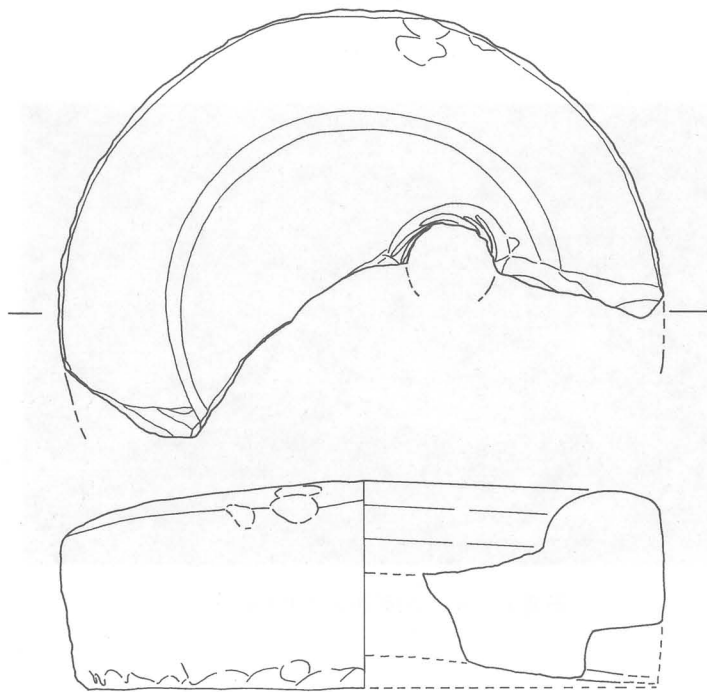
S X 567・570

S X 567は、西側の中程に位置する(第94図・図版29)。平面形は長楕円形を呈し、長径2.75m、短径1.3m、深さ1.05mを測る。遺構内中央には、直径0.55m、深さ0.15m位の円形の落ち込みがあり、酒搾り用船場遺構と考えられる。この遺構の西側に接する形でS X 570が検出されており、おそらく垂壺の掘形遺構と思われる。一槽さし単基型となると考えられ、小長谷正治・川口宏海氏の分類の1類に属する。S X 570の平面形は方形を呈し、長辺1.7m、短辺1.5m以上、深さ0.8mを測る。S X 567・570は、重複が激しかったため第2次面で検出できなかったが、本来は第2次面の遺構である。

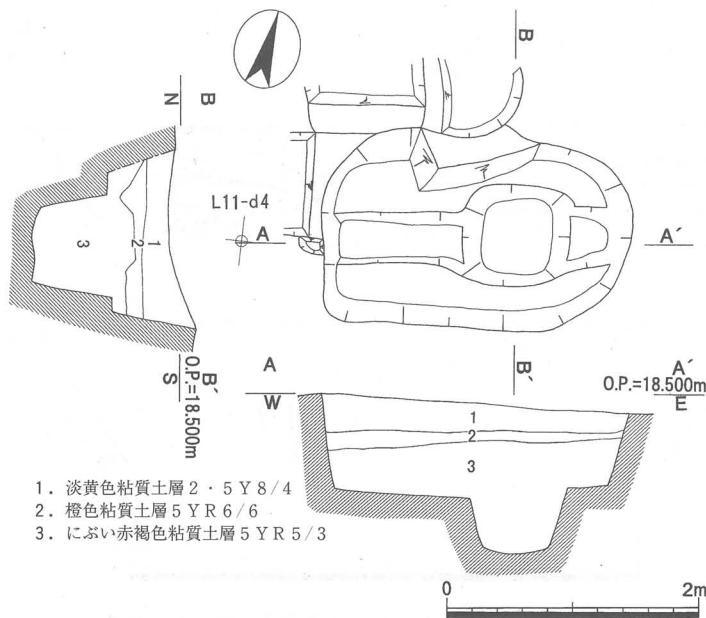
S X 567からは、肥前磁器コンニャク印判文碗や染付碗など大橋康二氏の編年Ⅳ期のもの、その他には、難



第91図 S K 622 (1~4・7)・S K 701 (5・6・8)・S K 581 (9)・S K 587 (10) 出土遺物



第92図 SX504出土遺物



1. 淡黄色粘質土層 2・5Y8/4
2. 橙色粘質土層 5YR6/6
3. におい赤褐色粘質土層 5YR5/3

第93図 SX542遺構図

波洋三氏の分類E類に属する土師質土器焙烙がみられた。また、SX570からは大橋康二氏の編年IV期に属する肥前磁器染付碗が出土している。これらの遺物を概観すると、18世紀中頃～後半と考えられる。Ⅲ-2b期に属する遺構である。

また、これらの遺構の東側から、先に述べた酒搾り用船場遺構であるSX617・618・758が検出されている。SX567・570の遺構の年代観から考えて、SX617・618・758より古い酒搾り用船場遺構であることがわかり、このことから、18世紀中頃～後半には酒蔵が建っていたと考えられる。

SX517・310

SX517は、SX567・570の西側に位置する(第95図・図版29)。平面形は長楕円形を呈し、長径3.15m、短径1.09m、深さ0.55mを測る。遺構内中央には、一辺0.75m、深さ0.45m位の正方形の落ち込みがあり、酒搾り用船場遺構と考えられる。この遺構西側に接する形でSX310が検出されており、おそらく垂壺の掘形遺構と思われる。一槽さし単基型となると考えられ、小長谷正治・川口宏海氏の分類の1類に属する。SX310の平面形は楕円形を呈し、長径1.35m、短径1.15m、深さ0.65mを測る。これらSX517・310も本来第2次面の遺構である。出土遺物には、大橋康二氏の編年IV期に属する肥前磁器染付碗・皿・壺や難波洋三氏の分類E類に属する土師質土器焙烙・京焼系色絵碗がみられる。

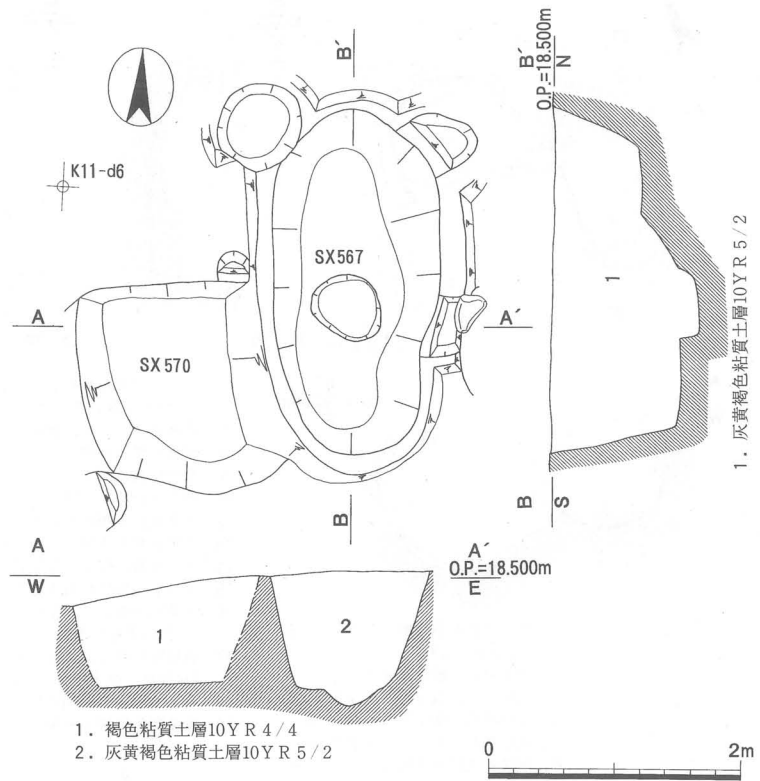
出土遺物を概観すると、SX567・570から出土した遺物と同じ特徴をもっていた。このことから、同時期に使用されていたと思われる。よって、Ⅲ-2b期に属する遺構である。

4. 第2次面の遺構と遺物

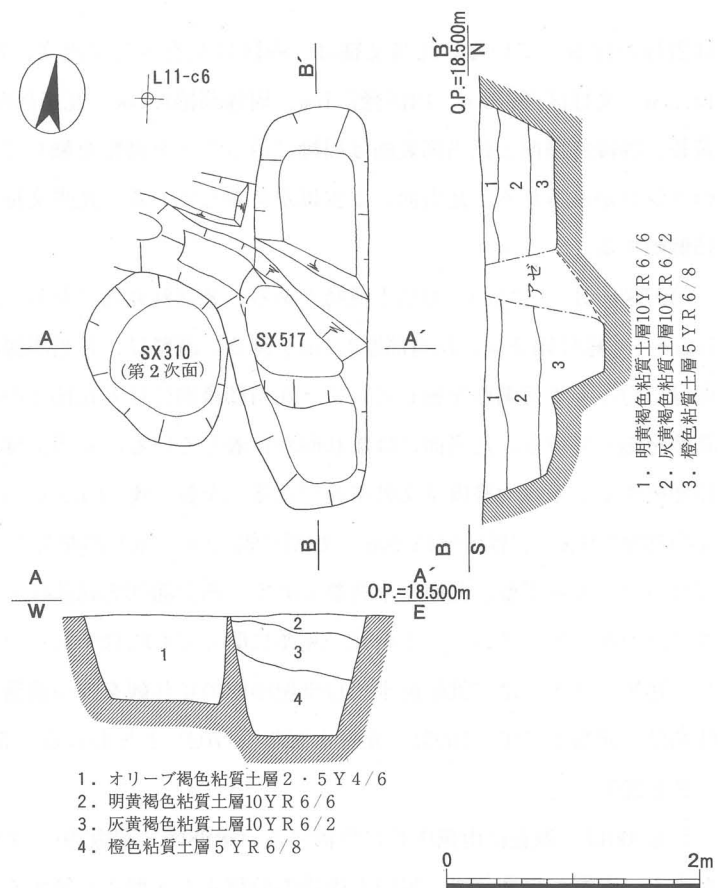
第2次面では、調査区北側と南側では三和土の様相が違っていった。調査区北側は、西側地口より東へ約25m、北壁から南へ約8.5mの範囲で火災を受けた三和土を検出した。この三和土の上層には、焼土層が堆積していたが、地口より東へ14mのところでは検出されなかった。しかし、第1次面で検出したSX01から多量の火災に遭った遺物と焼土が出土したことから、ここに処理したと思われる。調査区南側では、西側地口より東へ約11m、南壁から約5mのところから北へ約7mの範囲で三和土を検出した。しかし、これらの三和土に伴うであろう礎石は一部検出したが復元できなかった。その他には、酒造用の竈を検出した。

S V 302・303

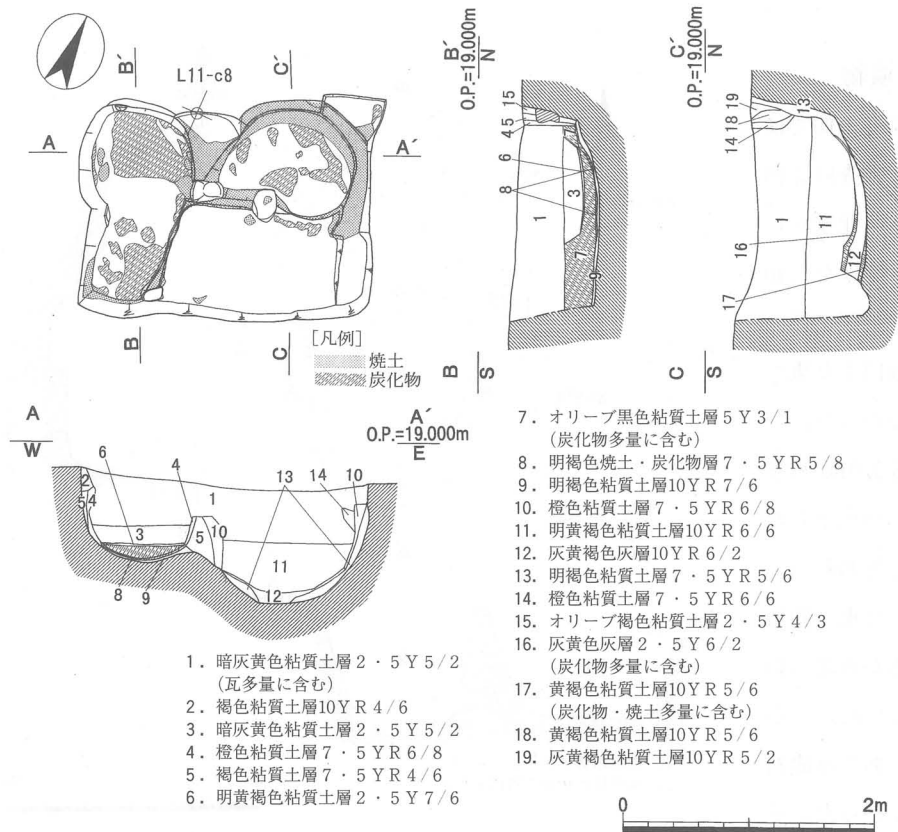
S V 302・303は、調査区南西隅に位置する(第96図・図版29)。酒造用の2基連基型半地下式竈である。2基の竈は南側を焚口にする。燃燒室は左右大きさが異なり、西側(S V 302)の直径は約0.9m、深さ0.55m、東側(S V 303)の直径は1.3m、深さ0.9mを測る。焚口は横長を呈し、東西約2.3m、南北9.5m以上を測る。竈本体には、骨材として大型の楕円形状の花崗岩を設置し、黄褐色粘土で構築されており、小長谷正治・川口宏海氏の変遷I期後半に属する(小長谷・川口1996年)。埋土は3層で、すべての層に焼土が混じり、一番上層には火をうけた瓦が多量に出土した。このことから、火災後、焼土をここに処理したと思われる。また、この竈の南東側の第105次調査区(伊丹市教育委員会調査)で酒造用の竈が検出されており、火災後、南



第94図 S X 567・570遺構図



第95図 S X 517・310 (第2次面) 遺構図



第96図 S V 302・303遺構図

は雲母が付着している。瓦当文様は、内区に左巻き三ツ巴文、外区は連珠を16個配する。2は、瓦当部径14.2cm、文様区径9.6cm、内区径7.1cm、周縁部幅2.1cm、瓦当部厚2.3cmを測る。調整は、瓦当周縁部はナデ調整、周縁部側面と瓦当部裏面は周縁に沿ってナデ調整を施している。瓦当部裏面には丸瓦部との接合の際のクシ目がみられる。瓦当面には雲母が付着している。瓦当文様は、内区は左巻き三ツ巴文、外区は連珠を16個配する。

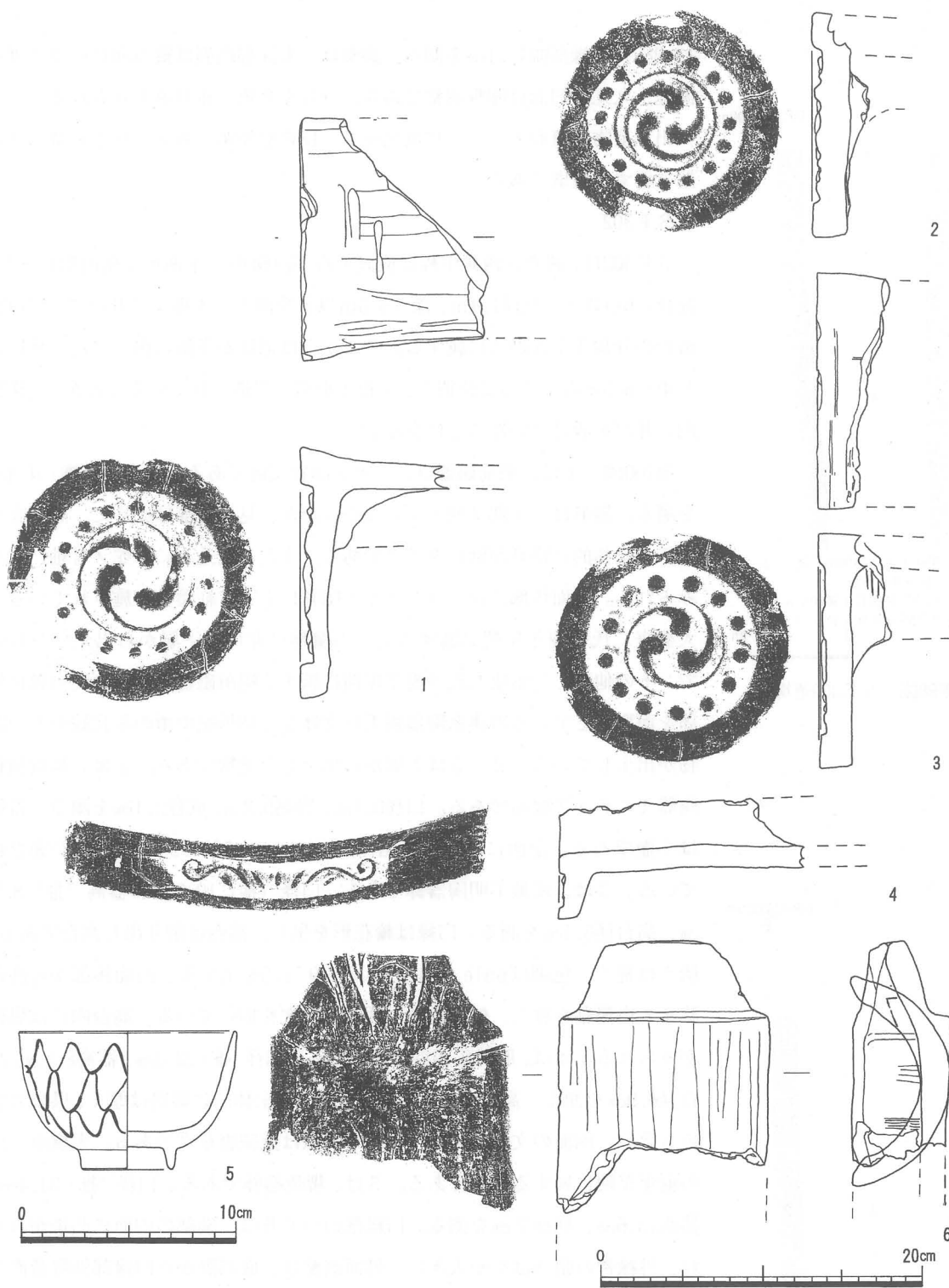
第97図-3・4はS V 303出土遺物である。3は軒丸瓦である。瓦当部径14.8cm、文様区径10.5cm、内区径7.4cm、周縁部幅2cm、瓦当部厚2.1cmを測る。調整は、瓦当周縁部はナデ調整、周縁部側面と瓦当部裏面は周縁に沿ってナデ調整を施している。瓦当部裏面には丸瓦部との接合の際のクシ目がみられ、接合部にナデ調整を施している。瓦当面には離れ砂が付着している。瓦当文様は、内区は左巻き三ツ巴文、外区に連珠を13個配する。4は均整唐草文軒平瓦である。全長(残)15.5cm、瓦当部上弦幅25.7cm、瓦当部下弦幅26.5cm、瓦当部厚3.9cm、文様区幅13.5cm、文様区厚2.2cm、顎上部厚2cm、顎下部厚1.2cmを測る。調整は、平瓦部凹面はヘラミガキ調整、凸面は未調整である。凹面顎部周縁部はナデ調整を施している。1~4の瓦類は火を受けたのか変色していた。その他の瓦類についても同様であった。瓦類以外には出土遺物はみられず、出土した瓦類のタイプは17世紀前半~17世紀中頃の年代観をもつ遺構から出土しており、このことから、火災の時期は、元禄十二年(1699)・元禄十五年(1702)と思われる。Ⅲ-2 a期に属する遺構である。

S E 300

S E 300は、調査区南側中程に位置する(第98図・図版29)。平面形は円形を呈し、直径1.4m、深さ3.7mを測る。素掘りの井戸で、川口宏海氏の分類A I a型式に属する。埋土は3層で、上層には黒褐色炭化物層が堆積し、ここから火を受けた瓦類が多量に出土した。これら瓦類と共伴して陶磁器類が出土しており、こ

東側に造り替えられたと考える。

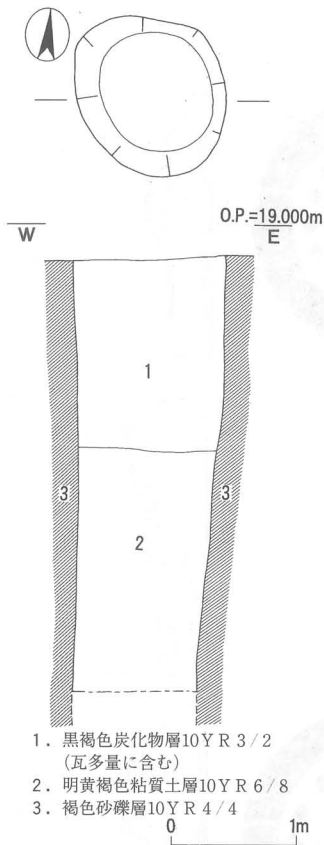
第97図-1・2はS V 302出土の軒丸瓦である。1は、瓦当部径15.8cm、文様区径11.4cm、内区径8.4cm、周縁部幅2.1cm、瓦当部厚1.9cmを測る。調整は、瓦当部裏面は周縁に沿ってナデ調整。瓦当部裏面の丸瓦部との接合部にはナデ調整を施している。丸瓦部凸面は縦方向にヘラミガキ調整、凹面には布目痕がみられる。凹面両側端は、縦方向にヘラナデ調整が施されている。瓦当周縁部は未調整である。瓦当面には



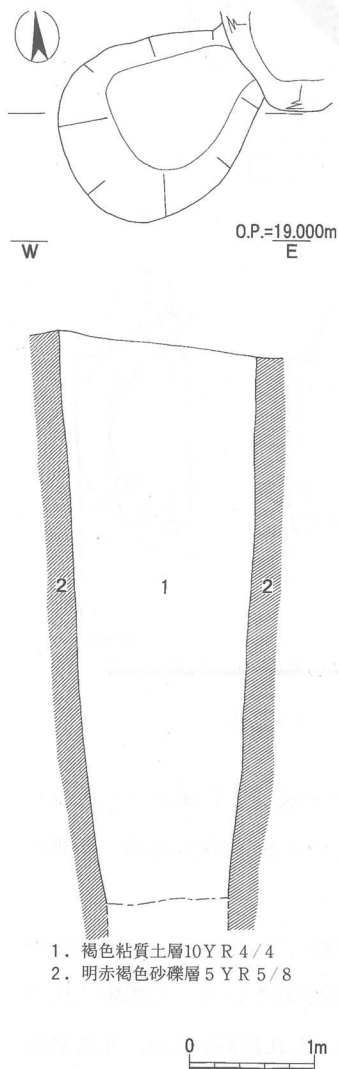
第97図 SV302 (1・2)・SV303 (3・4)・SE300 (5・6) 出土遺物

これらの年代観から、元禄十二年(1699)・元禄十五年(1702)の火災を受け、その後ここに埋めたと思われる。SE300の西隣には、18世紀前半の年代観をもつSE301を検出し、このことからSE300廃絶後、西側に新たに井戸を造り替えたと考えられる。

第97図-5は、肥前磁器染付碗である。口径(推)10.2cm、器高6.5cm、高台径4.2cmを測る。全体的に器壁が厚く、高台断面はU字型を呈するものである。外面体部には一重網目文が描かれている。大橋康二氏の編年Ⅲ期に属する。6は、丸瓦である。丸瓦部長(残)9.2cm、玉縁部長4.7cm、丸瓦部高6.6cm、丸瓦部幅



第98図 S E 300遺構図



第99図 S E 302遺構図

13.2cm、玉縁部幅11.1cmを測る。調整は、丸瓦部凸面は縦方向にヘラミガキ調整、丸瓦部凹面は叩板調整であり、コビキB痕・布目痕もみられる。

出土遺物を概観すると、17世紀後半～18世紀初頭と考えられる。Ⅲ-2 a 期に属する遺構である。

S E 302

S E 302は、調査区西側中程に位置する(第99図)。平面形は楕円形を呈し、長径1.6m以上、短径1.4m、深さ4.5m以上を測る。素掘りの井戸で、川口宏海氏の分類A I a 型式に属する。ここからは遺物が多量に出土した。地口より東へ6.5mのところの位置し、三和土を切って造られていることから、建物内に井戸を設けていたことになる。

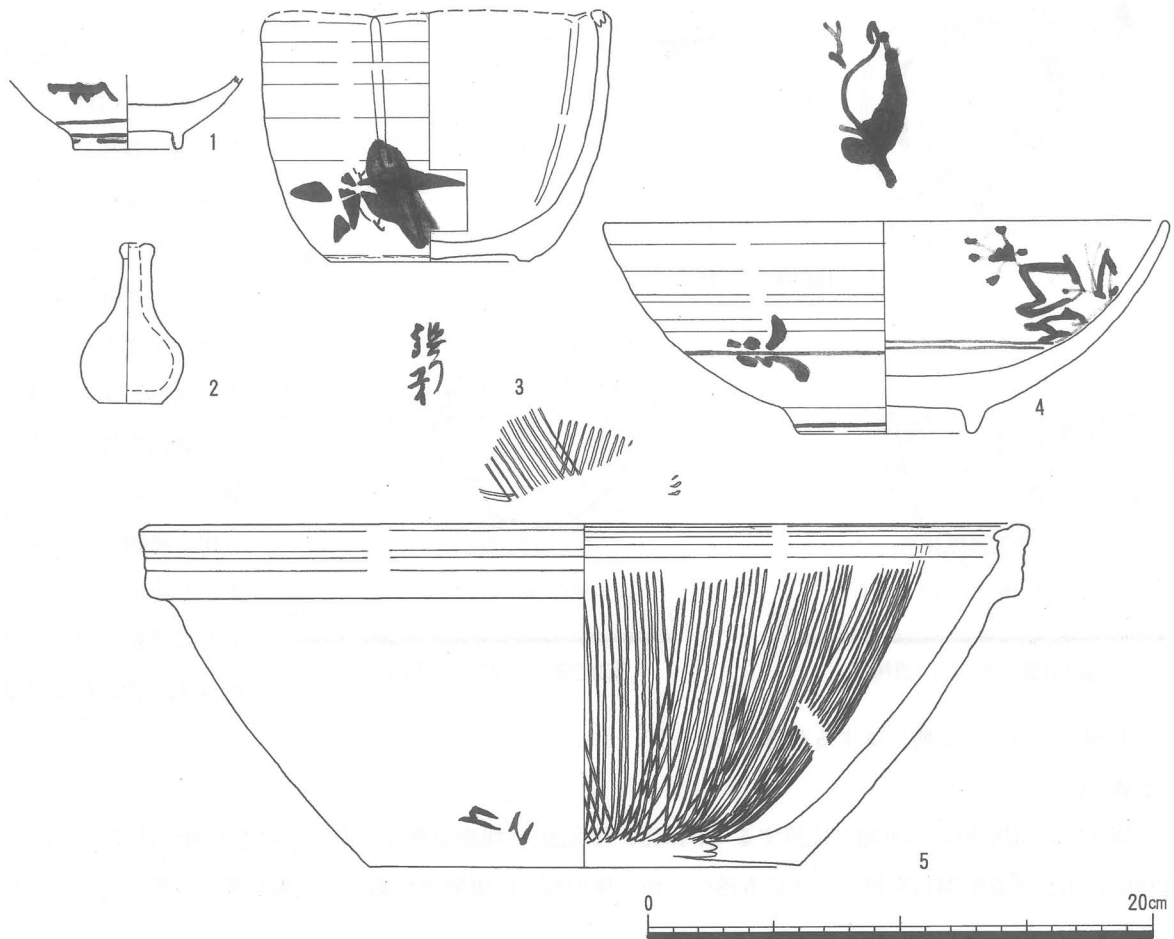
第100図-1は、肥前磁器コンニャク印判文碗である。高台径(推)4.4cmを測る。器形は、上部は残っていなかったが、見込み部は広くて、高台高が低く、全体的に器高が低いタイプである。また、見込みには蛇ノ目釉ハギがみられる。外面体部には、コンニャク印判によって紅葉文が施されている。

大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。この遺物は井戸の下層から出土したもので、その他に、大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する肥前磁器染付碗や高台畳付外周を面取りしている唐津系陶器刷毛目文鉢など18世紀中頃の年代観をもつ遺物が出土している。2～5は上層から出土した遺物である。2は、軟質施釉陶器ミニチュア製品である。口径0.7cm、器高5.3cm、底径2.1cmを測る。器種は小壺である。全面にdull reddish yellow 2.5Y 7.5/6の釉薬が施されている。3は、産地不明陶器鉢である。口径(推)10.5cm、器高(推)8.2cm、高台径6.4cmを測る。口縁は輪花形を呈し、高台は削り出し高台である。胎土は荒く、色調はpale yellow 5.5Y 9/1.5を呈する。内面体部から高台脇まで白濁釉を施し、外面体部に鉄絵の竹文を描いている。高台内には墨書がみられる。4は、肥前磁器染付鉢である。口径(推)22.3cm、器高8.5cm、高台径6.9cmを測る。高台断面はU字型を呈し、全体的に器壁は厚く、呉須の発色も悪い。内面の文様は草文、外面の文様は連続唐草文である。大橋康二氏の編年Ⅳ期に属するものである。5は、堺焼播鉢である。口径(推)34.4cm、器高13.6cm、底径7cmを測る。口縁部のつくりは、端部の内面に凸帯がみられ、外縁帯の張りはやや大きい。外面調整は、底部際から口縁部外縁帯直下まで、回転ヘラケズリを施している。内面の播目は12本単位である。白神典之氏の分類Ⅰ型式2段階に属する(白神1992年)。外面体部下端に墨書がみられる。

出土遺物を概観すると、18世紀前半～18世紀中頃と考えられる。Ⅲ-2 b 期に属する遺構である。

S W 301

S W 301は、調査区北西隅に位置する(第101図・図版29)。埋甕遺構である。掘形の平面形は円形を呈し、直径0.65m、深さ0.35mを測る。火災に遭った



第100図 SE302下層(1)・SE302(2～5)出土遺物

三和土に伴うものと考えられる。

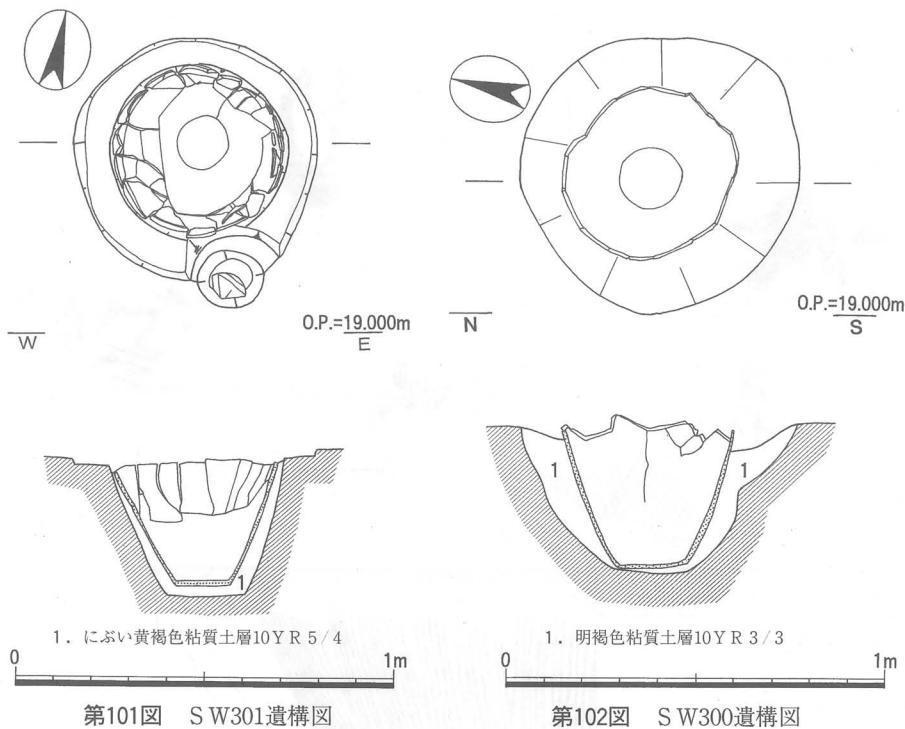
第103図-1は丹波焼壺である。口径17.6cm、器高54cm、底径17.4cmを測る。器形は、頸部の立上りは短く、体部のふくらみもやや弱い。外面全体に暗褐色(10Y R 3/4)の塗土が施されている。その他には出土遺物はみられなかったが、火災に遭った三和土に伴うことから、17世紀後半と考えられる。Ⅲ-2 a期に属する遺構である。

SW300

SW300は、調査区南東隅に位置する(第102図・図版29)。埋甕遺構である。掘形の平面形は円形を呈し、直径0.74m、深さ0.34mを測る。SW300の検出付近は、廃棄土壙や井戸が多くみられることから裏庭部だったと思われる。

また、第1次面ではSW300の南側0.5mのところまで、昆陽口道に面して建てられていた既存建物が建っており、それに伴う便槽甕がSW300の南隣で出土していることから、時代は異なるが昆陽口道に面する建物に伴うものではないかと考えられる。

第103図-2は肥前青磁碗である。高台径4.9cmを測る。高台断面は箱型を呈し、高台畳付は無釉である。大橋康二氏の編年Ⅱ-2期に属する。3は中国製青花皿である。口径(推)9.8cm、器高2.9cm、底径(推)3cmを測る。外面体部文様は波濤文帯・芭蕉葉文、見込みにはねじ花文が描かれている。小野正敏氏の分類C群Ⅰ類に属する。4は銅合金製煙管吸口部である。全長7.2cm、幅1cm、厚さ0.1cm測る。肩部はないタイ



プで、体部に接合痕がみられる。5は丹波焼甕である。口径（推）45.3cm、器高51.6cm、底径17.6cmを測る。口縁部断面はT字型を呈し、口縁端部上面には3条の沈線を施している。体部の膨らみは弱い。底部以外に塗土が施されている。

出土遺物を概観すると、3を伝世品と考えると17世紀中頃～17世紀後半と思われる。Ⅲ

ー1 b期からⅢー2 a期に属する遺構である。

SW302

SW302は、南壁沿いの東側に位置する（第104図・図版29）。埋甕遺構である。掘形の平面形は円形を呈し、直径0.74m、深さ0.34mを測る。先にも述べたが、検出地点は裏庭部にあたり、裏庭部に設置されたと思われる。

第105図ー1は丹波焼甕である。口径（推）18.6cm、器高21.3cm、底径12.2cmを測る。肥厚した口縁部が直立して立上り端部が外側へ傾く。体部は大きく膨らみ、体部中程から肩部にかけて沈線が施されている。内面から外面体部にかけて鉄釉を掛け、底部は露胎である。

出土遺物は丹波焼のみで、この上の第1次面に水琴窟遺構がかかっており、この遺構の年代観が19世紀前半であった。以上のことから、SW302の年代観は、18世紀中頃～18世紀後半と考えられる。Ⅲー2 b期に属する遺構である。

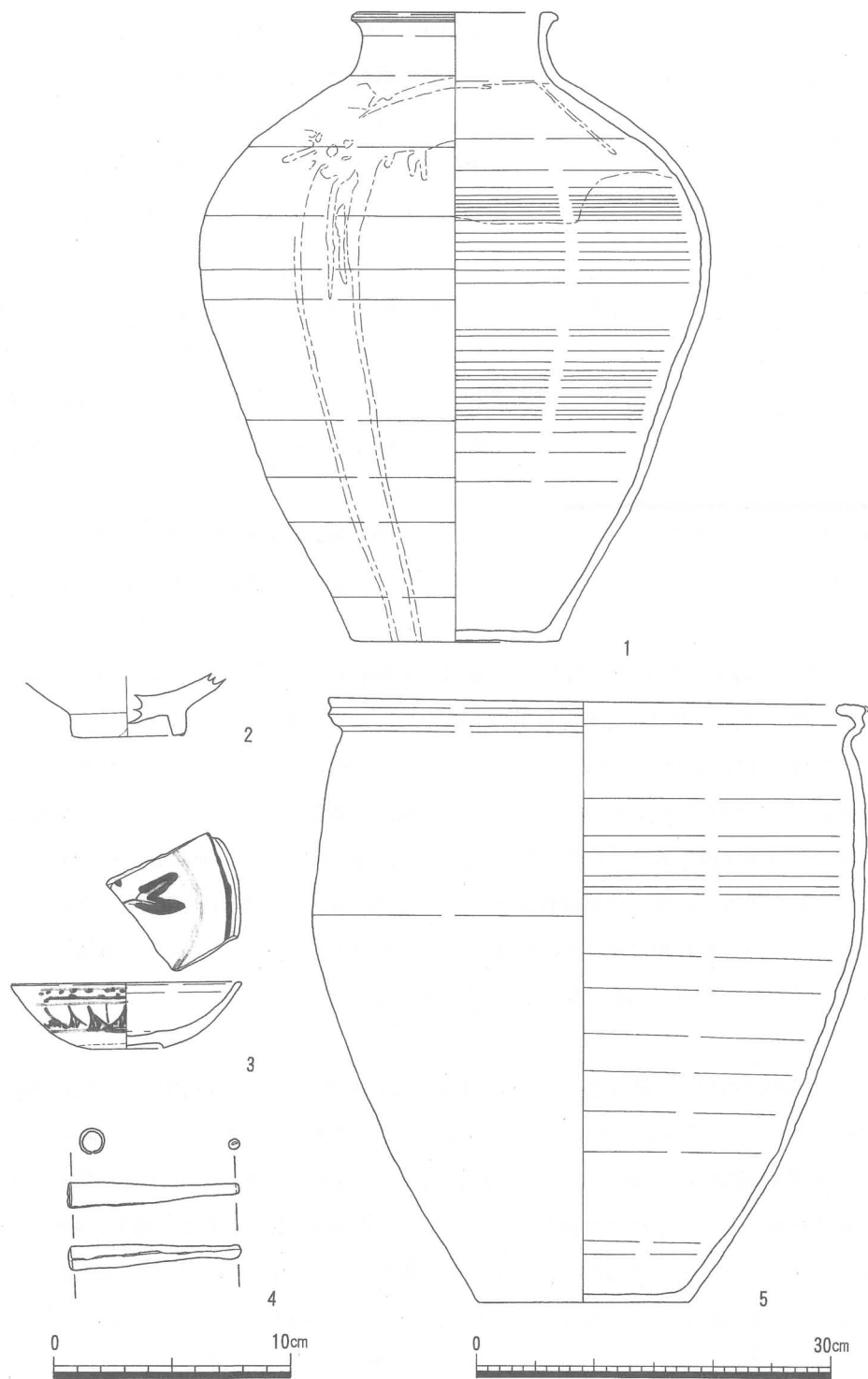
SD300

SD300は、調査区南西隅に位置する（表1）。長さ4.53m以上、幅0.54m、深さ0.4mを測る。溝として検出したが、土壌の可能性もある。埋土は1層で、明黄褐色粘質土層が堆積していた。

第105図ー2は、丹波焼播鉢である。底径（推）15.6cmを測る。体部外面にはユビオサエ痕がみられた。内面の播目は9本単位である。6は、寛永通寶である。銭径2.4cm、厚さ0.1cm、重さ1.8gを測る。裏は無文であり、『寶』の第18・19画が「ハ」となっており、新寛永（初鑄1697年）と思われる。その他には、大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する肥前磁器染付碗が出土しており、このことから、17世紀後半～18世紀初頭と考えられる。よって、Ⅲー2 a期に属する遺構である。

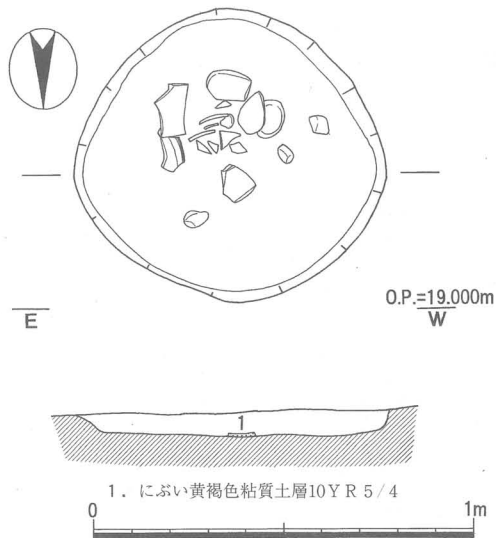
SD302・303

SD302・303は東壁沿いの中程に位置する（表1）。SD302の規模は、長さ3m、幅1.08m、深さ0.23mを測る。SD303は、長さ4.61m、幅0.8m、深さ0.13mを測る。SD302・303はL字状に接している。SD302・303の断面形は箱形を呈し、埋土には、にぶい黄橙色10Y R 6/4粘質土層が堆積している。



第103図 SW301 (1)・SW300 (2～5) 出土遺物

第105図-3・5はS D303から出土したものである。3は土師質土器皿である。口径（推）10.8cmを測る。胎土の色調は、にぶい橙色（7.5YR 7/3）を呈する。調整は、内面はナデ調整、口縁部内外面はヨコナデ調整、外面は指頭圧調整を施している。川口宏海氏の分類IT・1型式A類に属する（川口1997年c）。5は肥前青磁皿である。高台径（推）10.4cmを測る。波佐見町の三股青磁である。内面は片切り彫りによって文様が施されている。高台は蛇ノ目凹型高台で、釉剥ぎ部に鉄銹を塗布している。大橋康二氏の編年Ⅱ-2期に属する。



第104図 SW302遺構図

第105図-4・7・8はS D302から出土したものである。4は土師質土器皿である。口径（推）14cmを測る。胎土の色調は、にぶい橙色（7.5Y R 7/3）を呈する。調整は、内面ナデ調整、口縁部内外面はヨコナデ調整、外面は手掌圧調整を施している。川口宏海氏の分類I T・1型式A類に属する。7・8は寛永通寶である。7は、銭径2.4cm、厚さ0.1cm、重さ3.2gを測る。裏は無文であり、『寶』の第18・19画が「ス」となっており、古寛永（初鑄1636年）と思われる。8は、銭径2.3cm、厚さ0.1cm、重さ3.1gを測る。裏は無文であり、『寶』の第18・19画が「ハ」となっており、新寛永（初鑄1697年）と思われる。

これらの出土遺物を概観すると、17世紀後半～18世紀初頭と考えられる。Ⅲ-2 a期に属する遺構である。

S K 337

S K 337は、調査区中程に位置する（表1）。平面形は不整形を呈し、長さ0.91m、幅0.81m、深さ0.33mを測る。ここからは、17世紀中頃～17世紀後半の遺物がまとまって出土した。

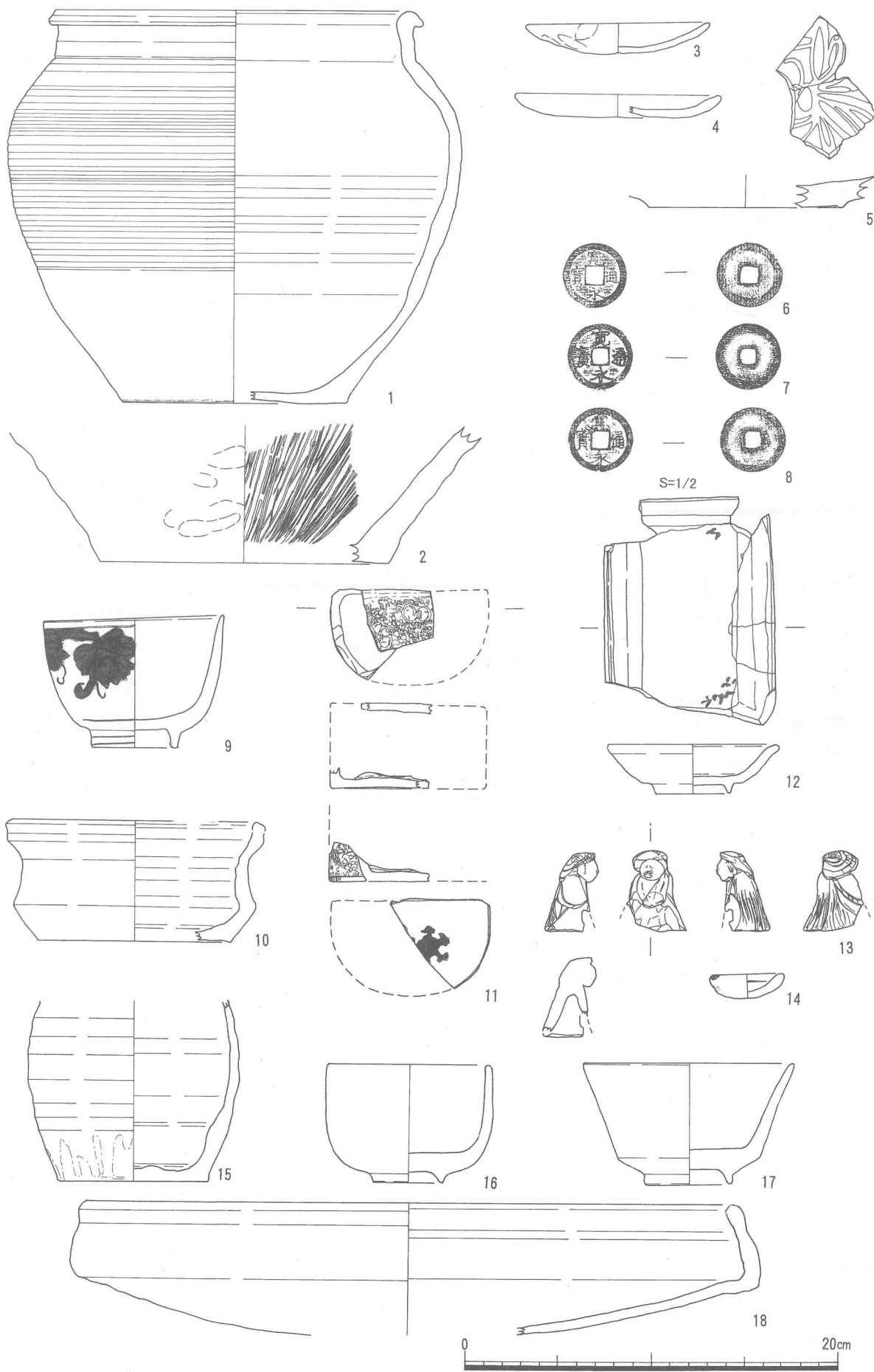
第105図-9は、肥前磁器染付碗である。口径（推）9.7cm、器高7cm、高台径4.6cmを測る。全体的に器壁が厚く、高台断面がU字型を呈するものである。外面体部には葡萄文が描かれている。大橋康二氏の編年Ⅲ期に属する。10は、丹波焼鉢である。口径（推）13.1cm、器高6.5cm、底径（推）10.4cmを測る。口縁端部はすべて打ち欠いており灰落しに用いた可能性がある。その他には、9と器形が同じで、外面に一重網目文を描いた碗や難波洋三氏の分類D類に属する土師質土器焙烙が出土していた。よって、遺構の年代は17世紀中頃～17世紀後半と考えられ、Ⅲ-1 b～Ⅲ-2 a期に属する。

S K 356

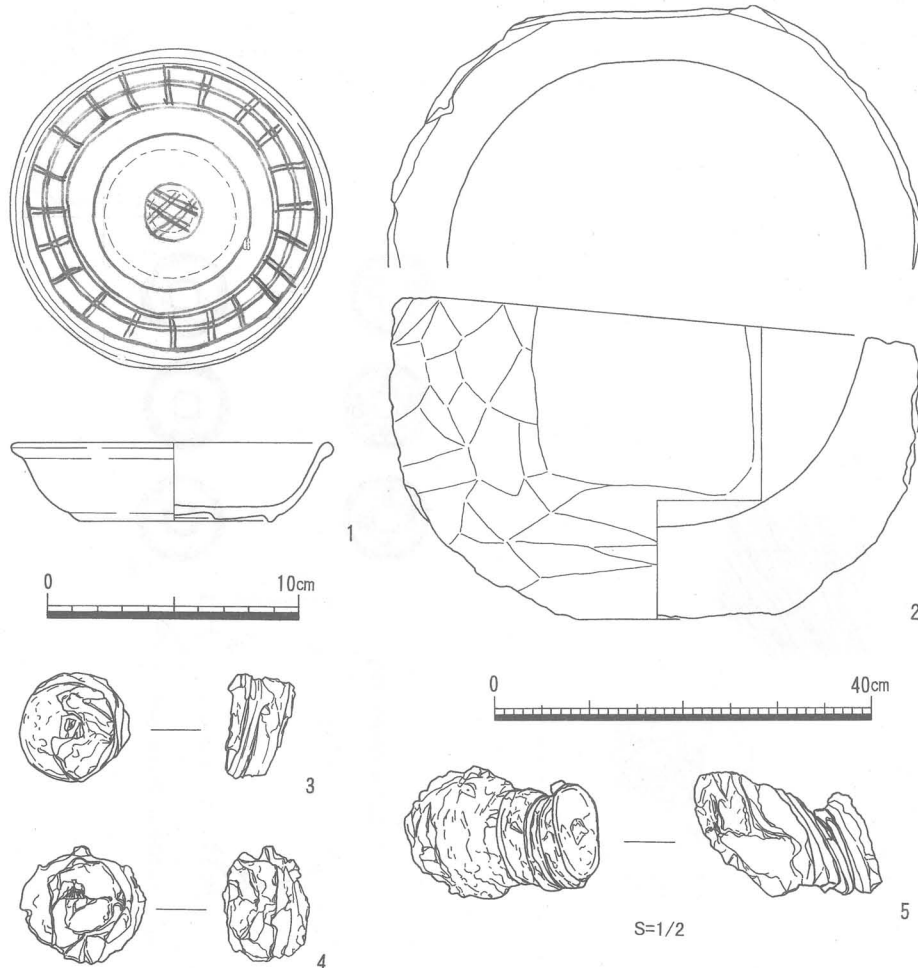
S K 356は、S E 300の東側に位置する（表1）。平面形は円形を呈し、直径0.82m、深さ0.66mを測る。ここからは、18世紀中頃の遺物がまとまって出土し、検出地点が裏庭部にあたることから廃棄土壙と思われる。

第105図-11は、肥前磁器色絵水滴である。底部残存長5.7cmを測る。器形はかまぼこ型を呈する。外面上面と湾曲した面は無釉である。文様は型押しによって施し、鋸歯文・桜文・丸文の部分に鉄釉を施している。体部と底部面は施釉されており、底部にはコンニャク印判による五弁花がみられる。大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。15は、丹波焼徳利である。底径8cmを測る。体部に灰釉が掛けられているが、それ以外は無釉である。18は、土師質土器焙烙である。口径（推）34.8cmを測る。胎土の色調は、orange（2.5Y R 6/8）を呈する。調整は、内面底部はナデ調整、内面口縁部から外面体部はヨコナデ調整、外面底部は未調整である。外面には煤が付着している。難波洋三氏の分類E類に属する。図版36-17は、肥前青磁鉢である。高台径（推）8.8cmを測る。内面は片切り彫りによって文様が施されている。高台は蛇ノ目凹型高台である。大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。その他には、肥前磁器染付碗が中心に出土しており、これらの器形は、高台高が低くて、全体に器高が低いタイプ碗（江戸遺跡碗分類17-10類）（成瀬1996年）のものである。

出土遺物を概観すると、17世紀後半の遺物が含まれるものの、大半が18世紀中頃のものであることと、青磁染付碗・広東型碗などは出土していないことから、18世紀中頃の遺構と考えられる。Ⅲ-2 b期に属する遺構である。



第105図 SW302 (1)・SD300 (2・6)・SD303 (3・5)・SD302 (4・7・8)・SK337 (9・10)・SK356 (11・15・18)・SK377 (12~14)・SK347 (16・17) 出土遺物



第106図 S K 381 (1・3～5)・S X 315 (2) 出土遺物

S K 377

S K 377は、S W 300の南側に位置する(表1)。平面形は不整形を呈し、長さ1.82m、幅1.28m、深さ0.23mを測る。

第105図-12は、瀬戸・美濃焼四方皿である。残存長11.5cm、幅8.9cmを測る。器形は長方形を呈する。型づくり成形で、内面隅に呉須で草文を描いている。

13は、軟質施釉陶器ミニチュア人形である。残存高5.3cmを測る。器形は虚無僧と思われる。型押し成形で、頭部と笠部・体部を別々に

作って接合している。また、底部以外に透明釉を施し、一部緑釉を掛けている。14は、土師質土器皿である。口径7.6cm、器高1.3cmを測る。手づくね成形で、外面には手掌圧調整、内面にはナデ調整を施している。また、口縁部の1ヵ所に灯芯痕がみられる。その他は、先に述べたS K 356と肥前磁器の様相は同じである。陶器は京焼系鉄絵碗、瀬戸・美濃焼鉄釉鉢などがみられ、白神典之氏の分類I型式2段階の堺焼播鉢が出土していた。

出土遺物を概観すると、18世紀中頃～18世紀後半と考えられる。Ⅲ-2 b期に属する遺構である。

S K 347

S K 347は、調査区北東部に位置する(表1)。平面形は楕円形を呈し、長径1.22m、短径1m、深さ0.4mを測る。

第105図-16・17は肥前磁器である。16は、青磁碗である。口径8.5cm、器高6.4cm、高台径3.7cmを測る。下部に重みがある腰張型碗である。高台畳付は無釉である。17は、白磁碗である。口径11.3cm、器高6.6cm、高台径4.8cmを測る。腰部から口縁部に向かって外へ開く朝顔型碗である。高台畳付は無釉である。16・17共に大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。その他には、肥前磁器筒型染付碗・肥前磁器青磁染付筒型碗など大橋康二氏の編年Ⅳ期に属するものが中心で、広東型碗は出土していない。陶器は京・伊賀・信楽焼系土瓶蓋がみられ、土師質土器焙烙は難波洋三氏の分類D・E類が出土している。

出土遺物を概観すると、18世紀後半と考えられる。Ⅲ-3 a期に属する遺構である。

S K 381

S K 381は、調査区南東隅に位置する（表1）。平面形は不整形を呈し、長さ0.83m、幅0.57m、深さ0.1mを測る。この遺構からは、銭貨がまとまって出土している。検出地点は裏庭部に位置するが、埋納理由は不明である。

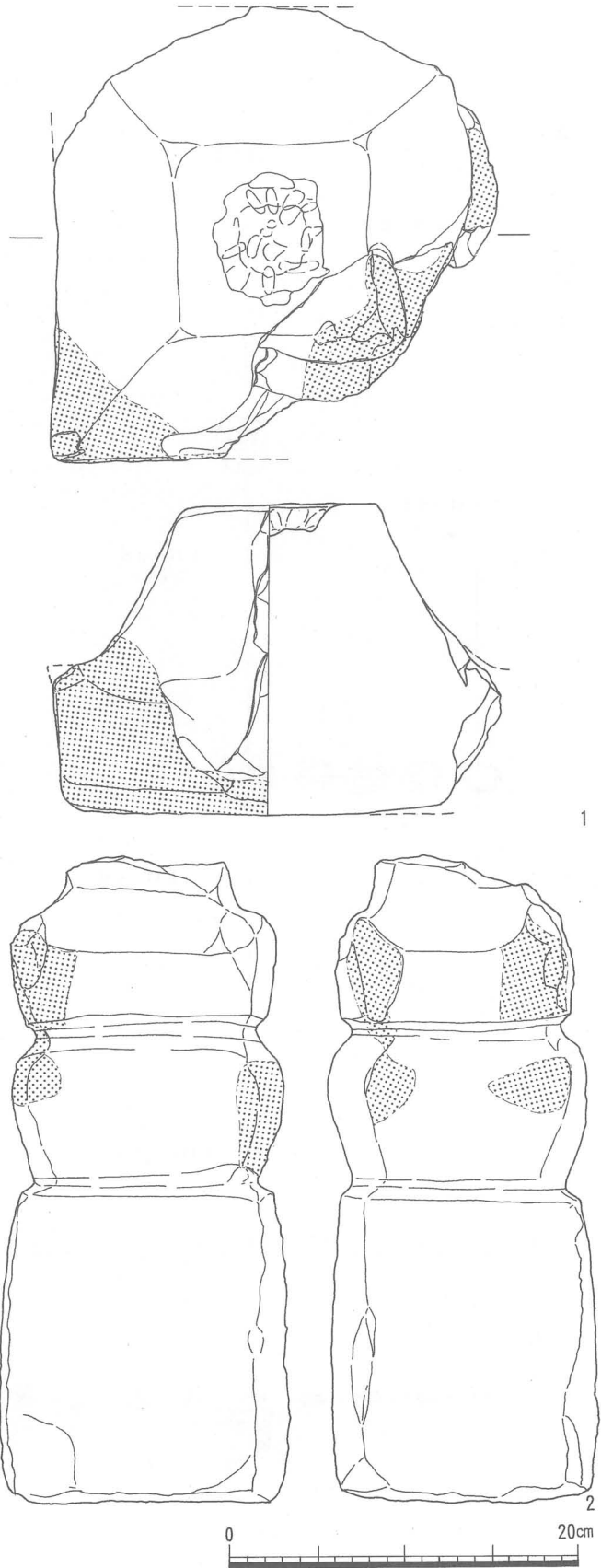
第106図-1は、肥前磁器染付皿である。口径12.7cm、器高3.1cm、高台径7.6cmを測る。高台は蛇ノ目凹形高台で、高台高の低いタイプのものである。見込みに蛇ノ目釉ハギみられ、内面体部には鎬線文、見込みに格字文が描かれている。大橋康二氏の編年V期に属する。3～5は、銭貨である。何枚か重なり、銭貨の中央には藁がみられることから緞銭であったと思われる。剥離した結果、枚数は24枚で、銭貨の種類はすべて新寛永通寶であり、そのうち文銭が3枚みられた。銭貨の処理・解読は、兵庫埋蔵銭調査会永井久美男氏の手を煩わせた。その他に、大橋康二氏の編年IV期の肥前磁器染付碗・伊賀・信楽焼灯明皿・土瓶の蓋などが出土している。

出土遺物を概観すると、19世紀前半と考えられる。Ⅲ-3b期に属する遺構である。

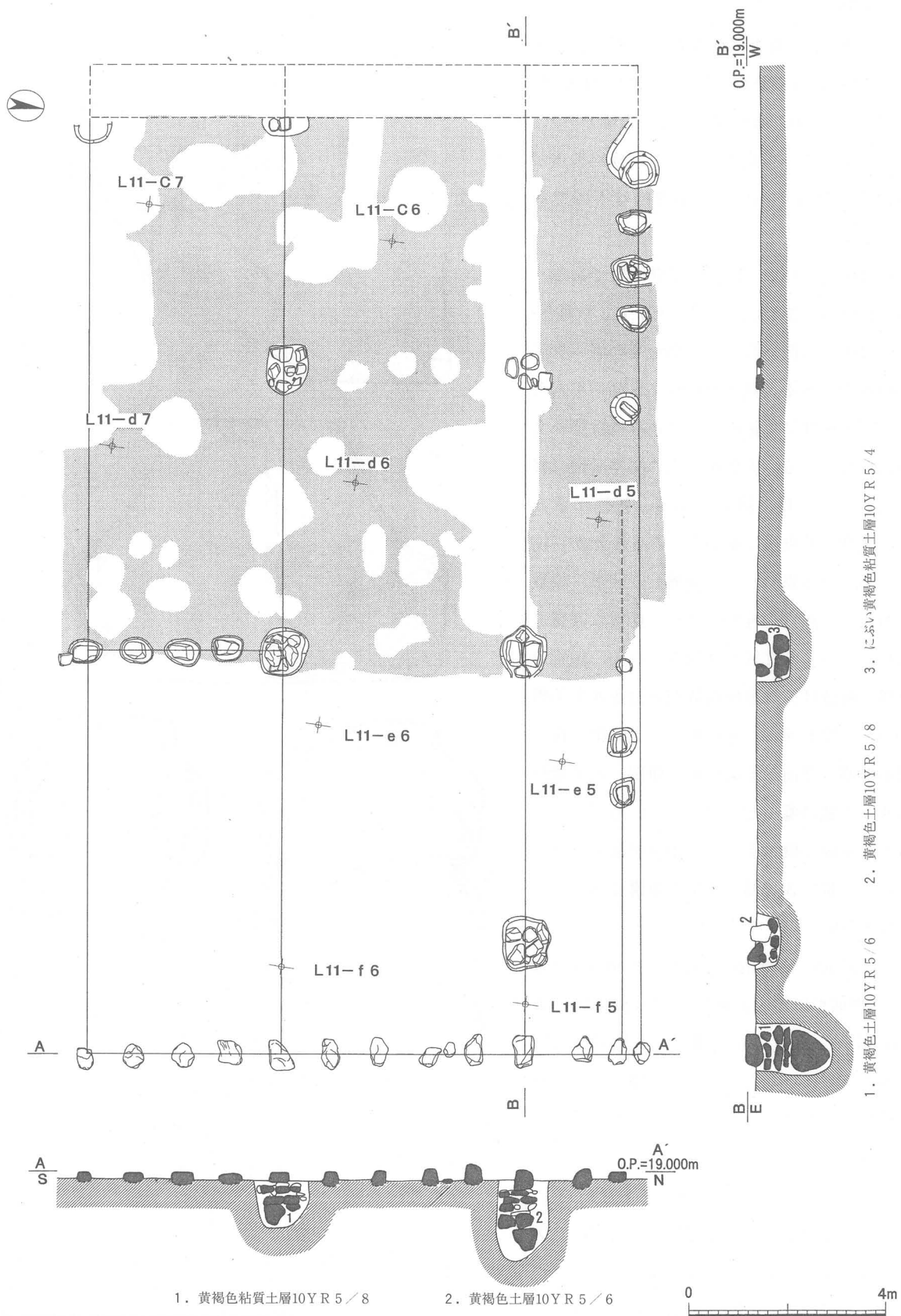
S X 315

S X 315は、南壁沿いの中程に位置する（表1）。平面形は楕円形を呈し、長径0.74m、短径0.43m、深さ0.1mを測る。花崗岩製石臼を逆さまで検出した。建物の基礎石として転用されていたと思われる。本来は1次面に伴う遺構である。

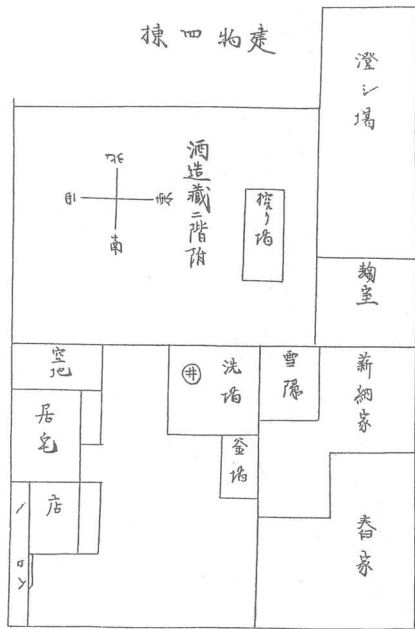
第106図-2は、搗臼である。口径53.8cm、器高33.7cmを測る。花崗岩製で、底部には固定できるように平坦に面取りされている。この調査地区から酒造関係の遺構が多く検出していることから、これも酒造用に使われていたものを転用したと思われる。共伴遺物は出土していないが、18世紀前半～18世紀後半の



第107図 S X 317 (1)・S X 309 (2) 出土遺物



第108図 SB01遺構図



免許鑑札第ニ〇八四号

石橋 茂一

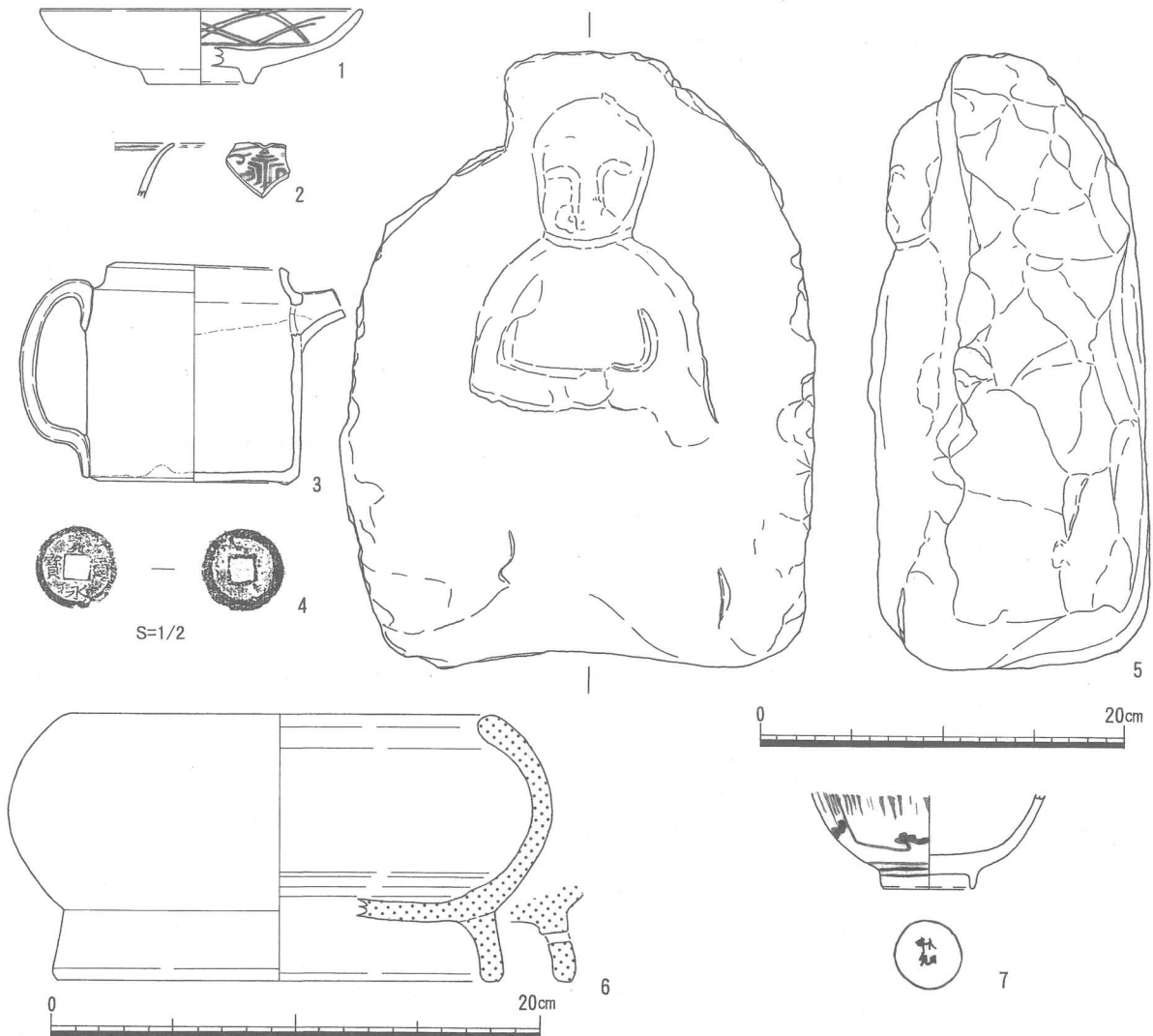
第109図 「酒造場絵図面届書写」

年代観をもつ第1次面S K80の直下に位置することから考えて、18世紀末以降と思われる。Ⅲ-3期に属する遺構である。

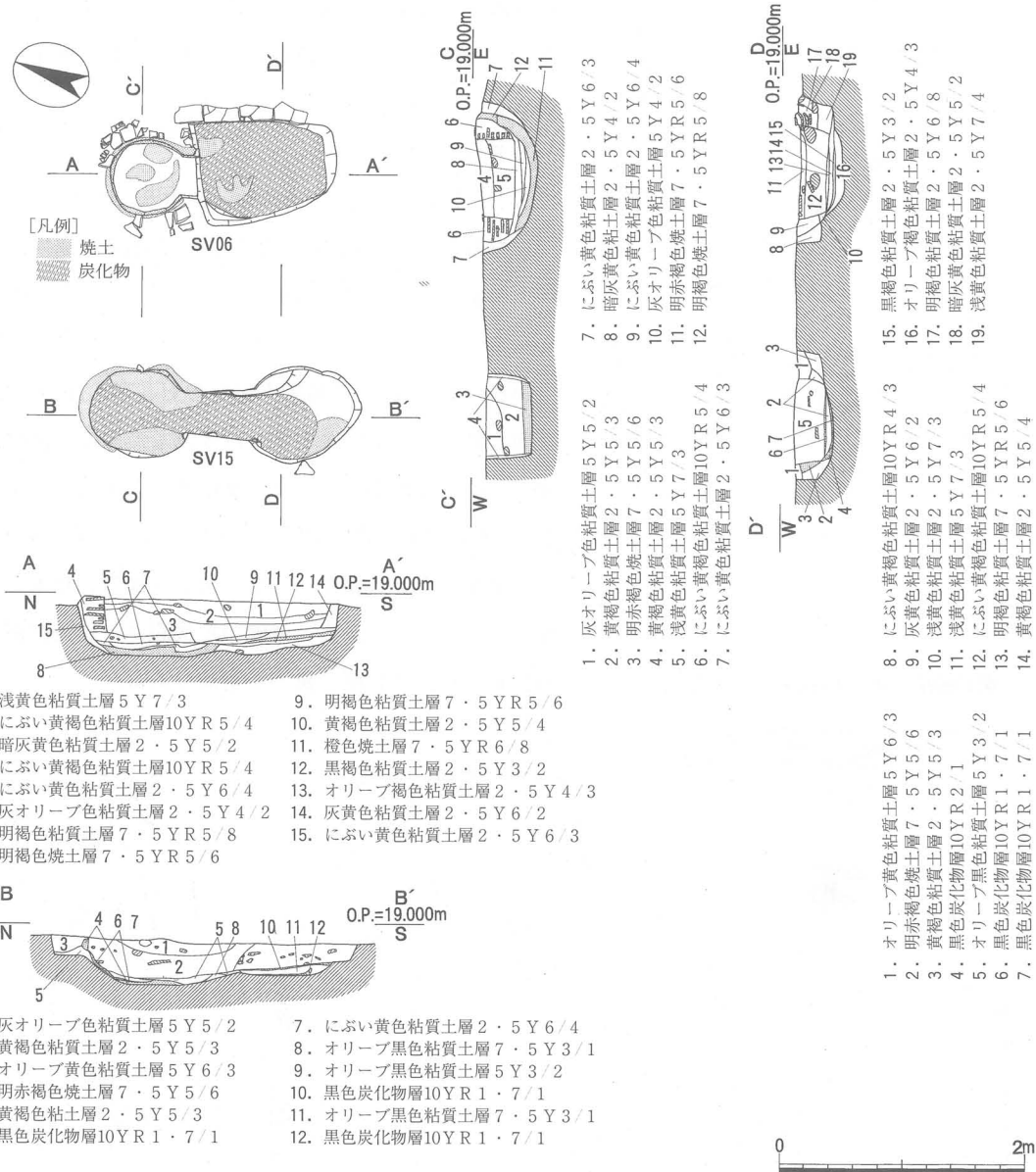
S X317

S X317は、調査区北東隅に位置する(表1)。平面形は円形を呈し、直径0.42m、深さ0.1mを測る。遺構内に五輪塔火輪を出土し、礎石の根石として用いられたものと考えられる。

第107図-1は、五輪塔火輪である。高さ17.9cmを測る。花崗岩製で、大部分が火を受け変色している(図の網目部分)。1/3は破損しており、破損部も火を受けていることから、転用される際、すでに完形ではなかったと思われる。共伴遺物は出土しなかったが、第2次面の三和土を切って掘られていることから、遺構の年代観は、18世紀前半と思われる。Ⅲ-2 b期に属する遺構である。



第110図 S S16 (1)・S V06 (2~4・6)・S S32 (5)・S E05 (7) 出土遺物



S X 309

S X 309は、調査区北西側に位置する(表1)。平面形は楕円形を呈し、長径1.16m、短径0.74m、深さ0.18mを測る。調査区北側から検出した火災を受けた三和土に伴うものと思われる、建物の基礎石として転用されたと思われる。

第107図-2は一石五輪塔である。残存高37.2cm、最大幅16.6cmを測る。花崗岩製で、火輪と水輪部分は火を受けて変色している(図の網目部分)。この遺構の年代観は、元禄年間の火災を受けた三和土に伴うことから、Ⅲ-2 a期に属する遺構である。

S K 353

S K 353は、調査区南東部に位置する(表1)。平面形は不整形を呈し、長さ1.93m、幅1.5m、深さ0.36mを測る。埋土は1層で、褐色粘質土(10YR4/4)が堆積していた。

図版37-8・9は、肥前磁器染付蓋物である。S K 353から出土したものである。蓋は、口径(推)14.5

cm、器高3.4cmを測る。鉢は、口径（推）14.8cm、器高7.4cm、高台径7.8cmを測る。どちらも器壁は薄くて、呉須の発色もよい。外面に描かれている文様は、桐文と水引文である。大橋康二氏の編年Ⅳ期に属するものである。

5. 第1次面の遺構と遺物

第1次面は、調査区北側と南側では三和土の様相が違っていた。北側は、西側地口から東へ14m、北壁から南へ7mの範囲で三和土を検出した。これに伴う礎石・礎石痕は検出できなかった。しかし、検出した三和土の範囲は、既存建物と同範囲であり、遺構の切り合いなどから既存建物に伴うものと思われる。調査区南側は、西側地口より東へ約9m、北壁8m付近から南へ約10mの範囲で三和土を検出し、残存している礎石・礎石痕より、S B01を復元した。明治十九年（1886）に出された「酒造場絵図面届書写」（第109図）によると、石橋茂一氏がここで酒造業を営んでおり、石橋氏の屋敷地だったことがわかった。それによると、検出された礎石建物は「酒造蔵」にあたる。また、S B01の南西側で井戸が数カ所検出されている。この絵図によると、そのあたりは「洗い場」になっており、これに関係する井戸と思われる。東側は、廃棄土壙が多く検出することから裏庭部だったと思われる。その他に、酒造関係の遺構が多く検出した。

S B01

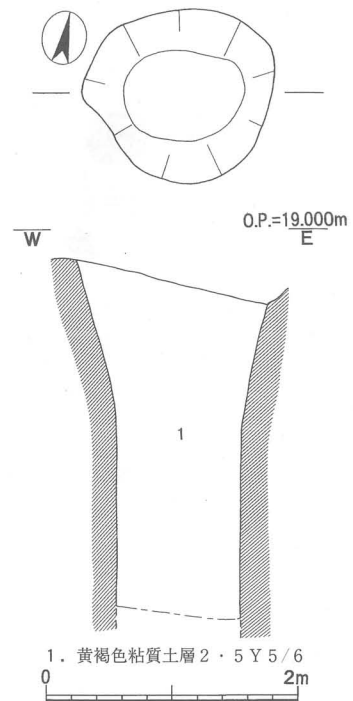
S B01は、調査区中央に位置する（第108図・図版30）。桁行10間（東西20.2m）、梁行5間（南北11.2m）を測る。礎石建物であり、柱通りの基礎石は花崗岩の河原石を根石に5段積み重ねていた。礎石の掘形からは、大橋康二氏の編年Ⅴ期に属する肥前磁器染付碗や白神典之氏の分類のⅡ型式に属する堺焼播鉢が出土しており、また礎石下のS K723の出土遺物が18世紀後半～19世紀初頭であることから、19世紀初頭頃に建てられたと思われる。また、この酒蔵は、酒造を廃止された後も残存していた。Ⅲ-3 a期～Ⅳ期に属する遺構である。

S S16

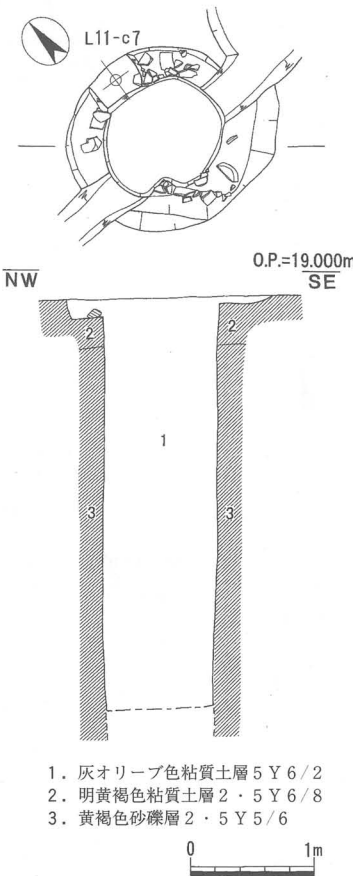
S S16は、S B01に伴う礎石である。掘形の平面形は楕円形を呈し、長径0.68m、短径0.52m、深さ0.1mを測る。

第110図-1は、肥前磁器染付皿である。掘形から出土した遺物で、大きさは口径（推）13.2cm、器高3.2cm、高台径（推）4.4cmを測る。見込みを蛇ノ目釉ハギした浅いタイプの皿である。高台畳付以外は施釉されており、内面体部には格子文が描かれている。大橋康二氏の編年Ⅳ期に属するものである。図化したのは、この遺物だけであったが、大橋康二氏の編年Ⅴ期に属する肥前磁器染付碗や白神典之氏の分類のⅡ型式に属する堺焼播鉢が出土していた。

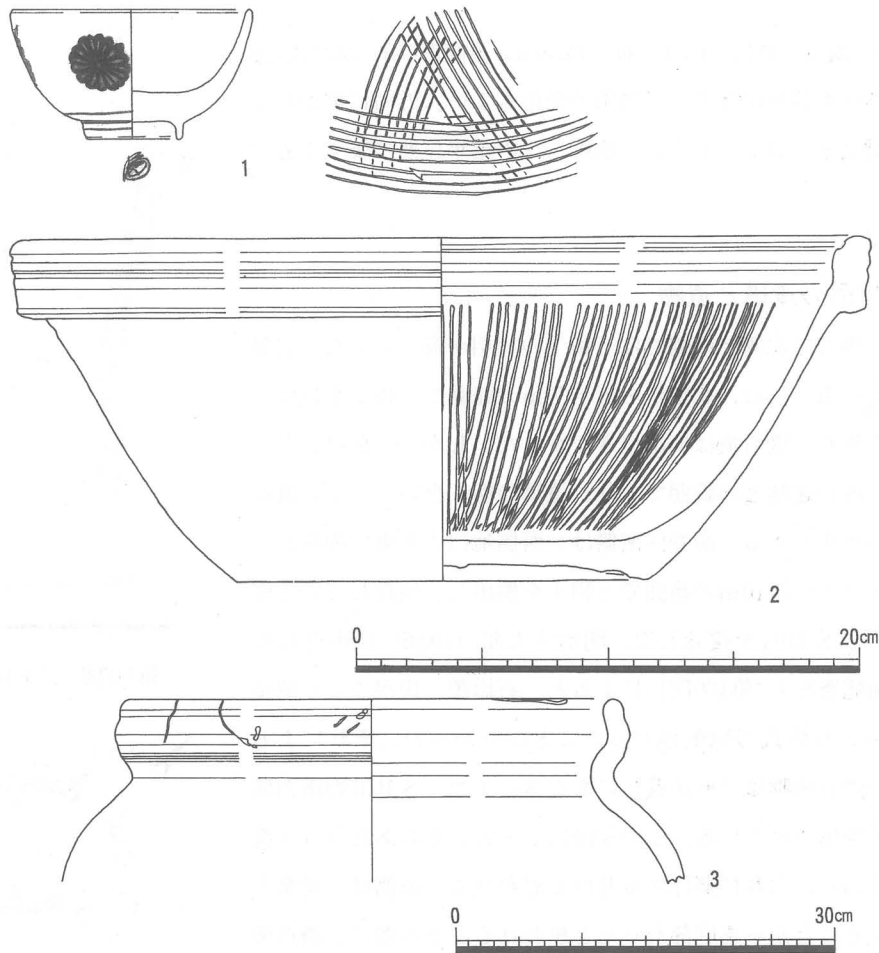
出土遺物を概観すると、19世紀初頭頃に建てられたと思われる。



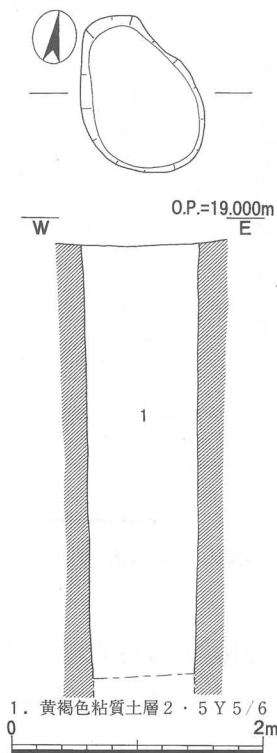
第112図 SE05遺構図



第113図 SE03遺構図



第114図 S E03出土遺物



第115図 S E02遺構図

S S 32

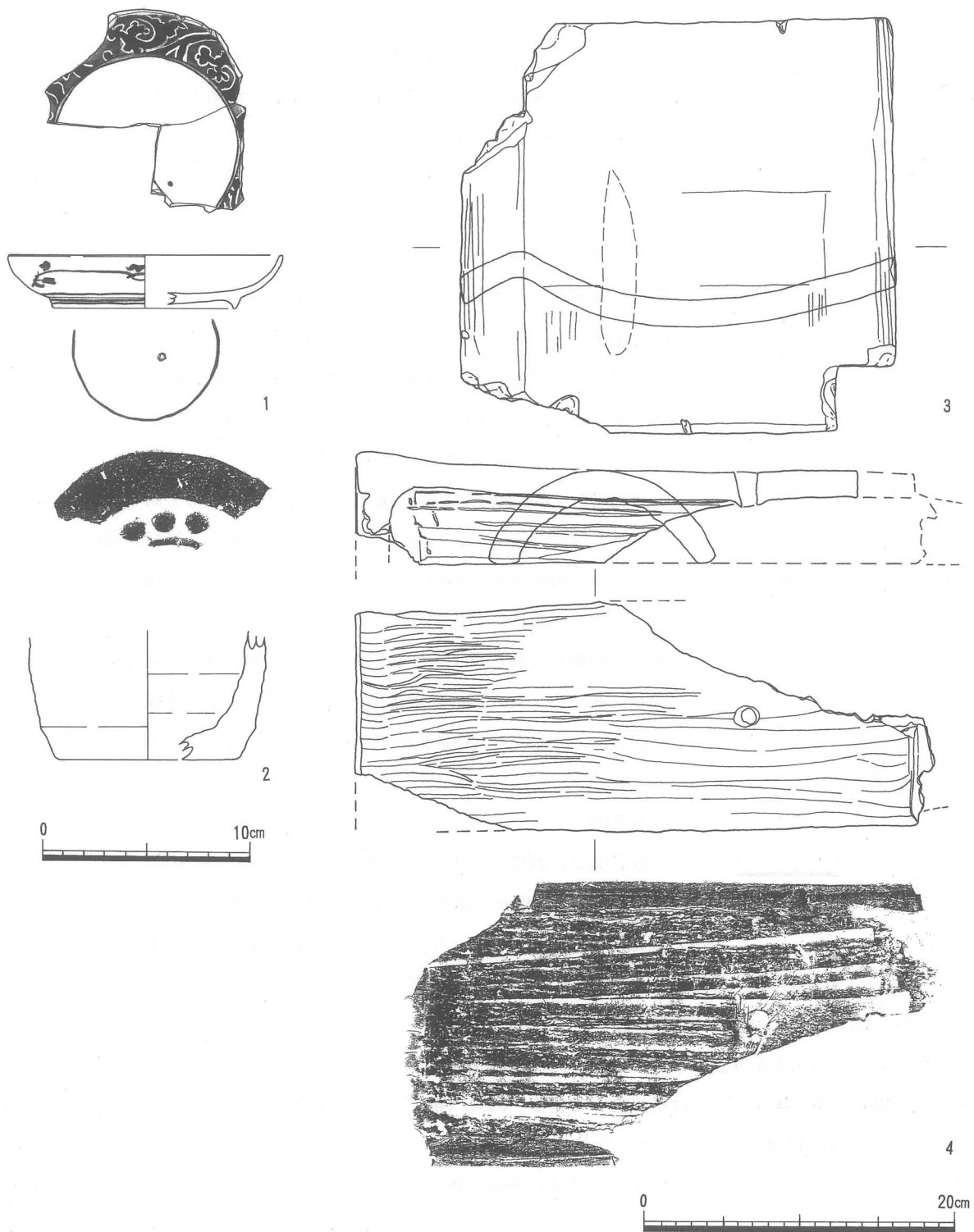
S S 32は、S B 01に伴う礎石である。掘形の平面形は正方形を呈し、一辺1 m、深さ0.8mを測る。

第110図-5は船形光背型石仏である。全長34 cm、幅25.7 cmを測る。石仏であるが柱通りの根石に転用されていた。素材は花崗岩である。

S V 06・15

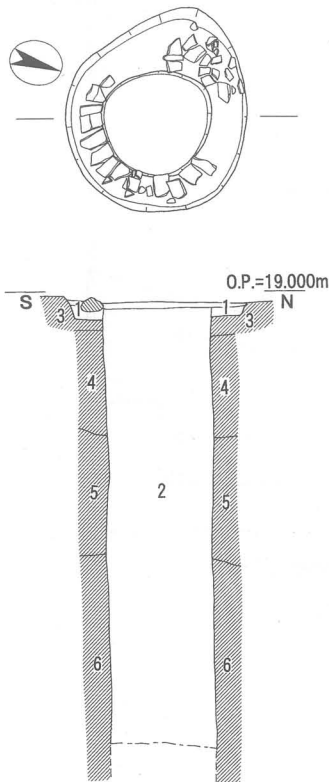
S V 06・15は、調査区北東部に位置する（第111図・図版30）。いずれも半地下式単式竈で、並んで検出した。竈の大きさから酒蔵に関係する竈と思われる。西側に位置するS V 15は、全長2.3m、燃烧室の直径0.7m、深さ0.35mを測る。焚口は南側である。燃烧室内は黄褐色粘土で構築されていた。また、焚口に近くなるにつれて、灰が多く堆積していた。S V 06の大きさは、全長1.85 m、燃烧室の直径1.1m、深さ0.45mを測る。焚口は南側である。S V 06の燃烧室の断面を観察すると、1度造り替えられていることがわかった。最初は、燃烧室の壁を暗灰黄色粘土で構築し、次は、平瓦を骨材として設置し、黄褐色粘土で塗り込めていた。また、焚口東壁も瓦積みに造り替えられている。この竈もS V 15同様に、焚口に近くなるにつれて灰が多く堆積していた。

第110図-2～4・6はS V 06埋土から出土したものである。2は、中国製青



第116図 SE02出土遺物

花小杯である。小片であるが、器壁は薄く、呉須の発色も良好である。外面の文様は唐草文がみられる。3は、京・伊賀・信楽焼系水注である。口径6.7cm、器高9.1cm、底径7.8cmを測る。内面口縁部から外面体部にかけて透明釉を施しているが、それ以外は無釉である。4は寛永通寶である。錢径2.3cm、厚さ0.1cm、重さ2.1gを測る。裏は無文であり『寶』の第18・19画が「ハ」となっており、新寛永である。6は瓦質土器火鉢である。口径（推）17.2cm、器高11cm、高台径（推）18.1cmを測る。小型のタイプのものである。体部の成形は、粘土紐輪積み成形で、その後、脚部をハリツケ、外面全体は丁寧な横方向のヘラミガキ調整を施して



1. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/6
2. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/6
3. 灰白色砂質土層 2・5 Y 8/1
4. 明黄褐色粘質土層 10 Y R 6/8
5. 明黄色砂礫層 10 Y R 6/6
6. 明褐色砂礫層 7・5 Y R 5/8



第117図 S E 07遺構図

第114図-1は肥前磁器染付碗である。口径（推）9.6cm、器高5.2cm、高台径3.7cmを測る。見込み部が広く、高台高は低く、全体的に器高も低い「くらわんか手」のタイプである。また、外面体部には、コンニャク印判によって菊花文が施されている。高台内は圏線がみられず、方形枠のない渦福の銘がみられる。大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。2は堺焼播鉢である。口径（推）33.2cm、器高13.7cm、底径16.4cmを測る。外面調整は、口縁部外縁帯直下まで回転ヘラケズリを施している。播目は右へまわし、9本単位で入れている。白神典之氏の分類Ⅰ型式2段階に属する。3は丹波焼大甕である。口径（推）38cmを測る。胎土は白色の礫を多く含み、色調はbrown (7.5 Y R 4/4) を呈する。その他には、大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する肥前磁器染付碗や三ツ巴軒丸瓦・丸瓦が出土していた。出土した肥前磁器碗には、青磁染付や広東型碗はみられないが、高台が「ハ」の字状に開く碗の蓋が出土していた。このことから、この遺構の年代観は、17世紀代の丹波焼甕を除いて、18世紀中頃～18世紀後半と考えられる。Ⅲ-2 b期に属する。

S E 02

S E 02は、S E 05の北西隣に位置する（第115図）。平面形は楕円形を呈し、長径1.31m、短径0.95m、深さ3.45mを測る。素掘りの井戸で、川口宏海氏の分類A I a型式に属する。出土した地点は、明治十九年に出された「酒造場絵図面届書写」によると、「洗い場」付近に位置し、「洗い場」のところに「⊕」の印しがあり、それに当たるであろう井戸（S E 04）を検出した。S E 04の年代観が20世紀初頭～20世紀前半であり、

いる。外面底部は離れ砂痕が残る。内面及び高台内内側はヨコナデ調整を施している。断面は土師質で、表面のみ炭素が吸着している。

図版41-10～12は、S V 15の埋土から出土した遺物である。小片で図化できなかった。10は京・伊賀・信楽焼系土瓶、11・12は伊賀・信楽焼系碗である。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。この時期には廃絶したと思われる。Ⅲ-3 a期に属する。

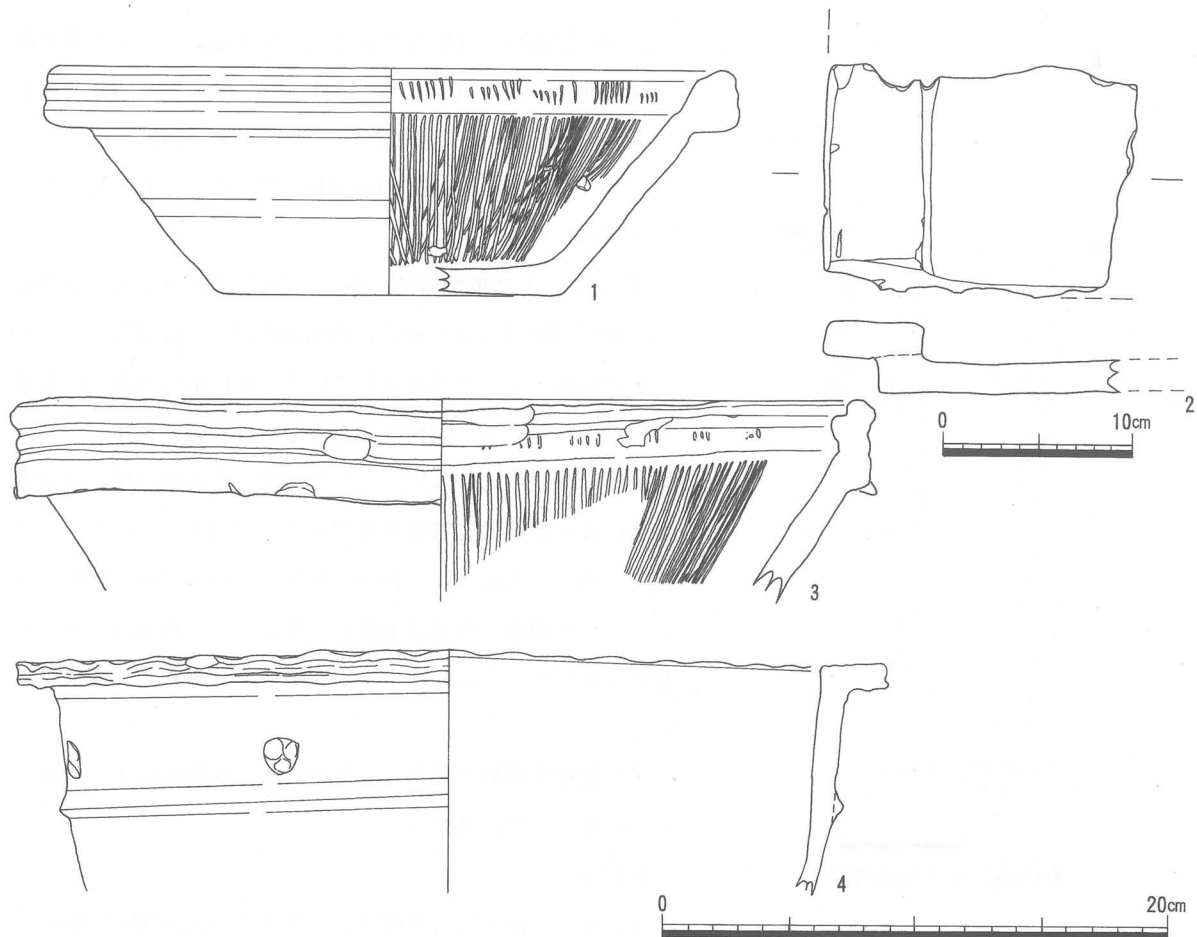
S E 05

S E 05は、南壁沿いの西側に位置する（第112図・図版30）。平面形は楕円形を呈し、長径1.45m、短径1.4m、深さ2.7m以上を測る。素掘りの井戸で、川口宏海氏の分類A I a型式に属する。

第110図-7は肥前磁器染付碗である。高台径3.7cmを測る。口径に比べて、高台径が小さくて、高台高の高いタイプである。外面体部の文様は、呉須による型紙摺りの雨降り文、手書きによる唐草文が描かれている。高台内は一重圏線内に「大明年製」の銘が一字一字独立してみられる。大橋康二氏の編年Ⅳ期に属するものである。その他には、肥前磁器コンニャク印判文碗や白神典之氏の分類Ⅰ型式1段階に属する堺焼播鉢が出土することから、18世紀前半～18世紀中頃と考えられる。よって、Ⅲ-2 b期に属する。

S E 03

S E 03は、西壁沿い南側に位置する（第113図・図版30）。平面形は円形を呈し、直径1.65m、深さ3.3m以上を測る。素掘りの井戸であるが、上部に瓦片が敷かれていた。川口宏海氏の分類A I b型式に属する。



第118図 SE07 (1・2)・SY08 (3)・SY09 (4) 出土遺物

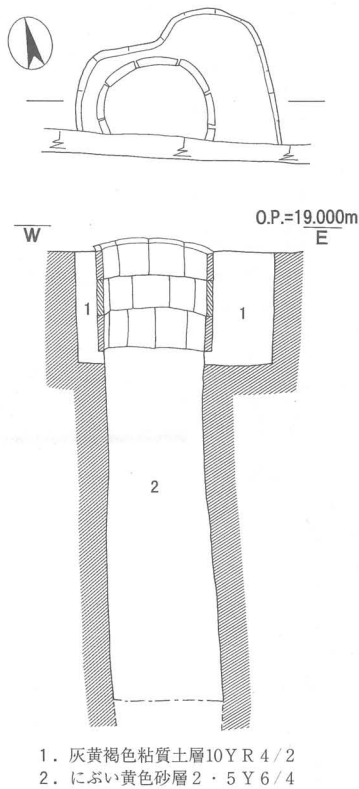
SE02の年代観から考えて、SE02廃絶後、新たにSE04を造り替えたと思われる。したがって、SE02は酒造用の井戸であったと思われる。

第116図-1は肥前磁器染付皿である。口径(推)13.4cm、器高2.6cm、高台径(推)8.8cmを測る。高台径が大きく、高台断面が三角形を呈するタイプのものである。口縁端部に口錆が施され、内面体部には、墨弾きによって唐草文、外面体部には連続唐草文が描かれている。大橋康二氏の編年Ⅲ期に属するものである。2は土師質土器である。壺の底部と思われる。底径(推)9cmを測る。器種は不明である。胎土は0.1cm位の礫を含み。色調は橙色(5YR7/6)を呈する。底部には糸切り痕がみられる。3は棧瓦である。全長26.5cm、幅28.3cm、厚さ1.7cmを測る。凸面は縦及び横方向にヘラミガキ調整、凹面は未調整である。4は軒丸瓦である。全長(残)37.6cm、瓦当部径(推)14cm、周縁部幅2.3cm、丸瓦部幅14.7cm、丸瓦部高6cm、厚さ1.9cmを測る。調整は、瓦当周縁部はヘラミガキ調整、丸瓦部凸面は縦方向にヘラミガキ調整、丸瓦部凹面は叩板調整であり、布目痕もみられる。瓦当面には雲母が付着している。その他には、大橋康二氏の編年Ⅴ期に属する肥前磁器染付碗・Ⅱ型式の大谷焼鉢(川口2000年)などが出土していた。

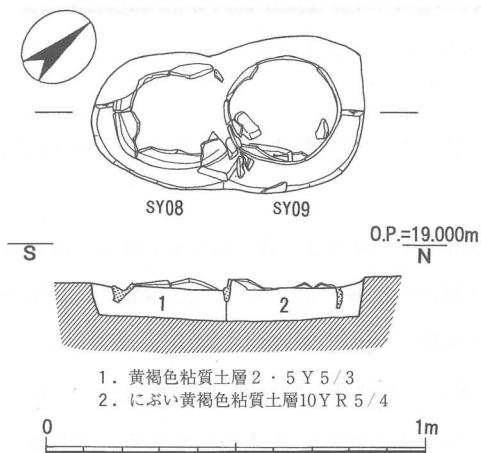
出土遺物を概観すると、17世紀後半のものもみられるが、廃絶時期は20世紀初頭と考えられる。Ⅲ-3～Ⅳ期に属する。

SE07

SE07は、東壁沿い南側に位置する(第117図・図版30)。平面形は楕円形を呈し、長径1.65m、短径1.45m、深さ3.9m以上を測る。構造は、井側上部に粘土を約15cmの幅で円形に巡らし、瓦・礫を交互に埋め込んでお



第119図 SE06遺構図



第120図 SY08・09遺構図

り、川口宏海氏の分類A I b型式に属する。SE07の東南隣には、同じような構造をもつSE503を検出している。SE503の年代観は先にも述べたが18世紀中頃～18世紀後半であり、このことから、SE503廃絶後、新たにSE07に造り替えたとと思われる。

第118図-1は堺焼播鉢である。口径(推)26.8cm、器高13cm、底径(推)9.1cmを測る。外面調整は、口縁部外縁帯やや下まで回転ヘラケズリを施している。播目は右方向へ、11本単位で入れている。白神典之氏の分類Ⅲ型式に属する。この堺焼播鉢は井戸内から出土したもので、その他には、肥前青磁染付蓋・肥前磁器雪輪草花文碗などが出土している。2は棧瓦である。全長(残)16.5cmを測る。凸面は縦及び横方向にヘラナデ調整、凹面は未調整である。この棧瓦は、井戸の基礎に使用された瓦である。この他には、平瓦が使用されている。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀前半と考えられる。Ⅲ-3期に属する。

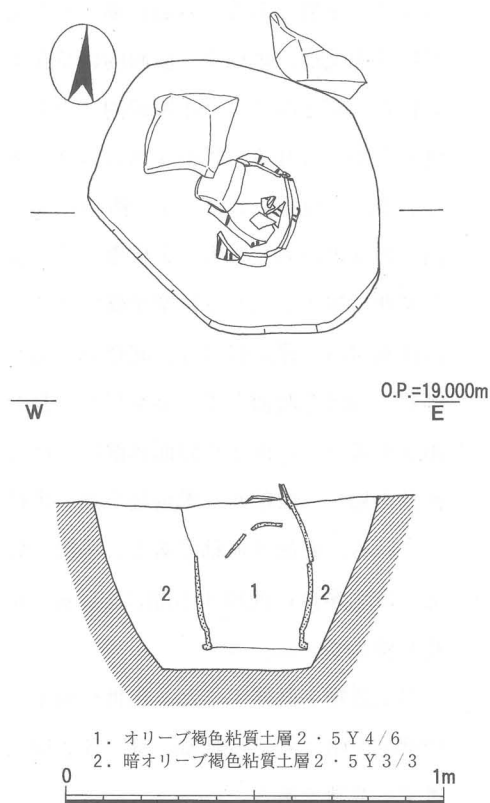
SE06

SE06は、南壁沿いの東端に位置する(第119図・図版30)。平面形は半円形を呈し、直径0.95m、深さ3.65m以上を測る。上部井戸瓦を3段積んだものである。この井戸は、調査区南側の昆陽口道に面した既存建物に伴うものである。出土遺物はなかったが、使用した井戸瓦には「金岡瓦宗」の刻印がみられる。この刻印のある瓦は、他の調査区でも確認されている。年代観は18世紀末以降といわれており(川口1999年)、このことから考えて、19世紀前半以降と思われる。Ⅲ-3期～Ⅳ期に属する遺構である。

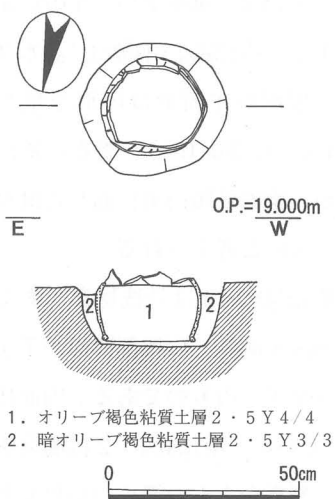
SY08

SY08は、北壁沿いの中央付近に位置する(第120図・図版30)。水琴窟遺構で、堺焼播鉢が使用されていた。掘形の平面形は不整形を呈し、長さ(残)0.35m、幅0.34m、深さ0.08mを測る。このように堺焼播鉢を水琴窟に使用している例は他の調査区でも検出されている(第51次調査区B-3区SY15)(藤井他1997年)。検出された地点は裏庭に位置する。また、SY08の付近では便槽桶や便槽甕が多く検出されていることから、便所使用後の手洗い用の排水処理施設として使用されていたと思われる。

第118図-3は堺焼播鉢である。口径33.8cmを測る。外面調整は、口縁部外縁帯直下まで回転ヘラケズリを施している。播目は右方向へ、8本単位で入れている。白神典之氏の分類Ⅰ型式2段階に属する。出土遺物はこの堺焼播鉢のみであるが、後述するSY09が19世紀前半～中頃であることから、18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。Ⅲ-3 a期に属する遺構である。



第121図 SY01遺構図



第122図 SY13遺構図

SY09

SY09は、SY08の北隣に位置する（第120図・図版30）。掘形の平面形は不整形を呈し、長さ0.4m、幅0.38m、深さ0.08mを測る。水琴窟遺構で、丹波焼植木鉢を使用していた。遺構の検出状況から、SY08廃絶後、新たにSY09に造り替えたと思われる。

第118図-4は丹波焼植木鉢である。口径34.8cmを測る。口縁は稜花状で、体部に一条の突帯を貼り付け、その上に丸形の粘土を貼り付けている。その他には遺物は出土しなかったが、このタイプの丹波焼植木鉢が伊丹郷町遺跡においてみられ始めるのは、19世紀前半～19世紀中頃である。よって、Ⅲ-3b期に属する遺構である。

SY07

SY07は、南壁沿いの東側に位置する（表1）。水琴窟遺構である。掘形の平面形は円形を呈し、直径0.8m、深さ0.08mを測る。SY07の検出地点は、南側昆陽口道に面した既存建物の床下に位置する。このことから、この既存建物を建てる際に廃絶したと思われる。また、SY07の東隣より、後述するSY13（水琴窟）を検出している。SY13が19世紀前半～中頃であり、位置的に既存建物に伴うものと考えられる。このことから、SY07廃絶後、新たにSY13を設置したと思われる。

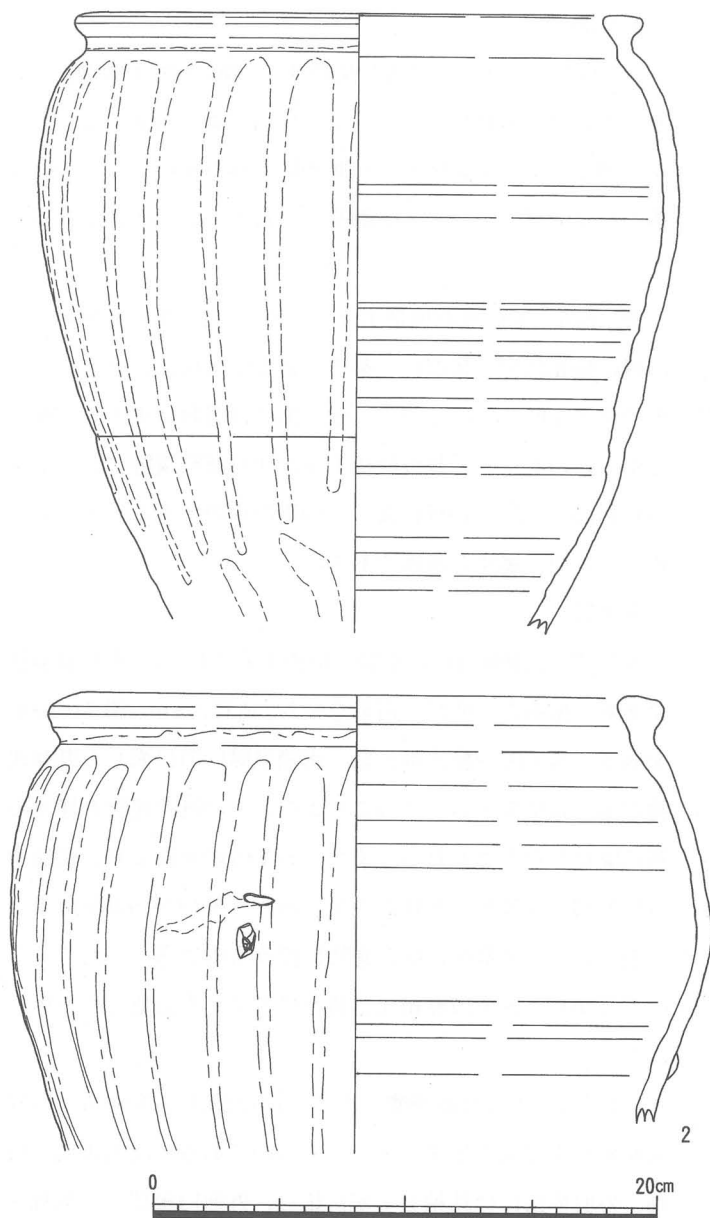
第123図-1は丹波焼甕である。口径22.6cmを測る。口縁部断面がT字型を呈するタイプのものである。内面体部に灰釉、外面体部には鉄釉を丁寧に施し、外面口縁部に黑色釉を流し掛けしている。

出土遺物の年代は、19世紀前半と考えられる。Ⅲ-3b期に属する遺構である。

SY01

SY01は、西南隅に位置する（第121図・図版31）。水琴窟である。掘形の平面形は不整形を呈し、長さ0.85m、幅0.75m、深さ0.43mを測る。上部は破損していたが、30cm程度の花崗岩が一緒に出土した。これは洞口付近に設置されていたものと思われる。また、地中に埋められた伏甕の中には、滴水が溜まるように肥前磁器染付皿が設置されていた。SY01を検出した地点は、明治十九年に出された「酒造場絵図面届書写」によると「空地」にあたる考えられ、北隣が「宅地」であることから、建物の裏側に設置されたと考えられる。さらに、SY01の東隣には便槽甕SW02を検出しており、便所使用後の手洗い用の排水処理施設として使用されていたと思われる。

第124図-1は肥前磁器染付皿である。口径13.2cm、器高3.4cm、高台径8.7cmを測る。蛇ノ目凹型高台をも



第123図 S Y07 (1)・S Y13 (2) 出土遺物

つ深めの中皿である。内面に描かれた文様は区画文様に亀甲文、区画内に草花文を描き、見込みには一重圏線内に松文・唐草文がみられる。外面文様は岩文である。また、見込みには「正・佛・高・角・山」の朱書がみられる。大橋康二氏の編年V期に属する。8は信楽焼甕である。口径36.4cm、器高47.7cm、底径18.6cmを測る。口縁部断面がT字型を呈し、長い頸部をもつ。内面から外面体部にかけて鉄釉を施し、肩部から黒色釉を流し掛けしている。底部は無釉である。また、底部には水琴窟に使用する際に3.8cmの穿孔を施している。

出土遺物を概観すると、19世紀前半～19世紀中頃と考えられる。Ⅲ-3b期に属する遺構である。

S Y13

S Y13は、東南隅のS Y07の東隣に位置する(第122図・図版31)。水琴窟である。掘形の平面形は円形を呈し、直径0.4m、深さ0.15mを測る。先にも述べたが、南側昆陽口道に面した既存建物に伴うものと考えられる。

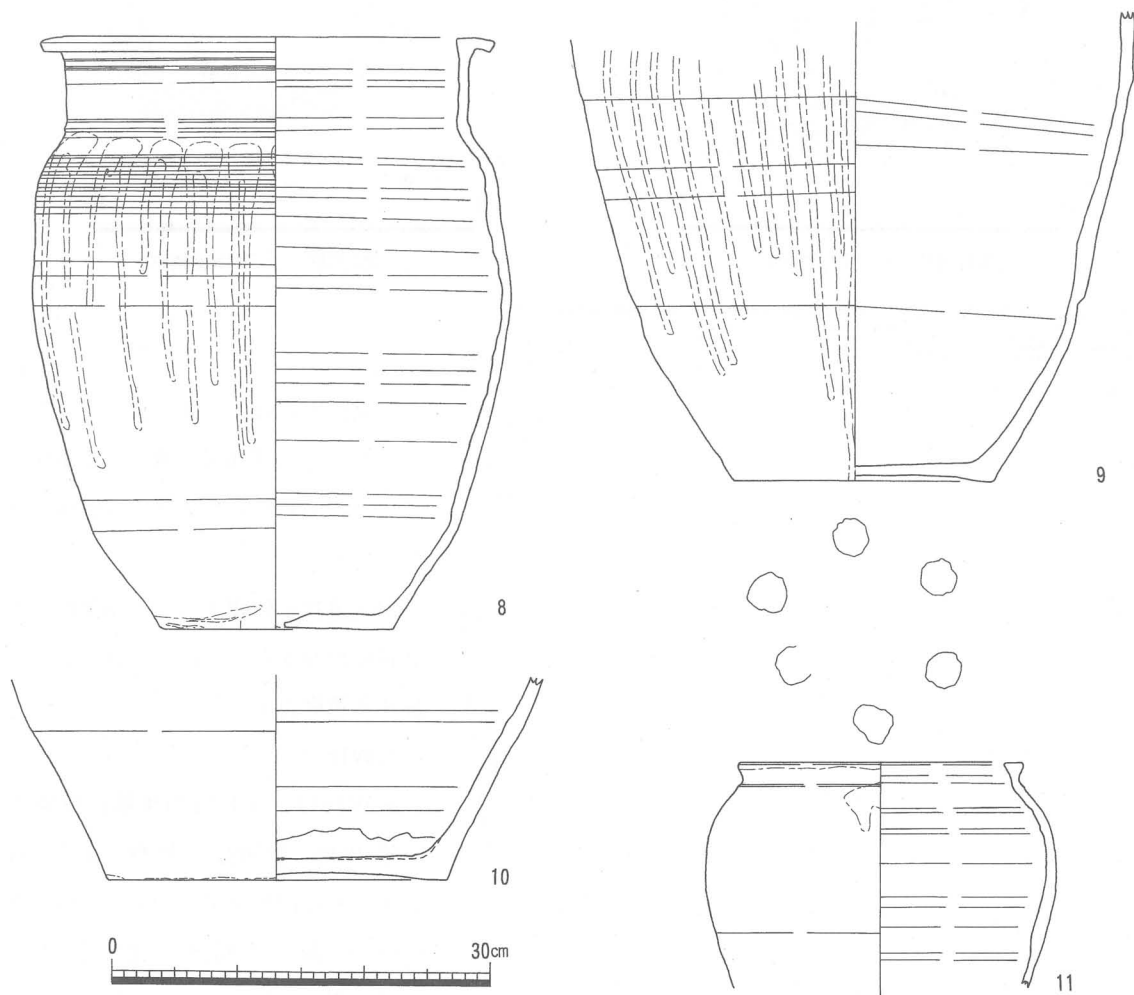
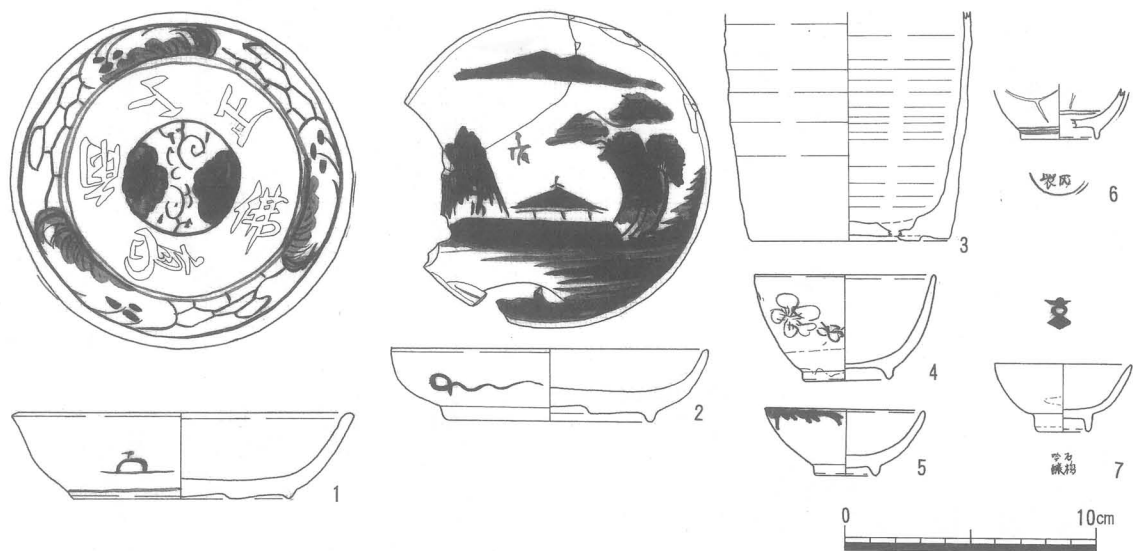
第123図-2は丹波焼甕である。口径21.6cmを測る。口縁部断面がT字型を呈するタイプのものである。内面体部に灰

釉、外面体部には鉄釉を丁寧に施し、外面口縁部に黒色釉を流し掛けしている。第124図-2は肥前磁器染付皿である。口径(推)12.7cm、器高3cm、高台径8.2cmを測る。蛇ノ目凹型高台をもつ深めの中皿である。内面は楼閣山水文が一枚の絵で描かれ、外面体部には流水文がみられる。また、口縁端部に口鏝が施されている。大橋康二氏の編年V期に属する。3は丹波焼瓶である。底径7.9cmを測る。内面は無釉で、外面に塗土を施している。底部には3mm程の穿孔がみられ、植木鉢として転用されたと思われる。

S U11

出土遺物を概観すると、19世紀前半～19世紀中頃である。よって、Ⅲ-3b期に属する遺構である。

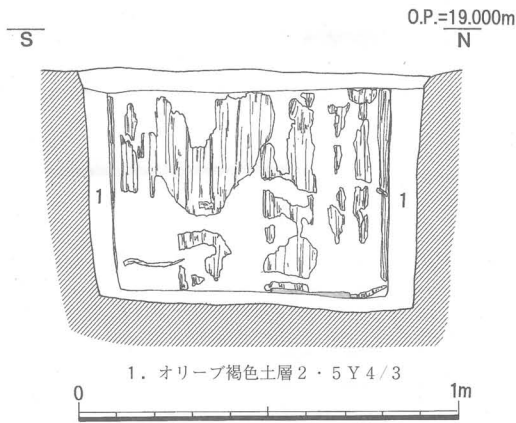
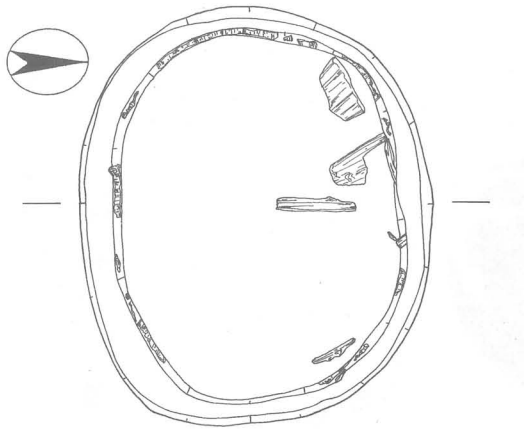
S U11は、北壁沿いの中央付近にあるS Y08・09の南東側に位置する(第125図・図版31)。埋桶である。掘形の平面形は楕円形を呈し、長径1.1m、短径0.93m、深さ0.6mを測る。先にも述べたが、検出した付近には多くの水琴窟や便甕がみられる。S U11内には白色の付着物がみられることから便槽と思われる。この桶の西側では既存建物に伴う大谷焼便槽甕(S W12・18)を、東側には丹波焼便槽甕(S W17)・備前焼便槽



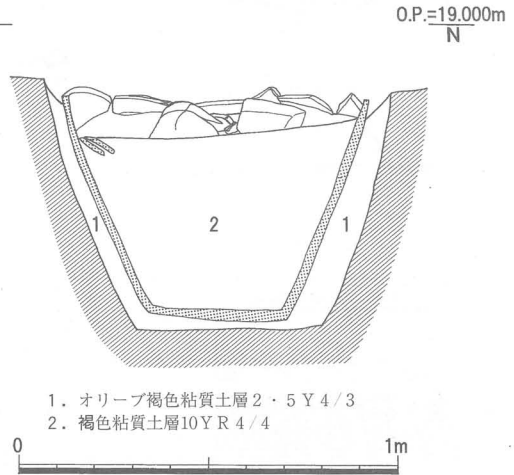
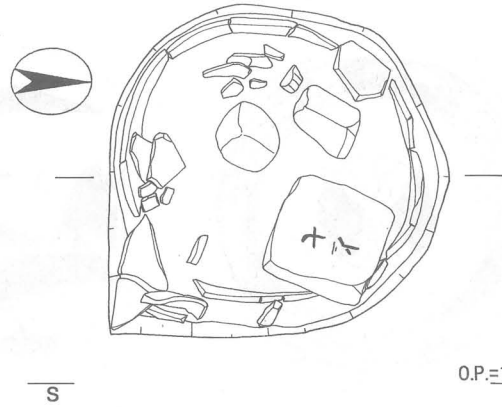
第124図 SY01 (1・8)・SY13 (2・3)・SU11 (4・6)・SW16 (5)・
SW02 (7・9)・SW14 (10)・SW82 (11) 出土遺物

大甕 (SW16) が検出されており、何回か造り替えられていることがわかった。

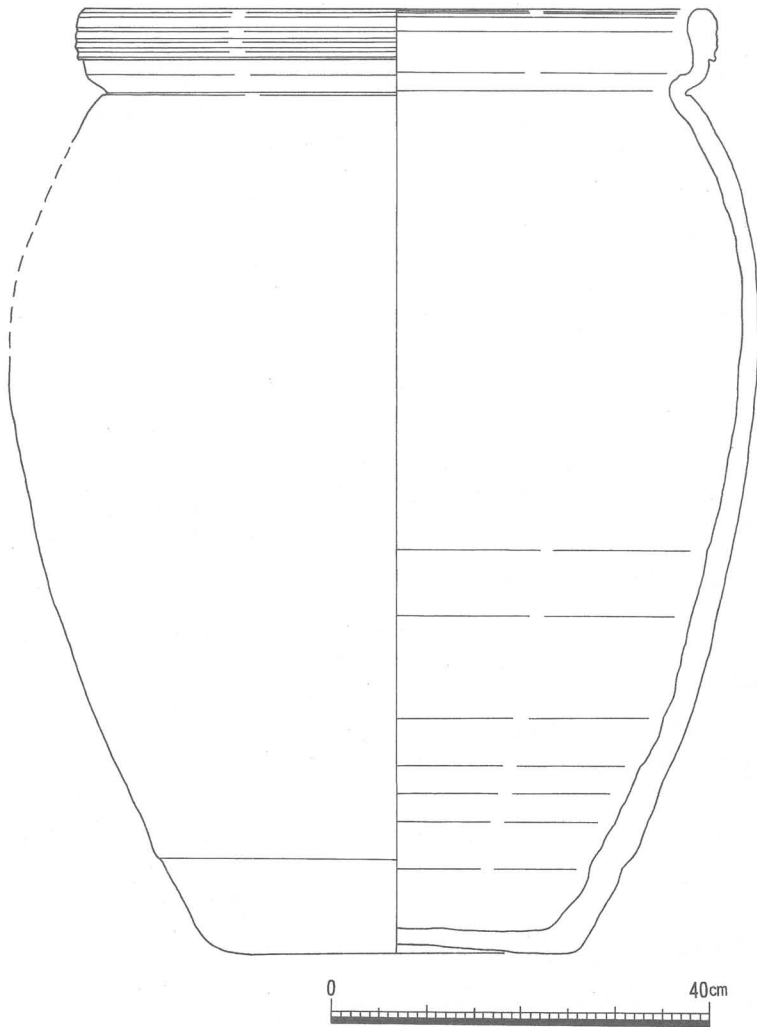
第124図-4・6は埋土から出土したものである。4は、京焼系陶器小碗である。口径(推)7.1cm、器高4.3cm、高台径(推)3.4cmを測る。内面から高台脇上まで白色釉を施し、鉄絵で桜花文を描いている。6は肥前磁器染付猪口である。高台径(推)3.1cmを測る。器壁は薄くて、外面にみられる呉須の発色も良好であ



第125図 SU11遺構図



第126図 SW16遺構図



第127図 SW16出土遺物 (2)

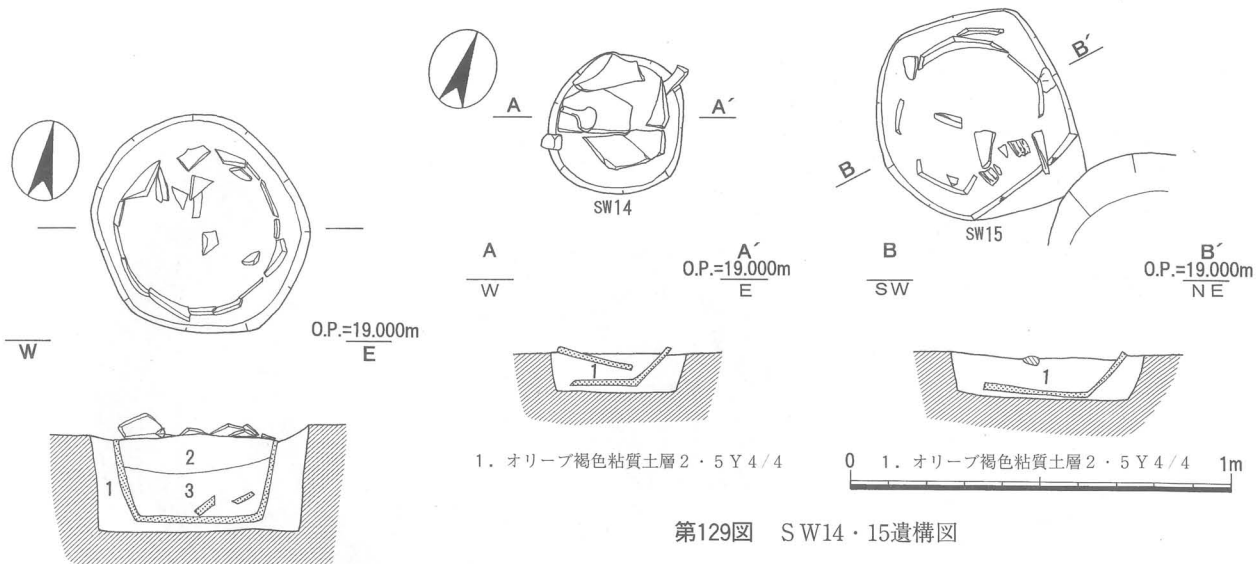
る。高台内には銘「成・製」がみられることから、「大明成化年製」の銘が施されていたと思われる。体部には焼継ぎ痕がみられる。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。Ⅲ-3 a 期に属する遺構である。

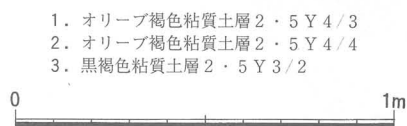
SW16

SW16は、SU11の東隣に位置する(第126図・図版31)。埋甕である。掘形の平面形は円形を呈し、直径0.9m、深さ0.65mを測る。備前焼大甕を使用したもので、甕内には白色の付着物が付着していた。

第124図-5は肥前磁器染付小杯である。埋土から出土したものである。口径(推)6.4cm、器高2.7cm、高台径2.7cmを測る。高台断面がU字型を呈するタイプである。外面口縁部には笹文が描かれて



第129図 SW14・15遺構図



第128図 SW02遺構図

いる。高台畳付は無釉である。大橋康二氏の編年IV期に属する。その他には、大橋康二氏の編年IV期に属する肥前磁器染付碗や京・伊賀・信楽焼系蓋などが出土した。

第127図は備前焼大甕である。口径67 cm、器高100.8 cm、底径38 cmを測る。口縁部はやや内傾気味に立上り、体部のふくらみは弱いタイプのものである。慶長十五年（1610）の紀年銘をもつ備前焼大甕と器形が似ている（備前市教育委員会1998年）。

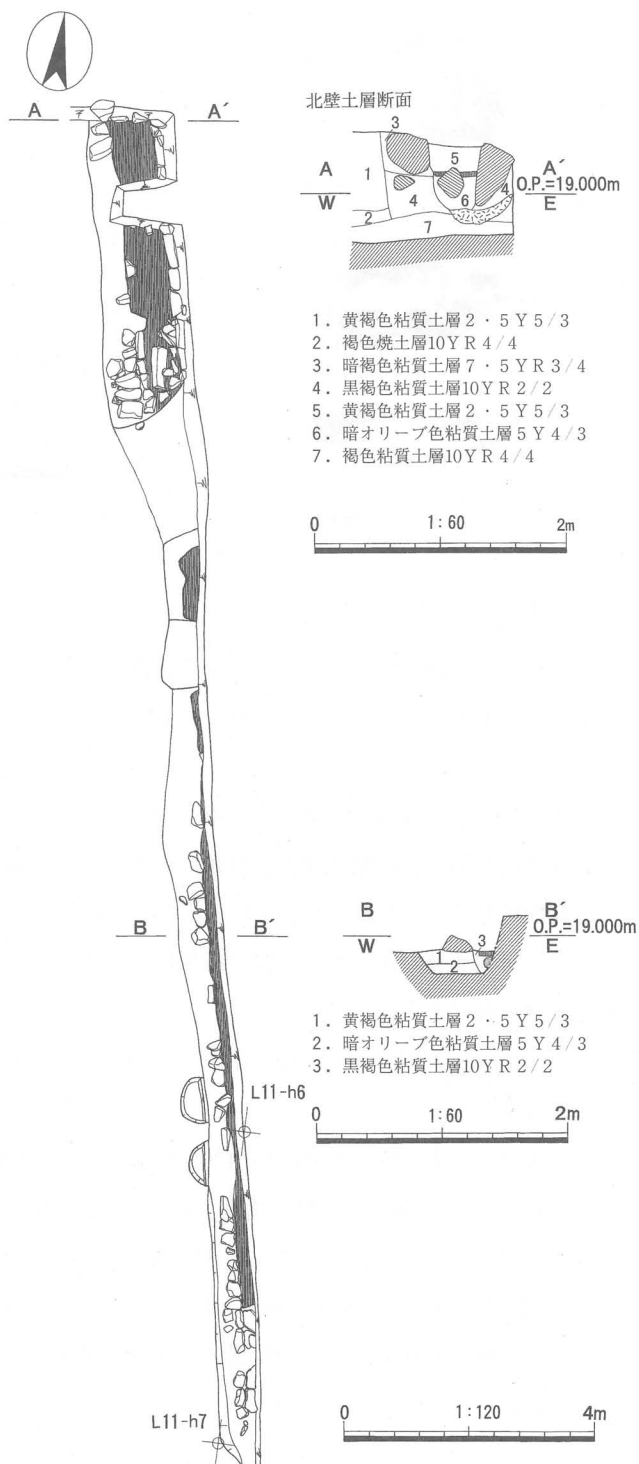
出土遺物のうち、備前焼大甕は17世紀初頭ごろのものであるが、甕内埋土から出土した遺物は18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。Ⅲ-3 a 期に属する遺構である。

SW82

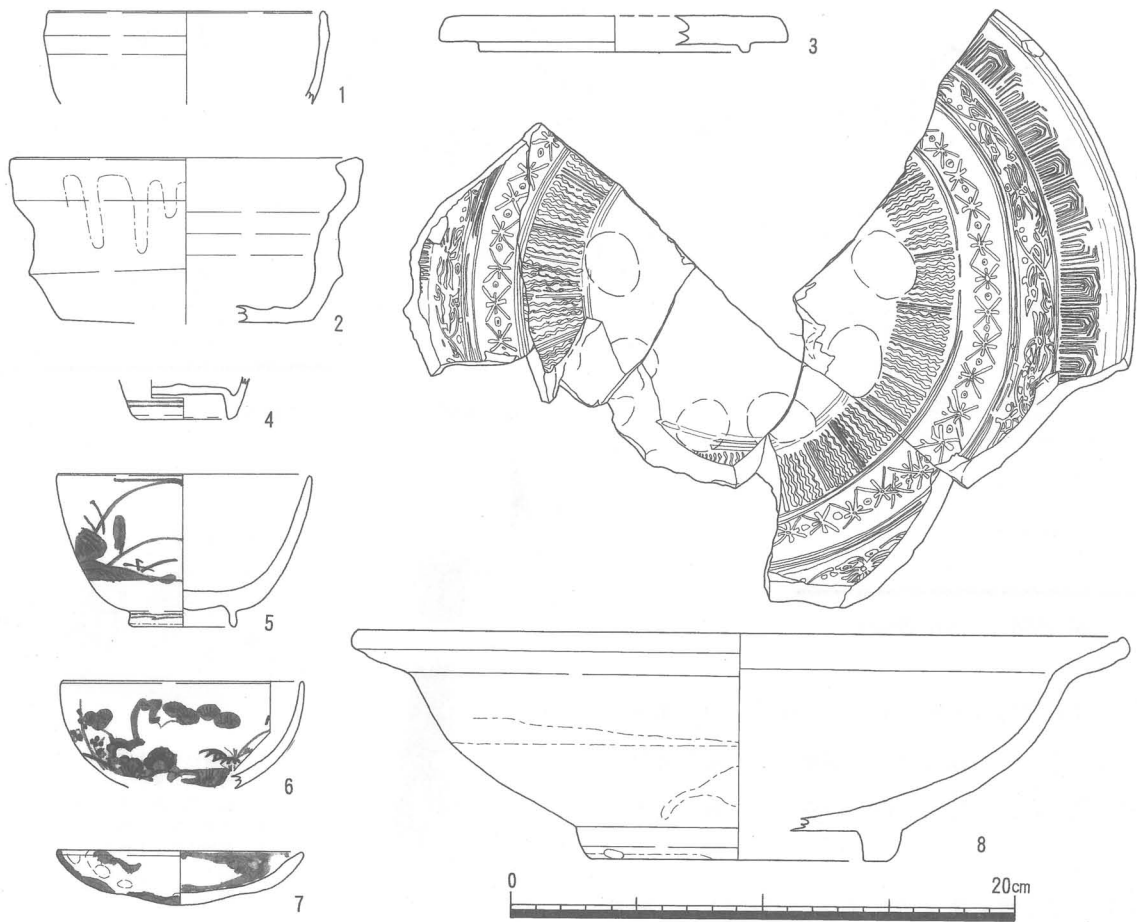
SW82は、東壁沿い北側のSV06の南東側に位置する(表1)。埋甕である。掘形の平面形は不整形を呈し、長さ0.8m、幅0.6m、深さ0.1mを測る。

第124図-11は丹波焼甕である。口径(推)20.6 cmを測る。口縁部断面がT字型を呈するタイプのものである。内面体部から口縁部外面にかけて灰釉、外面体部には鉄釉を丁寧に施し、外面口縁部に灰釉を掛けている。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。Ⅲ-3 a 期に属する遺構である。




第130図 SD07遺構図



第131図 S D01 (1・2)・S D02 (3)・S D07 (4～8) 出土遺物

SW02

SW02は、西南隅のSY01の東隣に位置する(第128図・図版31)。掘形の平面形は円形を呈し、直径0.57m、深さ0.25mを測る。先にも述べたが、検出した地点は宅地の裏側に位置し、SY01に伴う便槽甕と思われる。

第124図-7は、瀬戸磁器染付小杯である。埋土から出土したものである。口径(推)5.4cm、器高2.8cm、高台径2cmを測る。器壁は薄く、呉須の発色も良好である。高台内には「石橋吟醸」の銘があり、見込みには古菱の屋号である「」がみられる。この銘入りの小杯は、第117次調査A-7区SK118でも出土している。9は、丹波焼甕である。底径20.7cmを測る。内面体部に灰釉、外面体部には鉄釉を丁寧に施している。外面底部は無釉である。

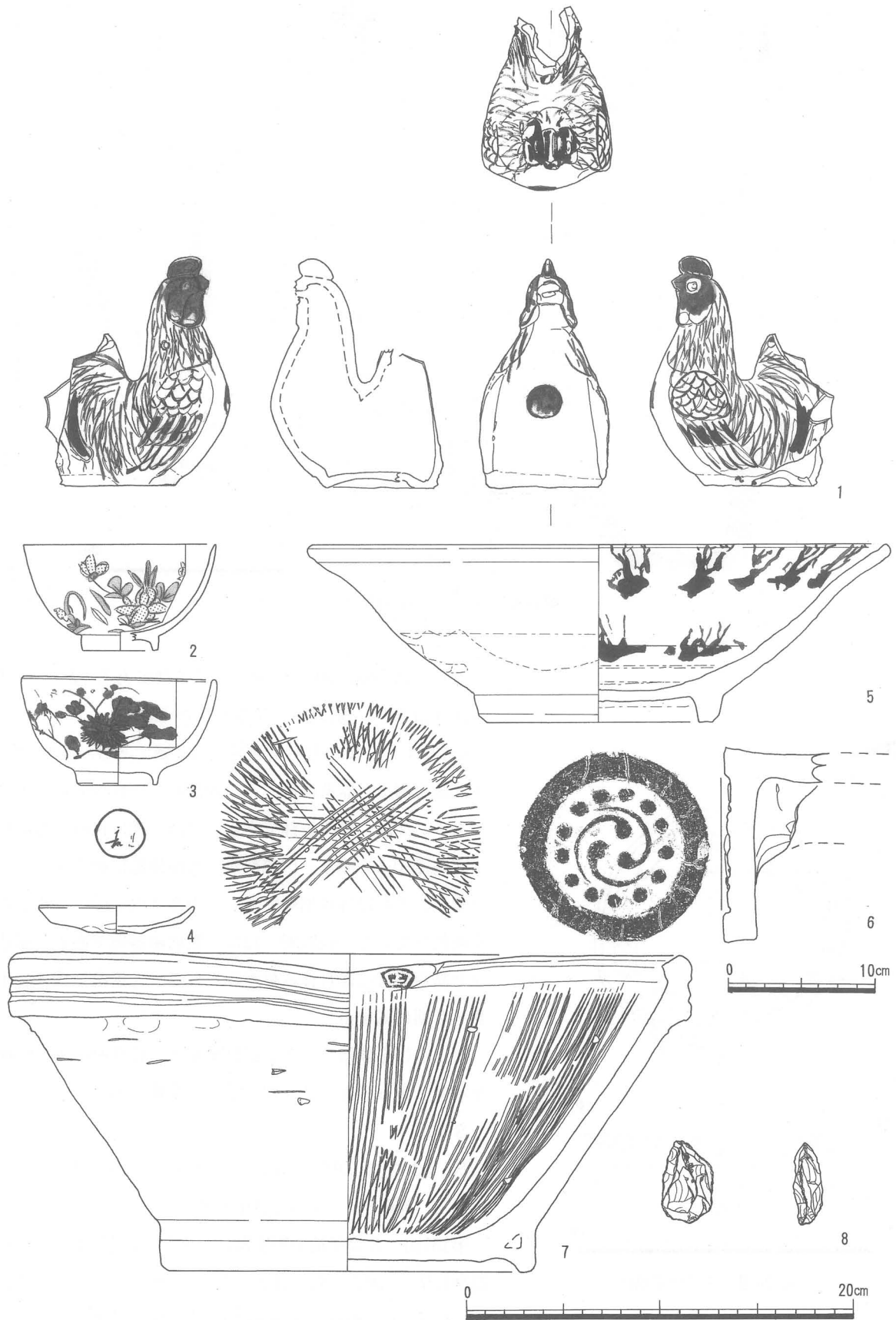
出土遺物を概観すると、19世紀前半～20世紀初頭と考えられる。Ⅲ-3b～Ⅳ期に属する遺構である。

SW14

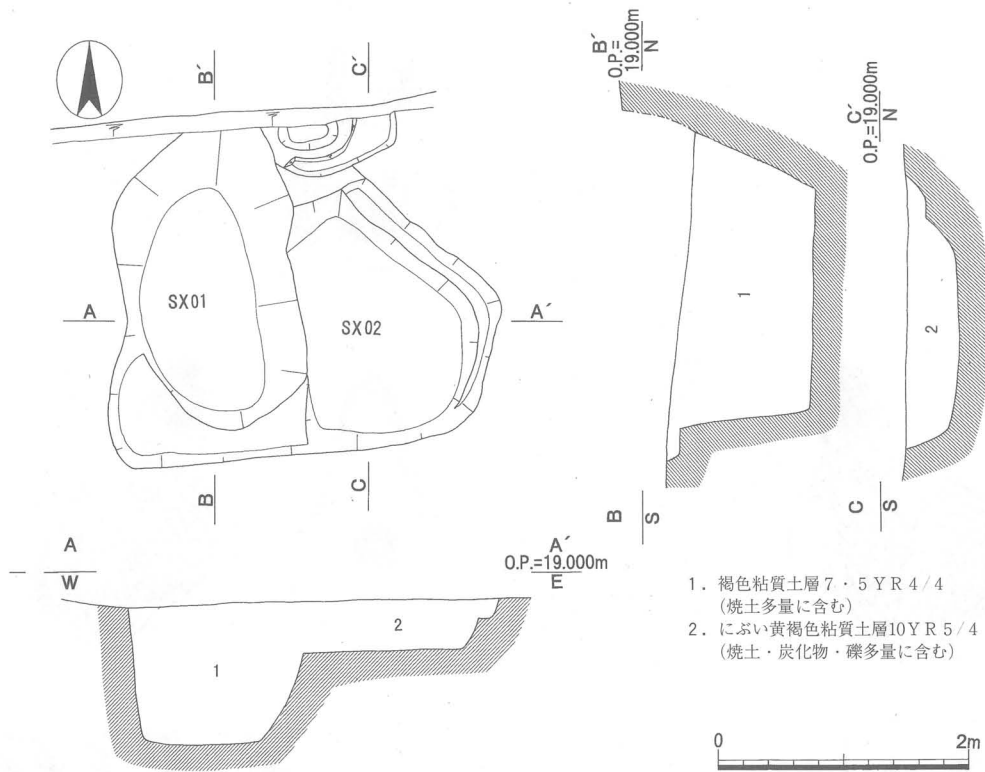
SW14は、東南隅のSE07の南側に位置する(第129図・図版31)。掘形の平面形は円形を呈し、直径0.35m、深さ0.1mを測る。便槽甕遺構である。このSW14は既存建物の便所位置と一致する。また、SW14の東隣にもSW15を検出しており、既存建物を建てる際造り替えられたと思われる。

第124図-10は大谷焼鉢である。底径(推)27.2cmを測る。内面から外面体部にかけて塗土が施されている。出土遺物を概観すると、19世紀末～20世紀前半と考えられる。Ⅳ期に属する遺構である。

SD01



第132図 SK139 (1) 出土遺物・SK102 (2~8)



第133図 SX01・02遺構図

S D01は、西壁中程から東へ延びる溝である(表1)。検出長8m以上、幅1.1m、深さ0.1mを測る。

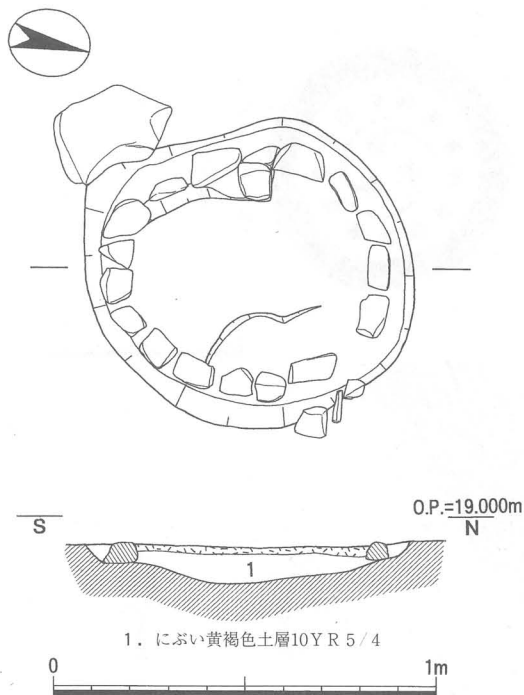
第131図-1は、瀬戸・美濃焼天目茶碗である。口径(推)10.9cmを測る。器壁は薄く、口縁部のくびれは弱いタイプである。2は、丹波焼鉢である。口径(推)14cm、器高6cm、底径10cmを測る。口縁部から外面体部に塗土をかけているが、それ以外は無釉である。内面は火を受けたためか白く変色していた。図版39-12は、肥前磁器碗である。見込みと高台畳付に砂目積み痕がみられる。大橋康二氏の編年II-2期に属する。

出土遺物を概観すると、17世紀初頭~17世紀後半の時期を示す。III-1a~2a期に属する遺構である。

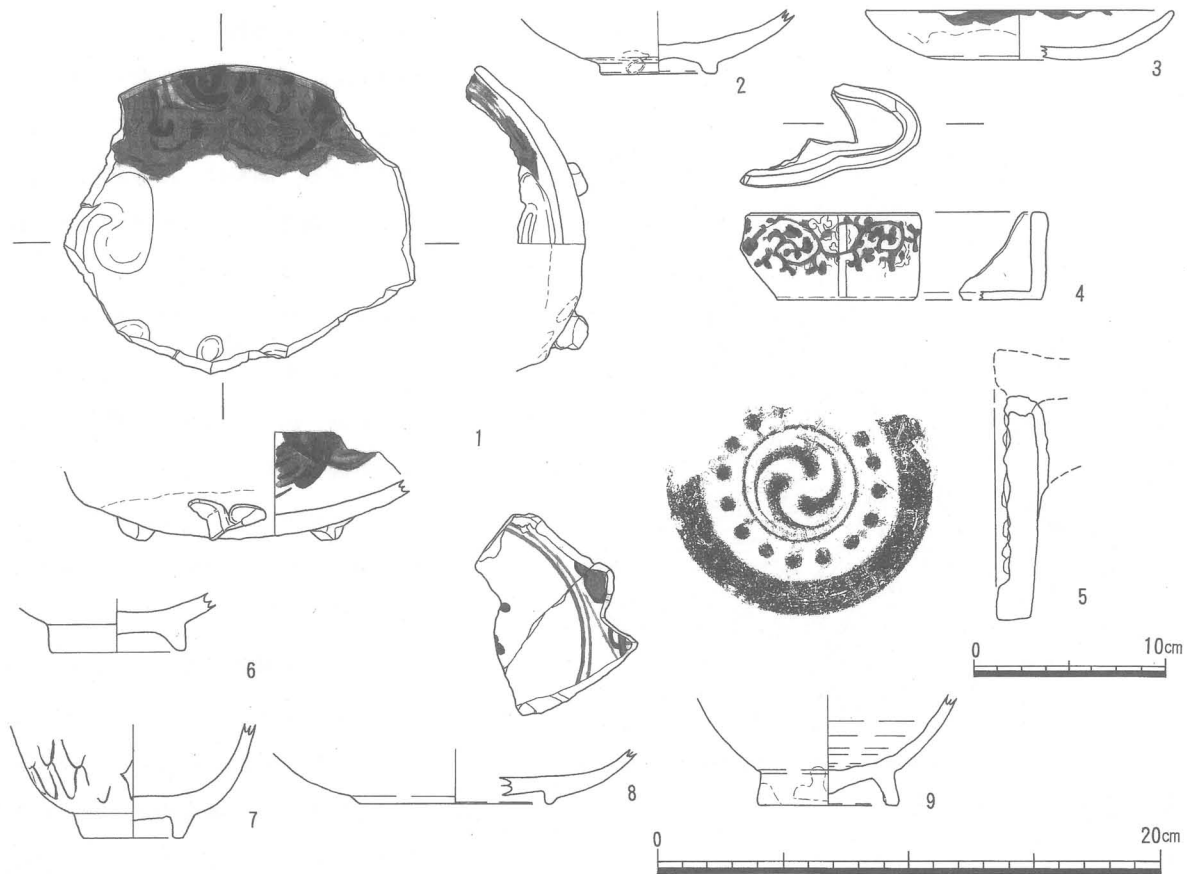
S D02

S D02は、S D01の南側に位置する(表1)。検出長3.2m以上、幅0.8m、深さ0.11mを測る。

第131図-3は産地不明陶器蓋である。口径(推)10.6cm、器高1.5cmを測る。胎土は、0.1cm位の礫を多く含み。色調は、deep reddish orange10R4.5/10を呈する。その他には、平瓦が出土していた。下層には18世紀後半~19世紀前半のS K696があり、これ以上の年代観と思われる。



第134図 SX10遺構図



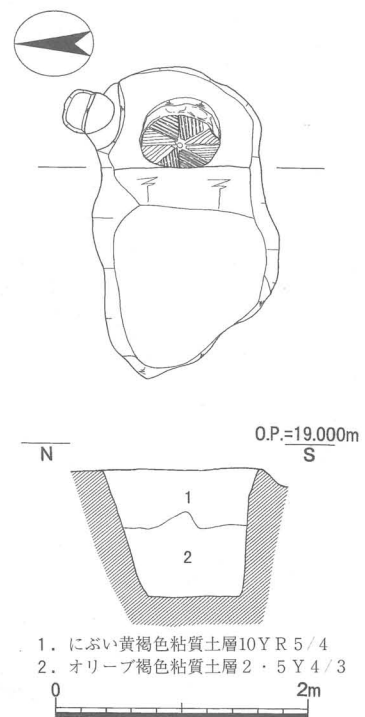
第135図 SK57 (1)・SX01 (2~4)・SX02 (5)・SX10 (6)・SX03 (7)・SX42 (8・9) 出土遺物

Ⅲ-3b期に属する遺構である。

SD07

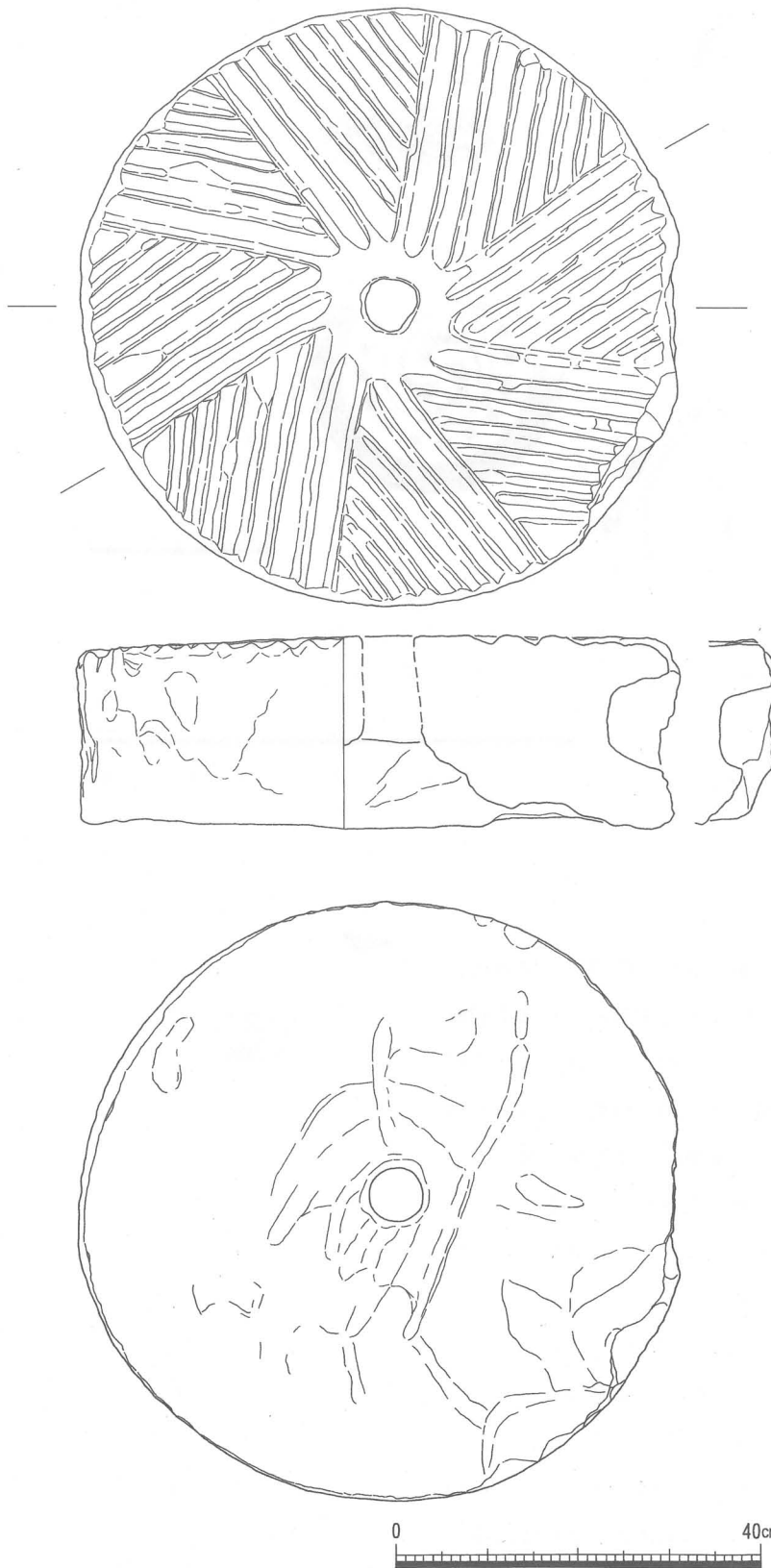
SD07は、調査区東壁沿いに位置する(第130図・図版32)。屋敷境背割石組溝である。検出長22m、幅1.4m、深さ0.6mを測る。北壁土層断面を観察すると、2度造り替えられていることが分った。最初は、素掘溝で、溝底に漆喰が敷かれていた。2時期目は、30cm程度の花崗岩を利用し石積溝に造り替えている。3時期目は、東側の石積を積み替え、その際、溝幅を縮小し、溝底をコンクリート敷に造り替えている。

第131図-4は、瀬戸・美濃磁器染付猪口である。この遺物は、3時期目に造り替えた東側石積の掘形(北壁土層断面第4層)から出土したものである。高台径3.7cmを測る。高台は削り出し高台で、器壁も薄い。5~8は、1時期目の素掘溝の埋土(第77図北壁土層第6層)から出土したものである。5・6は、肥前磁器染付碗である。5は、口径(推)11cm、器高6.4cm、高台径4.2cmを測る。器形は、口径に比べて、高台径が小さく、高台高が高いタイプのものである。外面体部の文様は水草文である。大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。6は、半球型碗である。大きさは、口径(推)9.5cmを測る。器壁は薄く、呉須の発色も良好である。外面に描かれた文様は松竹梅文である。大橋康二氏の編年Ⅳ期に属す



- 1. にぶい黄褐色粘質土層10YR 5/4
- 2. オリーブ褐色粘質土層2・5Y 4/3

第136図 SX42遺構図



第137図 S X42出土遺物

る。7は、土師質土器灯明皿である。口径9.8cm、器高2.2cmを測る。胎土は精密で、色調はにぶい橙色7.5Y R 7/3を呈する。調整は、口縁部内外面はヨコナデ調整、底部は指頭圧調整を施している。川口宏海氏の分類I T・1型式A類に属する。8は、唐津系陶器三島手鉢である。口径(推)30.4cm、器高9cm、高台径11.8cmを測る。高台畳付外周を面取りするタイプのものである。見込みには、円形の砂目積み痕が6個みられた。大橋康二氏の編年IV期に属する。

出土遺物を概観すると、17世紀後半～20世紀に属する。このことから、1時期目は17世紀後半に造られ、18世紀中頃～18世紀後半頃埋め戻され、石積溝に造り替えられる。その後、20世紀頃にコンクリート敷に造り替えられていることがわかった。Ⅲ-2b期～IV期に属する遺構である。

S K139

S K139は、調査区中程の南側に位置する(表1)。平面形は円形を呈し、直径0.8m、深さ0.21mを測る。


第132図-1は肥前磁器色絵鶏型水滴である。器高11.8cm、幅6.7cm、厚さ0.5cmを測る。型造り成形で、底部には布目がみられる。両羽根の部分には黒色釉で縁取りし、その中には緑色釉を施している。それ以外のところは赤絵である。大橋康二氏の編年Ⅲ期に属する。この他には、口径に比べて、高台径が小さく、高台高が高いタイプの肥前磁器染付碗・肥前磁器染付鶴首形徳利など大橋康二氏の編年Ⅲ期からIV期に属するものなどが出土していた。

出土遺物を概観すると、17世紀中頃

～17世紀末と考えられる。Ⅲ－1 b～2 a期に属する遺構である。

S K 102

S K 102は、S E 07の西側に位置する（表1）。平面形は不整形円形を呈し、長径0.99m、短径0.96m、深さ0.45mを測る。18世紀前半～18世紀中頃の遺物が多量に出土し、これらの遺物を計測分類している（第4章第2節第148図）。

第132図－2は、肥前磁器色絵碗である。口径（推）10 cm、器高5.5 cm、高台径3.8 cmを測る。口径に比べて、高台径が小さく、高台高が高いタイプで、器壁も薄い。外面体部には赤・緑色で草花文が描かれている。3は、肥前磁器染付碗である。口径9.8 cm、器高5.7 cm、高台径4 cmを測る。器形は、口径に比べて高台径が小さくて高台高が低いタイプのものである。外面体部に描かれた文様は菊梅文である。また、高台内には一重圏線内に二字連続にして書かれた「大明 年製」銘がみられる。2・3共に大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。S K 102からは、3のような器形のタイプの碗類と、見込み部が広くて高台高は低く、全体的に器高も低いタイプのもので大きく2分される。出土した碗類の中には、見込みに蛇ノ目釉ハギされたものもあり、見込み部が広くて高台高は低く、全体的に器高も低いタイプのものにみられた。これら碗類に多くみられる文様は、外面体部に雪輪草花文、高台内には一重圏線が描かれているものが比較的多くみられた。また、この遺構からは、肥前青磁染付碗や広東型碗は出土していない。4は、土師質土器皿である。口径（推）4 cm、器高1.5 cmを測る。胎土は精密で、色調はにぶい橙色（7.5 Y R 7 / 3）を呈する。調整は、口縁部内外面はヨコナデ調整、外面底部は指頭圧調整を施している。川口宏海氏の分類 I T・1 型式 A 類に属する。5は、唐津系陶器刷毛目文鉢である。口径（推）29.5 cm、器高9.2 cm、高台径11.6 cmを測る。高台畳付外周を面取りし、見込みには蛇ノ目釉ハギがみられた。大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。6は軒丸瓦である。全長（残）7.4 cm、瓦当部径13.4 cm、文様区径9.5 cm、内区径5.5 cm、周縁部幅1.9 cm、瓦当部厚2 cmを測る。調整は、瓦当周縁部はナデ調整、周縁部側面と瓦当部裏面は周縁に沿ってナデ調整を施している。瓦当部裏面には丸瓦部との接合部にナデ調整、瓦当から丸瓦凸面へは縦方向にヘラナデ調整を施している。瓦当文様は、内区に左巻き三ツ巴文、外区には連珠を13個配する。7は、堺焼播鉢である。口径（推）34.5 cm、器高16.3 cm、高台径18.5 cmを測る。高台を有するタイプである。外面調整は、口縁部外縁帯直下まで回転ヘラケズリを施している。播目は左回りに、11本単位で入れられている。内面口縁部に「」の刻印がみられる。白神典之氏の分類 I 型式 1 段階に属する。8は、火打石である。長さ4.3 cm、幅2.6 cm、厚さ1.5 cm、重さ15.8 gを測る。石材はチャートで、色調はlight bluish gray（10 B G 7 / 1）を呈する。形状は不整形円形で、側縁全周に打撃痕がみられる。

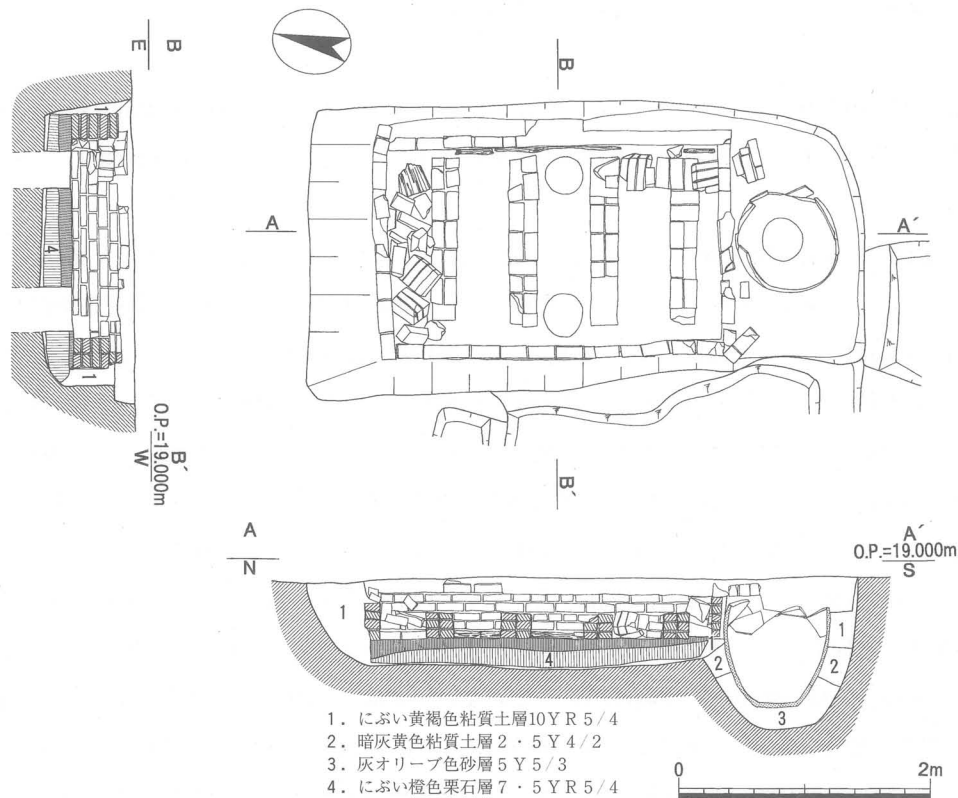
出土遺物を概観すると、18世紀前半～18世紀中頃と考えられる。Ⅲ－2 b期に属する遺構である。

S K 57

S K 57は、調査区中程に位置する（表1）。平面形は不整形を呈し、長さ2.85 m、幅2.11 m以上、深さ0.52 mを測る。

第135図－1は、美濃焼変形皿である。残存長13.7 cm、器高4.7 cmを測る。型打成形で、底部には3足の脚部がみられる。内面から外面口縁部付近まで灰釉が施されて、内面体部の半分には鉄釉が掛けられている。その他には、大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する肥前磁器染付碗や大平 茂氏の編年Ⅶ型式（大平1992年）に属する丹波焼播鉢が出土しており、18世紀末に属する遺物がみられないことから、この遺構の年代観は18世紀後半と思われる。よって、Ⅲ－2 b期に属する。

S X 01・02

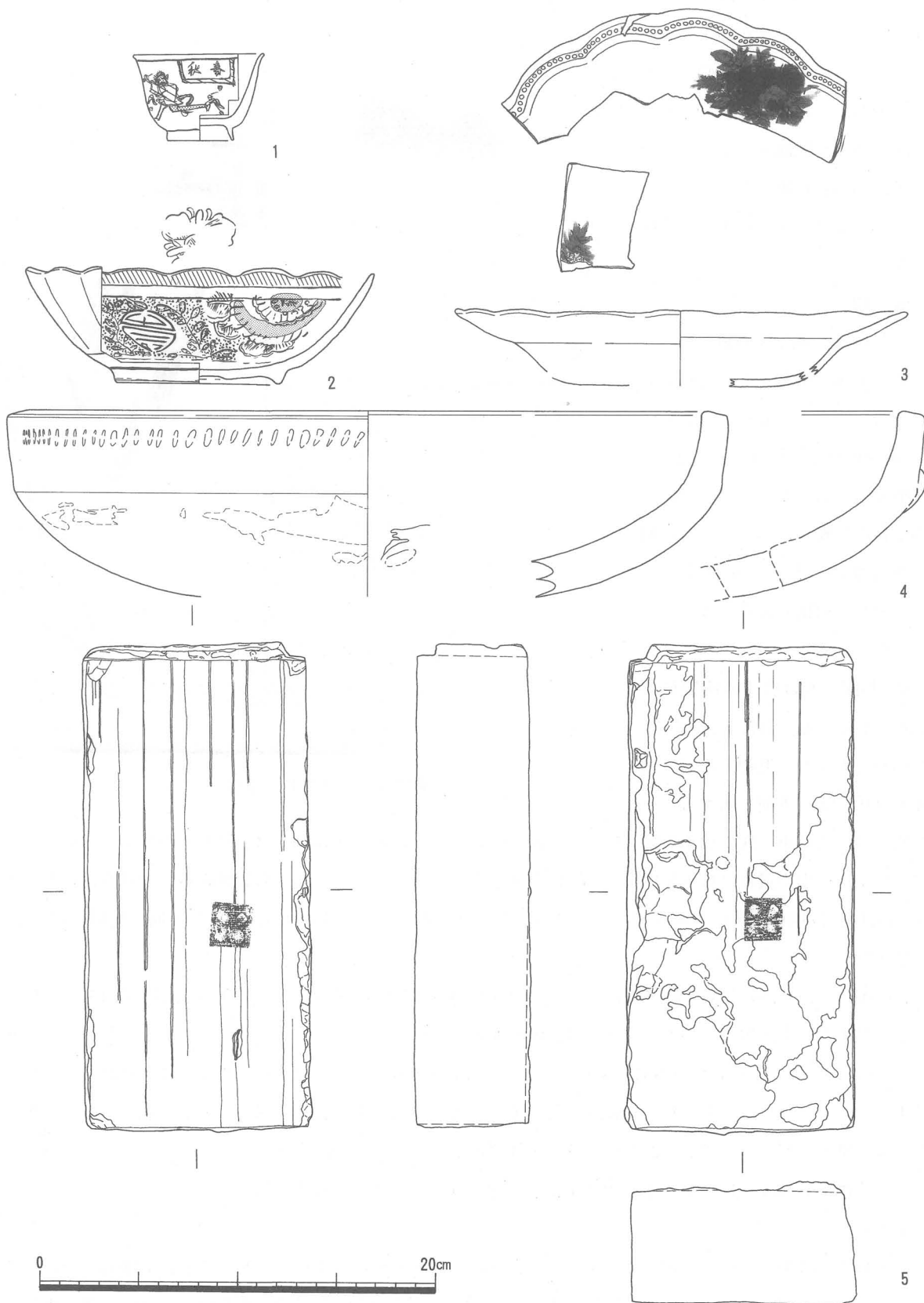


第138図 S X 17遺構図

S X 01・02は調査区北西隅に位置する（第133図・図版32）。S X 01の平面形は長楕円形を呈し、長径2.6m以上、短径1.4m、深さ1.1mを測る。酒搾り用の船場遺構と考えられる。この遺構東側に接する形でS X 02が検出された。S X 02の平面形は不整形を呈し、長さ2.25m以上、幅1.5m以上、深さ0.45mを測る。先にも述べたが、形状からおそらく垂壺の掘形遺構と思われる。一槽さし単基型となると考えられ、小長谷正治・川口宏海氏の分類の1類に属する。S X 01・02の埋土からは多量の焼土・炭化物が出土されたことから、火災後の焼土をここに処理したと思われる。ここから出土した遺物の年代観から、元禄十二年（1699）・元禄十五年（1702）の火災に伴うものと思われる。このことから、17世紀末～18世紀初頭までには、ここで酒造業を営んでいることがわかった。また、先に述べた第3次面S X 542（酒搾り用の船場遺構）も同時期のものであり、検出地点も近いことから、平行して使用されていたと考えられる。

第135図-2～4はS X 01から出土したものである。2は、嬉野焼青緑釉皿である。高台4.6cmを測る。高台内の削りは、高台脇と同じ高さまで削られている。高台脇から高台内にかけて無釉である。4は、肥前磁器染付鬚水入れである。型造り成形で、全長（残）7cm、幅（残）3.6cm、器高3.5cmを測る。外面には陽刻と染付で蛸唐草文を描いている。2・4共に、大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。3は、土師質土器柿釉灯明皿である。口径（推）12.2cm、器高2cmを測る。胎土はやや荒く、0.1mm程度の礫を含む。色調は橙色5 Y R 9/6を呈する。調整はロクロ成形で、外面は丁寧に回転ヘラケズリ調整を施し、内面から外面口縁部にかけて透明釉を掛けている。口縁部には煤が付着している。その他は、大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する肥前磁器染付碗・京焼風陶器碗・難波洋三氏の分類E類に属する土師質土器焙烙が出土していた。

第135図-5は、S X 02から出土した軒丸瓦である。瓦当部径（推）14.2cm、内区径6.5cm、周縁部幅1.8cm、瓦当部厚1.8cmを測る。調整は、瓦当周縁部はナデ調整、周縁部側面と瓦当部裏面は周縁に沿ってナデ調



第139图 S X17出土遺物

整を施している。瓦当文様は、内区に左巻き三ツ巴文を配す。その他には、丸瓦・平瓦が出土しており、これらの中には火を受けたのか変色していたものもみられた。

出土遺物を概観すると、17世紀後半～18世紀初頭と考えられる。よって、Ⅲ-2 a 期に属する遺構である。

S X 10

S X 10は、調査区南側中程のS K 57の南側に位置する（第134図・図版31）。掘形の平面形は円形を呈し、直径0.86m、深さ0.1mを測る。漆喰を円形状に敷き、その外側に10cm程度の礫を並べていた。南側の既存建物の軒下に位置するため、その雨落ち施設のようなものと思われる。

第135図-6は唐津系陶器呉器手碗である。高台径5.4cmを測る。掘形から出土した遺物である。大橋康二氏の編年Ⅲ期に属する。そ

他には、大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する肥前磁器染付碗・唐津系陶器刷毛目文鉢などが出土していた。

このように出土遺物は17世紀後半～19世紀初頭のものが出土した。このうち17世紀後半の遺物は少数であり、19世紀初頭頃のものを中心であることから、この頃に造られたと思われる。Ⅲ-3 a 期～Ⅳ期に属する。

S X 03

S X 03は、S X 10の北隣に位置する（表1）。掘形の平面形は円形を呈し、直径0.7m、深さ0.15mを測る。円形状に平瓦片を設置していた。埋土には、砂層が堆積していた。

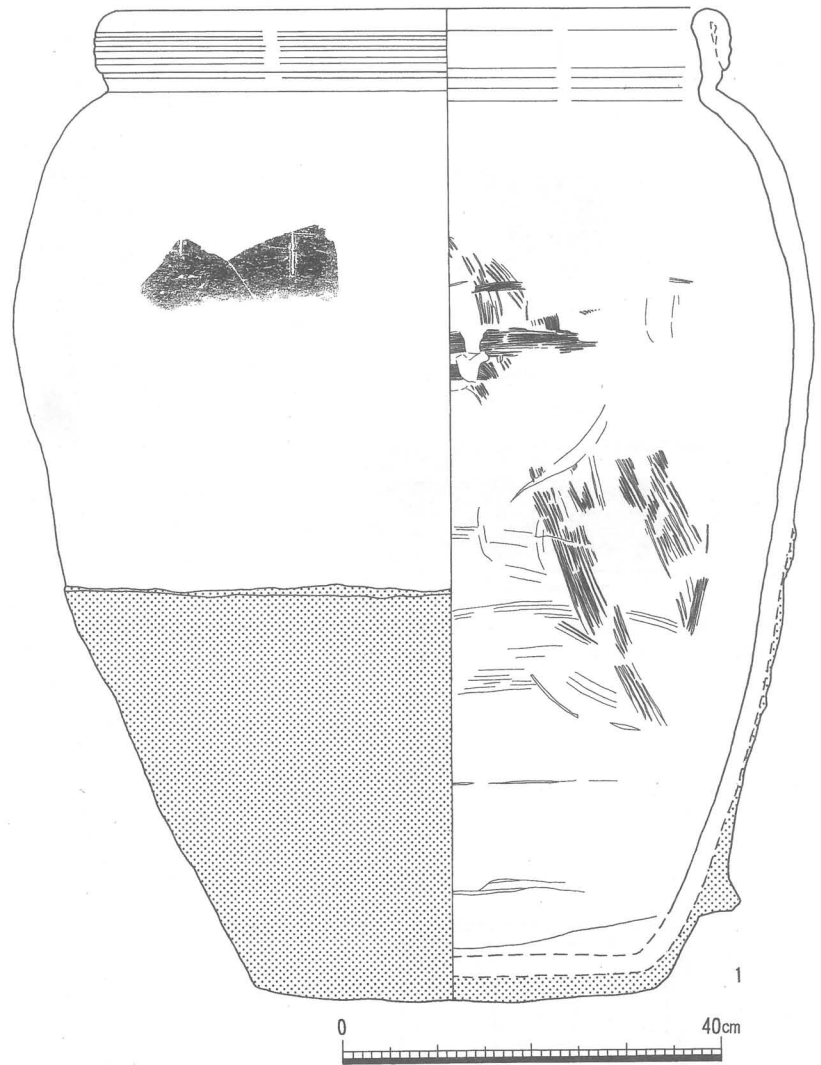
第135図-7は、肥前磁器染付碗である。高台径3.9cmを測る。全体的に器壁が厚く、高台断面はU字型を呈する。外面体部には一重網目文が描かれている。大橋康二氏の編年Ⅲ期に属する。その他には、大橋康二氏の編年Ⅲ・Ⅳ期に属する肥前磁器染付碗・唐津系陶器刷毛目文鉢などが出土していた。

出土遺物を概観は、17世紀後半～18世紀初頭と考えられる。Ⅲ-2 a 期に属する。

S X 42

S X 42は、調査区中程に位置する（第136図・図版32）。平面形は長楕円形を呈し、長径3.35m、短径1.25m、深さ1mを測る。埋土は2層で、褐色系の埋土が堆積していた。S X 42の東側は、S B 01の礎石掘形に切られていることから、S B 01を建てる際、埋め戻されたと思われる。

第135図-8は、肥前磁器染付皿である。高台径（推）7.6cmを測る。高台断面はU字型を呈する。内面の



第140図 S X 17出土遺物（2）

文様は、体部と見込みの境に2重圏線が描かれている。大橋康二氏の編年Ⅲ期に属する。9は、唐津焼瓶である。高台径5.5cmを測る。高台断面は長方形を呈する。高台内の削りは高台脇と同じ高さまで削られている。また、高台脇より上は鉄釉が施されている。8・9共に、大橋康二氏の編年Ⅲ期に属する。

第137図は碾臼の下臼である。直径64.6cm、高さ20.8cmを測る。花崗岩製で、中央には直径6.5cmの穿孔が施されている。上面の目は、8条1単位とし8分割されていた。非常に大きい石臼であり、調査区から酒造関係の遺構が多く検出されていることから、酒造用に使用されたものと思われる。その他には、大橋康二氏の編年Ⅲ・Ⅳ期に属する肥前磁器染付皿・唐津焼天目茶碗が出土している。

出土遺物を概観すると、17世紀後半と思われる。よって、Ⅲ-2 a期に属する遺構である。

S X 17

S X 17は、調査区中程に位置する（第138図・図版32）。掘形の平面形は長方形を呈し、長辺4.4m、短辺2.2m、深さ0.7mを測る。長方形のレンガ積み遺構で、その南側から埋甕を検出した。この埋甕は搾取された酒をうけるために用られた垂壺と考えられる。このことから、明治十九年に出された「酒造場絵図面届書写」に記されている「搾り場」にあたることがわかった。この搾り場の断面を観察すると、酒槽基礎部分は底部に栗石を入れ、コンクリートを敷き、煉瓦を積んでいる。垂壺の掘形は、埋土が3層みられ、最下層には砂層が堆積していた。これら埋土からは、18世紀後半～19世紀初頭の遺物が出土しているが、甕底部にモルタルが付着されていることから、煉瓦積みをする際、垂壺も再設置されたと思われる。また、甕内からは、大正・昭和頃の遺物が出土した。この酒蔵は、昭和十八年（1885）十一月三十日に転廃見込み製造場指定が出され、それ以降ここで製造されなくなっており、その時まで使用されたのではないと思われる。

第139図-1～3は垂壺内から出土した遺物である。1・2は産地不明染付磁器である。1は、小杯である。口径6.7cm、器高4.4cm、高台径3.5cmを測る。器形は端反り型であり、器壁も薄い。外面の文様は、黒色釉で文様を描き、所々に金彩を施している。2は、色絵鉢である。口径17.8cm、器高5.8cm、高台径8.4cmを測る。器形は輪花を呈し、高台は蛇ノ目凹型高台である。内面の文様は、3回に分けて施されている。最初に型紙摺りで黒色釉の圏線と寿文、その次も型紙摺りで赤色釉の区画花唐草文・菊弁文と花文（見込み中央）を施し、最後に手描きによって区画花唐草文に緑色釉、菊弁文に橙色釉、口縁部に光沢のある青色釉を施している。3は、軟質色絵磁器皿である。口径（推）23cmを測る。型押し成形で、口縁部は輪花形を呈する。内面口縁部に転写によってバラ花が描かれている。4・5は搾り場から出土したものである。4は、産地不明陶器である。口径34cmを測る。見込み部に1ヵ所、直径3cmの穿孔が施されている。また、外面にはトビカンナの文様がみられ、底部には漆喰が付着していた。5は、赤煉瓦である。搾り場の酒槽に使用されていたものである。長辺23.4cm、短辺11.2cm、高さ5.8cmを測る。色調は橙色（5 Y R 7/6）を呈する。長辺に「E3」の刻印がみられた。この刻印をもつ赤煉瓦は、大阪市住友銅吹所跡や西宮市白鹿酒ミュージアム「酒蔵館」の発掘調査でも出土している。

第140図-1は、備前焼大甕である。口径（推）62.4cm、器高106cm、底径40cmを測る。口縁部はやや内傾気味に立上り、体部のふくらみも弱いタイプである。SW16で検出した備前焼大甕と同タイプのものである。外面底部には、地中に固定する際に施されたモルタルが付着していた。

出土した遺物を概観すると、20世紀前半と考えられる。

6. まとめ

このように、D-7区では、16世紀後半～20世紀前半までの4面の遺構面を確認することができた。特に、

酒造関係の遺構が多く検出されたことは大きな成果であった。明治十九年（1886）に出された「酒造場絵図面届書写」によって、検出された遺構がどれにあたるかわかり、今回の調査で「酒蔵」が19世紀初頭に建てられたことがわかった。また、絵図にあたる「搾り場」は煉瓦積みの搾り場であることがわかり、更にその下からは1時期古い「搾り場」（S X 617・618・758）を検出した。この「搾り場」は、一槽さし連基型のものであり、掘形から出土した遺物の年代観から、18世紀後半～19世紀初頭頃造られたことがわかった。

さらに、調査区西側でS X 617・618・758より古い「搾り場」（S X 567・570・S X 517・310）を2ヵ所検出した。遺構の年代観が18世紀中頃～18世紀後半であることから、検出された「酒蔵」（S B 01）の前段階の酒蔵に伴うものであることがわかった。これらの「搾り場」は一槽さし単基型のもので、おそらく2基の「搾り場」は、平行して使用されていたと思われる。

この他にも、「酒蔵」（S B 01）の北側の屋敷地から、一槽さし単基型の「搾り場」（S X 05・06・746）を検出した。遺構の年代観から19世紀後半と考えられており、調査区北側の屋敷地でも酒造業を営んでいたことがわかった。また、この「搾り場」の北側と東側でも、元禄十二年（1699）・元禄十五年（1702）の火災に遭った「搾り場」（S X 01・02・S X 542）を2ヵ所検出していることから、17世紀末～18世紀初頭には酒蔵が建てられていたと思われる。

搾り場遺構以外にも酒造用の竈を南西隅で検出している。「酒造場絵図面届書写」では、この地点は「居宅」とされていることから、17世紀末～18世紀初頭は絵図でみられるような間取りではなかったと思われる。また、この竈の南側で18世紀後半頃の年代観をもつ酒造用の竈が検出されており、「居宅」が建てられる際、移動したと思われる。その他、「洗い場」にあたる地点から酒造用の井戸を検出している。

酒造関係の遺構以外にも、元禄十二年（1699）・元禄十五年（1702）の火災焼土処理遺構が、調査区全体で確認し火災の大きさが伺える。それ以外にも、16世紀末～17世紀初頭の火災痕が確認され、この時期火災があったことがわかった。

この他、16世紀末～17世紀初頭の溝や掘立柱建物・土壙など、古い時期の遺構が比較的多く検出しており、この時期の遺構の広がりを知る上で大きな成果であった。

第4章 結 語

第1節 調査区域の遺構の変遷について

1. 時期区分について

有岡城跡・伊丹郷町遺跡の時期区分は、従前の報告の通り、遺構・遺物の様相の変化によって以下のよう
に考えている。




I期 伊丹城期—中世の在地武士伊丹氏の伊丹城期（～天正二年・1574年）

II期 有岡城期—近世移行期の戦国大名荒木村重の有岡城期および池田之助の第2次伊丹城期
（天正二年・1574年～天正十一年・1583年）

III期 伊丹郷町期—近世在郷町の時期（天正十一年・1583年～明治中期）

IV期 近代—（明治中期～）

さらに、このうちのIII期については、以下のように細分している。

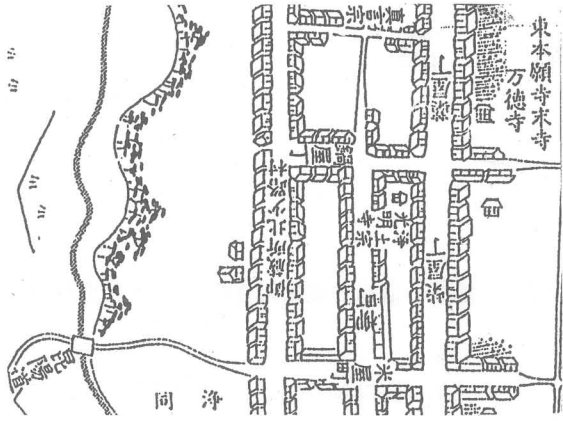
		図中の表示	
III-1期	16世紀末～17世紀中頃……………		その他…………… 
a期	16世紀末～17世紀初頭……………		
b期	17世紀初頭～17世紀中頃……………		
III-2期	17世紀後半～18世紀後半……………		
a期	17世紀後半～18世紀初頭……………		
b期	18世紀前半～18世紀後半……………		
III-3期	18世紀後半～19世紀後半……………		
a期	18世紀後半～19世紀初頭……………		
b期	19世紀前半～19世紀後半……………		

今回も、これにもとづいて、各地区の出土遺物の年代を基準とした遺構の変遷図を作成した。

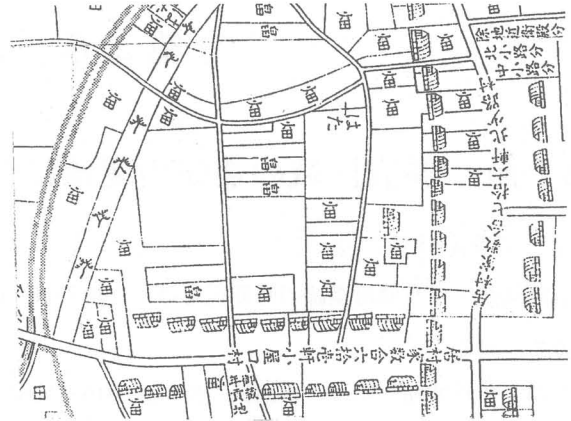
2. 各調査区の遺構の変遷について

(1) 第117次調査A-6区・A-7区

この調査区は、調査対象区域の西側に位置し、互いに近接している。A-6区は、北側に現行道路が東西に通る。最古の遺構は、II期（天正二年・1574～天正十一年・1583）に属すると推定できる溝SD301とII～III-1 a期にかけての井戸SE301である。A-7区にはこの時期の遺構はない。道路から奥まった場所であるため、居住空間として利用されていなかったためであろう。A-6区SD301は、報告文の通り東側にII期に造られてIII-2 a期頃まで利用された溝（第51次調査B-2-2区SD15など）があり、これに対応するものであろう。両者の距離は約3mである。しかし、SD301は、B-2-2区SD15のように南北に続かずに途切れてしまう。したがって、屋敷地の境を区切るための部分的な溝であろう。この溝の間は、今はない南北方向の直線道路があったと考えられる。絵図（第141図）でも『延宝五年（1677）伊丹郷町地味委細絵図』（八木哲浩他1982年、以下絵図は特に記さない限り同書による）、『元禄七年（1694）柳沢吉保領伊丹郷町絵図』（以下、『元禄絵図』と略称）、『寛政八年（1796）伊丹細見図』で確認できる。しかし、『天保十五年



寛文九年（1669）伊丹郷町絵図



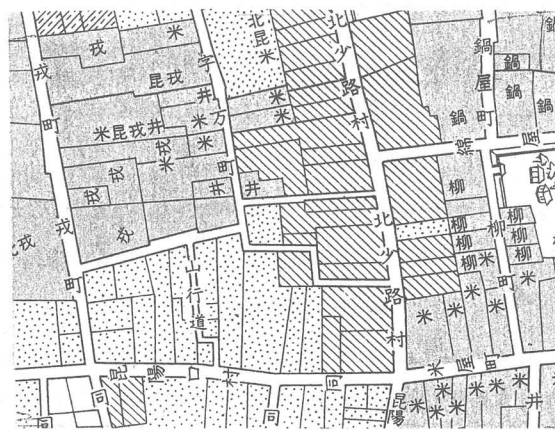
延宝五年（1677）伊丹郷町地味委細絵図



元禄七年（1694）柳沢吉保領伊丹郷町絵図



寛政八年（1796）伊丹細見図



天保十五年（1844）伊丹郷町分間絵図

第141図 伊丹郷町古絵図（1）（八木哲浩1982年）

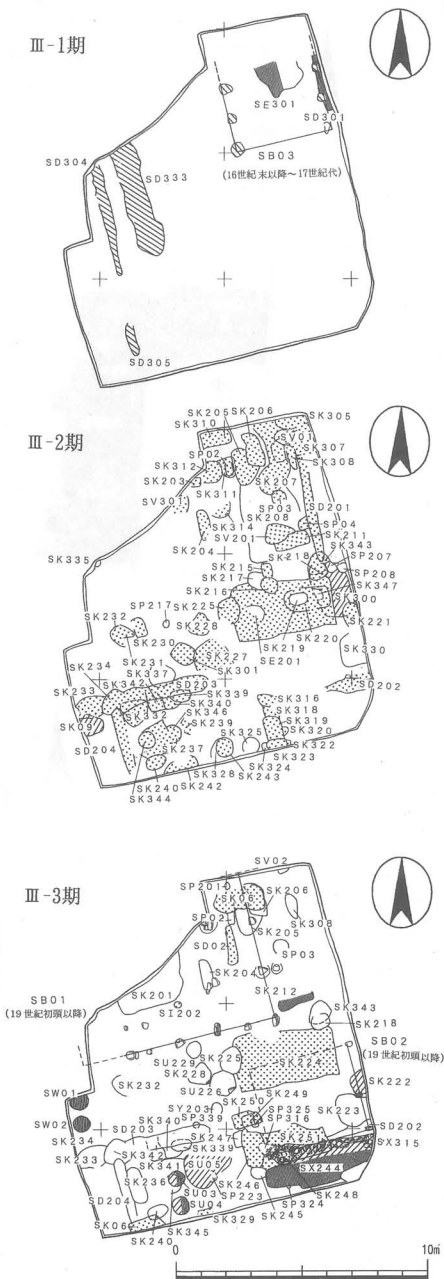
(1844)伊丹郷町分間絵図』では、西側に「山行道」という別の道路ができており、この道路は描かれていない。調査では、調査区の境界にあたってこの道路の消長を十分つかめなかったが、絵図資料で見る限り寛政八年(1796)から天保十五年(1844)の間に廃絶したものと考えられる。したがって、Ⅱ期有岡城期に造られ、Ⅲ-2 a期の17世紀後半頃まで東側の側溝があったが、この頃に埋没し、さらに19世紀前半のうちに道路も廃絶したものと考えられる。

A-6区SE301は、この地域にこの頃出現する井戸のひとつである。西に接する第51次調査A-1区でもSE13・14を検出している。分布は非常にまばらで、道路際に造られるものと奥に造られるものの2種類が認められる。これは道路際に造られる例である。今のところ、道路際に造られるのは住居用、奥に造られるのは耕作用ではないかと推測している。この井戸は、この頃から住居が進出してくる証左として注目すべき遺構である。

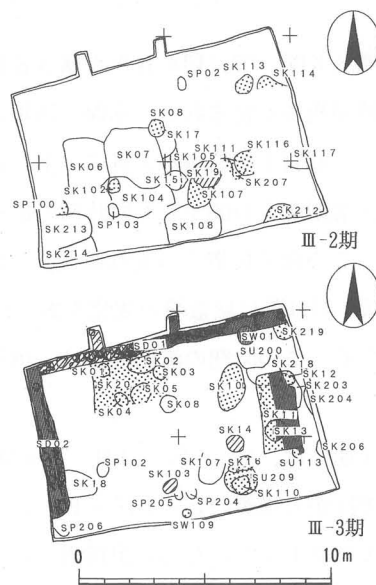
A-6区SB301はSE301と重複し、SE301の廃絶後Ⅲ-1 a~2 a期のうちに建てられたと考えられる掘立柱建物である。北側道路に面して建てられており、北側道路もこの頃にはあったと考えられる。17世紀中頃までは、このような掘立柱建物がこの地域に多い。

また、Ⅲ-1期(16世紀末~17世紀中頃)に属する地割溝と考えられるSD304・305が西側に存在するが、この地域では非常に早い例である。この西側の調査区第51次調査A-2区にも同様の素掘溝SD03があるが、これはⅢ-2期(18世紀前半~後半)に成立している。

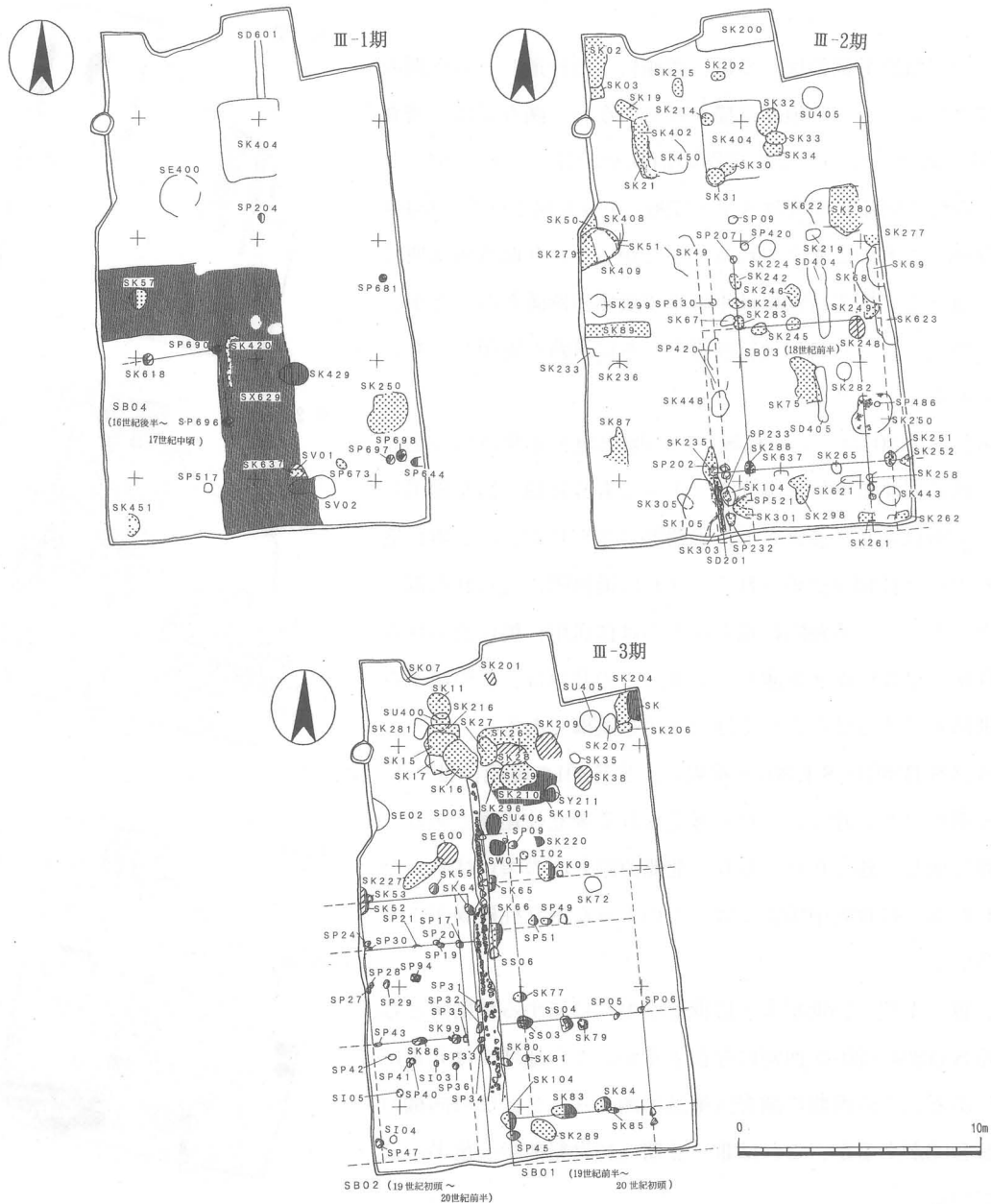
Ⅲ-2期にはA-6区では遺構が増え、A-7区にも多くの遺構がみられるようになる。Ⅲ-2 a期(17世紀後半~18世紀初頭)には、A-6区では享保十四年(1729)の火災の焼土処理土壌SK208や井戸SE201などがあって、建物は不明ながら居住区域となっていたことがわかる。『元禄絵図』では、A-6区は百姓「善右衛門」の屋敷地に属しているが、奥行は「十一間」(21.66m)となっており、現在の屋敷地の奥行52mとは一致しない。元禄年間には空地となっており、その後に享保十四年(1729)の火災に遭う建物が建てられたのであろうか。A-7区は『元禄絵図』では、百姓「庄左衛門」の屋敷地となっている。Ⅲ-2 b期(18世紀前半~後半)には、A-6区では地割溝SD201の西側に遺構が密集する。やはり建物は復元できないが竈SV201など建物の存在をしめす遺構がある。A-7区では、享保十四年の火災の焼土



第142図 A-6区遺構変遷図



第143図 A-7区遺構変遷図



第144図 B-14区遺構変遷図

処理土壌 S K 06・07に切られた土壌 S K 104が、17世紀後半～末頃のもっとも古い遺構である。この頃から、廃棄土壌が数多く営まれる。享保十四年の火災の焼土処理土壌には、S K 06・07と S K 108がある。S K 108からは、土師質土器焙烙が大量に出土した。この調査区の北端に設けられた S D 01の前身である第51次調査 A-2区素掘溝 S D 06からも同時期の焙烙が大量に出土しており、住人の職業に関わる遺物と考えられる。しかし、この溝の位置と『元禄絵図』の屋敷境（奥行「十七間半」=34.46m）とは一致しない。したがって、元禄年間以降に屋敷境の変化があったと考えられる。また、S K 108からは、中国清朝の青花碗が1点出土している。この時期の清朝磁器は、伊丹郷町遺跡では極めて珍しい。どのような経緯で流通したのか、興味深い。

III-3期には、A-6区ではIII-3a期（18世紀後半～19世紀初頭）に属する焼土処理土壌 S K 201があり、この調査区から東側のB-3区・B-2-2区・B-5区で確認されていた（川口1997年 a）この頃の火災がここまでおよんでいたことが判明した。S U 226・229はこの時期の埋桶遺構である。A-7区では、石積

溝S D01が素掘溝に替わって構築される。他の調査区でもこの頃に石積溝が一斉に構築されており、一連の現象の一環としてとらえられる。同時に、報告文で述べているように、『天保十五年(1844)伊丹郷町分間絵図』にみえる「山行道」の成立に伴う裏地利用の変化にも関連すると考えられる。Ⅲ-3 b期(19世紀前半～後半)には、A-6区では竈S V01・02と、これに伴う建物があったと考えられる。礎石建物S B01は、この頃にすでに建てられていた可能性もあるが、確定できなかった。S B02も同様である。A-7区では、地下室と考えられるS X20がある。周囲に礎石は残っていないが、上屋建物があったと考えられる。

Ⅳ期(明治中期～)には、A-6区では礎石建物S B01・02が存在し、防空壕S X244や便槽桶S U03・04が設けられる。S W01・02は西隣の屋敷地の便槽である。A-7区では、石積溝S D02が再構築され、既存建物が建てられたと考えられる。

(2) 第117次調査B-14区

B-14区は、幹線道路昆陽口通りに北面する調査区である。最古の遺構は、Ⅱ期有岡城期以前にさかのぼるS X629である。これは幅約3mの浅い溝で、直角に曲って調査区外に延びる。したがって、現在の敷地割や昆陽口通り成立以前の遺構であることは明らかである。性格は、判然としない。Ⅱ～Ⅲ-1期には、これが埋没した後掘立柱建物S B04が建てられる。竈S V01・02はⅡ～Ⅲ-1 a期(16世紀末～17世紀初頭)の遺構であり、周辺に散在する柱穴S P697・698などのいずれかがこれに伴う掘立柱建物を構成していると考えられる。奥にはS E400がある。このように、ここは比較的古くから居住区域となっていた。裏手には耕作の犁溝と考えられるS D601などがみられ、裏地は畑として利用されていたと考えられる。Ⅲ-1 b期(17世紀前半～中頃)にも、土壙S K250などがみられる。

Ⅲ-2期には、遺構が増える。Ⅲ-2 a期(17世紀後半～18世紀初頭)には、享保十四年(1729)の火災の焼土処理土壙S K200があり、ここも被災したことがわかる。Ⅲ-2 b期(18世紀前半～後半)には礎石建物S B03が建てられた。『元禄絵図』では、ここは2軒の屋敷地として描かれており、S B03は東側の屋敷地の建物である。この地割境は、Ⅲ-1 a～2 a期の土壙S K404の西肩ともほぼ一致しており、17世紀代には成立していたことがわかる。

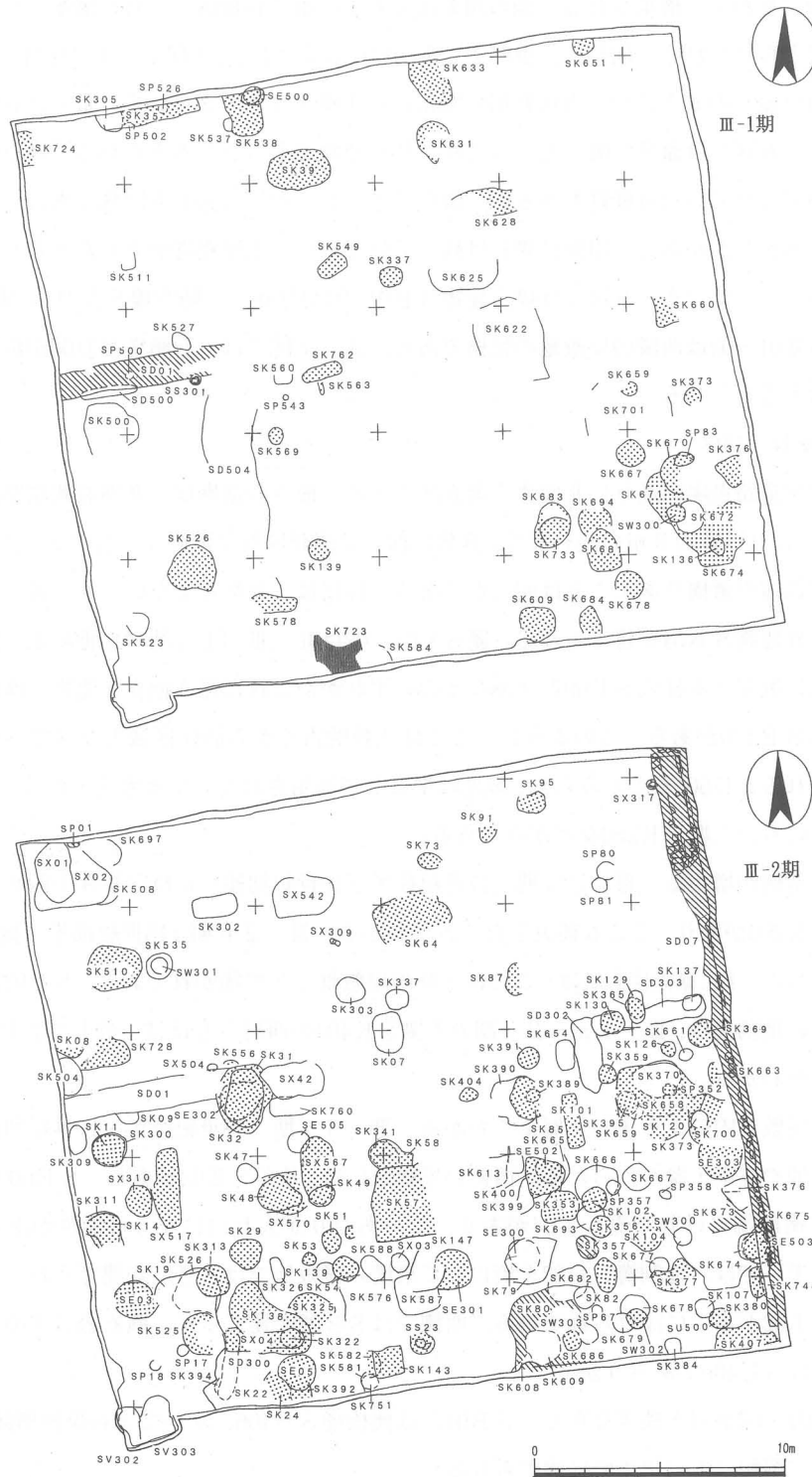
Ⅲ-3期には、屋敷地内のように一層よくわかる。Ⅲ-3 a期(18世紀後半～19世紀初頭)では、東側の敷地には奥に埋桶や廃棄土壙がみられる。西側の屋敷地には、井戸S E02がある。S E600は、造り替えられた井戸である。南西端には胞衣壺S I04があり、このあたりが入り口になる可能性がある。Ⅲ-3 b期(19世紀前半～後半)では、地割溝S D03を境にして東側の屋敷地ではS B01が建てられ、これに伴うと考えられる胞衣壺S I02が裏手に設けられている。西側ではS B02が建てられ、胞衣壺S I03・04・05などがこれに伴う。便所はS U400であろうか。

Ⅳ期には、S B01・02が引き続き存在し、S B01には便槽桶S U406、次いで大谷焼便槽鉢S W01が伴う。その後、既存建物が昭和二十三年までに建てられる。

(3) 第123次調査D-7区

D-7区は、猪名野神社参道の東側に面している。ここで最古の遺構は、古墳時代の須恵器甕片が出土した土壙S K723である。しかし、それ以外にこの時期の遺構はない。

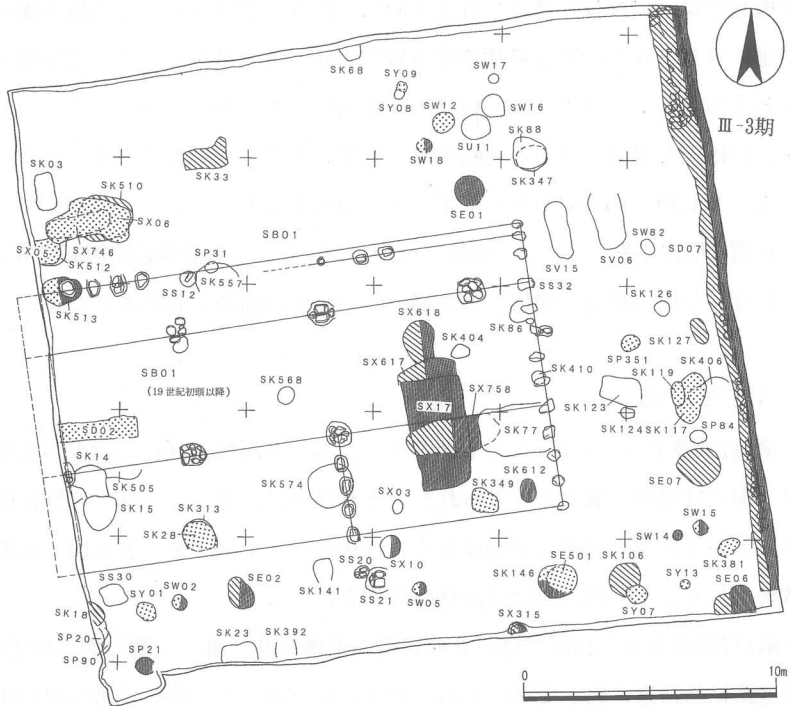
Ⅲ-1期では、Ⅲ-1 a期(16世紀末～17世紀初頭)の南北溝S D504が調査区西側にある。報告文のように、ここより北側の調査区ではⅡ期の南北溝が西側の参道に沿って設けられていたが、これとつながるかどうかは、中間の調査区の報告を待たねばならない。Ⅲ-1 a～2 a期のS D01は浅い溝である。現存する地割境に近く、報告文の通り古い時期の地割溝の可能性はある。このほか、中国製青花花碗が出土した土壙S K



第145図 D-7区遺構変遷図(1)

622など、いくつかの土壇や柱穴がみられる。建物を復元するには至らなかったが、参道沿いの調査区で一般的にみられる掘立柱建物が、ここにも存在していた可能性が高い。Ⅲ-1b期(17世紀前半~中頃)には、北端に素掘井戸SE500がある。ここからも青花皿が出土している。このほか、多くの廃棄土壇がみられる。したがって、この頃には一定数の人口があったものと考えられる。しかし人家が密集していたようすは、まだうかがえない。

Ⅲ-2期には、Ⅲ-2 a期(17世紀後半~18世紀初頭)に属する遺構として、礎石転用一石五輪塔S X309のような転用石材を一部に利用した礎石建物がみられる。この建物は、全体を復元するに至らなかった。東端の背割素掘溝S D07は、この時期に設けられている。北方の第97次調査D-6区でも、この溝の続きを確認している。それでも、Ⅲ-2 a期の素掘溝S D800が最古であった。このように、背割溝の成立は、意外に遅いことが判明した。北西隅には、元禄年間の大火(元禄十二年・1699か元禄十五年・1702)



第146図 D-7区遺構変遷図(2)

による焼土処理土壙S X01・02がある。これは、報告文の通り酒を搾る船場遺構であり、同じ遺構のS X542とともに、この頃にここで酒造りが行われていたことを示している。S D01より南側では、南西隅に酒造用大型竈S V302・303がある。埋土には焼土が混じり、元禄年間の大火に遭ったものと考えられる。これは、調査区南側の別の屋敷地に属する遺構である。中央付近にS E505、やや南東側にはS E300がある。東南端には、丹波焼の埋甕S W300がある。便槽と考えられるが、古い例である。Ⅲ-2 b期(18世紀前半~後半)に属する遺構では、S E03・05・302が道路に面した西側にあり、S E502・301が東側にある。東端にはS E303・503がある。このうちS E05、S E503は調査区南側の別の屋敷地の井戸と考えられる。それぞれ微妙に時期が異なっており、すべて同時に存在したのではないと考えられるが、前代に比べると多い。その理由は、西側で検出した酒搾りの船場遺構S X567・570、S X517・310にある。これらは18世紀中頃~後半で、この頃から調査地南半分は酒蔵になったと考えられる。井戸は、酒造用として多く掘られたと考えられるのである。この酒蔵には竈がなく、酒造用竈を検出したD-7区の南の伊丹市教育委員会が調査した調査区と一体の酒蔵であった可能性が高い。また、S E503によって、この上に造られた石積溝S D07(素掘溝から改修)が18世紀後半以降に構築されたことが判明した。一方、調査区のS D01より北側では、この時期から酒造関係の遺構はみられなくなる。

Ⅲ-3期では、Ⅲ-3 a期(18世紀後半~19世紀初頭)に属する遺構として、南半分の屋敷地では船場遺構S X617・618・758が中央にある。したがって、引き続き酒造りが行われたことがわかる。これは、近代に入ってS X17のレンガ積船場遺構に造り替えられる。酒蔵S B01は正確な築造年代がつかめないが、船場遺構との関係や、礎石下の遺構との関係で、この時期にさかのぼる可能性がある。根石を何段にも積み重ねており、2階建ての澄し蔵であったと考えられる。この酒蔵の東側には竈S V06・15がある。規模は不明であるが、これに伴う上屋建物があつたと考えられる。報告文の通り、これも酒蔵に関係する竈であろう。井戸は、S E07が東側にある。南側のS E02、S E06は調査区南側の屋敷地に属する井戸と推測される。北側の

屋敷地では、便槽桶と考えられるSU11が中程に設けられ、丹波焼埋甕SW17・備前焼埋甕SW16へ、さらにⅢ-3b～Ⅳ期の大谷焼便槽甕SW12・18へと変遷していく。水琴窟SY08もⅢ-3b期にSY09へと造り替えられる。このように、ほぼ同じ場所にこれらが造り替えられているところをみると、復元はできないが、ほぼ同じ構造を持った建物がⅢ-3期に存在していたと考えられる。

Ⅲ-3b期(19世紀前半～後半)も、前代と変わらない。

Ⅳ期(明治中期～)には、明治十九年(1886)の「酒造場絵図面届書写」(第109図)にみられる配置となっており、今回の調査で建物、搾り場、洗い場が図面通り確認された。

3. まとめ

第117次調査A-6区・A-7区のうち、A-6区では既往の調査の成果とやや異なり、Ⅱ～Ⅲ-1期の井戸・掘立柱建物・溝などがみられた。それ以外は、Ⅲ-2a期(17世紀後半～18世紀初頭)から遺構が増加するという周辺の結果と矛盾はなく、以後もA-7区でⅢ-3a期(18世紀後半～19世紀初頭)に石積溝が構築されるなど、周辺とほぼ同様の変化をたどる。

第117次調査B-14区では、Ⅱ期以前の遺構やⅡ～Ⅲ-1期の掘立柱建物・竈などが検出され、古くから幹線道路昆陽口道に面して住居があったことがわかった。同じ昆陽口道の西端にあたる第51次調査A-1区よりも、早く居住区域になっている。これは、この地点が中心域に近いと考えられる。

第123次調査D-7区では、古墳時代から遺構がみられ、Ⅲ-1期には一定数の人々が居住していたと考えられる。この地域は『寛文九年(1669)伊丹郷町絵図』や『天保十五年(1844)伊丹郷町分間絵図』では「米屋町」にあたり、伊丹郷町では中心部から西に離れているとはいえ、「町」として扱われた地域である。古野^{まさみつ}将盈作成の『文禄伊丹之図』(八木他1982年所収、19世紀前半頃成立)には、「米屋町」は文禄年間(1592～96)には成立していたように描かれている。しかし、今回の調査成果では、それを積極的に支持できない。唐津焼製品が主体となる遺構が中心で、むしろ慶長年間(1596～1610)頃から発展したと考えられる。

Ⅲ-2a期(17世紀後半～18世紀初頭)に北側の屋敷地で酒造りが行われていたことが判明したのは、記録に現れない事実であり、大きな成果といえよう。また、南半分の屋敷地では、Ⅲ-2b期(18世紀前半～後半)以降、Ⅳ期(近代)の石橋茂一氏まで連綿と酒造りが行われてきたことが判明した。梶曲阜『有岡古続語』(八木他1968年所収、元治二年・1865成立)には、文化元年(1804)から元治元年(1864)までに存在していた酒蔵として、米屋町では「飯田屋」と「鹿清」があがっている。このうち「鹿清」は鹿島屋清右衛門で、現在の国の重要文化財に指定された旧岡田家住宅が彼の所有する酒蔵であったことが発掘調査で判明している。(和島恭仁雄1995年、小長谷他1999年)。したがって、「飯田屋」が、今回の酒蔵にあたると思われる(伊丹市博物館長 和島恭仁雄氏の御教示による)。

このように、伊丹郷町の中心部に近くなると、早くから町場化することが判明した。現在、伊丹市教育委員会・兵庫県教育委員会によって各所で発掘調査が行われており、これらの整理が進むことによって伊丹郷町全域での発展の様相がより正確につかめるようになると期待される。

表1 主要遺構一覧表(1)

地区	遺構名	グリット	遺構面	土層	平面形	直径or 長辺or 一辺 (m)	短辺(m)	深さ (m)	断面形	時代	備考
CIT117 A-6区	SD301	J11-f2	3	1	溝	2.3 以上	0.14以上	0.03		16世紀末以前	
A-6区	SK208	J11-f2	2	1	不整形	3.1 以上	2.25	0.53		17世紀末～ 18世紀初頭	享保火災
A-6区	SK300	J11-f3	3	1	隅丸長方形	2.2	1.43	0.32		17世紀末～ 18世紀前半	
A-6区	SK224	J11-f3	2	1	隅丸長方形	4	2.08	0.61		18世紀前半 19世紀前半～後半	
A-6区	SE201	J11-f3	2	1	円形	0.8	—	0.7 以上		17世紀末～ 18世紀初頭	
A-6区	SU201	J11-e3	2	1	円形	0.51	—	0.47		18世紀後半	
A-6区	SD202	J11-g4	2	1	溝	1.88 以上	0.6	0.15		18世紀後半～末	
A-6区	SU229	J11-e3	2	1	円形	0.58	—	0.45		18世紀後半～ 19世紀初頭	
A-6区	SK201	J11-e2	2	1	不整形	2.7	1.6 以上	0.27		18世紀後半～ 19世紀初頭	火災痕
A-6区	SU05	J11-e4	1	5	不整形	内1.05 掘1.94	内— 掘1.36以上	内0.7 掘—		18世紀後半～ 19世紀前半	
A-6区	SD02	J11-f2	1	1	溝	1.5	0.37	0.12		19世紀前半	
A-6区	SK06	J11-e4	1	1	不整形	1.38	0.38以上	0.22		19世紀前半～後半	
A-6区	SE03	J11-f3	1	1	円形	1.18	—	0.5 以上		現代	
A-6区	SX244	J11-f4	1	1	不整形	4.0 以上	1.4	1.72		20世紀初頭	防空壕
CIT117 A-7区	SK104	J11-b7	2	1	長方形	2.64 以上	2.48	0.13		17世紀後半	
A-7区	SK06	J11-b7	1	1	不整形	2.18	1.6以上	0.05		17世紀後半～ 18世紀初頭	享保火災
A-7区	SK07	J11-b7	1	1	不整形	2.42	2.3	0.06		17世紀後半～ 18世紀初頭	享保火災
A-7区	SK214	J11-b8	3	1	不整形	2.28 以上	6.8	0.31		17世紀後半～ 18世紀初頭	
A-7区	SK108	J11-c8	2	1	不整長方形	2.22	1.36以上	0.26		17世紀末～ 18世紀初頭	享保火災
A-7区	SK113	J11-c7	2	1	不整形	0.72	0.7	0.2		18世紀前半～後半	
A-7区	SU200	J11-c7	3	1	不整円形	0.64	4.2以上	0.65		18世紀後半～ 19世紀初頭	
A-7区	SU209	J11-b7	1	1	円形	1.32	1.32	0.7		18世紀後半～ 19世紀初頭	
A-7区	SK118	J11-c8	2	1	不整形	0.5	0.28以上	0.3		19世紀中頃～後半	

表1 主要遺構一覧表(2)

地区	遺構名	グリット	遺構面	土層	平面形	直径or 長辺or 一辺 (m)	短辺(m)	深さ (m)	断面形	時	代備考
CIT117 B-14区	SK429	K11-d10	3	1	不整形	1.26	0.96	1.17		16世紀後半	
B-14区	SP681	K11-e9	4	1	円形	0.3	—	0.11		16世紀後半~ 17世紀中頃	
B-14区	SP697	K12-e1	4	1	楕円形	0.5	0.43	0.56		16世紀後半~ 17世紀中頃	
B-14区	SP698	K12-e1	4	1	円形	0.34	—	0.34		16世紀後半~ 17世紀中頃	
B-14区	SK246	K11-d9	2	1	不整形	0.97	0.53	0.08		17世紀前半	
B-14区	SP283	K12-d10	2	1	楕円形	0.58	0.4	0.09		17世紀中頃	
B-14区	SP673	K12-e1	4	1	楕円形	0.48	0.33	0.4		17世紀中頃	
B-14区	SP420	K11-d10	3	1	円形	0.32	—	0.29		17世紀後半	
B-14区	SK402	K11-c8	3	1	隅丸長方形	2.5	1.94	0.42		17世紀後半	
B-14区	SK408	K11-c9	3	1	不整形	1.05	0.55	0.39		17世紀後半~末	元禄火災
B-14区	SX68	K11-e9	1	1	楕円形	2	1.26	0.12		17世紀後半~末	
B-14区	SK409	K11-c9	3	5	不整形	1.26	0.96	1.17		17世紀後半~ 18世紀初頭	享保火災
B-14区	SK200	K11-c8	2	1	長方形	3.5	1.26	0.39		17世紀後半~ 18世紀初頭	享保火災
B-14区	SK282	K11-e10	2	1	楕円形	0.92	0.64	0.21		17世紀末~ 18世紀初頭	
B-14区	SU405	K11-e8	3	1	円形	0.86	—	0.3		18世紀後半	
B-14区	SE02	K11-c9	1	1	円形	1.4	—	0.68		18世紀後半~ 19世紀初頭	
B-14区	SU400	K11-c8	3	1	円形	0.78	—	0.23		19世紀前半~後半	
B-14区	SS04	K11-d10	1	1	不整形	0.56	0.49	0.11		19世紀前半~ 20世紀初頭	
B-14区	SU406	K11-d9	3	1	楕円形	0.9	0.53	0.46		20世紀初頭	
CIT123 D-7区	SK723	L11-d7	3	1	不整形	2.3 以上	2.18以上	0.3		7世紀~8世紀	
D-7区	SK622	L11-f5	3	1	隅丸長方形	4.31	3.26	0.05		16世紀末~ 17世紀初頭	
D-7区	SK701	L11-g5	3	1	不整形	4.22	2.18以上	0.43		16世紀末~ 17世紀初頭	
D-7区	SD500	L11-b5	3	1	溝	2.8	0.5	0.11		17世紀初頭	

表1 主要遺構一覧表(3)

地区	遺構名	グリット	遺構面	土層	平面形	直径or 長辺or 一辺 (m)	短辺(m)	深さ (m)	断面形	時代	備考
D-7区	SD01	L11-b5 L11-c5	1	1	溝	8以上	1.1	0.1		17世紀初頭～後半	
D-7区	SK762	L11-d5	4	1	楕円形	1.78	0.54	0.41		17世紀前半～中頃	
D-7区	SK609	L11-f7	3	1	不整形	1.8	1.7	0.56		17世紀前半～後半	
D-7区	SK337	L11-e4	2	1	不整形	1.1	1	0.33		17世紀中頃～後半	
D-7区	SK139	L11-d6	1	1	円形	0.8	—	0.21		17世紀中頃～末	
D-7区	SK587	L11-e7	3	1	不整形	1.9 以上	1.87以上	0.38		17世紀後半	
D-7区	SD300	L11-c7	2	1	溝	4.53	0.54	0.4		17世紀後半～ 18世紀初頭	
D-7区	SD302	L11-f5	2	1	溝	3.75	1.2	0.23		17世紀後半～ 18世紀初頭	
D-7区	SD303	L11-g4	2	1	溝	5.68	0.92	0.13		17世紀後半～ 18世紀初頭	
D-7区	SK581	L11-d7	3	1	不整形	0.9	0.33	0.18		17世紀後半～ 18世紀初頭	
D-7区	SX03	L11-e6	1	2	円形	0.95	—	0.15		17世紀後半～ 18世紀初頭	
D-7区	SK390	L11-e5 L11-f5	2	1	不整形	1.9	1.09以上	0.57		17世紀末～ 18世紀初頭	
D-7区	SX309	L11-b5	2	1	不整形	1.16	0.74	0.18		17世紀末～ 18世紀初頭	
D-7区	SX504	L11-c5	3	1	楕円形	0.5 以上	0.3	0.07		18世紀初頭	
D-7区	SE301	L11-e6	2	1	不整形円形	1.6	1.49	1.17 以上		18世紀前半	
D-7区	SX317	L11-f7	2	1	円形	0.42	—	0.1		18世紀前半	
D-7区	SK102	L11-f6	1	1	不整形円形	1	0.9	0.45		18世紀前半～中頃	
D-7区	SX04	L11-c7 L11-d7	1	1	不整形	3.18	0.64	0.09		18世紀前半～中頃	
D-7区	SK353	L11-f6	2	1	不整形	1.93	1.5	0.36		18世紀前半～後半	
D-7区	SK356	L11-f6	2	1	円形	1.1	—	0.66		18世紀中頃	
D-7区	SE303	L11-g5 L11-g6	2	1	不整形円形	1.71	1.7	0.59 以上		18世紀中頃～後半	
D-7区	SK377	L11-g6	2	1	不整形	2.1	1.58	0.23		18世紀中頃～後半	
D-7区	SX310	L11-b6 L11-c6	2	1	不整形円形	1.3	1.1	0.6 以上		18世紀中頃～後半	

表1 主要遺構一覧表(4)

地区	遺構名	グリット	遺構面	土層	平面形	直径or 長辺or 一辺 (m)	短辺(m)	深さ (m)	断面形	時	代備考
D-7区	SW04	L11-e6	1	1	楕円形	0.7	0.53	0.28		18世紀後半	
D-7区	SW17	L11-e3	1	1	円形	0.5	—	0.1		18世紀後半	
D-7区	SK347	L11-f3	2	1	円形	1.55	—	0.4		18世紀後半	
D-7区	SK57	L11-e6	1	1	不整形	2.84	2.11以上	0.52		18世紀後半～	
D-7区	SD02	L11-h6	1	1	溝	3.9 以上	1	0.11		18世紀後半～ 19世紀前半	
D-7区	SW82	L11-g4	1	1	不整形	0.8	0.6	0.1		18世紀末～ 19世紀前半	
D-7区	SX315	L11-g4	2	1	楕円形	0.74	0.43	0.1		18世紀末以降	
D-7区	SY07	L11-g7	1	1	円形	0.72	—	0.08		19世紀前半	
D-7区	SK381	L11-g7	2	1	不整形	0.83	0.57	0.1		19世紀前半	
D-7区	SE501	L11-f7	3	1	不整形円形	1.19	0.98以上	1.01 以上		19世紀前半～中頃	
D-7区	SW02	L11-c7	1	1	円形	0.59	—	0.28		19世紀前半～ 20世紀前半	
D-7区	SW12	L11-e3	1	1	円形	1.05	—	0.31		19世紀後半	
D-7区	SW18	L11-e3	1	1	円形	0.75	—	0.26		19世紀後半～	
D-7区	SW05	L11-e7	1	1	円形	0.7	—	0.02		19世紀後半～ 20世紀初頭	
D-7区	SE01	L11-e4	1	1	円形	0.58	—	0.34 以上		19世紀後半～ 20世紀初頭	
D-7区	SE04	L11-d7	1	1	不整形	2.05	1.9	0.48		昭和	

表2 各調査区主要遺構年代表(1)

第117次調査A-6区

遺構番号	挿図番号	16C	17C	18C	19C	20C
SD304	第10図					
SD305	第10図					
SD333	第10図					
SE301	第8図					
SD301	第6図					
SB301	第6図					
SK208						
SK300						
SV301	第7図					
SK332	第11図					
SV201	第13図					
SD201	第19図					
SK224						
SV01	第24図					
SE201						
SU201						
SD202						
SD203	第20図					
SD204	第20図					
SV02	第24図					
SY203	第16図					
SU226	第17図					
SU229						
SU04	第26図					
SK201						
SU05						
SU03	第26図					
SX315	第12図					
SD02						
SI202	第15図					
SK06						
SB01	第22図					
SB02	第23図					
SW01	第27図					
SW02	第27図					
SK244						
SE03						

第117次調査B-14区

遺構番号	挿図番号	16C	17C	18C	19C	20C
SK429						
SX629	第53・54図					
SV02						
SB04	第47図					
SE400	第59図					
SD601	第52図					
SV01	第58図					
SK246						
SP681						
SP697						
SP698						
SP673						
SP283						
SK404	第61図					
SP420						
SK402						
SD404	第60図					
SD405	第60図					
SK408						
SX68	第76図					
SK409						
SK200						
SP248						
SK282						
SB03	第63図					
SU405						
SE02						
SE600	第51図					
SI04	第71図					
SD03	第75図					
SY211	第66図					
SI02	第70図					
SI05	第72図					
SU400						
SB01	第67図					
SS04						
SB02	第68図					
SW01	第73図					
SU406						

第117次調査A-7区

遺構番号	挿図番号	16C	17C	18C	19C	20C
SK104						
SK06						
SK07						
SK108						
SK214						
SK113						
SU200						
SU209						
SD01	第38図					
SW109	第34図					
SX20	第43図					
SK118						
SW01	第37図					
SU113	第33図					
SD02	第41図					

表2 各調査区主要遺構年代表(2)

第123次調査D-7区

遺構番号	挿図番号	16C	17C	18C	19C	20C
SK723		---				
SK622			---			
SK701			---			
SD500			-			
SD504	第90図		-			
SD01			=====			
SK762			=====			
SK609			=====			
SE500	第86図		=====			
SE300	第98図		=====			
SW300	第102図		=====			
SK337			=====			
SK139			=====			
SX301			=====			
SW301	第101図		=====			
SK587			=====			
SX42	第136図		=====			
SD300			=====			
SD302			=====			
SD303			=====			
SK581			=====			
SX01	第133図		=====			
SX02	第133図		=====			
SX03			=====			
SE02	第115図		=====			
SD07	第190図		=====			
SV302	第96図		=====			
SV303	第96図		=====			
SE505	第79図		=====			
SK390			=====			
SX309			=====			
SX542	第93図		=====			
SX504			=====			
SE301			=====			
SX310	第95図		=====			
SX317			=====			
SE05	第112図		=====			
SE302	第99図		=====			
SX04	第84図		=====			
SK353			=====			
SK102			=====			

遺構番号	挿図番号	16C	17C	18C	19C	20C
SK356				=====		
SE03	第113図			=====		
SE303				=====		
SE503	第81図			=====		
SW302	第104図			=====		
SK377				=====		
SX567	第94図			=====		
SX570	第94図			=====		
SX510				=====		
SX517	第95図			=====		
SE502	第87図			=====		
SW04				=====		
SW17				=====		
SU500	第89図			=====		
SK57				=====		
SK347				=====		
SV06	第111図			=====		
SV15	第111図			=====		
SY08	第120図			=====		
SW16	第126図			=====		
SX06				=====		
SE07	第117図			=====		
SU11	第125図			=====		
SD02				=====		
SX617	第82図			=====		
SX618	第82図			=====		
SX758	第82図			=====		
SE06				=====		
SW82				=====		
SX315				=====		
SX10	第134図			=====		
SY07				=====		
SW05				=====		
SK381				=====		
SB01	第108図			=====		
SE501				=====		
SY01	第121図			=====		
SY09	第120図			=====		
SY13	第122図			=====		
SW02	第128図			=====		
SW12				=====		

遺構番号	挿図番号	16C	17C	18C	19C	20C
SX746	第84図					=====
SW18						=====
SX05	第84図					=====
SE01						=====
SW14	第129図					=====
SW15	第129図					=====
SX17	第138図					=====
SE04						=====

第2節 遺物計測方法および計測結果について

1. 目的

調査を重ねるごとに出土する遺物は膨大な数に上るが、各遺物については個々に報告を行ってきた。今回も前回と同様に、出土遺物の大半を占める土器・陶磁器・土製品について、一括資料を対象として、

- (1) 遺物の種類
- (2) 生産地
- (3) 器種・器形

の分類基準を定め、破片計測法と集計方法についても独自の方法を行い、計測・数量化を行った。これにより、同時期の種類・器種構成、伊丹における当時の土器・陶磁器・土製品の流通動向の把握、生活空間の状況復元がある程度可能になると考えられる。但しその基準については編年作業の進展や生産地での調査成果により、今後さらに精密にしていきたい。

2. 種類と分類基準

種類—土器・陶器・磁器・玩具（ミニチュア品を含む）

基本的な種類は、大別して4項目に分けた。分類基準については細分化するとかえって正確さを欠くと考えたため、下記に記す大枠に従った。

- (1) 土器—素地は陶土、原則として軟質で、無釉である。
- (2) 陶器—素地は陶土、土器よりも硬質である。釉薬の有無は原則的には問わず、焼締陶器・施釉陶器共に含む。
- (3) 磁器—素地は陶石、原則として硬質である。
- (4) 玩具—他の遺物とは異質であり、単独に別置した。よって分類基準としては他と異なる（土器・陶器・磁器と分類せず、玩具・ミニチュアとして一括した）。

3. 生産地と分類基準

生産地の分類は最小限に留めた。消費地の場合、生産地を特定することは甚だ困難であり、且つ、安易な特定は混乱を招くと考えたからである。そこで断定はせずに「～系」とし、さらに生産地を明確にしえないものは、その他・産地不明とした。

(1) 土器

在地系①—いわゆる土師質土器である。焙烙は、17世紀前半～後半は堺か大坂産の難波洋三氏分類C類、18世紀前半～後半には明石もしくは堺産E類、18世紀末には枚方の津田産G類が加わることで難波洋三氏によって明らかにされている（難波1992年）。しかし、厳密に堺・大坂・明石の生産地を破片から区別することは難しく、便宜上ここに含めた。また、18世紀末～19世紀前半には大坂D類と津田産G類を模した焙烙の生産窯が、伊丹市教育委員会が調査した本遺跡の宮ノ前地区第93次調査で検出されている（小長谷1992年）。土師質土器皿などは、伊丹市近郊において生産され、購入されたものと思われる。

在地系②—いわゆる瓦質土器である。

泉州系—焼塩壺・火消壺・焜炉など、湊焼と称される土器は、大阪府堺市西湊町周辺及び八田北町など

和泉において生産されたものと考えられている。

その他一柿釉が施された製品は、施釉されている点で陶器に含むべきものであるが、焼成温度が低く、軟質であるという点から、その他の土器に含めた。(産地不明のものもここに含まれる。)

(2) 陶器

備前系、堺・明石系、丹波系、瀬戸・美濃系①(太白手)、瀬戸・美濃系②(その他)、唐津系①(京焼風陶器)、唐津系②(嬉野焼)、唐津系③(呉器手)、唐津系④(その他)、京焼系(伊賀・信楽焼系を含む)、萩焼系、中国系、その他(産地不明のものもここに含まれる。)

(3) 磁器

肥前系(有田・波佐見を中心とする肥前磁器と、肥前磁器の制作技法をまねた、あるいは工人が移動して制作したと思われる肥前系磁器とがあるが、前者を肥前系とした。なおここでは、厚手・粗製のいわゆる「くらわんか手」のものー波佐見などで多く焼かれているーを肥前系の中で細分化した。) 瀬戸・美濃系(新製焼)、三田系、京焼系、中国系、その他(産地不明のものもここに含まれる。)

(4) 玩具

ミニチュア、土人形、泥面子、ままごと道具

4. 器種と器形の分類基準

器種はその形状から大別して15種類に分類した。近世の陶磁器は器種が多様化するため細分すればきりが無く、器形に関してはなお一層この傾向が顕著なため、使用方法が明確なものに関して、これを重点的に分類した。それ以外は細分化を避け、個々の分類基準に関しては、以下に掲げた。

(1) 碗(鉢との相違点は、口縁装飾が華美でないもの。)

小杯ー口径5.0cm未満、小碗ー口径5.0~9.0cm未満、中碗ー口径9.0~12.0cm、大碗ー口径12.0~15.0cm未満。

紅猪口ー白磁小杯のみを選んだ。白磁以外のものでも紅猪口として使用されていた製品があるかもしれないが、特定の製品に限定した。

薄手酒杯ー幕末から明治にかけて現れるもので、器壁が0.1mm前後の小杯である。清酒用に用いられたと考えられる。

仏飯器

(2) 皿

極小皿ー口径7.0cm未満、小皿ー口径7.0~14.0cm未満、中皿ー口径14.0~26.0cm未満、大皿ー口径26.0cm以上。

灯明皿ー口縁部に煤の付着しているもの。灯明受皿ー口縁内部に環状の受けを持つもの。

卸皿ー内面底部に卸目が見られるもの。

(3) 鉢(碗との相違点は、1. 高台が広い、2. 口縁装飾が華美。皿との相違点は、1. 器高と口縁の比が三分の二以下、2. 主文様が器の外面にあたる。)

小鉢ー口径15.0cm未満、中鉢ー口径15.0~24.0cm、大鉢ー口径24.0cm以上

水鉢(手水鉢・瀬戸・美濃焼水甕を含む)、餌鉢(餌猪口・鳥鉢を含む)、鬢水入、植木鉢、猪口(そば猪口を含む)、蓋物、段重、片口鉢、播鉢、練鉢(こね鉢)、香炉、灰吹き、火入れ、火鉢(手焙り)、火消壺、焜炉、七厘(火力調整窓を持つ)、匣鉢、風炉(火窓や脚の形態に工夫の凝らされているも

の)、建水、合子

(4) 壺

小壺—器高12.0cm未満、中壺—器高12.0~30.0cm未満、大壺—器高30.0cm以上
お歯黒壺（口縁の一箇所が鷹口で、肩に耳が付く壺）、水指、焼塩壺

(5) 甕

小甕—器高12.0cm未満、中甕—器高12.0~30.0cm未満、大甕—器高30.0cm以上

(6) 瓶類

小瓶—器高12.0cm未満、中瓶—器高12.0~15.0cm未満、大瓶—器高15.0cm以上
神酒徳利、香壺、爛徳利、花瓶

(7) 水注

小水注—6.0cm未満、中水注—6.0cm以上、急須、土瓶、水滴

(8) 釜

釜、茶釜

(9) 鍋類

焙烙、土鍋、行平

(10) 鐘類

瓦燈（傘部）、瓦燈（皿部）、火もらい、灯竜

(11) 杓子類

散蓮華、十能

(12) 燭類

秉燭、カンテラ

(13) 台類

有脚灯明受皿・燭台

(14) 蓋類

小碗蓋、中碗蓋、大碗蓋、合子蓋、蓋物蓋、段重蓋、焼塩壺蓋、火消壺蓋、七厘窓蓋、壺蓋、水注蓋、
急須・土瓶蓋、土鍋・行平鍋蓋、燭・カンテラ蓋

(15) その他

器種・器形の分類不可能なものもここに含まれる。

5. 集計・表記方法

今回報告した調査区から、時期・出土量・種類ともにまとまった遺構を5ヶ所選び、上記の分類基準に従って計測を行った。

計測方法は、計算の際から正確さを求め、口縁部換算値のみから推定個体数を求めた。口縁部の無い破片は0個体と換算し、体部から底部までほぼ完全に残り、口縁部もほぼ欠損の無いものは1個体とした。

口縁部の破片は「口縁部半径チャート（1/12分割）」を用いて少数第2位までを記録した。その値を合計したものが推定個体数となる。

6. 分析結果

今回のデータの入力方法としては、『EXCEL Ver5. 0』を利用して、基礎データ（番号・遺構番号・器種・産地・用途・破片数・個体数）を入力し（表3）、遺構ごとに産地別構成比と用途別構成比をグラフ化した（第147～149図）。

産地別構成比の凡例については個々にグラフに付した。用途別構成比の凡例については、

A－食膳具（食べ物を盛るex. 碗・皿・鉢・猪口など）

B－調理具（食べ物を加工する道具ex. 搗鉢・焙烙・土瓶・急須など）

C－貯蔵具（物を保存する容器ex. 壺・甕・瓶・水注・水鉢など）

D－調度具（暖房・灯明・化粧等に使用された器具ex. 香炉・火鉢・火入れ・瓦灯・灯明皿・植木鉢・香油壺など）

E－その他（玩具など）

とした。

7. 破片数と推定個体数について

破片数と推定個体数に付いて、全体における比率に大差はないが、土師質土器などは破片数が比較的高い数値となる。これは破片数が土師質土器の場合、破棄されると細かく割れる場合が多く、硬質な陶磁器の破片数と推定個体数が同率、あるいは推定個体数の方が上回るのと対象的である。

8. 遺構の年代について

今回の資料は合計5遺構で、年代の古い順に、

①C I T 117次調査A－6区S E 301 16世紀後半～末（Ⅱ期～Ⅲ－1 a期に属する）

②C I T 123次調査D－7区S K 622 16世紀末～17世紀初頭（Ⅲ－1 a期に属する）

③C I T 117次調査A－6区S K 332 18世紀前半～後半（Ⅲ－2 b期に属する）

④C I T 123次調査D－7区S K 102 18世紀前半～中頃（Ⅲ－2 b期に属する）

⑤C I T 117次調査A－7区S X 20 19世紀中頃～後半（Ⅲ－3 b期に属する）

となり、③A－6区S K 332と④D－7区S K 102は同時期の遺物資料である。この2遺構は18世紀前半～中頃・後半（Ⅲ－2 b期）のものであるが、この時期の純粋な遺構はこれまで少なくて計測を行うに至っていなかった。したがって、新たなデータとして注目される。

9. 用途別構成比について

①A－6区S E 301（16世紀後半～末・Ⅱ期～Ⅲ－1 a期）と②D－7区S K 622（16世紀末～17世紀初頭・Ⅲ－1 a期）は近世初頭の資料であるが、この地域の通例で出土総数が少ない。①A－6区S E 301は破片総数21片、②D－7区S K 622は24片である。

①A－6区S E 301の用途別構成比は、出土総数の少なから、個体数では食膳具（A）が91.30%と大きく片寄っている。破片数では、食膳具（A）が52.38%、貯蔵具（C）23.80%、調理具（B）・調度具（D）が共に4.76%となる。食膳具（A）の内容は、皿が破片数で38.1%、碗が14.28%となり約7：3の比率となる。このうち皿は、在地系①の土師質土器が28.58%を占め、他は瀬戸・美濃系皿9.52%（2片）である。

この遺構と比較できる同時期の遺構は、前回報告した第63次調査B－6区S E 02『有岡城跡・伊丹郷町VI』

(藤井他1999年、P 195~201)とJ R伊丹駅前地区の資料『有岡城跡・伊丹郷町Ⅱ第1分冊』(藤井他1992年、P 162~167)である。このうちB-6区SE02では、出土総数が62片とSE301の3倍であるが、在地系①土師質土器皿が個体数で98.71%と極端に多い。破片数では62.9%となり、こちらのほうが実態に近い数値と考えられる。J R伊丹駅前地区の資料は出土総数が豊富であるが、データの出し方が今回とは異なり、直接数値を対比できない。しかし、傾向を比較することは可能である。J R伊丹駅前地区のC I T 23次調査SF01・SF02・SD10(Ⅱ期・有岡城期)では、3遺構の器種別平均値で皿は84%、碗は4.2%となり約9:1の比率となる。SE301と比べると皿の割合が大変多いことがわかる。また、J R伊丹駅前地区の皿の大半は土師質土器で、84.4%にのぼる。SE301では皿に占める土師質土器の比率は75%で、J R伊丹駅前地区の方が土師質土器皿の比率が高いことがわかる。一方、B-6区SE02では破片数で皿は62.9%、碗は3.22%で9.5:0.5となり、J R伊丹駅前地区を上回る。皿に占める土師質土器の比率は90.7%で、これもJ R伊丹駅前地区を上回る。

J R伊丹駅前地区の遺物は、上級武士の屋敷地の資料である。今回のSE301との比較からの予測として、一般的に上級武士の屋敷地では皿の数量が多く、なかでも土師質土器皿の消費量が一般民衆の屋敷地に比べて多かった可能性が考えられる。この予測が正しければ、具体的な用途は判然としないが、食器として利用された個数が多かったことや、灯明皿として使用する数が多かったことが理由として考えられる。しかし、B-6区SE02のように土師質土器皿が極端に多い例もあり、①A-6区SE301のデータを城下町区域の代表例とするには、まだ計測遺構数が少なすぎて無理がある。今後、城下町区域の同時期のデータを多く集積することによって、この予測に対する結論が出されることが望まれる。

貯蔵具(C)は、破片数で壺14.28%(3片)・大甕9.52%(2片)である。同じくJ R伊丹駅前地区のデータと比較すると、種類が少ないことがわかる。調理具(B)・調度具(D)も同様である。

しかし、碗に瀬戸・美濃系天目茶碗が1片、中国系青花が1片含まれていることは注目される。城下町の一角に位置するために、これらの製品が容易に入手できたのであろうか。また、最低限の器種が揃っていることにも注意を払いたい。この傾向は、同じ城下町区域の第63次調査B-6区SE02と共通する。

②D-7区SK622(16世紀末~17世紀初頭・Ⅲ-1a期)では、個体数で食膳具(A)が25.90%、調理具(B)が30.575%、貯蔵具(C)34.715%、調度具(D)8.81%となっている。貯蔵具(C)の比率は、破片数では41.66%と一層多くなる。これがこの遺構の特徴であろう。

これと比較できる時期の遺構は、前回報告した第51次調査B-2-1区SK479・第97次調査D-6区SP507(藤井他1999年、P 195~201)であるが、両方とも出土総数21片と6片という少ないデータのため、十分なものとはいえない。以下に比較を行うが、参考程度としたい。

食膳具(A)は個体数でSK479が65.7%、SP507が76.47%といずれも高率で、②D-7区SK622とは対照的である。SK622の内訳は、個体数で碗が12.95%、皿が12.95%となり、碗と皿が同数である。SK479では皿が全体の65.7%で、碗は個体数では現れず破片数で19.05%となっており、これも傾向が異なる。調理具(B)はSK479が12.21%、SP507が破片数で16.67%と、SK622の半分である。SK622の内訳は、すべて播鉢である。貯蔵具(C)は、SK479が4.76%、SP507が破片数で16.67%であり、SK622が極端に多い。内訳は、SK622では個体数で中壺21.765%、大瓶12.95%、破片数で中甕16.67%となっている。一方、SK479・SP507はすべて大甕である。調度具(D)はSK479が22.09%、SP507が23.53%であり、逆にSK622が極端に少ない。器種はSK622が灯明皿、SK479が火入れ、SP507がお歯黒壺である。

このように共通点は少なく、資料の蓄積が待たれる。

③A-6区SK332(18世紀前半～後半・Ⅲ-2b期)と④D-7区SK102(18世紀前半～中頃・Ⅲ-2b期)はほぼ同時期のため、両者の比較を行いつつ説明する。

食膳具(A)は、個体数でSK332が59.95%、SK102が79.42%となっている。この数値は、前報告書の17世紀後半～18世紀初頭(Ⅲ-2a期)のB-6区SE01が74.1%、B-12区SE03が61.23%となっているのとはほぼ同じ比率であり、傾向が変化していないことがわかる。ところが、18世紀末～19世紀後半(Ⅲ-3a～3b期)の前報告書B-4区SE04では38.26%、前々回報告書『有岡城跡・伊丹郷町V』(藤井他1997年、P240～244)B-2-2区SK722(18世紀後半～19世紀前半)では35%となっており、Ⅲ-3期の遺構との間に大きな変化がみられる。

碗と皿の比率はSK332が碗1.11%、皿58.84%、SK102が碗49.66%、皿22.48%と違った傾向が見られる。これは、SK332に在地系①土師質土器皿が42.59%も含まれているからである。Ⅲ-2a期B-6区SE01では碗57.61%、皿11.99%、B-12区SE03では碗37.07%、皿17.51%であり、碗と皿の比率は7:3から8:2となり、SK102のデータが一般的実態を反映しているものと考えられる。一方、Ⅲ-3期は全体に占める碗皿の比率は少なくなり、碗と皿の比率はB-4区SE04では碗22.12%、皿2.91%、B-2-2区SK722では碗21.94%、皿6.57%となって、8:2から9:1で碗が多い傾向を示すようになる。

調理具(B)はSK332が破片数で1.88%、SK102が個体数で11.22%となっている。その内訳はSK332で土鍋・行平が破片数で0.94%、SK102で焙烙が個体数で6.17%、播鉢5.05%となっている。これもⅢ-2a期の遺構とは変化がないが、Ⅲ-3期B-4区SE04では34.89%、B-2-2区SK722では25%と急増する。これは、以前に指摘した通り京焼系土瓶・土鍋・行平などがⅢ-3期に急増するためである。

貯蔵具(C)はSK332で1.04%、SK102で2.18%と少ない。内訳はSK332が中壺0.52%、小壺0.52%、SK102が中甕1.09%、中壺0.74%、小壺0.35%である。

調度具(D)はSK332で26.53%、SK102で6.48%とSK332の方が非常に多い。これは、在地系①土師質土器灯明皿が17.88%と多いためである。他には柿釉灯明皿5.98%、泉州系炬燵2.15%、泉州系風炉0.52%などがある。灯明皿が多いのは、おそらく灯明皿を多く使う行為に関係した屋敷地であったためであろう。SK102には建水が2.52%、在地系①土師質土器灯明皿が2.17%、柿釉灯明皿1.09%、香炉0.35%、泉州系火鉢0.35%がみられる。

⑤A-7区SX20(19世紀中頃～後半・Ⅲ-3b期)では、食膳具(A)が個体数で41.17%みられる。これは、以前の同時期のデータが20～30%代であり、それより多い数値である。その内訳は、個体数で碗19.98%、蓋類8.7%、皿5.79%、鉢5.13%、段重1.17%、蓋物0.34%となっている。碗と皿の比率は約8:2となる。この比率は、前述のようにⅢ-3期は碗と皿の比率は9:1から8:2で碗が多い傾向にある、というデータの範囲内であるが、いくぶん皿が多い。また、蓋類も多く、食膳具(A)の比率を高めている。

調理具(B)は個体数で38.03%となっており、前回報告したB-4区SE04の34.89%に近い。これは20～30%代が平均値である。内訳は土鍋・行平11.6%、土鍋・行平蓋4.78%、土瓶4.64%、播鉢4.3%、土瓶・急須蓋3.13%、急須1.65%となっている。土鍋・行平や土瓶・急須などがⅢ-3a期になって登場し、Ⅲ-3b期まで引き続いて多数を占めていることがわかる。

貯蔵具(C)は6.93%で、これも前回報告したB-4区SE04の6.2%に近い。少ないもので『有岡城跡・伊丹郷町IV』(藤井他1995年)A-1区SK614の4.1%、多いもので『有岡城跡・伊丹郷町V』(藤井他1997年)B-2-2区SK722の22%とバラツキの多い項目である。SX20の内訳は甕3.65%、瓶1.3%、壺0.99%、火消壺蓋0.83%、火消壺0.16%となり、ほかに京焼系水注、瀬戸・美濃系②(その他)水鉢が各1

片出土している。

調度具(D)は8.25%で、これも前回報告したB-4区SE04の9.45%に近い。これは少ない方の例である。『有岡城跡・伊丹郷町Ⅳ』(藤井他1995年)A-1区SK614は23.9%、『有岡城跡・伊丹郷町Ⅴ』(藤井他1997年)B-1-1区SK441は47%とバラツキが多い。灯明皿などが多いと、この比率が高くなる。SX20の内訳は灯明皿1.8%、植木鉢1.65%、花瓶1.65%、焔炉1.33%、仏飯具1.31%、火入れ0.83%、灯明受皿0.83%、香炉0.16%となり、ほかに破片数で風炉・涼炉・有脚灯明受皿・線香筒・肥前系御神酒德利などがある。これも以前に指摘したように、植木鉢・涼炉などがみられることがこの時期の特徴である。

10. 産地別構成比について

①A-6区SE301の産地別構成比は、資料の少なさから個体数は片寄りをみせているため、破片数でみていく。もっとも多いのが在地系①の土師質土器である。これはすべて皿で28.58%を占める。次いで多いのが在地系②の瓦質土器で19.06%である。これは火鉢などである。同じく備前系が19.04%あり、これは大甕・中壺など貯蔵具(C)となっている。瀬戸・美濃系も同率であり、内訳は皿9.52%(2片)、天目茶碗4.76%(1片)、中壺4.76%(1片)である。中国系は、青花碗9.52%(2片)であり、全体に占める割合は多いが、これも出土点数の片寄りの結果である。他に丹波系播鉢が4.76%(1片)ある。

このような産地別構成比の傾向は、前述したJR伊丹駅前地区のデータと比較すると、在地系①土師質土器、中国系が少なく、在地系②瓦質土器、瀬戸・美濃系が多い。しかし、産地の種類は共通しており、数量や用途別構成比は異なっているが、流通面では変わらなかったといえよう。ただし、輸入陶磁器の絶対量や種類は非常に乏しく、経済格差を感じさせる。

②D-7区SK622(16世紀末~17世紀初頭・Ⅲ-1a期)では、個体数で備前系が34.715%と最も多い。内訳は、播鉢が21.75%(4片)、大瓶が12.95%(1片)、中壺が破片数で12.49%などとなり、調理具・貯蔵具の多くを占めている。続いて多い丹波系30.575%も調理具・貯蔵具で、播鉢が8.81%(1片)、中壺が21.765%、中甕が破片数で16.67%である。この傾向は、破片数で丹波系が備前系の5倍あった前報告書SK479とは異なり、備前系と丹波系が同数であったSP507に近い。次いで唐津系④(その他)の古唐津皿12.95%、中国系青花碗12.95%(2片)となっている。在地系①土師質土器はもっとも少なく8.81%である。これはSK479の24.42%、SP507の23.53%に比べると極端に少ない。

このように、SK622は産地別構成比についても他と異なっており、この時期のデータの増加を待って傾向をつかむ必要がある。

③A-6区SK332(18世紀前半~後半・Ⅲ-2b期)と④D-7区SK102(18世紀前半~中頃・Ⅲ-2b期)は、ほぼ同時期である。SK332では、前述したように在地系①土師質土器皿が個体数で42.59%と非常に多い。続いて在地系①土師質土器灯明皿17.88%、その他(柿釉・施釉)の柿釉灯明皿などが12.48%となっている。また、この時期から、底部に回転ヘラケズリ調整を施す量産タイプの柿釉灯明皿が少量みられるようになる。SK102では、在地系①土師質土器皿は11.61%、同灯明皿2.17%、焙烙6.17%となっており、こちらの方が一般的傾向であろうと考えられる。

SK102では肥前系が個体数で65.24%を数え、もっとも多い。その内訳は、染付くらわんか手の中碗30.44%、小皿10.87%と大半を占める。SK332はこれと対照的で、肥前系は染付が8.65%みられ、このうちくらわんか手が2.15%を占める。

陶器では、SK102で唐津系④(その他)中鉢が1.44%、唐津系②(嬉野焼)中皿が0.74%と一定量を占

めている。また、丹波系は中甕1.09%、中壺0.74%、中鉢0.74%などと、貯蔵具（C）の大半を占めているが、播鉢は0.35%と少なくなっている。替わって堺・明石系播鉢が4.7%を占めており、この時期に両者の主従転換が起こったことがわかる。

このほか、泉州系土師質土器炬燵がS K332で2.15%、同風炉が0.52%、火鉢がS K102で0.35%と、泉州系土師質土器暖房具・調度具が出現していることに注目したい。これらは、この頃から流通し始めたと考えられる。

⑤A-7区SX20（19世紀中頃～後半・Ⅲ-3b期）では、非常に多くの産地の製品がみられる。これも以前のデータ通りである。もっとも多いのは京焼系で総个体数39.21%におよぶ。内訳は灰釉製品が16.89%、白釉製品が4.12%、鉄釉製品が3.97%などとなっている。器種では土鍋・行平、灯明具、土瓶、急須などが中心で、前述のようにⅢ-3期の特徴となっている。次いで肥前系が総个体数23.13%を占める。その内訳は染付16.67%、色絵2.99%、白磁2.30%、染付くらかわんか手1.17%である。染付くらかわんか手の比率は、低くなっている。器種としては、碗・皿・鉢・瓶・段重・香炉など食膳具（A）を中心として貯蔵具（C）、調度具（D）におよんでいる。丹波系も8.59%みられる。器種は、花瓶・甕・壺・播鉢・植木鉢などである。このほか、瀬戸・美濃系磁器新製焼が6.28%みられる。これはこの時期の特徴である。器種は碗・皿である。瀬戸・美濃系②（その他）の陶器も1.15%みられる。これは皿・鉢・水鉢である。在地系①は5.27%を占めるが、大半は伊丹産の焙烙である。その他（柿釉・土器）は2.97%と少ない。これは土鍋・灯明皿である。泉州系は1.98%で、焜炉・風炉である。このほか萩焼系が1.65%、三田系が1.49%みられる。萩焼系は大碗、三田系は植木鉢である。

11. まとめ

今回は、不足しているⅡ～Ⅲ-1a期やⅢ-2b期のデータが加わった。しかし、Ⅱ～Ⅲ-1a期に属する16世紀後半～末のA-6区SE301とⅢ-1a期の16世紀末～17世紀初頭のD-7区SK622のデータは資料総数が少ないため片寄りがあり、なお資料の蓄積を必要とすることがわかった。ただ、JR伊丹駅前地区の上級武士の屋敷地から出土した遺物群と比較すると、輸入陶磁器の量や種類の豊富さが格段に乏しいことがわかる。また、その他の国産陶磁器も必要最低限の種類・量のとどまっており、その格差が歴然としていることは言えよう。また、同時期の堺・大坂と比較すると、町人の居住区域での比較においても輸入陶磁器の量や種類の豊富さが格段に乏しい。これが、伊丹郷町におけるこの時期の城下町区域の特徴であろう。

Ⅲ-2b期に含まれる18世紀前半～中頃のA-6区SK332とD-7区SK102のデータからは、食膳具（A）の比率がⅢ-2a期（17世紀後半～18世紀初頭）とほぼ同じ傾向があり、碗皿の比率も同様であることがわかった。また、堺焼播鉢がこの時期に丹波焼播鉢を凌駕することが確認された。このほか、底部に回転ヘラケズリ調整を施す量産タイプの柿釉灯明皿が少量みられるようになる。これは、18世紀後半から急増する。その出現期と言える。また、泉州系土師質土器暖房具・調度具もこの時期が出現期である。

Ⅲ-3b期に属する19世紀中頃～後半のA-7区SX20は、これまでのデータを補強する結果が得られた。すなわち、調理具（B）の土鍋・行平、土瓶などの比率が高く、食膳具（A）比率が低いこと、調理具（B）の大半を占める京焼系がⅢ-3a期に続いて多いこと、三田系、萩焼系、瀬戸・美濃系新製焼がみられること、植木鉢・涼炉などが多いこと、などである。

このような作業を今後も積み重ねていくことによって、より正確な遺物構成が把握できると考えられる。

表3 伊丹郷町遺物計測基礎データ(1)

No.	遺構番号	器種	産地	用途	破片数	%	個体数	%
1	SE301	極小皿	在地系①	A	1	4.76	0.42	22.83
2	SE301	小皿	在地系①	A	5	23.82	0.67	36.40
3	SE301	火鉢	在地系②	D	1	4.76	0.08	4.35
4	SE301	不明	在地系②	不明	3	14.30	0	0.00
5	SE301	中壺	備前系	C	2	9.52	0	0.00
6	SE301	大甕	備前系	C	2	9.52	0	0.00
7	SE301	播鉢	丹波系	B	1	4.76	0.08	4.35
8	SE301	中碗(天目茶碗)	瀬戸・美濃系②(その他)	A	1	4.76	0.17	9.24
9	SE301	小皿	瀬戸・美濃系②(その他)	A	2	9.52	0.25	13.59
10	SE301	中壺	瀬戸・美濃系②(その他)	C	1	4.76	0	0.00
11	SE301	中碗	中国系(青花)	A	2	9.52	0.17	9.24
総数					21		1.84	
12	SK622	灯明皿	在地系①	D	1	4.17	0.17	8.81
13	SK622	播鉢	備前系	B	4	16.67	0.42	21.765
14	SK622	中壺	備前系	C	3	12.49	0	0.00
15	SK622	大瓶	備前系	C	1	4.17	0.25	12.95
16	SK622	不明	備前系	不明	2	8.33	0	0.00
17	SK622	播鉢	丹波系	B	1	4.17	0.17	8.81
18	SK622	中壺	丹波系	C	2	8.33	0.42	21.765
19	SK622	中甕	丹波系	C	4	16.67	0	0.00
20	SK622	小皿	唐津系④(その他)	A	2	8.33	0.25	12.95
21	SK622	中碗	唐津系④(その他)(混入)	混入	1	4.17	0	0.00
22	SK622	中碗	肥前系(染付)(混入)	混入	1	4.17	0	0.00
23	SK622	中碗	中国系(青花)	A	2	8.33	0.25	12.95
総数					24		1.93	
24	SK332	極小皿	在地系①	A	1	0.94	0.33	2.15
25	SK332	小皿	在地系①	A	12	11.32	6.22	40.44
26	SK332	灯明皿	在地系①	D	3	2.83	2.75	17.88
27	SK332	火鉢	在地系②	D	15	14.16	0	0.00
28	SK332	火鉢	泉州系	D	1	0.94	0	0.00
29	SK332	風炉	泉州系	D	45	42.46	0.08	0.52
30	SK332	炬燵	泉州系	D	4	3.78	0.33	2.15
31	SK332	極小皿	その他(柿釉)	A	2	1.90	1	6.50
32	SK332	灯明皿	その他(柿釉)	D	1	0.94	0.92	5.98
33	SK332	不明	その他(施釉)	不明	1	0.94	0	0.00
34	SK332	播鉢	堺・明石系	B	1	0.94	0	0.00
35	SK332	中壺	丹波系	C	1	0.94	0.08	0.52
36	SK332	大甕	丹波系	C	2	1.90	0	0.00
37	SK332	中瓶	丹波系	C	1	0.94	0	0.00
38	SK332	極小皿	瀬戸・美濃系②(その他)	A	1	0.94	0.42	2.73
39	SK332	不明	瀬戸・美濃系②(その他)	不明	1	0.94	0.08	0.52
40	SK332	土鍋・行平	京焼系(鉄釉)	B	1	0.94	0	0.00
41	SK332	不明	京焼系(鉄釉)	不明	2	1.90	0	0.00
42	SK332	小碗	肥前系(青磁)(混入)	混入	1	0.94	0	0.00
43	SK332	小碗	肥前系(染付)	A	3	2.83	0.17	1.11
44	SK332	極小皿	肥前系(染付)	A	1	0.94	0.75	4.87
45	SK332	小皿	肥前系(染付くらわんか)	A	1	0.94	0.33	2.15
46	SK332	小壺	肥前系(染付)	C	1	0.94	0.08	0.52
47	SK332	小瓶	肥前系(染付)	C	1	0.94	0	0.00
48	SK332	不明	肥前系(染付)	不明	1	0.94	0	0.00
49	SK332	ミニチュア(神輿)	産地不明	E	1	0.94	0.92	5.98
50	SK332	ミニチュア(独楽)	産地不明	E	1	0.94	0.92	5.98
総数					106		15.38	
51	SK102	小皿	在地系①	A	18	8.73	2.67	11.61
52	SK102	灯明皿	在地系①	D	4	1.94	0.5	2.17
53	SK102	焙烙	在地系①	B	19	9.22	1.42	6.17
54	SK102	不明	在地系②	不明	3	1.45	0	0.00
55	SK102	火鉢	泉州系	D	1	0.49	0.08	0.35
56	SK102	不明	泉州系	不明	1	0.49	0	0.00
57	SK102	灯明皿	その他(柿釉)	D	3	1.45	0.25	1.09

表3 伊丹郷町遺物計測基礎データ(2)

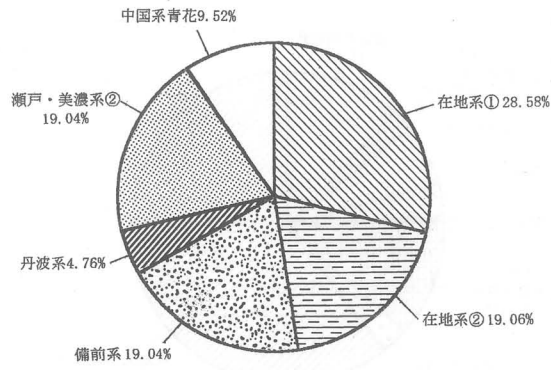
No.	遺構番号	器種	産地	用途	破片数	%	個体数	%
58	SK102	不明	産地不明(土師質土器)	不明	3	1.45	0	0.00
59	SK102	中鉢	備前系	A	1	0.49	0	0.00
60	SK102	大鉢	備前系	A	1	0.49	0.08	0.35
61	SK102	建水	備前系	D	2	0.97	0.5	2.17
62	SK102	中壺	備前系	C	1	0.49	0	0.00
63	SK102	大甕	備前系	C	1	0.49	0	0.00
64	SK102	大瓶	備前系	C	1	0.49	0	0.00
65	SK102	不明	備前系	不明	1	0.49	0	0.00
66	SK102	播鉢	堺・明石系	B	7	3.39	1.08	4.70
67	SK102	中鉢	丹波系	A	1	0.49	0.17	0.74
68	SK102	播鉢	丹波系	B	6	2.91	0.08	0.35
69	SK102	建水	丹波系	D	1	0.49	0.08	0.35
70	SK102	小壺	丹波系	C	1	0.49	0.08	0.35
71	SK102	中壺	丹波系	C	1	0.49	0.17	0.74
72	SK102	中甕	丹波系	C	7	3.39	0.25	1.09
73	SK102	大甕	丹波系	C	11	5.33	0	0.00
74	SK102	大瓶	丹波系	C	3	1.45	0	0.00
75	SK102	不明	丹波系	不明	4	1.94	0	0.00
76	SK102	中壺	瀬戸・美濃系②(その他)	C	1	0.49	0	0.00
77	SK102	中碗	唐津系②(嬉野焼)	A	2	0.97	0	0.00
78	SK102	中皿	唐津系②(嬉野焼)	A	5	2.42	0.17	0.74
79	SK102	中碗	唐津系④(その他)	A	1	0.49	0	0.00
80	SK102	中鉢	唐津系④(その他)	A	1	0.49	0	0.00
81	SK102	大鉢	唐津系④(その他)	A	1	0.49	0.33	1.44
82	SK102	香油壺	唐津系④(その他)	D	1	0.49	0	0.00
83	SK102	小碗	京焼系(灰釉)	A	4	1.94	0.08	0.35
84	SK102	小碗	肥前系(白磁)	A	1	0.49	0	0.00
85	SK102	中碗	肥前系(白磁)	A	3	1.45	0.67	2.91
86	SK102	中皿	肥前系(白磁)	A	3	1.45	0.17	0.74
87	SK102	香油壺	肥前系(白磁)	D	1	0.49	0	0.00
88	SK102	小鉢	肥前系(青磁)	A	2	0.97	0.33	1.44
89	SK102	香炉	肥前系(青磁)	D	1	0.49	0.08	0.35
90	SK102	不明	肥前系(青磁)	不明	1	0.49	0.08	0.35
91	SK102	小杯	肥前系(染付)	A	2	0.97	0.25	1.09
92	SK102	小碗	肥前系(染付)	A	3	1.45	0.33	1.44
93	SK102	中碗	肥前系(染付)	A	31	15.04	2.92	12.70
94	SK102	中碗	肥前系(染付くらわんか)	A	22	10.67	7	30.44
95	SK102	大碗	肥前系(染付)	A	2	0.97	0	0.00
96	SK102	大碗	肥前系(染付くらわんか)	A	2	0.97	0	0.00
97	SK102	小皿	肥前系(染付くらわんか)	A	6	2.91	2.5	10.87
98	SK102	中皿	肥前系(染付)	A	2	0.97	0	0.00
99	SK102	蓋物	肥前系(染付)	A	1	0.49	0.17	0.74
100	SK102	花瓶	肥前系(染付)	D	1	0.49	0	0.00
101	SK102	香油壺	肥前系(染付)	D	1	0.49	0	0.00
102	SK102	不明	肥前系(染付)	不明	1	0.49	0	0.00
103	SK102	不明	肥前系(青磁染付)(混入)	混入	1	0.49	0.08	0.35
104	SK102	中碗	肥前系(色絵)	A	1	0.49	0.42	1.82
総数					206		22.99	
105	SX20	灯明皿	在地系①	D	2	0.40	0.33	0.65
106	SX20	焙烙	在地系①	B	29	5.82	2.33	4.62
107	SX20	中鉢	在地系②	A	1	0.20	0.17	0.34
108	SX20	大鉢	在地系②	A	1	0.20	0	0.00
109	SX20	焜炉	在地系②	D	2	0.40	0.17	0.34
110	SX20	不明	在地系②	不明	3	0.60	0	0.00
111	SX20	火消壺	泉州系	C	3	0.60	0.08	0.16
112	SX20	火消壺蓋	泉州系	C	3	0.60	0.42	0.83
113	SX20	焜炉	泉州系	D	2	0.40	0.5	0.99
114	SX20	風炉	泉州系	D	1	0.20	0	0.00
115	SX20	不明	泉州系	不明	6	1.20	0	0.00
116	SX20	灯明皿	その他(柿釉)	D	5	1.00	0.58	1.15

表3 伊丹郷町遺物計測基礎データ(3)

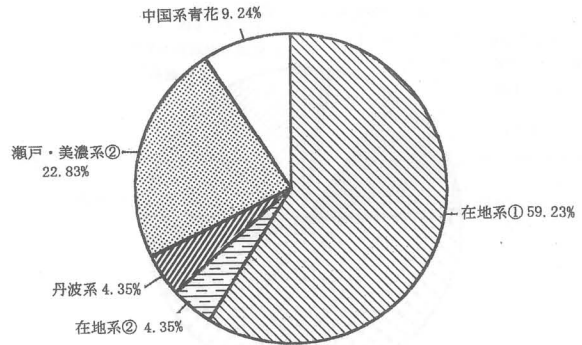
No.	遺構番号	器種	産地	用途	破片数	%	個体数	%
117	S X 2 0	土鍋	その他(柿釉)	B	10	2.01	0.92	1.82
118	S X 2 0	小鉢	産地不明(土師質土器)	A	9	1.81	0	0.00
119	S X 2 0	涼炉	産地不明(土師質土器)	D	7	1.40	0	0.00
120	S X 2 0	不明	産地不明(土師質土器)	不明	1	0.20	0	0.00
121	S X 2 0	小皿	備前系	A	1	0.20	0	0.00
122	S X 2 0	小壺	備前系	C	1	0.20	0	0.00
123	S X 2 0	播鉢	堺・明石系	B	21	4.21	1.67	3.31
124	S X 2 0	中壺	堺・明石系	C	1	0.20	0	0.00
125	S X 2 0	小鉢	丹波系	A	2	0.40	0.25	0.50
126	S X 2 0	植木鉢	丹波系	D	1	0.20	0.08	0.16
127	S X 2 0	播鉢	丹波系	B	7	1.40	0.5	0.99
128	S X 2 0	火入れ	丹波系	D	4	0.80	0.42	0.83
129	S X 2 0	中壺	丹波系	C	2	0.40	0.5	0.99
130	S X 2 0	中甕	丹波系	C	9	1.81	0.67	1.33
131	S X 2 0	大甕	丹波系	C	14	2.81	0.17	0.34
132	S X 2 0	中瓶	丹波系	C	6	1.20	0.33	0.65
133	S X 2 0	花瓶	丹波系	D	3	0.60	0.83	1.65
134	S X 2 0	不明	丹波系	不明	15	3.01	0.58	1.15
135	S X 2 0	中皿	瀬戸・美濃系②(その他)	A	1	0.20	0.33	0.65
136	S X 2 0	小鉢	瀬戸・美濃系②(その他)	A	2	0.40	0.17	0.34
137	S X 2 0	火鉢	瀬戸・美濃系②(その他)	D	1	0.20	0	0.00
138	S X 2 0	水鉢	瀬戸・美濃系②(その他)	C	1	0.20	0	0.00
139	S X 2 0	不明	瀬戸・美濃系②(その他)	不明	4	0.80	0.08	0.16
140	S X 2 0	小碗	唐津系①(京焼風陶器)	A	2	0.40	0.08	0.16
141	S X 2 0	中碗	唐津系④(その他)	A	1	0.20	0	0.00
142	S X 2 0	大鉢	唐津系④(その他)	A	1	0.20	0	0.00
143	S X 2 0	練鉢	京焼系(白)	B	1	0.20	0.92	1.82
144	S X 2 0	急須	京焼系(白)	B	7	1.40	0.58	1.15
145	S X 2 0	土鍋・行平蓋	京焼系(白)	B	6	1.20	0.58	1.15
146	S X 2 0	小碗	京焼系(灰釉)	A	1	0.20	0.08	0.16
147	S X 2 0	中碗	京焼系(灰釉)	A	2	0.40	0.17	0.34
148	S X 2 0	極小皿	京焼系(灰釉)	A	1	0.20	0.25	0.50
149	S X 2 0	灯明受皿	京焼系(灰釉)	D	1	0.20	0.42	0.83
150	S X 2 0	中水注	京焼系(灰釉)	C	1	0.20	0	0.00
151	S X 2 0	急須	京焼系(灰釉)	B	6	1.20	0	0.00
152	S X 2 0	土瓶	京焼系(灰釉)	B	23	4.61	1.42	2.82
153	S X 2 0	土鍋	京焼系(灰釉)	B	6	1.20	1.17	2.32
154	S X 2 0	土鍋・行平	京焼系(灰釉)	B	25	5.02	0.67	1.33
155	S X 2 0	有脚灯明受皿	京焼系(灰釉)	D	1	0.20	0	0.00
156	S X 2 0	蓋物蓋	京焼系(灰釉)	A	4	0.80	2.33	4.62
157	S X 2 0	土瓶・急須蓋	京焼系(灰釉)	B	7	1.40	1.08	2.14
158	S X 2 0	土鍋・行平蓋	京焼系(灰釉)	B	7	1.40	0.75	1.49
159	S X 2 0	不明	京焼系(灰釉)	不明	5	1.00	0.17	0.34
160	S X 2 0	小鉢	京焼系(鉄釉)	A	1	0.20	0.17	0.34
161	S X 2 0	片口鉢	京焼系(鉄釉)	B	1	0.20	0.75	1.49
162	S X 2 0	中甕	京焼系(鉄釉)	C	8	1.61	1	1.98
163	S X 2 0	土瓶	京焼系(鉄釉)	B	1	0.20	0	0.00
164	S X 2 0	土鍋・行平	京焼系(鉄釉)	B	4	0.80	0.08	0.16
165	S X 2 0	大碗	京焼系(その他)	A	2	0.40	0.42	0.83
166	S X 2 0	仏飯器	京焼系(その他)	D	1	0.20	0.58	1.15
167	S X 2 0	急須	京焼系(その他)	B	4	0.80	0	0.00
168	S X 2 0	土瓶	京焼系(その他)	B	12	2.41	0.92	1.82
169	S X 2 0	行平	京焼系(その他)	B	9	1.81	1.92	3.81
170	S X 2 0	土鍋・行平	京焼系(その他)	B	10	2.01	1.09	2.16
171	S X 2 0	蓋物蓋	京焼系(その他)	A	1	0.20	0	0.00
172	S X 2 0	土瓶・急須蓋	京焼系(その他)	B	2	0.40	0.5	0.99
173	S X 2 0	土鍋・行平蓋	京焼系(その他)	B	2	0.40	1.08	2.14
174	S X 2 0	不明	京焼系(その他)	不明	16	3.21	0.67	1.33
175	S X 2 0	大碗	萩焼系	A	1	0.20	0.83	1.65
176	S X 2 0	小碗	産地不明陶器	A	1	0.20	0	0.00

表3 伊丹郷町遺物計測基礎データ(4)

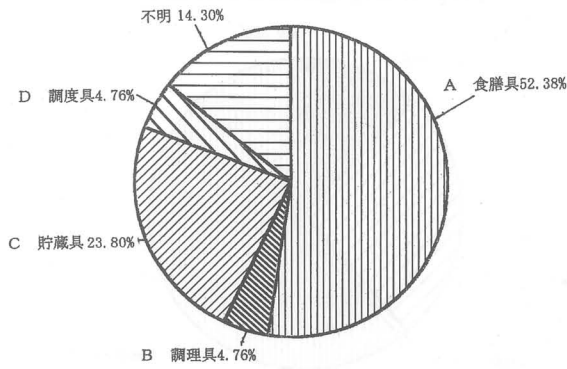
No.	遺構番号	器種	産地	用途	破片数	%	個体数	%
177	S X 2 0	中碗	産地不明陶器	A	4	0.80	0.75	1.49
178	S X 2 0	小鉢	産地不明陶器	A	1	0.20	0.33	0.65
179	S X 2 0	大壺	産地不明陶器	C	1	0.20	0	0.00
180	S X 2 0	中甕	産地不明陶器	C	1	0.20	0	0.00
181	S X 2 0	急須	産地不明陶器	B	1	0.20	0.25	0.50
182	S X 2 0	土瓶	産地不明陶器	B	1	0.20	0	0.00
183	S X 2 0	小碗	肥前系(白磁)	A	2	0.40	0.33	0.65
184	S X 2 0	中碗	肥前系(白磁)	A	3	0.60	0.75	1.49
185	S X 2 0	香炉	肥前系(白磁)	D	1	0.20	0.08	0.16
186	S X 2 0	花瓶	肥前系(白磁)	D	1	0.20	0	0.00
187	S X 2 0	中碗	肥前系(青磁)	A	1	0.20	0	0.00
188	S X 2 0	花瓶	肥前系(青磁)	D	1	0.20	0	0.00
189	S X 2 0	不明	肥前系(青磁)	不明	1	0.20	0	0.00
190	S X 2 0	小杯	肥前系(染付)	A	1	0.20	0	0.00
191	S X 2 0	小碗	肥前系(染付)	A	13	2.61	2.33	4.62
192	S X 2 0	小碗	肥前系(染付くらわんか)	A	1	0.20	0.17	0.34
193	S X 2 0	中碗	肥前系(染付)	A	18	3.61	1.58	3.13
194	S X 2 0	中碗	肥前系(染付くらわんか)	A	7	1.40	0.42	0.83
195	S X 2 0	仏飯器	肥前系(染付)	D	1	0.20	0.08	0.16
196	S X 2 0	小皿	肥前系(染付)	A	3	0.60	0.5	0.99
197	S X 2 0	小皿	肥前系(染付くらわんか)	A	1	0.20	0	0.00
198	S X 2 0	中皿	肥前系(染付)	A	10	2.01	0.42	0.83
199	S X 2 0	小鉢	肥前系(染付)	A	5	1.00	0.58	1.15
200	S X 2 0	中鉢	肥前系(染付)	A	8	1.61	0.83	1.65
201	S X 2 0	蓋物	肥前系(染付)	A	1	0.20	0.17	0.34
202	S X 2 0	段重	肥前系(染付)	A	1	0.20	0.17	0.34
203	S X 2 0	小瓶	肥前系(染付)	C	4	0.80	0.33	0.65
204	S X 2 0	小瓶	肥前系(染付くらわんか)	C	1	0.20	0	0.00
205	S X 2 0	神酒徳利	肥前系(染付)	D	1	0.20	0	0.00
206	S X 2 0	花瓶	肥前系(染付)	D	1	0.20	0	0.00
207	S X 2 0	線香筒	肥前系(染付)	D	1	0.20	0	0.00
208	S X 2 0	中碗蓋	肥前系(染付)	A	2	0.40	1	1.98
209	S X 2 0	蓋物蓋	肥前系(染付)	A	2	0.40	0.42	0.83
210	S X 2 0	中碗	肥前系(青磁染付)	A	1	0.20	0	0.00
211	S X 2 0	中鉢	肥前系(青磁染付)	A	1	0.20	0	0.00
212	S X 2 0	小碗	肥前系(色絵)	A	2	0.40	0.08	0.16
213	S X 2 0	中碗	肥前系(色絵)	A	1	0.20	0.25	0.50
214	S X 2 0	小皿	肥前系(色絵)	A	1	0.20	0.25	0.50
215	S X 2 0	中皿	肥前系(色絵)	A	1	0.20	0.17	0.34
216	S X 2 0	中鉢	肥前系(色絵)	A	1	0.20	0.08	0.16
217	S X 2 0	段重	肥前系(色絵)	A	2	0.40	0.42	0.83
218	S X 2 0	中瓶	肥前系(色絵)	C	2	0.40	0	0.00
219	S X 2 0	小碗蓋	肥前系(色絵)	A	2	0.40	0.25	0.50
220	S X 2 0	小碗	瀬戸・美濃系(新製焼)	A	5	1.00	1.5	2.97
221	S X 2 0	中碗	瀬戸・美濃系(新製焼)	A	2	0.40	0.25	0.50
222	S X 2 0	大碗	瀬戸・美濃系(新製焼)	A	1	0.20	0	0.00
223	S X 2 0	小皿	瀬戸・美濃系(新製焼)	A	2	0.40	1	1.98
224	S X 2 0	中碗蓋	瀬戸・美濃系(新製焼)	A	3	0.60	0.42	0.83
225	S X 2 0	植木鉢	三田系	D	1	0.20	0.75	1.49
226	S X 2 0	小碗	産地不明磁器	A	1	0.20	0.08	0.16
227	S X 2 0	中碗	産地不明磁器	A	1	0.20	0	0.00
228	S X 2 0	ミニチュア(壺)	産地不明	E	1	0.20	0.5	0.99
229	S X 2 0	ミニチュア(皿)	産地不明	E	1	0.20	0	0.00
230	S X 2 0	ミニチュア(蓋)	産地不明	E	1	0.20	0.17	0.34
		総	数		499		50.42	



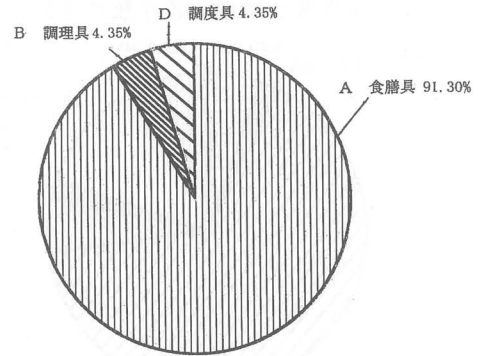
SE301産地別破片数グラフ



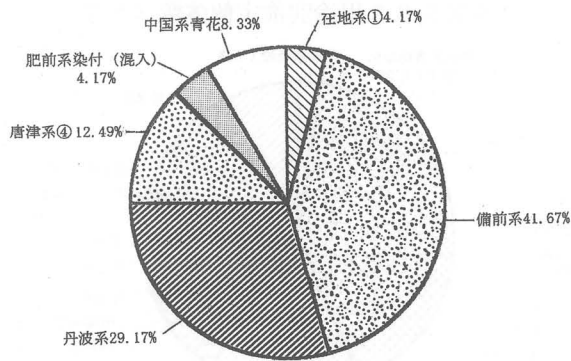
SE301産地別推定個体数グラフ



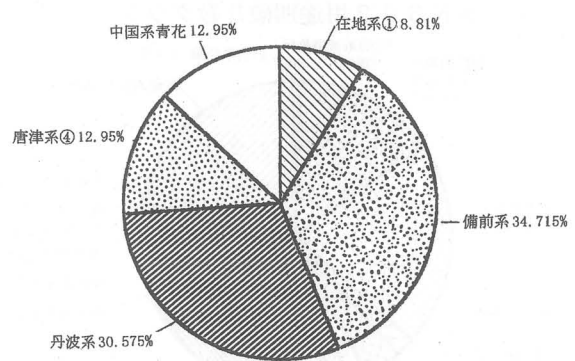
SE301用途別破片数グラフ



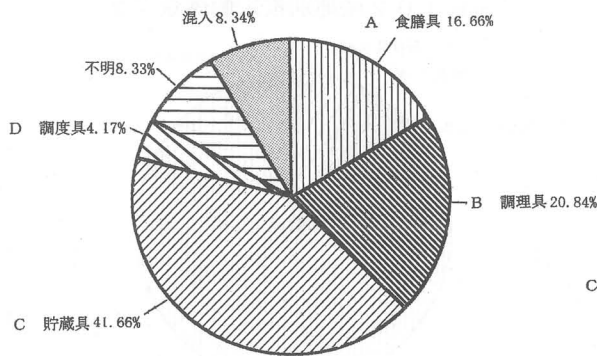
SE301用途別推定個体数グラフ



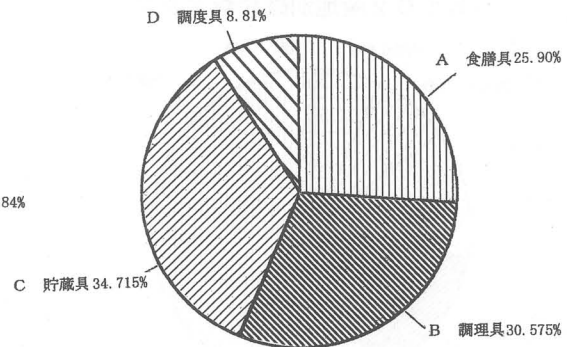
SK622産地別破片数グラフ



SK622産地別推定個体数グラフ

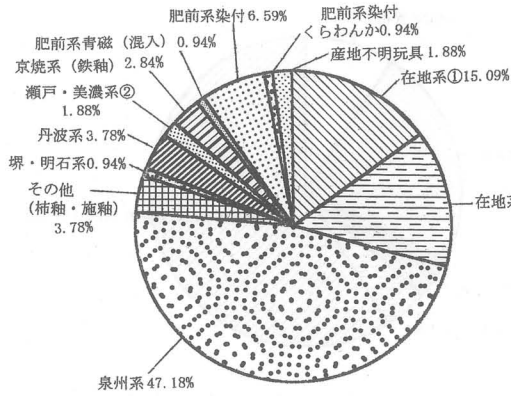


SK622用途別破片数グラフ

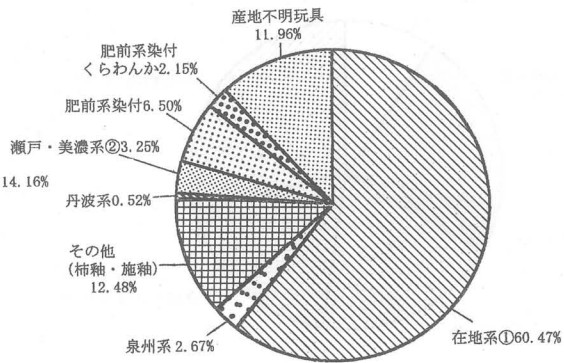


SK622用途別推定個体数グラフ

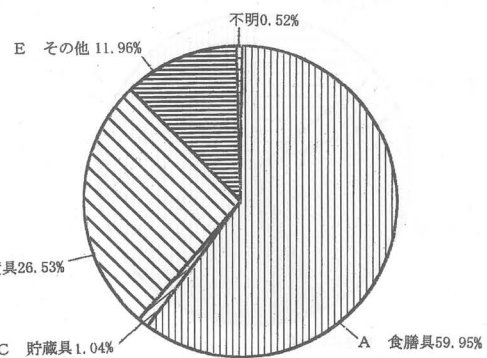
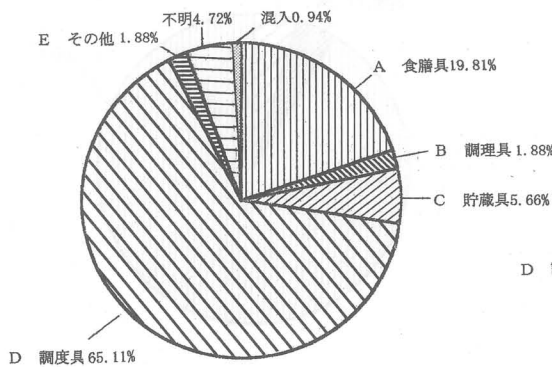
第147図 A-6区SE301・D-7区SK622産地別・用途別構成比グラフ(1)



SK 332 産地別破片数グラフ

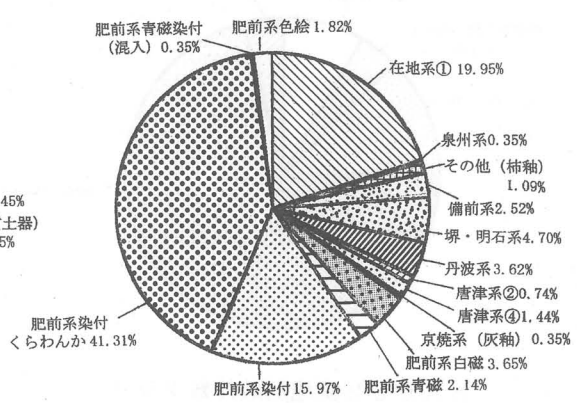
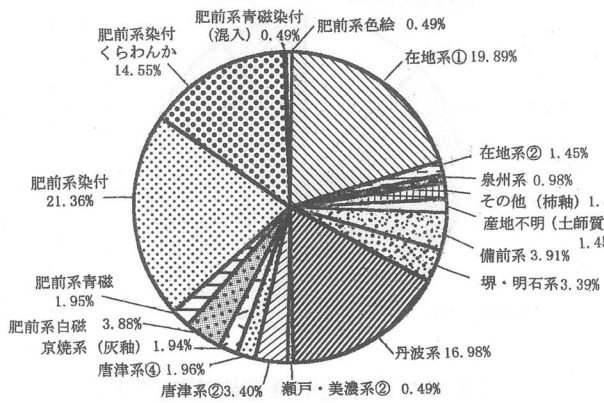


SK 332 産地別推定個体数グラフ



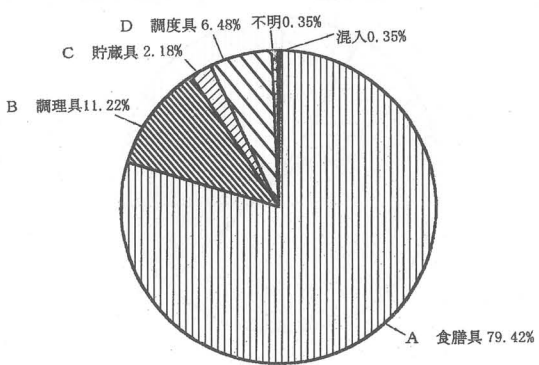
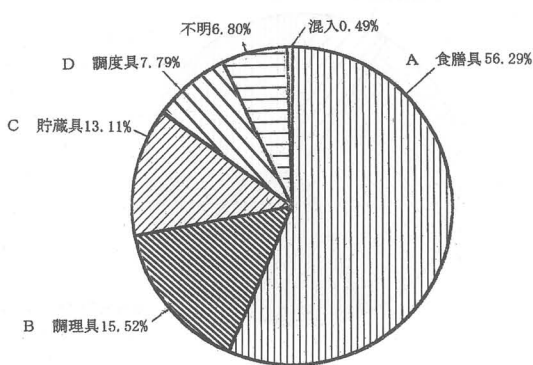
SK 332 用途別破片数グラフ

SK 332 用途別推定個体数グラフ



SK 102 産地別破片数グラフ

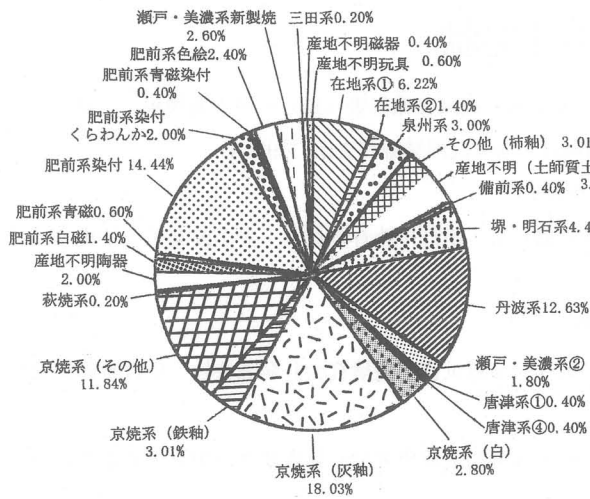
SK 102 産地別推定個体数グラフ



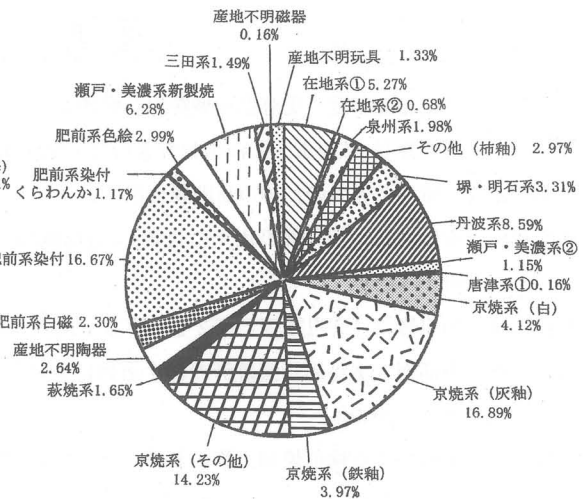
SK 102 用途別破片数グラフ

SK 102 用途別推定個体数グラフ

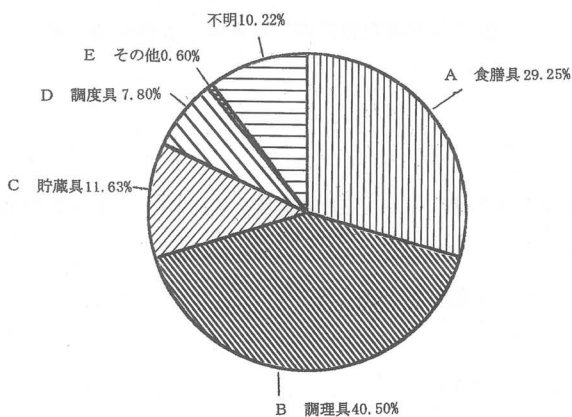
第148図 A-6区SK332・D-7区SK102産地別・用途別構成比グラフ(2)



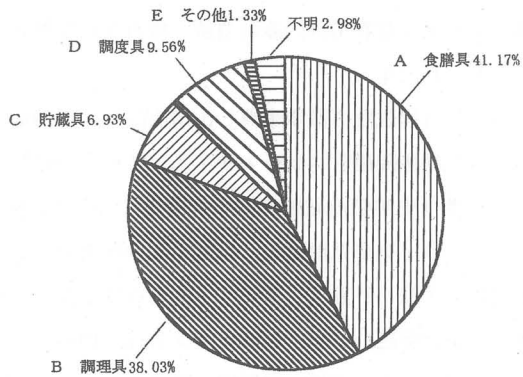
SX20産地別破片数グラフ



SX20産地別推定個体数グラフ



SX20用途別破片数グラフ



SX20用途別推定個体数グラフ

第149図 A-7区SX20産地別・用途別構成比グラフ (3)

参考・引用文献

- 会津芳子他『昭和58年度 史跡弘前城跡保存修理事業 三の丸庭園発掘調査報告書(Ⅳ)―出土遺物集―「陶磁器金属器等」』弘前市・弘前市教育委員会・史跡弘前城跡三の丸庭園発掘調査団 1984年
- 青木重雄『兵庫のやきもの』神戸新聞総合出版センター 1993年
- 赤松和佳「有岡城跡・伊丹郷町出土の貝類」『有岡城跡・伊丹郷町Ⅵ』伊丹市教育委員会・大手前女子大学史学研究所 1999年
- 朝倉治彦・柏川修一『守貞謾稿』第2巻 東京堂出版 1992年
- 石井 啓「伊部南大窯跡周辺窯跡群の出土遺物について」『第3回中近世備前焼研究会』発表要旨 中近世備前焼研究会 2000年
- 石井 啓「土型による備前焼細工物の製作について」『第3回中近世備前焼研究会』発表要旨 中近世備前焼研究会 2000年
- 石神由貴「三田焼の変遷について―三輪明神窯跡出土品より」『平成11年 第12回歴史講演会 日本の青磁 三田の青磁』別添資料 1999年
- 伊藤幸司「近世遺構出土の埴塼と羽口」『難波宮址の研究第九(本文)』財団法人 大阪市文化財協会 1992年
- 井波隆夫他『東京都新宿区内藤町遺跡―放射5号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書―』新宿区内藤町遺跡調査会 1992年
- 井上光貞監修『図説歴史散歩事典』山川出版社 1979年
- 井上喜久男『尾張陶磁』ニュー・サイエンス社 1992年
- 今井二三夫他『史跡弘前城跡保存修理事業 三の丸庭園発掘調査報告書(Ⅱ) 三の丸庭園』弘前市・弘前市教育委員会・史跡弘前城跡三の丸庭園発掘調査団 1988年
- 今野春樹他『千駄ヶ谷五丁目遺跡 2次調査報告書』千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会 1998年
- 大橋康二『肥前陶磁』ニュー・サイエンス社 1993年
- 大橋康二『古伊万里の文様―初期肥前磁器を中心に―』理工学社 1994年
- 大橋康二他『国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館 1984年
- 大橋康二他『福岡の陶磁展』佐賀県立九州陶磁文化館 1992年
- 大平 茂「近世丹波焼播鉢の型式分類と編年」『三田市下相野窯址 近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書 XVⅡ』兵庫県教育委員会 1992年
- 岡崎正雄「丹波焼について」『中尾城跡―近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書XI』兵庫県教育委員会 1989年
- 岡崎正雄他『有岡城跡・伊丹郷町Ⅱ 都市計画道路伊丹飛行場線道路改良工事に伴う発掘調査報告(1)』兵庫県教育委員会 1997年
- 根木 修「近世備前焼の変遷と年代観」『木村コレクション 古備前図録』岡山市教育委員会 1984年
- 小川 望「中近世関東の瓦質土師質火鉢類」『江戸在地系土器研究会通信NO.4』江戸在地系土器研究会 1988年
- 扇浦正義他『三栄町遺跡』東京都新宿区教育委員会 1988年
- 尾崎葉子・村上伸之『窯の谷・多々良の元窯・丸尾窯・樋口窯―町内古窯群詳細分布調査報告 第2集―』有田町教育委員会 1989年
- 尾崎葉子・村上伸之・野上建紀『赤絵町―佐賀県西松浦郡有田町1604番地の調査―』有田町教育委員会 1990年
- 小野正敏「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究NO.2』日本貿易陶磁研究会 1982年
- 小長谷正治「伊丹郷町発見の焙烙窯(兵庫県伊丹)」『関西近世考古学研究Ⅱ』関西近世考古学研究会 1991年
- 小長谷正治・川口宏海「伊丹郷町の酒造業」『関西近世考古学研究Ⅳ』関西近世考古学研究会 1996年
- 小長谷正治他『兵庫県伊丹市有岡城跡 発掘調査報告書Ⅸ』伊丹市教育委員会 1993年

- 小長谷正治他『伊丹市埋蔵文化財調査概報Ⅳ 有岡城跡・伊丹郷町遺跡の調査』伊丹市教育委員会 1995年
- 小長谷正治他『重要文化財 旧岡田家住宅保存修理工事報告書(災害復旧)』伊丹市 1999年
- 垣内光次郎「江州高嶋硯の生産」『江戸遺跡研究会第7回大会江戸時代の生産遺跡』江戸遺跡研究会 1994年
- 桂 又三郎『時代別 古備前名品図録』光美術工芸 1973年
- 加藤唐九郎編『原色陶器大辞典』淡光社 1972年
- 川口宏海(a)「胞衣壺考」『大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院研究集録第9号』大手前女子学園 1989年
- 川口宏海(b)「関西における住空間」『江戸遺跡研究会第2回大会江戸の住空間とその周辺』江戸遺跡研究会 1989年
- 川口宏海「近世在郷町における屋敷地利用の変遷—摂津国伊丹郷町を中心として—」『大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院研究集録第11号』大手前女子学園 1991年
- 川口宏海(a)「第23次調査」『有岡城跡・伊丹郷町Ⅱ—J R伊丹駅市街地再開発に伴う発掘調査報告書—』第1分冊 伊丹市教育委員会・大手前女子大学史学研究所 1992年
- 川口宏海(b)「中・近世都市における便所遺構の諸様相」『関西近世考古学研究Ⅲ』関西近世考古学研究会 1992年
- 川口宏海「江戸時代の土師質土器の製作技法—兵庫県伊丹郷町遺跡出土遺物を中心として—」『大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院研究集録第15号』大手前女子学園 1995年
- 川口宏海(a)「焼土処理土壌について」『有岡城跡・伊丹郷町Ⅴ』伊丹市教育委員会・大手前女子大学史学研究所 1997年
- 川口宏海(b)「池状遺構について」『有岡城跡・伊丹郷町Ⅴ』伊丹市教育委員会・大手前女子大学史学研究所 1997年
- 川口宏海(c)「土師質土器皿の分類について」『有岡城跡・伊丹郷町Ⅴ』伊丹市教育委員会・大手前女子大学史学研究所 1997年
- 川口宏海「有岡城跡・伊丹郷町遺跡出土の近世丹波焼製品」『榎崎彰一先生古希記念論文集』榎崎彰一先生古希記念論文集発行会 1998年
- 川口宏海「有岡城跡・伊丹郷町遺跡の井戸について」『史学論集—佛教大学文学部史学科創設三十周年記念』佛教大学文学部史学科創設三十周年記念論集刊行会編 1999年
- 川口宏海「摂河泉出土の大谷焼製品の様相」『第2回徳島城下町研究会 四国・淡路の陶磁器—生産と流通Ⅰ』発表要旨 徳島城下町研究会 2000年
- 河原正彦「丹波—近世以降の展開—」『世界陶磁全集4 桃山(一)』小学館 1977年
- 関西近世考古学研究会編『近世陶磁器の諸様相—消費地における18・19世紀の器種構成—』関西近世考古学研究会 1994年
- 九州近世陶磁学会『第9回九州近世陶磁学会「江戸中・後期における九州・山口地方の陶器」—窯跡資料を中心とした—』発表資料 1999年
- 北野隆亮「奈良盆地における火花式発火具—サヌカイト製火打石の認識とその評価—」『関西近世考古学研究Ⅲ』関西近世考古学研究会 1992年
- 古泉 弘『江戸の考古学』ニュー・サイエンス社 1987年
- 小林謙一「江戸における近世瓦質・土師質焔炉について」『江戸在地土器の研究Ⅰ』江戸在地土器研究会 1991年
- 柴田明彦他『柴田コレクションⅠ～Ⅵ』佐賀県立九州陶磁文化館 1990～1998年
- 白神典之「堺摺鉢考」『東洋陶磁VOL.19』東洋陶磁学会 1992年
- 鈴木秀典他『住友銅吹所跡発掘調査報告書』財団法人 大阪市文化財協会 1998年
- 世界焔の博覧会波佐見町運営委員会『世界焔の博覧会 波佐見青磁・くらわんか展』1996年
- 寺島良安(著)／島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳(訳注)『和漢三才図会5』東洋文庫 平凡社 1986年
- Donald R. Adams『図説 犬の解剖学』チクサン出版社 1988年
- 鶴丸俊明他『江戸 都立一橋高校地点発掘調査報告』都立一橋高校内遺跡調査団 1985年

- 東京大学遺跡調査室『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書2 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』1990年
- 長崎県窯業試験場編『波佐見古陶磁文様集』肥前波佐見焼振興会 1985年
- 永井久美男編『日本出土銭総覧』兵庫埋蔵銭調査会 1996年
- 永井久美男編『近世の出土銭Ⅰ～Ⅱ』兵庫埋蔵銭調査会 1997～1998年
- 長佐古真也「“江戸”遺跡に流通する量産陶器碗の編年(Ver.2.1)」『「江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ」～18世紀代を中心とする編年研究の試み～』発表要旨 江戸陶磁土器研究グループ 1996年
- 中野雄二「波佐見」『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念』九州近世陶磁学会 2000年
- 中野雄二『長田山窯跡-波佐見町文化財調査報告書第4集-』波佐見町教育委員会 1997年
- 榎崎彰一編「丹波」『日本陶磁全集11』中央公論社 1977年
- 榎崎彰一他『萩焼古窯-発掘調査報告書-』山口県教育委員会 1990年
- 成瀬晃司「江戸遺跡出土磁器碗・皿の変遷-文様、銘款を中心に-」『「江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ」～18世紀代を中心とする編年研究の試み～』発表要旨 江戸陶磁土器研究グループ 1996年
- 難波洋三「徳川氏大坂城時代の焙烙」『難波宮趾の研究第九』財団法人 大阪市文化財協会 1992年
- 日本貨幣商協同組合『日本貨幣カタログ』1996年
- 野上建紀「磁器の編年(色絵以外)」『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念』九州近世陶磁学会 2000年
- 乗岡 実「近世の備前焼播鉢」『関西近世考古学研究Ⅶ』関西近世考古学研究会 1999年
- 乗岡 実「備前焼播鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会』発表要旨 中近世備前焼研究会 2000年
- 橋口定志他『染井Ⅰ-染井遺跡(日本郵船地区)発掘調査の記録-』豊島区教育委員会 1990年
- 長谷川 真「丹波焼播鉢について」『中世土器基礎研究Ⅳ』日本中世土器研究会 1988年
- 長谷川 真『伊丹郷町発掘調査報告書』兵庫県教育委員会 1995年
- 備前焼紀年銘土型調査委員会・備前市教育委員会『備前焼紀年銘土型調査報告書』1998年
- 藤井直正「「近衛家会所」所用の屋瓦」『地域研究いたみ第18号』伊丹市立博物館 1987年
- 藤井直正・藤本史子・前川 要『有岡城跡・伊丹郷町Ⅰ-三井パークマンション建設に伴う発掘調査報告書-』伊丹市教育委員会・大手前女子学園有岡城跡調査委員会 1987年
- 藤井直正・川口宏海・前川 要『有岡城跡・伊丹郷町Ⅱ-JR駅前市街地再開発に伴う発掘調査報告書-』第1分冊・第2分冊 伊丹市教育委員会・大手前女子大学史学研究所 1992年
- 藤井直正・川口宏海・藤本史子・小笠原典子・赤松和佳・木南アツ子・山崎晴世『有岡城跡・伊丹郷町Ⅳ-宮ノ前地区市街地再開発に伴う発掘調査報告書-』伊丹市教育委員会・大手前女子大学史学研究所 1995年
- 藤井直正・川口宏海・赤松和佳・川上啓子・小出匡子・渡辺晴香『有岡城跡・伊丹郷町Ⅴ-宮ノ前地区市街地再開発に伴う発掘調査報告書-』伊丹市教育委員会・大手前女子大学史学研究所 1997年
- 藤井直正・川口宏海・赤松和佳・小出匡子・渡辺晴香・佐藤由美・大石真『有岡城跡・伊丹郷町Ⅵ-宮ノ前地区市街地再開発に伴う発掘調査報告書-』伊丹市教育委員会・大手前女子大学史学研究所 1999年
- 藤澤良祐「近世瀬戸磁器編年の再検討-磁器端反碗を中心に-」『榎崎彰一先生古希記念論文集』榎崎彰一先生古希記念論文集発行会 1998年
- 藤澤良祐「瀬戸・美濃の天目について」『開館20周年記念秋季特別展 茶の湯の名碗-和物茶碗-』茶道資料館 1999年
- 藤澤良祐他『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅴ』瀬戸市歴史民俗資料館 1986年
- 藤澤良祐他『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅵ』瀬戸市歴史民俗資料館 1987年
- 藤澤良祐他『瀬戸市史 陶磁史篇 四』愛知県瀬戸市 1993年
- 堀内秀樹「東京大学本郷構内の遺跡出土陶磁器の編年の考察」『「江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ」～18世紀代を中心とする編年研究の試み～』発表要旨 江戸陶磁土器研究グループ 1996年
- 前川 要「有岡城惣構の再検討」『有岡城跡・伊丹郷町Ⅰ』大手前女子学園有岡城跡調査委員会 1987年

- 前川 要「近世城下町発生に関する考古学研究」『ヒストリア第121号』大阪歴史学会 1988年
- 前川 要「伊丹郷町の都市構造の変化とその歴史的背景」『いな文化財調査室だよりNO.2』大手前女子大学史学研究所文化財調査室 1990年
- 前川 要『都市考古学の研究—中世から近世への展開—』柏書房 1991年
- 間壁忠彦『備前焼』ニュー・サイエンス社 1991年
- 間壁忠彦・間壁葎子「備前研究ノート（1～4）」『倉敷考古館研究集第1～3・18号』倉敷考古館 1966年～1984年
- 満岡忠成・奥田直学編『世界陶磁全集4 桃山（一）』小学館 1977年
- 水野信太郎『日本煉瓦史の研究』法政大学出版局 1999年
- 宮崎貴夫他『波佐見町内古窯群調査報告書—波佐見町文化財調査報告書第4集—』波佐見町教育委員会 1993年
- 村上伸之「肥前における初期陶器生産に関する考察—主として地域差の問題を中心に—」『有田町歴史民俗資料館・有田焼参考館 研究紀要第6号』有田町歴史民俗資料館・有田焼参考館 1997年
- 村上伸之「磁器の編年（色絵・色絵素地）」『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念』九州近世陶磁学会 2000年
- 盛 峰雄「陶器の編年」『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念』九州近世陶磁学会 2000年
- 森田克行『摂津高槻城本丸発掘調査報告書』高槻市教育委員会 1984年
- 両角まり「土師質塩壺類」『江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅰ ～江戸出土遺物による編年研究の試み～』発表要旨 江戸陶磁土器研究グループ 1992年
- 八木哲浩他『伊丹市史』第1～5巻伊丹市役所 1982年
- 八木哲浩他『伊丹資料叢書6 伊丹古絵図集成』伊丹市役所 1982年
- 横田賢次郎・森田 勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」『九州歴史資料館 研究論集4』九州歴史資料館 1978年
- 和島恭仁雄「古文書からみた旧岡田家住宅」『地域研究いたみ第24号』伊丹市立博物館 1995年

表紙図版解説

本冊の表紙には、第123次調査D-7区S K139から出土した肥前磁器色絵鶏型水滴を載せた。報告文でも説明しているが(122頁)、S K139の検出面は第1次面で、出土遺物の年代観(17世紀中頃~17世紀末)から、酒蔵が建つ前の町屋時期に伴う遺構である。水滴の大きさは、器高11.8cm、長さ(残)9.5cm、幅6.7cm、厚さ0.5cmを測る。体部は型造り成形で、鶏冠部分は別に成形された後、ハリツケしている。口部は型おこしの後接合する際に空けられており、首部の片側には直径4.5mmの穿孔が施されている。また、底部に布目痕がみられる。

装飾は、型押しされた文様の上に、体部と顔部・鶏冠部分は朱色釉(vivid reddish orange 10R5.5/14)、雨覆い部と風切り部・尾羽部には黒色釉(black 10Y R *1.7/1)の縁取りのなかに緑色(bright bluish green 10G6.5/7)を彩色している。この遺物の年代観は、有田町歴史民俗資料館の村上伸之氏にご教示を得て、1660年~1670年代前後のものであることがわかった。共伴遺物には、大橋康二氏の編年のⅢ・Ⅳ期に属する肥前磁器染付碗類が出土している。この他にも、この肥前磁器色絵鶏型水滴と同型の破片が出土しており、2個体廃棄されていたことがわかった。

このような肥前磁器色絵鶏型水滴は、第123次調査D-7区の東隣に位置する第55次調査区からも1点出土している。この調査区は、17世紀前半以降、昆陽口道から北に入る道路に面して、間口5間程の宅地が5~6軒建てられていたと考えられているところであり、第123次調査D-7区と同様に町屋から出土している。水滴は頭部のみであるが、器形や釉薬の色調などS K139から出土したものと似ている。廃棄年代は17世紀後葉と考えられる整地層から出土している。このように、伊丹郷町遺跡では17世紀後半~末頃に町屋で使用されていたことがわかった。

この肥前磁器色絵鶏型水滴は、江戸遺跡からも多く出土している。東京都千代田区都立一橋高校地点の発掘調査区では、3点出土している。3点とも元禄十年(1697)から宝暦十年(1760)の土層から出土している。この時期は町屋が存在していたと考えられている。出土した3点は頭部しか残っていなかったが、装飾は色絵2点、呉須1点であった。

新宿区三栄町遺跡は、下級御家人の拝領屋敷地だったところで、19世紀代を中心とし19世紀第3四半期までの年代観をもつ大型廃棄土壌から1点出土している。その他、渋谷区千駄ヶ谷五丁目遺跡2次調査区の大名屋敷でも色絵鶏型水滴が1点出土していた。

また、青森県弘前市の弘前城跡三の丸庭園発掘調査からは、水鳥を模した水滴が1点出土している。頭部以外は欠損していた。装飾は、羽部を朱色で細かく線描きし、部分的に同色で塗りつぶしている。その他には青緑色釉を施していた(弘前市教育委員会 成田正彦氏のご教示を得た)。

以上のように、この肥前磁器色絵鶏型水滴は、大名屋敷から町屋まで階層に関係なく広く使用されていたことがわかり、広範囲で流通していたと思われる。